

豊 後 府 内 16

(第2分冊)

—庄の原佐野線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(5)—
(中世大友府内町跡第69次調査区)

2 0 1 0

大分県教育庁埋蔵文化財センター

豊 後 府 内 16

(第2分冊)

— 庄の原佐野線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(5) —
(中世大友府内町跡第69次調査区)

2 0 1 0

大分県教育庁埋蔵文化財センター



南からみた第69次A調査区

例 言

1. 本書は大分県大分市六坊北町に所在する中世大友府内町跡第41・69・75・77次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は大分県付近連続立体交差事業の実施に伴い、大分県土木建築部大分駅周辺総合整備事務所の委託を受けて大分県教育庁埋蔵文化財センターが実施した。
3. 中世大友府内町跡第69次調査は平成18(2006)年7月13日から平成19(2007)年1月31日にかけて実施し、高橋信武・槇島隆二が担当した。
4. 現地での写真撮影・遺構の実測は上記職員の他、民間調査機関の協力を得た。第69次調査：株式会社パスコ(調査員岡本範之・秀嶋龍男・安達通夫・福山寿仁)。
5. 遺物実測・トレースなど報告書作成に伴う現地調査終了後の諸作業については、平成20年度に大分県教育庁埋蔵文化財センターの整理補佐員が大部分行い、一部を平成21年度に(株)九州文化財総合研究所に委託した。
6. 遺物撮影は埋蔵文化財センターの河野真幸が担当した。
7. 出土遺物ならびに図面・写真等は、大分県教育庁埋蔵文化財センターにおいて保管している。
8. 本書で使用する方位はいずれも座標北である。座標値については世界測地系の数値を使用している。10m包含の調査区の区割り、従来の中世大友城下町跡と共通のものである。
9. 本書で使用する遺構略号は以下のとおりである。
SD(溝)、SB(掘立柱建物)、SK(土坑)、SP(井戸)、SF(道路)、SA(柱穴列)、SP(柱穴及び小穴)、SX(性格不明遺構及び集石遺構)
10. 本書で使用した出土遺物の分類については、以下の文献による。
青花 小野正敏「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」(『貿易陶磁研究』No.2 1982年)
青磁 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」(『貿易陶磁研究』No.2 1982年)
白磁 森田 勉「14～16世紀の白磁の分類について」(『貿易陶磁研究』No.2 1982年)
備前系陶器 乗岡 実「中世備前焼(壺)の編年案」・「備前焼(鉢)の編年案」(『第3回中近世備前焼研究会資料 付第1回・第2回研究資料』所収 2000年)
乗岡 実「近世備前焼(鉢)の編年案」(『岡山城三之丸曲輪跡一表町一丁目地区再開発ビル建設に伴う発掘調査一』岡山市教育委員会 2000年)
中国南部製焼締陶器 吉田 寛「中世大友府内町跡出土の窯地不明焼締陶器について」(『貿易陶磁研究』No.23 2003年)
京都系土師器 塩地潤一「大友領国内における京都系土師器の分布とその背景」(『博多研究会誌』第6号 1998年)
11. 金属分析は別府大学の平尾良光教授に依頼し、原稿を頂いた(第4分冊)。動物骨については、国立歴史民俗博物館の西本豊弘教授に同定を依頼し、原稿を頂いた(第4分冊)。
12. 本書の執筆は高橋信武(69次A調査区)、横澤 慈(69次B調査区)が担当した。

総目次

- 第1分冊 第1章 はじめに (高橋信武)
第2章 中世大友府内町跡第41次調査区 (高橋信武)
- 第2分冊 第3章 中世大友府内町跡第69次 A 調査区 (高橋信武)
第4章 中世大友府内町跡第69次 B 調査区 (横澤 慈)
- 第3分冊 第5章 中世大友府内町跡第75次調査区 (後藤一重)
- 第4分冊 第6章 中世大友府内町跡第77次調査区 (横澤 慈)
第7章 中世大友府内町跡から出土した金属製品と鋳造関連遺物の文化財科学的調査 (平尾良光他)
中世大友府内町跡第41次・69次・77次出土の動物遺体 (西本豊弘)
第8章 総括 (高橋信武・横澤 慈)

目次

第3章 中世大友府内町跡第69次 A 調査区	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 遺構の概要と基本層序	1
第3節 近世以降の遺構と遺物	5
第4節 中世の遺構と遺物	5
第5節 縄紋時代・弥生時代・古墳時代の調査	112
遺構一覧表	153
遺物一覧表	173
第6節 A区まとめ	190
第4章 中世大友府内町跡第69次 B 調査区	195
第1節 調査区の設定	195
第2節 調査区の基本層序	195
第3節 中世末～近世の遺構	199
第4節 古代～中世の遺構	204
第5節 最下層の遺構	217
第6節 包含層出土遺物	221
遺物観察表	227
第7節 B区まとめ	229
写真図版	233

図版目次

第1図 第69次 A 調査区位置図	1	第7図 SK31出土遺物実測図	6
第2図 A北調査区北壁層序図	2	第8図 SK31出土銭貨拓影	6
第3図 欠番		第9図 SK54実測図	7
第4図 A北調査区東壁層序図	3	第10図 SK54出土遺物実測図①	7
第5図 A北調査区最上層の遺構	4	第11図 SK54出土遺物実測図②	8
第6図 焼土を切る溝 (SD44)・SK31実測図	5	第12図 SE33実測図	9

第13図	SE33出土遺物実測図①	10	第54図	SP557出土銭貨拓影	34
第14図	SE33出土遺物実測図②	11	第55図	SK566・621実測図	35
第15図	SE33・SK62出土遺物実測図	12	第56図	SK566他出土遺物実測図	35
第16図	SK62実測図	12	第57図	SK255実測図(平面図・断面図)	36
第17図	SK63実測図	13	第58図	SK255出土遺物実測図	37
第18図	SK63出土遺物実測図①	14	第59図	SK73出土遺物実測図①	38
第19図	SK63出土遺物実測図②	15	第60図	SK73出土遺物実測図②	39
第20図	SK63踏出土状況実測図	15	第61図	SK73出土銭貨拓影	39
第21図	SK63出土遺物実測図③	16	第62図	SK140・214・217出土遺物実測図	40
第22図	SK60・65実測図	17	第63図	北調査区下層の中世遺構	41
第23図	SK66出土遺物実測図	17	第64図	SP321他出土遺物実測図	42
第24図	SP162・168・171出土遺物実測図	17	第65図	SK325出土銭貨拓影	42
第25図	SK159出土遺物拓影	17	第66図	SK354・355実測図	42
第26図	SK172実測図	17	第67図	SK636出土遺物実測図	43
第27図	SP184・210出土遺物実測図	18	第68図	SK560実測図	44
第28図	SK208実測図	18	第69図	SK706実測図	45
第29図	SK211出土銭貨拓影	18	第70図	SK706出土遺物実測図	45
第30図	SK369出土遺物実測図	19	第71図	SK718実測図	46
第31図	SK439他遺物出土状況	20	第72図	SK718出土遺物実測図	46
第32図	SK548出土遺物実測図	20	第73図	最下層の遺構	48
第33図	SK439・556等遺物出土状況	21	第74図	SK780出土銭貨	49
第34図	SK556出土遺物実測図	21	第75図	SK780実測図	49
第35図	SKR246・273・557・601・621・623~625・673実測図	22	第76図	SK750実測図	50
第36図	SD439出土遺物実測図	23	第77図	SD750層序図①	51
第37図	礎石出土状態実測図	24	第78図	SD750層序図②	52
第38図	上層の中世遺構	25	第79図	SD750出土遺物実測図①	54
第39図	SK36実測図	26	第80図	SD750出土遺物実測図②	55
第40図	SK82実測図	26	第81図	SD750出土遺物実測図③	56
第41図	SK126・157出土遺物実測図	26	第82図	SD750出土遺物実測図④	57
第42図	SK36出土遺物実測図	27	第83図	SD750出土遺物実測図⑤	58
第43図	SK221出土遺物実測図	28	第84図	SD750出土銭貨拓影	58
第44図	鍛冶遺構実測図	28	第85図	SK893・SD810・930実測図	59
第45図	SK243他出土遺物実測図	28	第86図	SD930の層序実測図	60
第46図	SK242・325上層実測図	29	第87図	SD930出土遺物実測図	60
第47図	SK242・325下層実測図	30	第88図	SP826・SP935出土遺物実測図	61
第48図	欠番		第89図	SD810・882実測図	61
第49図	SK242出土銭貨拓影	31	第90図	SD810層序図	61
第50図	SK254実測図	32	第91図	掘立柱建物跡SB1実測図	62
第51図	SK254層序	33	第92図	欠番	
第52図	SK254出土遺物実測図	33	第93図	掘立柱建物跡SB2実測図	63
第53図	SK544・557出土遺物実測図	34	第94図	南調査区西壁面層序図	64
			第95図	41次調査区から見た69次A南調査区土層図	65

第96図	北壁層序図	66	第137図	SK411出土遺物実測図	94
第97図	南調査区近世の遺構①	67	第138図	中層の中世遺構	95
第98図	南調査区近世の遺構②	68	第139図	SE519実測図	96
第99図	近世遺構断面図	69	第140図	南調査区の東壁実測図	97
第100図	SD32・SK42実測図	69	第141図	SE519出土遺物実測図①	98
第101図	近世遺構出土遺物実測図	70	第142図	SE519出土遺物実測図②	99
第102図	SP94出土銭貨拓影	70	第143図	SE519出土遺物実測図③	100
第103図	上層の中世遺構	72	第144図	SE519出土遺物実測図④	101
第104図	SK67実測図	73	第145図	SE519出土遺物実測図⑤	102
第105図	SK67出土遺物実測図	73	第146図	SK524実測図	102
第106図	SK67出土銭貨拓影	73	第147図	SE587他出土遺物実測図	103
第107図	SK158・252・186等出土遺物実測図	74	第148図	SK817実測図	103
第108図	SK58実測図	74	第149図	SK817出土遺物実測図	103
第109図	SK58出土遺物実測図	75	第150図	SK817出土銭貨拓影	103
第110図	SP97・134出土遺物実測図	76	第151図	SK700実測図	104
第111図	SP300他出土遺物実測図	76	第152図	SK701実測図	104
第112図	SE207実測図	77	第153図	SK738出土遺物実測図	104
第113図	SP192他出土遺物実測図	78	第154図	SE751実測図	105
第114図	SE252位置図	78	第155図	SE751出土遺物実測図	105
第115図	SE252実測図	79	第156図	SE751・SD754出土銭貨拓影	106
第116図	SE252出土遺物実測図	80	第157図	SK754・773等出土遺物実測図	106
第117図	SK266等実測図	80	第158図	下層の中世遺構	107
第118図	SK253・270・271出土遺物実測図	81	第159図	下層の中世遺構拡大図	108
第119図	SK271出土銭貨	81	第160図	SK1010実測図	109
第120図	SK273・278・281出土遺物実測図	82	第161図	SD991～999横断面図	109
第121図	SK291実測図	83	第162図	SP953他出土遺物実測図	109
第122図	SK130・SP333・365・378・779出土遺物実測図	83	第163図	SD884出土遺物実測図	109
第123図	SK382実測図	84	第163-2図	SD750実測図	110
第124図	SK385実測図	84	第164図	SD884北壁層序図	111
第125図	SK382・385出土遺物実測図	85	第165図	SD750層序図	111
第126図	SK141実測図	86	第166図	SD884出土銭貨拓影	111
第127図	SK141東面層序図	87	第167図	SK953・954実測図	112
第128図	SK141出土遺物実測図①	88	第168図	SK913出土銭貨拓影	112
第129図	SK141出土遺物実測図②	89	第169図	SK689～691等実測図	112
第130図	SK141出土遺物実測図③	90	第170図	南調査区道路断面図	113
第131図	SP390出土銭貨拓影	91	第171図	縄紋・弥生・古墳時代包含層の遺物・遺構	114
第132図	SK398実測図	91	第172図	第171図の投影図	115
第133図	SK398出土遺物実測図	92	第173図	下層包含層出土遺物実測図	115
第134図	SK419等出土遺物実測図	93	第174図	下層包含層等出土遺物実測図	116
第135図	SP445出土銭貨拓影	93	第175図	SK1058実測図	116
第136図	SK411実測図	94	第176図	SK1059・SK1060実測図	116

第177図	SK1061実測図	117	第211図	SD6・SD9～11実測図	201
第178図	包含層出土遺物実測図①	119	第212図	SK7実測図	202
第179図	包含層出土遺物実測図②	120	第213図	SK7出土遺物実測図	202
第180図	包含層出土遺物実測図③	121	第214図	SE8実測図	202
第181図	包含層出土遺物実測図④	123	第215図	SD20実測図	202
第182図	包含層出土遺物実測図⑤	124	第216図	SD4実測図	203
第183図	包含層出土遺物実測図⑥	126	第217図	SD4出土遺物実測図	204
第184図	包含層出土遺物実測図⑦	127	第218図	69次B調査区遺構平面図(第2面)	205
第185図	包含層出土遺物実測図⑧	128	第219図	SD12～SD19実測図	206
第186図	包含層出土遺物実測図⑨	129	第220図	SD16・SD17出土遺物実測図	206
第187図	包含層出土遺物実測図⑩	130	第221図	SD5実測図	207
第188図	包含層出土遺物実測図⑪	131	第222図	SD5出土遺物実測図	207
第189図	包含層出土遺物実測図⑫	132	第223図	SK23実測図	208
第190図	包含層出土遺物実測図⑬	134	第224図	SK23出土遺物実測図	209
第191図	包含層出土遺物実測図⑭	135	第225図	SD25実測図	210
第192図	包含層出土遺物実測図⑮	136	第226図	SD25出土遺物実測図	211
第193図	包含層出土遺物実測図⑯	137	第227図	SD21・SX26実測図	212
第194図	包含層出土遺物実測図⑰	138	第228図	B1東調査区SD21実測図	213
第195図	包含層出土遺物実測図⑱	139	第229図	SD21出土遺物実測図	213
第196図	包含層出土遺物実測図⑲	140	第230図	SX26出土遺物実測図	214
第197図	包含層出土遺物実測図⑳	141	第231図	SK27実測図	214
第198図	包含層出土遺物実測図㉑	142	第232図	SF28実測図(1/40)	215
第199図	包含層出土遺物実測図㉒	144	第233図	SF28出土遺物実測図	215
第200図	包含層出土遺物実測図㉓	145	第234図	SE22・SE24実測図	215
第201図	北調査区包含層銭貨	146	第235図	69次B調査区遺構分布図(第3面)	216
第202図	南調査区包含層銭貨①	147	第236図	B1西区SK30・SD31実測図	217
第203図	南調査区包含層銭貨②	148	第237図	B2区SD29実測図	218
第204図	大分県内の在地系技術での横徹京都系土器	191	第238図	SD29実測図	219
第205図	鹿児島県内の在地系技術での横徹京都系土器	192	第239図	SD29出土遺物実測図	220
第206図	69次B調査区位置図	195	第240図	SD29出土遺物実測図(2)	221
第207-1図	69次B1西区上層断面図	196	第241図	69次B1西調査区包含層出土遺物実測図	222
第207-2図	69次B2区上層断面図	197	第242図	69次B1東調査区包含層出土遺物実測図	223
第207-3図	69次B1東区土層断面図	198	第243図	69次B1区R60グリッド包含層出土遺物実測図	224
第208図	69次B調査区遺構分布図(最上面)	199	第244図	69次B2区包含層出土遺物実測図	224
第209図	SD1実測図	200	第245図	41次・69次B調査区で確認された方形区画の溝	230
第210図	SD2・SD3実測図	200			

表 目 次

第1表	第69次A調査区	遺構一覧表	153
第2表	第69次A調査区	遺物一覧表	173
第3表	第69次B調査区	遺物観察表	227

写真図版目次

巻頭写真図版	構完掘状況	238
写真図版1	写真図版7	239
A調査区空撮	SK67半掘状況および埋土状態	239
写真図版2	南調査区上層遺構全景	239
SK19半掘状況	SD91遺物出土状況	239
SK63検出状況・床面までの遺物出土状況	南調査区全景	239
SK63踵胸板出土状況	SD999とSD1006近接写真	239
SK73遺物出土状況	SE751上部の半掘状況	239
SP235・SP236・SK560	SE751完掘状況	239
写真図版3	SE751井筒出土状況	239
SE33半掘状況	写真図版8	240
SE33第二段階の半掘状況	SK73出土在地系土師器	240
SE33石組井筒出土状況	SK73山七京都系土師器	240
SE33最下面の板石検出状況	SK79出土京都系土師器	240
SE33最下面板石設置状況	SK273出土京都系土師器	240
SE33完掘状況	写真図版9	241
A南調査区全景	SK556山七京都系土師器	241
写真図版4	SK439出土京都系土師器	241
SK254完掘状況	SK557出土京都系土師器	241
SK325近景	SE519出土京都系土師器	241
SK242完掘状況	写真図版10	242
北調査区SD750完掘状況	SE519出土京都系土師器	242
SE519遺物出土状況	SE519出土京都系土師器	242
SK524遺物出土状況	SE519山七京都系土師器	242
SD810層序写真	SE519出土京都系土師器	242
SD750第2断面	写真図版11	243
写真図版5	SE519山七京都系土師器	243
SR255(石組井筒出土状況・土層断面と井筒・井筒近接写真・最下面の板石組状況・完掘状況)	SE519出土在地系土師器	243
写真図版6	SE519出土横俵京都系土師器	243
北調査区全景	SE519出土京都系土師器	243
南調査区全景(近世段階の耕作痕を掘り上げた段階・中世の道路遺構最上面検出状況)	写真図版12	244
SD48とSK42の重複状況・南調査区近世段階の溝状遺	SK31出土瓦器椀・SD980出土在地系土師器	244
	S930出土在地系土師器	244
	SK31出土瓦器椀	244

SD750出土在地系土師器	244	写真図版19	251
SD623出土京都系土師器	244	SK141出土青花碗	251
写真図版13	245	SK141出土青磁皿	251
SK63出土甕の胸板(表裏)	245	SK141出土青磁碗	251
SK67出土甕部品(鉄)	245	SK141出土天目碗	251
SK67出土甕部品(青銅)	245	SK141出土青磁皿	251
SP171出土備前焼水滴	245	写真図版20	252
包含層出土メダイ	245	SK141出土磁石・火打ち石(石英)	252
北調査区包含層出土の高麗青磁碗	245	SP192出土高麗青磁碗	252
北調査区包含層出土の古瀬戸	245	SK253出土青花碗	252
写真図版14	246	SE252出土青花碗	252
SK26出土青磁皿	246	SK255出土瓦質土器	252
SK134出土青花碗	246	磁石(天草砂岩)	252
SK255・273等出土青花碗	246	SP270出土青花碗	252
SAK273/75次S292出土青花碗	246	写真図版21	253
写真図版15	247	SP271出土白磁皿	253
SD20出土青花碗・SK23出土白磁碗	247	SP327出土磁石(天草砂岩)	253
SK23(白磁)	247	SK237出土中国製黒釉陶器	253
SD31出土青花碗	247	SP278出土青花碗	253
SD31出土青花碗	247	SP369出土青花碗	253
SD32出土青花碗	247	SP369出土備前焼播鉢	253
SK33出土五彩碗	247	写真図版22	254
SK33出土青花碗	247	SK369出土備前焼播鉢	254
SK33出土磁石	247	SK369出土備前焼播鉢	254
SK33出土青磁皿	247	写真図版23	255
写真図版16	248	SK382出土青花皿	255
SK36出土磁石	248	SK382出土青花皿	255
SD48出土紅皿	248	SK382・77次S102出土備前焼瓶	255
SD40・SK411出土青磁碗	248	SK398出土青花碗	255
SD41出土青花碗	248	SK398出土青花碗	255
SD41出土青磁碗	248	SK398出土中国南部製焼締陶器	255
SD40出土青花碗	248	写真図版24	256
写真図版17	249	SK411出土青花皿	256
SK54出土磁石	249	SK411出土青花碗	256
SK54出土青花碗	249	SE519出土華南三彩蓋	256
SK54出土備前焼播鉢	249	SP438出土青花碗	256
SK58出土青花碗	249	SE519出土華南三彩鳥形水滴	256
写真図版18	250	SE519出土青花碗	256
SK58出土青磁皿	250	写真図版25	257
SK63出土備前焼水屋甕	250	SE519出土瓦質土器	257
SK63出土瓦質土器	250	SE519出土白磁皿	257
SK67出土青花皿	250	SE519出土青磁皿	257

SE519出土青花碗	257	B61区出土青花皿	262
SE519出土青花碗	257	B61区出土青花碗	262
SE519出土中国南部製黑釉陶器	257	写真図版31	263
写真図版26	258	B61区出土染付碗	263
SP548出土世紀碗	258	B62区出土青花碗	263
SD750出土青磁碗	258	B62区出土青花碗	263
SD750出土青磁碗	258	B62区出土白磁碗	263
SD750出土青磁碗	258	C60区出土青花碗	263
SD750出土青磁合子蓋	258	C60区出土青花碗	263
SD750出土白磁皿	258	C60区出土青花碗	263
SD750出土瀬戸美濃御皿	258	C60区出土白磁碗	263
写真図版27	259	C60区出土白磁碗	263
SD750出土青磁碗	259	C60区出土瀬戸美濃製御皿	263
SD750出土青磁瓶	259	写真図版32	264
SD750出土備前焼壺	259	C61区出土白磁碗	264
SD750出土瓦質土器	259	C61区出土青磁碗	264
SD750出土瓦質土器	259	C61・62区出土青磁碗	264
SD750出土東播系こね鉢	259	C61区出土青花碗	264
SD750出土東播系こね鉢	259	C61区出土白磁碗	264
写真図版28	260	C61区出土青花碗	264
SE751出土瓦質土器	260	C61区出土青花碗	264
SD754出土備前焼注口	260	C61区出土染付碗	264
SK779出土白磁皿	260	C61区出土染付碗	264
SD884出土瓦質土器	260	写真図版33	265
SP939出土磁石(天草砂岩)	260	C61区出土五彩	265
SP979出土青磁碗	260	C62区出土青磁碗	265
写真図版29	261	C62区出土青磁皿	265
A区出土青磁皿	261	C62区出土青磁碗	265
A62出土区青磁碗	261	C62区出土青磁皿	265
A63区出土青花皿	261	C62区出土青磁碗	265
A60区出土青花碗	261	C62区出土青磁碗	265
A61区出土華南三彩	261	写真図版34	266
A60区出土瀬戸美濃製陶器	261	C62区出土白磁皿	266
B60区出土五彩	261	C62区出土白磁碗	266
B61区出土白磁碗	261	C62区出土白磁皿	266
B61区出土青磁	261	C62区出土青花皿	266
写真図版30	262	C62区出土青花皿	266
B61区出土白磁皿	262	C62区出土五彩	266
B61区出土青花碗	262	D61区出土青磁碗	266
B61区出土青花碗	262	D61区・75次S12出土青花皿	266
B61区出土青花碗	262	写真図版35	267
B61区出土青花合子蓋	262	D61区出土青花碗	267

D61区出土青花碗	267	第186図8 砥石(天草砂岩)	271
D62区出土青磁碗	267	第186図6 砥石(天草砂岩)	271
D62区出土青花皿	267	第196図4 砥石(天草砂岩)	271
D62区出土天目碗	267	第196図5 砥石(天草砂岩)	271
北調査区出土青磁碗	267	第196図6 砥石	271
79層出土青磁碗	267	第196図8 砥石	271
16層出土青磁碗	267	第196図10 砥石	271
表面採集の青磁碗	267	第196図12 砥石	271
表土・75次F61区出土青磁碗	267	第196図2 火打ち石(六太郎石)	271
南調査区(青磁)	267	第196図3 火打ち石	271
写真図版36	268	写真図版40	272
92層出土青花	268	SD31・32出土青磁碗	272
表面採集の青花碗	268	No.590朝鮮製陶器碗	272
南調査区出土の中国南部製黒釉陶器	268	SD930山土青磁碗	272
表土採集の青花碗	268	SD884出土赤間石	272
No.61瀬戸次郎製却皿	268	SP900出土陶器碗	272
表土採集の青花碗	268	写真図版41	275
No.62青磁香炉	268	69次調査区南東上空からの全景	275
No.62青磁	268	69次B調査区直上からの全景	275
写真図版37	269	写真図版42	276
No.108青花碗	269	B1西区北壁土層断面	276
No.140青花碗	269	B2区土層断面(2トレンチ)	276
No.163華南三彩	269	B1西区第1面(西から)	276
No.145・491・75次S130出土青花碗	269	B2区SD4	276
No.145・491・75次S130出土青花碗	269	B1西区SK7	276
No.160白磁碗	269	写真図版43	277
No.205青磁碗	269	B1西区第2面(西から)	277
No.205青磁碗	269	B1東区第2面(北から)	277
No.222青花皿	269	B2 2トレンチ	277
No.226青磁碗	269	B2区SD5	277
No.299青磁碗	269	B1西区SK23	277
写真図版38	270	SK23遺物/土状況	277
No.296青花碗	270	写真図版44	278
No.300天目碗	270	B1東区SD21完備状況	278
No.346/75次青磁	270	B1東区SD21遺物出土状況	278
No.364青花皿	270	B1西区SD21	278
No.468白磁皿	270	B1西区SD21遺物出土状況	278
No.649青磁皿	270	B1西区SD21骨州上状況	278
No.615青磁碗	270	写真図版45	279
写真図版39	271	B1東区SE22	279
第185図2 瓦質土器	271	B1東区SE24	279
第193図1 備前焼播鉢	271	B1東区SF28(北東から)	279

B1東区SF28 (南西から)	279
B1東区SF28半截状況	279
写真図版46	280
B1西区SK30	280
B1西区SD31	280
B1西区SD29土層断面	280
SD29暗灰色粘土層内獣骨出土状況	280
SD29獣骨出土状況	280
写真図版47	281
SD4出土青花碗	281
SK23出土須恵器	281
SK23出土天目	281
SK23出土備前焼甕	281
SK23出土石鍋	281
写真図版48	282
SD21出土土師器環	282
SD21出土土師器環	282
SD21出土獣骨	282
SD29出土青磁皿	282
SD29出土杭	282
SD29出土漆器椀	282
写真図版49	283
SD29出土下駄	283
SD29出土下駄	283
R61区出土弥生土器	283
R61区出土弥生土器	283
R61区出土弥生土器	283
R61区出土弥生土器	283
写真図版50	284
R61区出土弥生土器	284
S61区出土弥生土器	284
R61区出土土師器	284
B2区出土鉄製釣針	284
B2区出土唐津鉄絵皿	284
Q60区出土白磁皿	284

第3章 中世大友府内町跡第69次A調査区

第1節 調査の経緯

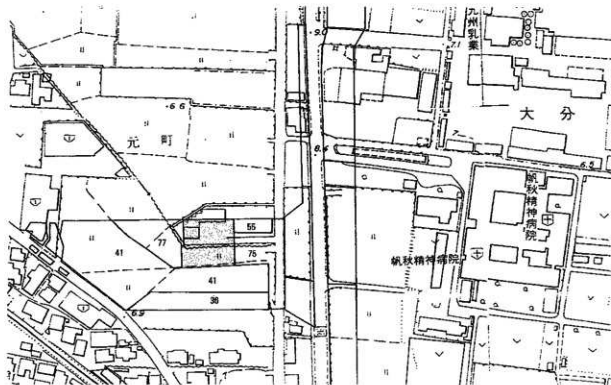
中世大友府内町跡第69次調査区は大分県大分市六坊北町に所在し、標高約5.5mの沖積低地上に立地する。

本節で報告する第69次調査区については、県道庄の原佐野線建設に伴い大分県土木部大分駅周辺総合整備事務所からの委託を受け、2006年(平成18年)7月13日～2007(平成19)年1月31日までの約7ヶ月間発掘調査を行った。発掘面積は約1400㎡である。調査対象地は東西の二ヶ所に分かれて存在したので、第41次調査区の東側をA調査区とし、西側をB調査区とした。1987年に大分市史編さん委員会が作成した「戦国時代の府内復元想定図」によると、東側に位置するA調査区を南北に二分した場合、北部調査区が「御蔵場」に該当する場所である。調査前にはA調査区北部は南部よりも一段高い場所になっていたが、これはこの場所を事務所として利用していた土地利用者が盛り土を行い、擁壁を削らしていたためである。木来の地面は北側に続く水田の高さと同じである。

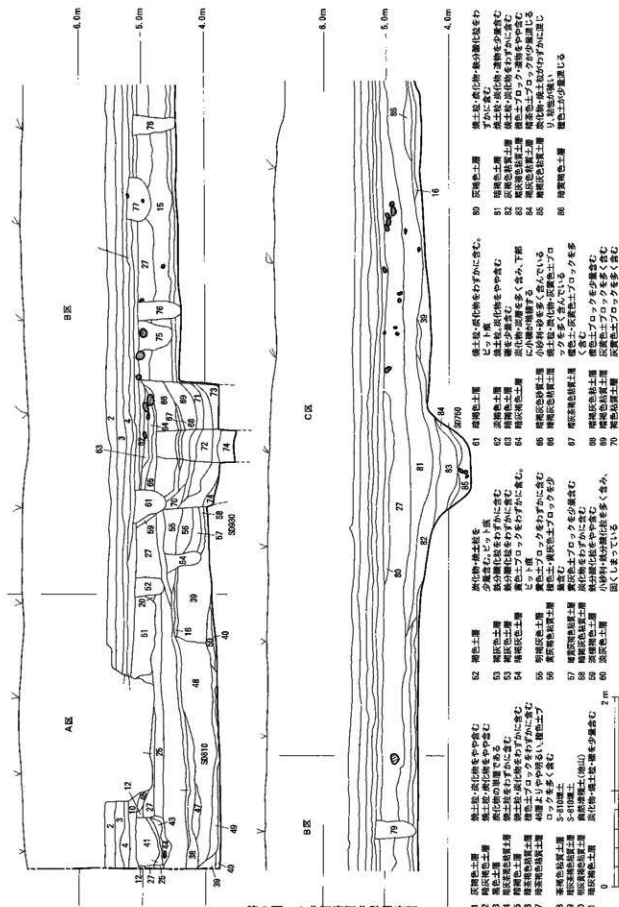
擁壁南部を流れる水路は第69次調査区の西側で屈折し、北西方向に水を流している。この線は「府内古図」にある「御蔵場」の外郭線とされている。したがって、水路に囲まれた内側の第69次調査区の北半部は「御蔵場」の南端に相当することになる。しかし、第69次調査区の東側にあって同じく「御蔵場」南端に位置するとみられる既に報告書刊行済みの第55次調査区では、検出した遺構の状態は町屋を思わせるものであった。

第2節 遺構の概要と基本層序

中世大友府内町跡発掘調査では一般国道10号古国府拡幅事業や庄の原佐野線事業、JR高架化事業それぞれに伴う発掘調査を通じて統一的に、事業対象地区を国上座標(旧日本測地系)に乗せた10m方眼で区画している。それぞれの区画には西から東へJ～M、北から南へ1～78の番号を付し、アルファベットと数字の組み合わせで、各々の区画を呼称することになっている。



第1図 第69次A調査区位置図

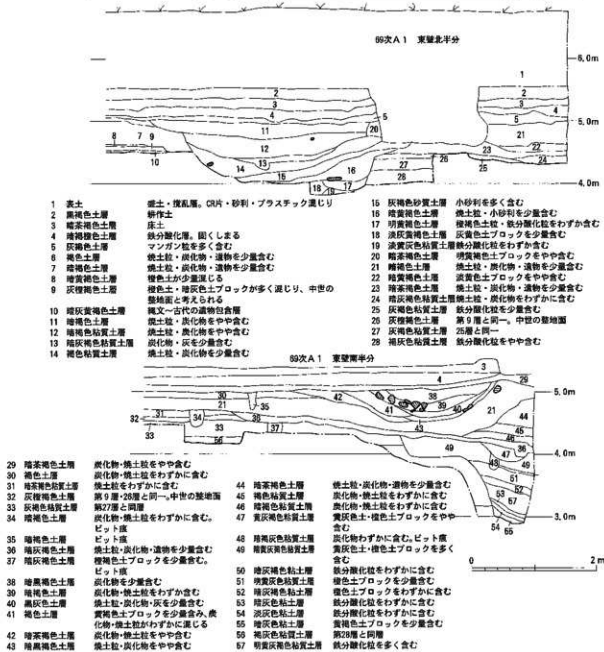


第2図 A北湖東区北麓層序図

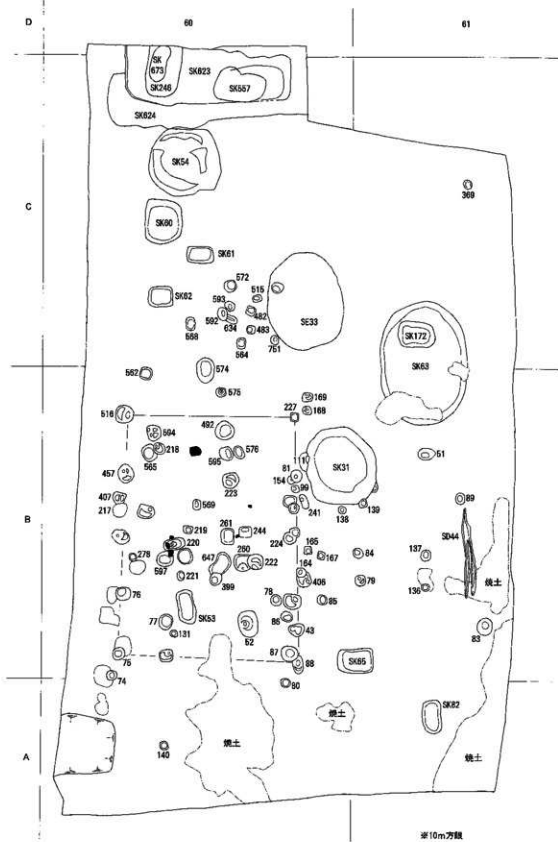
第69次調査区の中央を東西に横切る水田用水路があり、調査中も周辺の耕作に必要なため、この部分をそのまま残して発掘調査した。以下では、水路を境に北側調査区と南側調査区に分けて記述する。調査中は北部をA1区、南部をA2区としたが10m方眼区画と紛らわしいので、本文では上記のように呼ぶことにする。柱穴以外の比較的大きな穴を土坑として扱い、基本的に遺物が出士していなくても図示することにする。

(1) 北調査区

A区北調査区は耕作土を除去すると水田床土の硬く締まった面が現れる。この層は中世の遺物を含んでいるため手掘りで掘り下げた。ほぼ標高5.2mの面まで下げると初めて遺構確認面となる(第5図)。この高さでは部分的に調査区中央部から西部に焼土が分布し、焼土を切る細い溝状の遺構を南部に一カ所検出した。近世以降の耕作痕跡であるが、近世と思われる遺構は北調査区ではこれだ



第4図 A北調査区東壁層序図



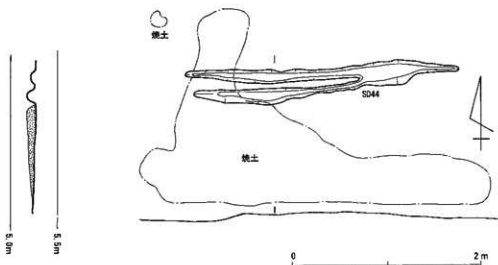
第5図 A北調査区最上層の遺構

けであり、東西方向の細い溝状遺構多数検出した南調査区（大型のゴミ穴状土坑、幅広く斜行する溝状遺構群を検出）や東側に隣接する第55次調査区（東西方向の細い溝状遺構多数と南北溝若干を検出した）の状況とは異なる特徴であった。その他の土坑や柱穴類穴類は焼土と同じ高さ、あるいは焼土面を少し下げた段階で検出した遺構である（第5図）。

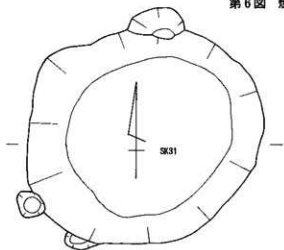
遺跡は中世の時期のものが複数堆積した状態であった。したがって、遺構番号は小さい番号が比較的新しい遺構を示すが、必ずしも調査した順番に時期毎に検出できた訳ではない。出土遺物を参考にして、ほぼ新しい時期の遺構から説明するが、基本通りには行かない点があることをあらかじめ断っておきたい。

第3節 近世以降の遺構と遺物

SD44（第6図） B61区にあり、焼土を切る東西方向の溝状遺構である。標高5.24mで検出した。深さは10cm前後で、出土遺物はないが、近世以降に掘られた耕作痕とみられる。



第6図 焼土を切る溝（SD44）・SK31実測図



第4節 中世の遺構と遺物

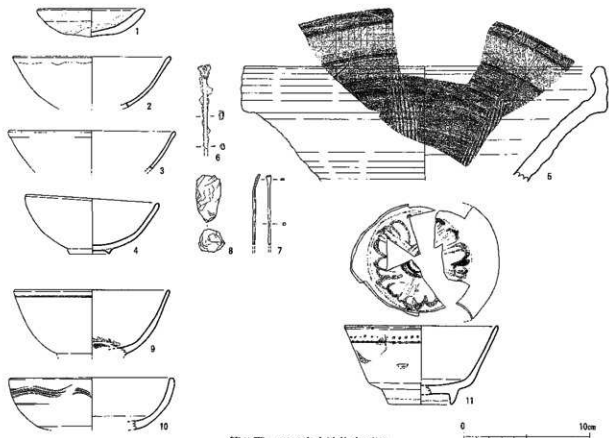
厳密に時期差を確認出来たわけではないが、中世の遺構を上層・中層・下層に分けて説明する。

上層の遺構

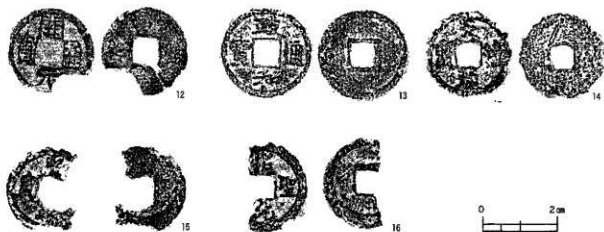
近世の遺構とほぼ同じ高さで検出した遺構である。第5図は水田床土を掘り上げた段階に現れた遺構の分布図である。中世末の遺構を検出した。この次の段階は第63図に示しているが、第5図との明確な時期差はとらえがたい。

SK31（第6図） C60区に位置する円形土坑である。検出標高は5.24m。16世紀後葉。

出土遺物（第7・8図1～16） 1は3期の京都系土師器である。内外面に煤が付着する。2は白磁



第7図 SK31出土遺物実測図



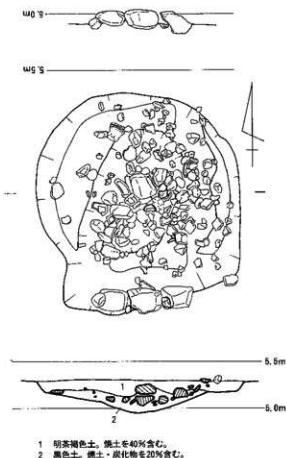
第8図 SK31出土銭貨拓形

碗、3も白磁碗、4は吉備系土師器碗である。口径10.6cm、器高は4cm～4.8cmと歪である。内面と体部外面上部までは横方向のナデ調整、以下はヘラ磨きしている。5は中世6期の備前焼き播鉢、6は鉄製の釘、7は青銅製の棒状製品で、図の上部は扁平、その他は断面四角である。8は水晶製の火打ち石と思われるもの。9は中国南部漳州窯系の青花碗、10は青磁碗で口縁部に波状櫛描き紋がある。11は漳州窯系の青花碗である。12～15は銭貨で、12は、政和通宝（北宋1111年初鑄）、13は天福通宝（北宋1017年初鑄）、14は開元通宝（唐621年初鑄）、16は紹聖元宝（北宋1094年初鑄）。

SK54（第9図） C60区にある浅い円形土坑である。標高5.02mで検出した。南辺は直線的で、大型

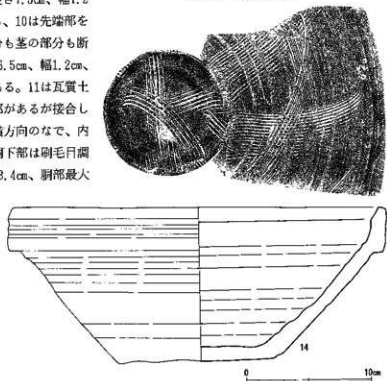
の石3個が同一面に並べられている他、内部からは多量の遺物・礫が廃棄された状態で出土した。規模は平面が $2.32\text{m} \times 2.16\text{m}$ 、深さ 35cm である。16世紀後葉の遺構である。

出土遺物(第10・11図1~14) 1~6は3期の京部系土師器である。1は器壁が厚く、横方向のなでによって口縁部を小さく外湾させている。口径 16.0cm 、器高 2.9cm で色調は褐色である。2は浅い器形で、口縁部は強調されない。口径 12.4cm 、器高 2.0cm で、色調はにぶい黄褐色である。3は口縁部の器壁がやや厚く、口縁部は強調されない。口径 13.6cm 、器高 2.6cm で、色調は褐灰色である。4も口縁部を強調しない杯で、口径 12.0cm 、器高 2.7cm で、色調は淡黄褐色である。5は口縁部に煤が付着した灯明皿である。口径 8.8cm 、器高 2.0cm で、色調はにぶい黄褐色である。6は内面及び口縁部外面に煤が付着した灯明皿である。口径 8.8cm 、器高 1.8cm で色調は褐灰色である。7は中国景德鎮窯系の青花碗、8は青磁瓶で、底部が極端に厚い。高台外面には上方から軸が垂れるが、壺付と内側には軸が及ばない。底径 9.0cm 。9・10は鉄製品でどちらも片側の刃がついている。9は長さ 7.3cm 、幅 1.2cm 、厚さ 2mm の刀子である。10は先端部を欠損した刀子で、刃の部分も茎の部分も断面は三角形である。長さ 16.5cm 、幅 1.2cm 、厚さ 3mm 、重さ 14.1g である。11は瓦質土器の土釜、口縁部と胴下部があるが接合しない。器面調整は外面が横方向のなで、内面は指押さえ痕が残り、胴下部は刷毛目調整のままである。口径は 13.4cm 、胴部最大径は 23.0cm で、直径 5mm 程度の穴が開いた把手が付く。胴部最大径部分よりも少し下に鐙が廻る。色調はにぶい褐色である。12は凝灰岩製の加工品である。四角形に面とりしており、何らかの製品の一

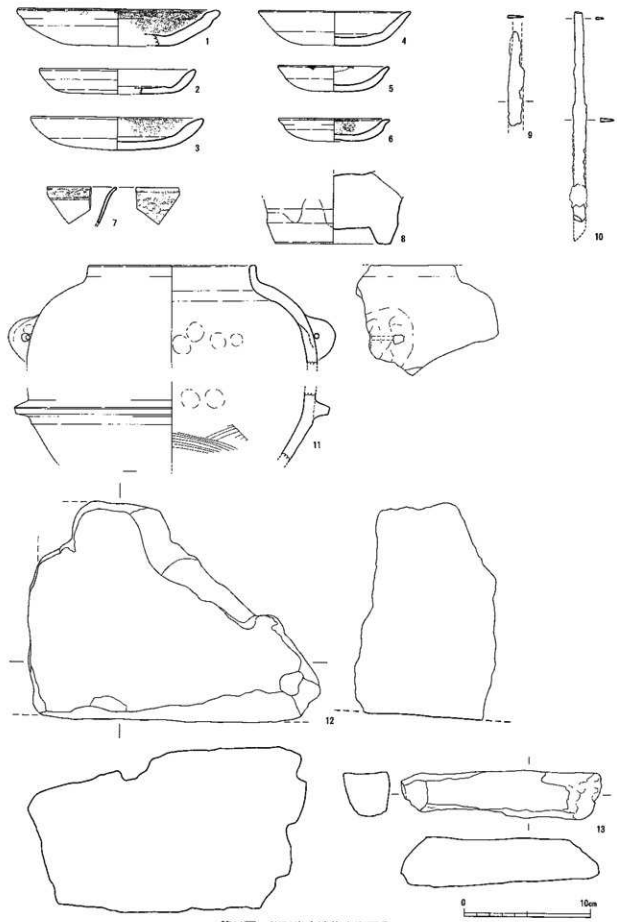


1 明茶褐色土、炭土を40%含む。
2 黒色土、炭土・炭化物を20%含む。

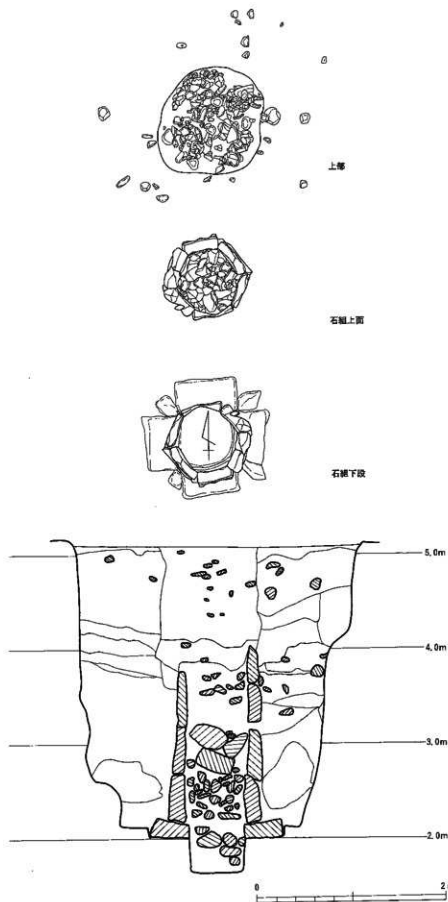
第9図 SK54実測図



第10図 SK54出土遺物実測図①



第11圖 SK54出土遺物実測図②

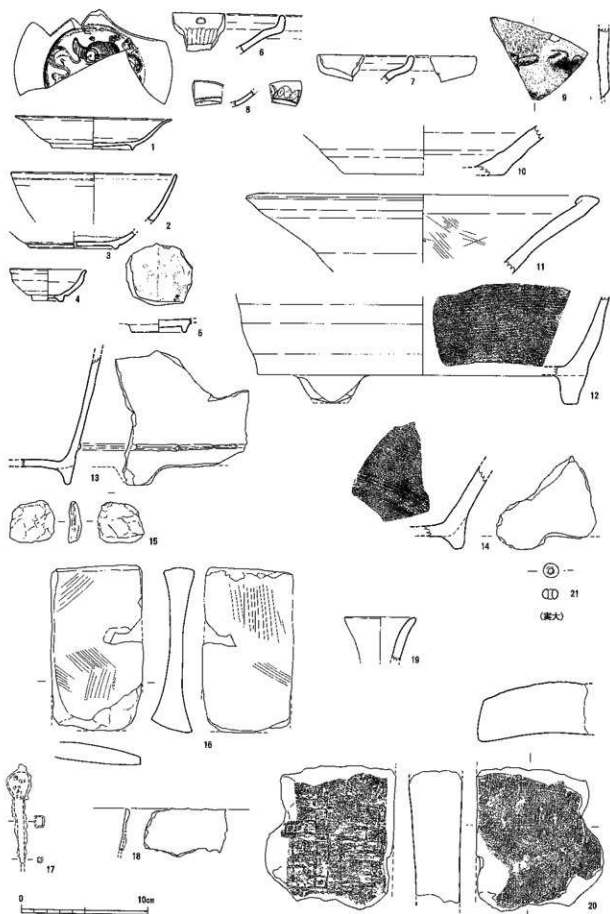


第12図 SE33実測図

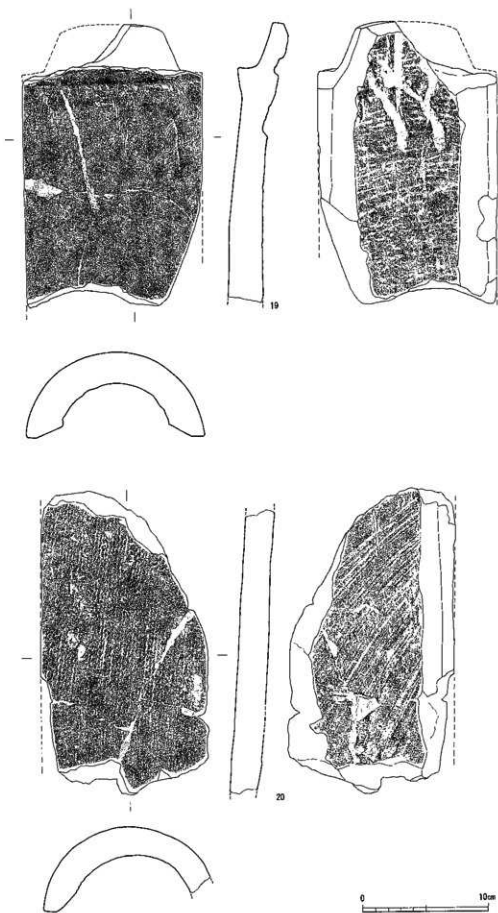
部であるが、本来の形が分からないほど欠損しており詳細は不明である。縦17.0cm、横22.0cm、厚さ11.0cmで、重量は2.5kgある。13は結晶片岩製の砥石で、長さ15.5cm、幅3.8cm、重さ325.6gである。使用面は四で平面を示した1面だけである。14は近世1期の備前焼摺鉢で、体部には16条単位の放射状の摺り目の上から斜行摺り目を加え、見込みには交叉摺り目を入れている。17縁部は上部に斜め部分があり、口径29cm、底径12.2cm、器高12.4cmである。16条の櫛目具を使って摺り目を入れている。

SE33（第12図）C60区南西部に位置する凝灰岩製板石組の六角井戸である。標高5.1mで検出した。検出面の規模は3.12m×2.46mの楕円形である。層序断面に示すように、井側痕跡は上部では縦方向の土層の違いとして認められるが、材質は不明である。おそらく石組を二段程度抜き取ったのであろう。下部には平面が六角形をなす四段の井側石組みが残る、内部に障が埋没していた。最下段の井側は十字形四方に並べられた板石の上に直接乗っており、内部には桶の井筒があったと思われるが、痕跡は残っていなかった。

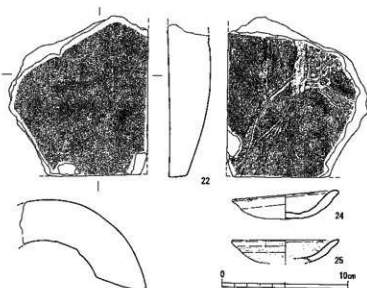
井側・基盤の石とも凝灰岩の切石であり、基盤の石



第13図 SE33出土遺物実測図①



第14図 SE33出土遺物実測図②



第15図 SE33・SK62出土遺物実測図

は内側が円形に組み合うように挟られていた。

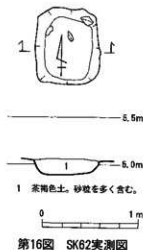
人工遺物の他にブタ幼豚の下顎骨1点が出土している。

出土遺物から16世紀後葉の遺構である。

出土遺物 (第13～15図1～22) 1・10・12・17・21は井筒の外側から出土し、他は井筒内出土である。1は井筒の外側から出土した中国景德鎮窯系の青花皿B1群である。井戸を作る以前、あるいはその段階の遺物である。2は漳州窯系の青花碗、3は白磁碗、4は瀬戸美濃製の天日碗、5は漳州窯系青花碗である。6は龍泉窯系の青磁鉢である。7も青磁鉢、8は五彩磁器の皿、9は華南三彩の鉢である。10は備前焼の鉢、11は瓦質土器の鉢、12～14は瓦質土器の火鉢、15は石英製の火打ち石で、3.2cm四方、重さ15.8gである。16は天草砂岩製の砥石で、井筒内からと外部の包含層出土破片が接合した。表裏2面を使用。17は鉄釘、18は鉄鍋、19は青磁瓶、20は古代平瓦、21は赤色のガラス玉で0.35mm×0.4mm、厚さ0.25g、重さ0.1gである。22は丸瓦。

SK62 (第16図) C60区にある小型の長方形土坑である。標高5.05mで検出した。規模は平面が80cm×68cm、深さ18cmである。出土遺物から16世紀第4四半期の遺構である。

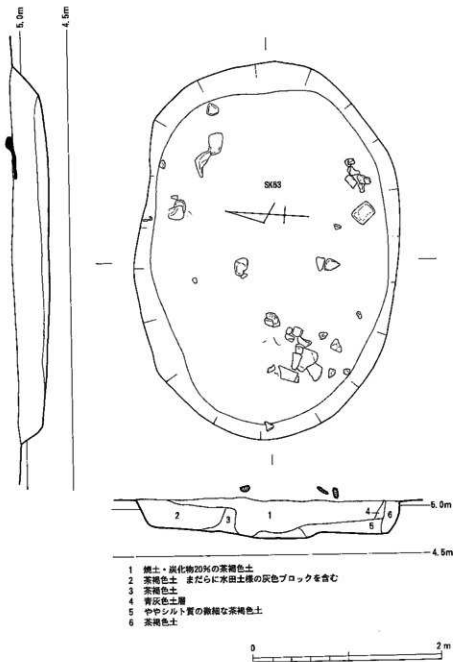
出土遺物 (第15図24・25) 25・26は3期の京都系土師器である。25は口縁部の器壁が厚い小型の環で、口径8.5cm、器高1.9cmで色調は淡黄褐色である。口縁部に煤が付着しており、灯明皿として使われている。26は内外両面に広く煤が付着した灯明皿として使われた小型の環である。口径8.4cm、器高2.8cm+αで、色調は黒色である。



第16図 SK62実測図

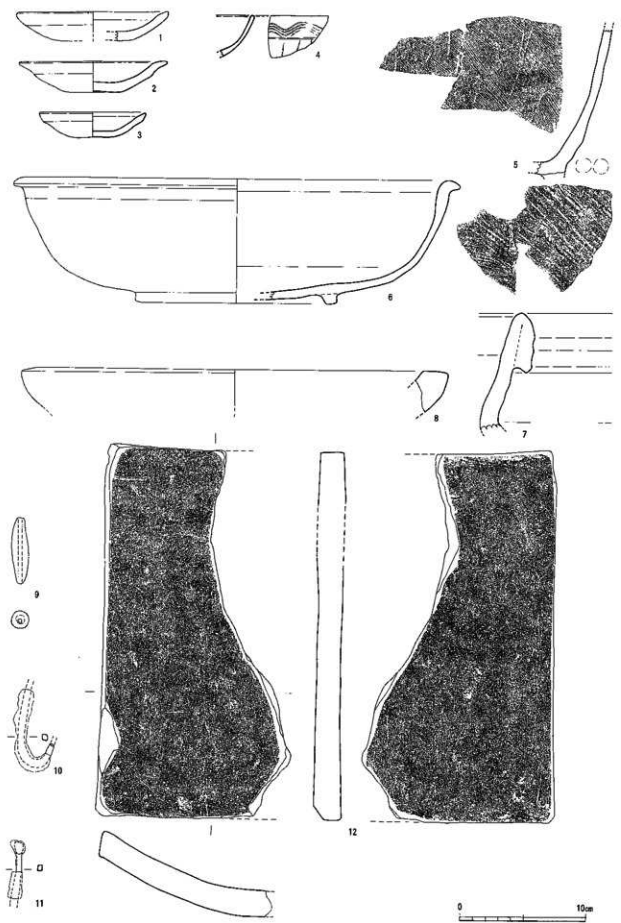
SK63 (第17図) B61区とC61区の境に東西方向に長く位置する土坑である。上部には土坑範囲よりも外側から内側に掛けて焼土が分布していた。焼土を除去して下げた段階で標高5.1mで楕円形の土坑を確認した。断面図に示すように埋土上部には焼土が多い。遺物も検出面よりも上から出土し始めており、本来はもっと上に掘り込み面があったとみられる。規模は東西4.0m、南北2.8m、深さ40cmである。出土遺物から16世紀第4四半期の遺構である。遺構の性格ははっきりしないが、付近に粘土採掘坑が数基あるので、SK61もその可能性がある。

出土遺物 (第18～21図1～14) 1～3は3期の京都系土師器である。1は器壁が

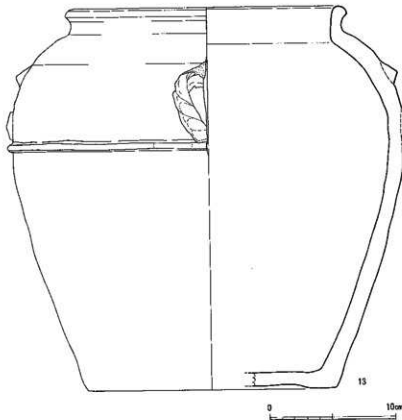


第17図 SK63実測図

均一に厚い器形で、口縁部と体部の境は強調されていない。口径12.0cm、器高2.3cmで、色調は淡黄褐色である。2は口縁部外面を横方向になでることにより口縁部を作り出し、先端部を外側に突き出させている。口径11.7cm、器高2.4cmで、色調は明赤褐色である。3は小型で器壁は比較的薄い。口縁部を厚くすることにより体部と区別している。口径8.4cm、器高2.0cmで、色調はにぶい棕色である。4は青磁碗である。口縁部に櫛描き波状文を描き、その下に沈線紋がある。5・6は瓦質土器の鉢である。5の器面調整は外面は指によるなで行われ、底部近くでは粘土を指で押さえて底部の立上がり部を形成し、内面は斜め方向に刷毛調整を細かい単位で繰り返して行っている。外底面は工具によって平行になで付けたようになっている。色調は灰色である。6の破片はほとんどSK63から出土しているが、他にS61とS969から1片ずつ出土した。体部から底部は丸く連続し、中央

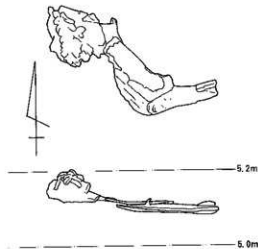


第18圖 SK63出土遺物実測図①



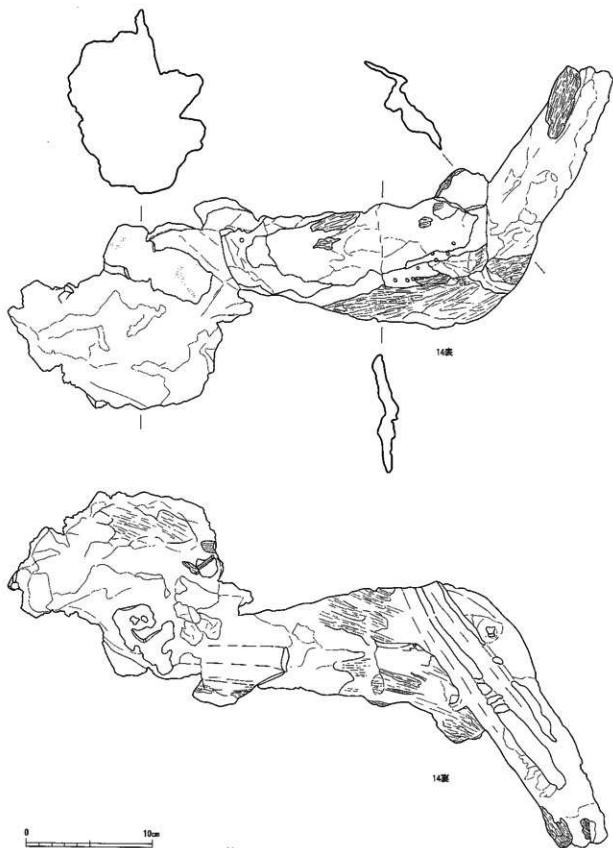
第19図 SK63出土遺物実測図②

11も鉄製品である。同じく断面形が四角で、全体を錆が覆い、両端を欠損する。長さ4.5cm、厚さ4mm、重さは5.2gである。12は平瓦で縦29cm、厚さ1.9cmである。長軸断面図の下面はへら切りを行っている。13は中世6期の備前焼水屋甕である。胴部最大径は上位にあり、最大径付近に1条の断面三角突帯を貼り付けて廻らす。突帯にくっつけて上部に捻った粘土紐を環状にしたものを貼付している。口縁部は垂直気味に短く立ち、端部が膨らむ。口径19.9cm、底径19.5cm、胴部最大径31.2cmである。14は埋土北東部の上部に平たい状態で出土した遺部品である。出土状態は鉄製部品を第20図に示すように水平に横たわって出土した。SK61を土坑として確認する前の段階ですでに出土したので、SK61がかなり埋没した状態の時に廃棄された遺物である。中心に木質や布らしい部分もあるが、錆びているため、胸をおおう鎧の部品、胸板の上部に該当する部品であろうとしか分からない。第21図上の細い線が密集したように描いた部分は木質である。その木質物が乗るくの字形の平板部分は鉄板であり、その鉄板屈曲部に小穴が空いて乗っているのは鉄製の小札群である。小札は上図の左の部分にも折り重なっているようである。この物体の全長は52.0cmで、最大の厚さは14.4cm、重さは2.5kg



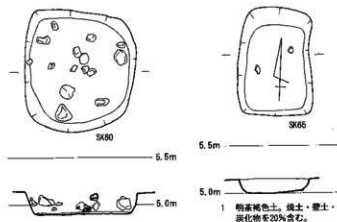
第20図 SK63出土状況実測図

部分は垂れ下がっている。器面調整は回転へら削りを行っており、底面に断面の四角い高台を貼り付けている。口縁部は短く外湾させ、先端は外側に尖る。外面は口縁部直下に横方向のなでを行い、下位と区別している。口径35.4cm、高台最大径16.0cm、器高9.75cmで、色調は灰白色である。7は中世6期の備前焼甕である。口縁部は外側に傾き、折り曲げて厚くした口縁部下部には二条の凹線が廻る。8は砂粒の細かな安山岩質の上白で、最大径は33.8cm。外面にノミ痕、口縁部上端と内面は磨き込まれている。9は上節質の上鎌で長さ5.2cm、幅1.3cm、重さ7.6gである。10は鉄製品で釣り針状を呈するが全体を錆が覆う。断面形は四角であり、釘が曲がったものか。両端を欠損している。長さ7.0cm、厚さ4mm、重さは17.8gである。

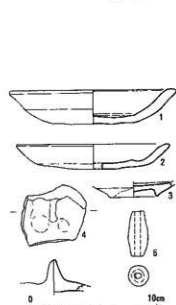


第21図 SK63出土遺物実測図③

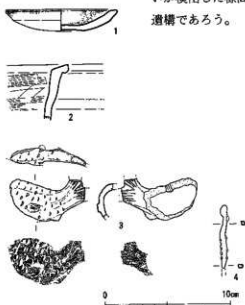
である。



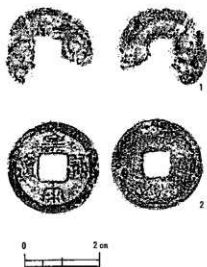
第22図 SK60・65実測図



第23図 SK66出土遺物実測図



第24図 SP162・168・171出土遺物実測図



第25図 SK159出土遺物拓形

SK60 (第22図) C60区でSK54の西側に位置する円形気味の土坑である。標高5.02mで検出した。年代の分かる出土遺物はないが、検出標高の高さから16世紀末頃の遺構であろう。

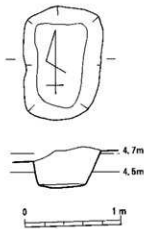
SK65 (第22図) B61区北西隅の標高5.1mで検出した長方形の土坑である。長軸は南北方向を向いている。

規模は平面が1.15m×80cm、深さが15cmである。埋土は1枚しか認識できない状態で、焼土・壁土や炭化物を含んでいたため、火事の廃棄物を捨てた穴である。年代の分かる出土遺物はないが検出した標高からみて16世紀第4四半期の遺構であろう。

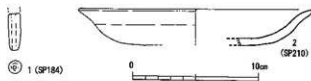
SK66 F64区で検出した土坑である。出土遺物からみれば16世紀第3四半期である。

出土遺物(第23図1~5)
1・2は3期の京都系土師器である。1は底部に比べて体部の器壁が厚い器形で、口縁部は強調されていない。口径13.2cm、器高2.7cmで、色調は暗黄褐色である。2は1よりも器壁が薄く、浅い器形である。口径12.0cm、器高2.0cmで色調は

淡黄褐色である。3は内外面に各1条の染付け線が回る青花皿である。削り出した高台は萐荷底状をなし、高台部分と内側は露胎である。底径3.8cm。4は瓦質土器の蓋で、突出部分は円形ではなく帯状である。色調はにぶい黄褐色である。5は土師質の土罐である。長さ3.5cm、幅1.6cm、重さ10.0gである。



第26図 SK172実測図



第27図 SP184・210出土遺物実測図

SP74 B60区にある柱穴類である。

SK159 B63区の柱穴類である。

出土遺物(第25図1) 1は中国銭貨である。銘は読めない。

SP169 B60区の柱穴類である。標高4.99mで検出した。

出土遺物(第25図2) 2は皇宋通宝(北宋1088年初铸)である。

SP162 B60区の標高5.06mで検出した柱穴類である。

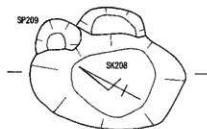
出土遺物(第24図1) 1は3期の京都系土師器である。口径8.8cm、器高1.7cm、内面と口縁部外面に煤が付着し、灯皿皿として使われたことが分かる。

SP168 B60区の標高4.99mで検出した柱穴類である。

出土遺物(第24図2) 2は出土した瓦質土器鍋である。短い口縁部が屈折し、内側に鋭い稜線がつく。器面調整は内面は刷毛による横方向のなで、外面は指による横方向のなでである。これは14世紀代の瓦質鍋であり、古い時期の遺物が混入したのであろう。

SP171 B60区の標高5.00mで検出した柱穴類である。

出土遺物(第24図3・4) 3は備前焼の魚形水滴で、背中に1孔がある。型押しで整形し、二つを合わせて仕上げた製品であり、半分が出土した。鱗の紋様は竹を半分に削ったような道具で削って表現し、尾は沈線で表現している。縦2.6cm、横5.9cmである。同じく4は鉄釘で、全体が錆で覆われているがわずかに湾曲している。



第28図 SK208実測図

SK172(第26図) C61区のSK63の下層、標高4.73mで検出した楕円形土坑である。時期の分かる出土遺物はない。平面形は隅丸の楕円形で、長さ1.25m、幅80cm、深さ30cmである。



SK208(第26図) C62区の標高5.05mで検出した土坑である。平面形は楕円形で、規模は縦1.68m、横1.0mで深さは60cmである。東部で柱穴類2個と重複する。

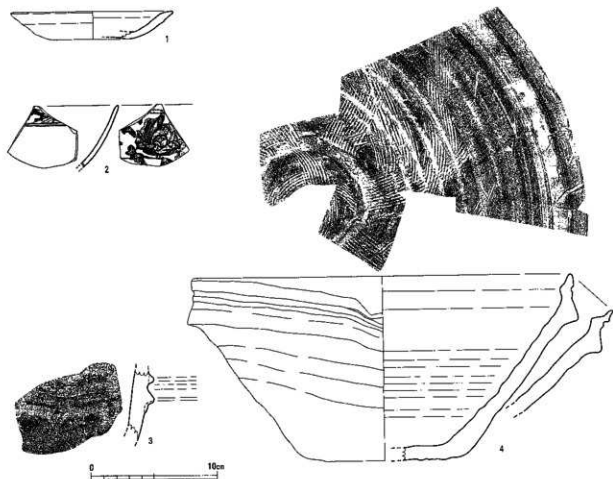
年代の分かる出土遺物はないが、検出面の標高から16世紀後葉頃の遺構であろう。



第29図 SK211出土銭貨拓影

SP210 Y63区の標高4.52mで検出した柱穴類である。

出土遺物(第27図2) 2は出土した2期の京都系土師器である。大型の器形で、口縁部は横方向のなで調整によって体部と区別しわずかに外湾



第30図 SK369出土遺物実測図

する。口径18.4cm、器高2.8cm。色調は淡黄橙色を呈する。

SP211 Y64区の標高5.05mで検出した柱穴類である。

出土遺物（第29図1） 1の天型元宝（北宋1023年初铸）1点が出土した。

SK303（第38図） A1区にある柱穴類である。

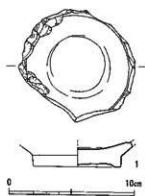
出土遺物（第111図3） 3は内面にロクロ目を残す在地系土師器である。口径9.2cm、底径5.5cm、器高1.7cm。

SK369（第5図） C61区にあり、大型土坑のSK560南部に掘り込まれた柱穴類である。標高4.94mで検出した。

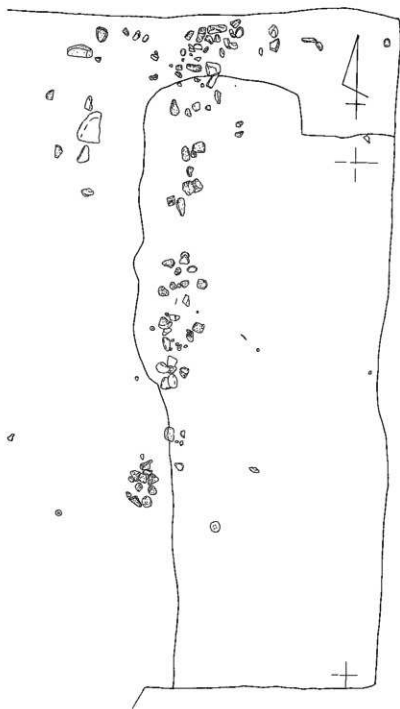
出土遺物（第30図1～4） 1は2期の京都系土師器である。口径12.8cm、器高2.2cm、色調は淡黄色を呈する。2は景徳鎮窯系の青花碗である。輪郭を描いた後、薄い呉須で埋めている。3は弥生時代後期の壺形土器である。4は近世1期（16世紀第4四半期末～17世紀第1四半期）の備前焼播鉢である。口径29.9cm、底径9.4cm、器高14.5cmで14条の櫛による揃り目をもつ。

SK556（第33図） 調査区北西部にある土坑である。

出土遺物（第34図1～6） 1は内面にロクロ目を残す在地系土師器で、底径5.7cm、器高2.4cmで、

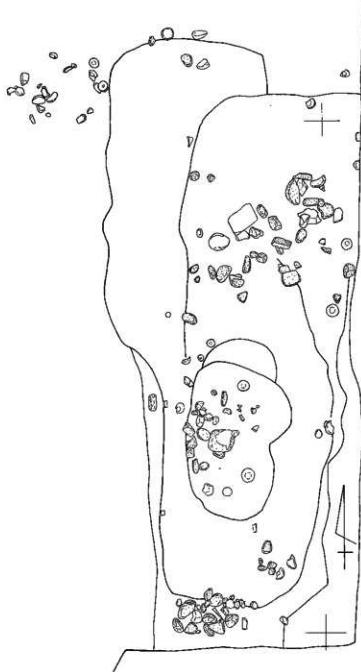


第32图 SK548出土遺物実測図



C60区	D60区
C61区	D61区

第31图 SK439他遺物出土状況



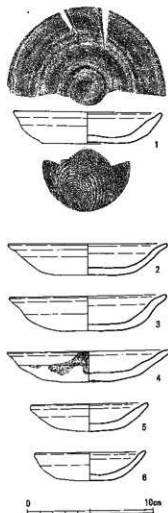
第33図 SK439・566等遺物出土状況

つ。口径8.2cm、器高2.2cm、色調はぶい黄橙色である。

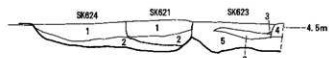
SD439 (第36図) C60区の廃棄土坑である。1は在地系土師器で、2～6は京都系土師器である。7は中国製白磁皿で、この手の白磁皿の施軸範囲は口縁部内外だけである。口径14.5cm、底径7.8cm、器高2.7cmである。8は中世6期の備前焼播鉢で、9条の櫛による播目をもつ。口径28.0cm。9は青銅製の板状製品の破片である。

色調はぶい黄橙色を呈する。2～6は2期から3期の京都系土師器である。2は口縁端部を外側に折り曲げたように、口縁上部を横方向にんでいる。口径13.2cm、器高2.1cm、色調は暗灰色を呈する。3は口縁部と体部の境を強調しない。内面には粘土板接合時の痕跡が残る。口径10.4cm、器高2.0cm、色調は暗赤褐色である。

4は外面に板状工具痕が縦方向につき、器壁は比較的薄い。口径12.8cm、器高2.8cm、色調はぶい橙色である。5は口径10.4cm、器高2.3cm、色調はぶい黄橙色である。6は坏である。底部は丸く、口縁部はさらに屈折して立



第34図 SK566出土遺物実測図



SK621

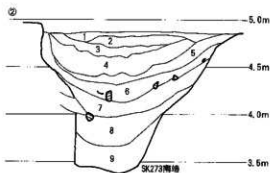
- 1 増灰褐色土 炭化物ブロック焼土ブロック多量混入
砂質で比較的しまりあり
- 2 暗灰褐色土 1層に比べ黒味強く、焼土でブロック
は含まない

SK623

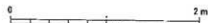
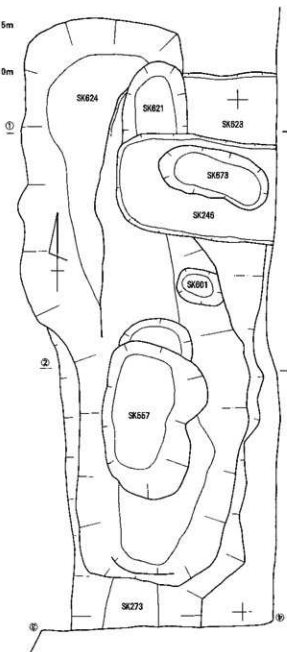
- 1 増灰褐色土 SK621の1層とほとんど同一だが炭化物
ブロックは小さく混入割合も少ない
白色粒を若干混入する
- 2 1層とベースは同じであるが白色粒を含む
- 3 2層と同一 炭化物焼土はみられない
- 4 暗褐色土 焼土ブロック炭化物ブロックを少量含む

SK624

- 1 増褐色土 SK621の1層に比べ、黒味が強くやや明
るい焼土ブロック、炭化物ブロック、
黄褐色地山粒を含む砂質
- 2 暗黄灰褐色土 黄色地山粒を多量に含む、しまりあり

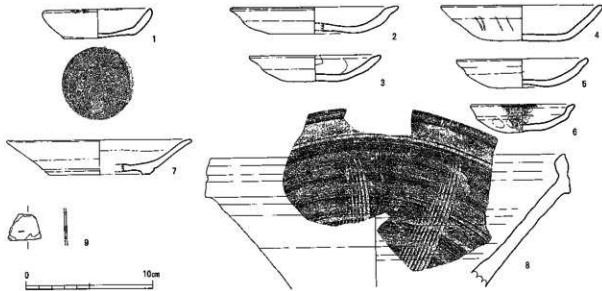


- 1 灰褐色土
- 2 灰褐色土層
- 3 灰褐色土質砂層
- 4 純褐色層 上部は褐色気味、下部は灰褐色(うろい色)
- 5 灰のためが黒色の土
- 6 高褐色土 木炭少量含む
- 7 暗褐色土



- 1 赤黒褐色 焼(丸)を含む
- 2 砂
- 3 赤黒灰土 炭化物少量含む
- 4 赤褐色土
- 5 赤褐色土
- 6 赤褐色土
- 7 赤褐色土 不規則な塊状の砂が混入している
- 8 赤褐色土
- 9 赤褐色土
- 10 赤褐色土
- 11 赤褐色土
- 12 赤褐色土 砂が混入している
- 13 暗黄褐色土

第35図 SKK246・273・557・601・621・623～625・673実測図



第36図 SD439出土遺物実測図

礎石 (第37図)

礎石の可能性のある石がA60区に分布したのでここで説明する。最上層の焼土面付近の比較的狭い範囲に分布するが建物跡を復元できなかった。これらの石は上面が標高5.2m前後に位置するので、16世紀第4四半期頃とみられる。

SK36 (第38図) A60区の南東部の標高5.16mで検出した長方形土坑である。西部には柱穴類1基が重複している。規模は東西1.92m、南北1.02m、深さ40cmである。埋土上部には焼土・礎土を多量に含んでいる。出土遺物から16世紀前葉に所属する遺構である。

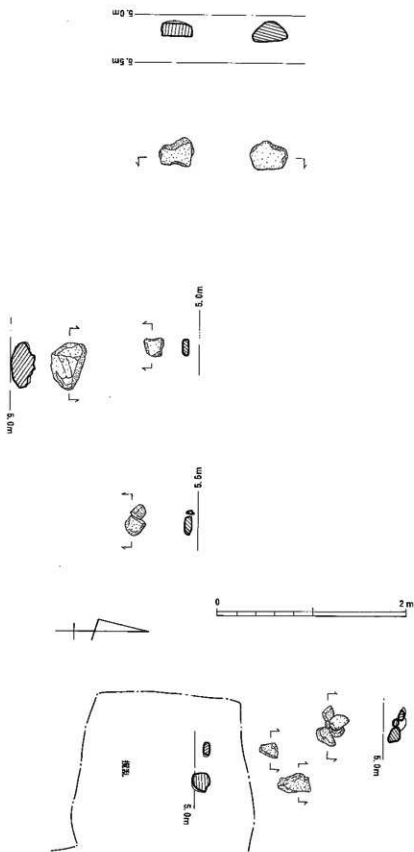
出土遺物 (第42図1~8) 1・2は内面にクロロ目を残す在地系土師器である。1は口径13.9cm、底径8.2cm、器高2.8cmで、2は口径10.2cm、底径5.4cm、器高1.7cmである。3・4は1期の京都系土師器である。3は口径14.0cm、器高2.4cm、4は口径10.2cm、器高1.8cmである。5は景徳鎮窯系の青花皿である。6は瓦質土器の火鉢で体部の下方に廻る突帯の間には双頭龍手紋3個が刻印されている。7は結晶片岩製の砥石で、両面を使用しているが、欠損している。長さ10.0cm。8は多孔質の安山岩製上臼である。図の穴は中心の穴ではなく、穀物等が落ちる部分である。

SK82 (第40図) A61区の標高5.19mで検出した楕円形小型土坑である。東部では鍛冶に関連するとみられる焼け土を切っている。規模は東西1.06m、南北60cmで、深さ20cmである。出土遺物はなかった。

SP126 標高4.26mで検出した柱穴類である。

出土遺物 (第41図1) 1は結晶片岩製の薄い砥石で、上下両端を欠損する。平たい両面を使用している。厚さ6mm前後で、現状で長さ12.0cmである。

SK157 B61区にある柱穴類である。標高5.1mで検出した。出土遺物から16世紀第4四半期の遺構である。



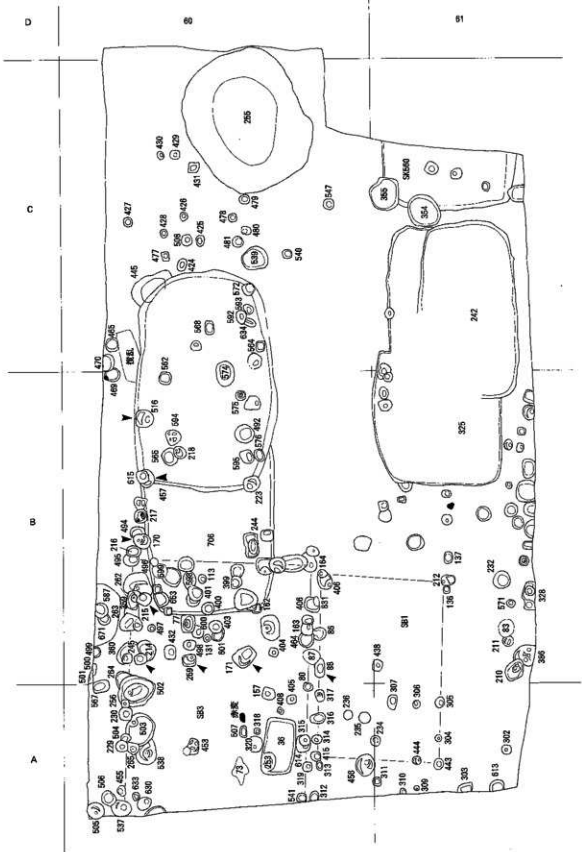
第37図 礫石出土状態実測図

出土遺物（第41図
2・3） 2・3とも3期の京都系土師器である。口径・器高はそれぞれ2が13.2cm・2.4cm、3が13.0cm・2.6cmである。

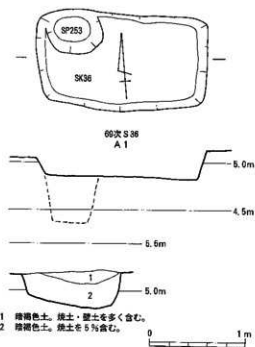
SK221 B60区
の5.01mで検出した柱穴類である。この位置では下からSK706が出土している。

出土遺物（第43図
1～3） 1・2は瓦質土器の火鉢である。1は脚部のない部分の破片である。SP221からは破片1点が出土し、この同一個体破片が下に位置するSK706からも2点出土しているの
で、本来はSK706に属する遺物であろう。2は底径39.0cmで、この同一個体破片がSK255からも出土している。3は瓦質土器のこね鉢である。底径16.8cm。

SK235・236（第44図） A60区の南東部で鍛冶遺構2基が接近して出土した。SK235は標高5.08mで検出した。赤く焼けた範



第38図 上層の中世遺構



第39図 SK36実測図

円が直径66cm×70cmの円形状にあり、その中央部分には皿状の鉄があり、その周囲は灰色に変色している。鍛冶の痕跡であろう。検出した標高からみて他の遺構と同様、16世紀第4四半期の遺構であろう。

SX235 (第44図) 鍛冶遺構である。A61区で検出した。中心部に鉄滓が溶けて固まった16cm×12cmの部分があり、厚さは4cmを計る。その周囲に灰色土の分布域があり、さらに高熱で赤色に変色した範囲が取り囲んでいる。

SX236 (第44図)

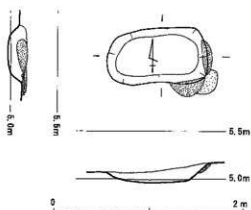
A61区にあり、SX235の北側で検出した。中心から鉄、灰色土、赤変域からなる。

SK243 E63・D63区の標高4.87mで検出した柱穴類である。

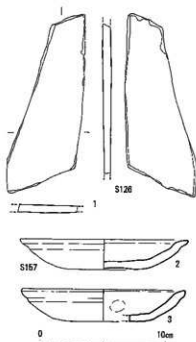
出土遺物 (第45図1) 1は2期の京都系土師器で、口径12.4cm、器高2.9cm、色調はにぶい黄褐色である。

SK245 B65区の標高4.98mで検出した柱穴類である。

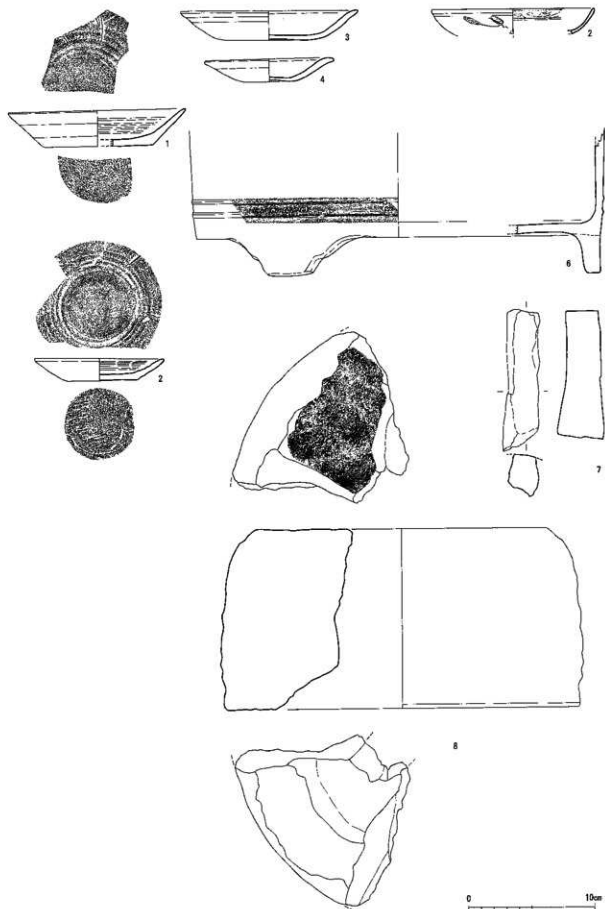
出土遺物 (第45図2・7) 2は2期の京都系土師器で、口径13.1cm、器高2.2cm、色調は淡黄色である。7は鉄釘で、何かに打ち付けたためか曲がった状態で出土した。長さ7.2cm、厚さは0.6cm×0.4cmの角釘である。



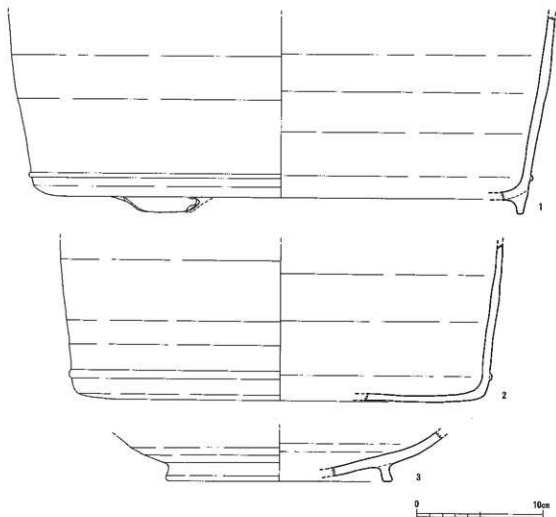
第40図 SK82実測図



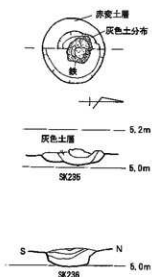
第41図 SK126・157出土遺物実測図



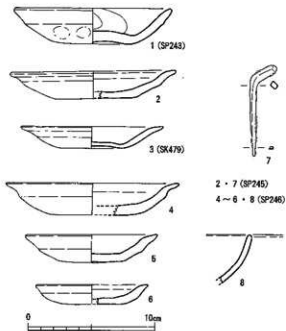
第42図 SK36出土遺物実測図



第43図 SK221出土遺物実測図



第44図 鍛冶遺構実測図

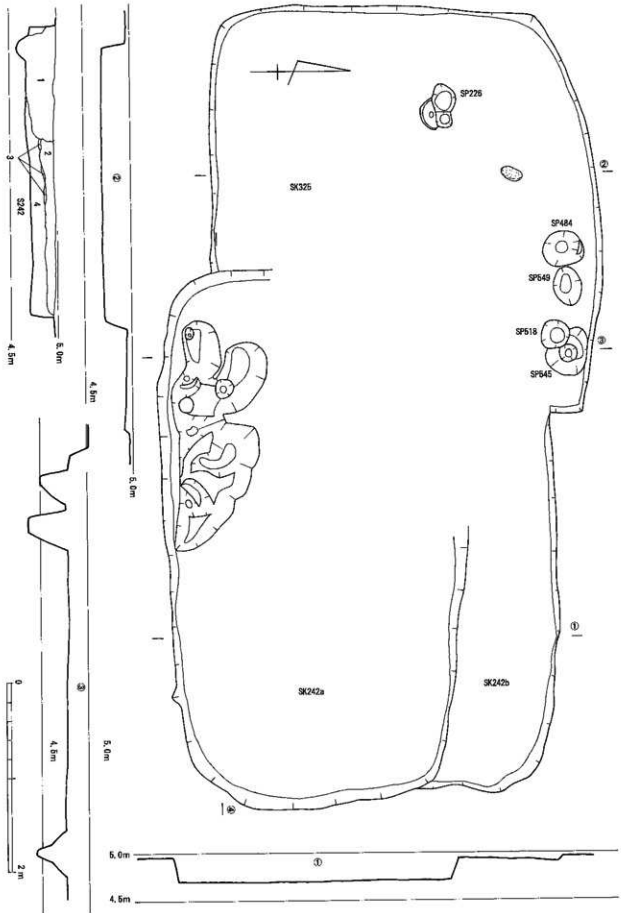


第45図 SK243他出土遺物実測図

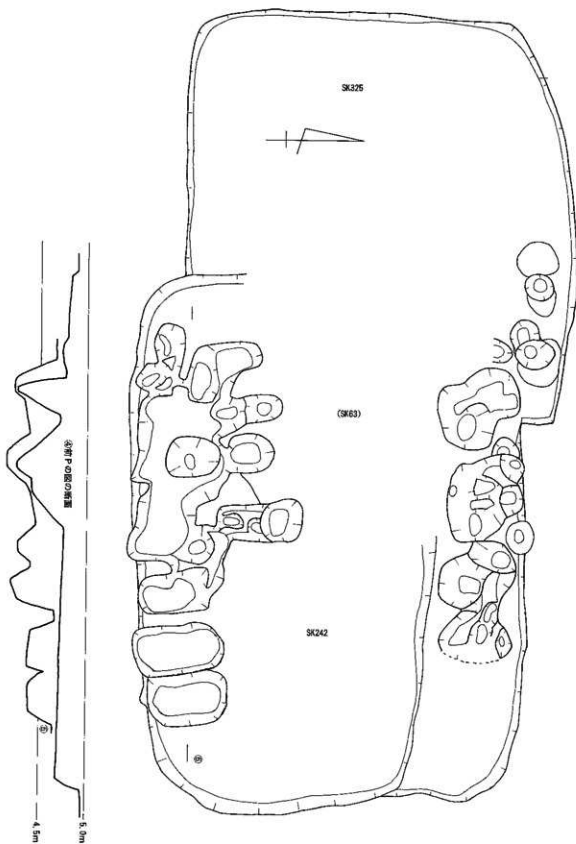
SK479

C60 区の標高4.91mで検出した柱穴類である。

出土遺物（第45図3）3は1期の京都系土師器である。薄い底部は上方に盛り上がり、口縁部は底部よりも厚く直線的に延びた後、端部を細めつ



第46図 SK242・325上層突測図

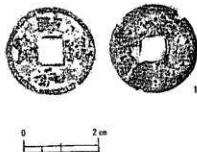


第47図 SK242・325下層実測図

つ外両する。口径11.2cm、器高1.7cm、色調は淡黄色である。

SK246 A62区の標高5.13mで検出した柱穴類である。

出土遺物(第45図4~6・8) 4~6は3期の京都系土師器である。口径・器高・色調はそれぞれ次のとおりである。4(13.7cm・2.5cm・淡黄色)、5(10.4cm・2.2cm・淡黄褐色)、6(8.8cm・2.6cm・橙色)。8は青磁碗で両面とも貫入がある。



第49図 SK242出土銭貨拓影

SK242(第46図) B61区東部からC61区にかけて東西方向に長く位置した隅丸長方形の粘土採掘坑と考えられる土坑である。西側には同様規模の大型土坑であるSK325があり重複する。これら2基が埋没した後、中央部分に16世紀第4四半期のSK63が掘り込まれていたこと、検出標高の高さからSK242等も比較的接近した時期の遺構と思われる。

SK242は初めは1基の遺構として掘り下げたが、床面に段差が現れたため、南北に同規模の土坑が2基重複したことが判明した。標高4.98mで検出した。南側をSK242a、北側をSK242bとする。SK242aは東西5.7m、南北3.2m、床面は平らで深さ25cm前後である。床面南部に柱穴類が複数重複しているが、南北方向の土層断面によれば、これらはSK242aが埋没してから掘り込まれている。これらの埋土は水田の上に類似していた。第47図には上記の柱穴類を検出し掘り上げた後に検出した柱穴類である。この場所でも繰り返し同じような穴を造ったのであろう。

SK242bは東西4m以上、南北は1.2m以上あり、深さは5cm前後と浅い。SK242のa・bの区別をせず採り上げた。

出土遺物(第49図1) 第49図1は政和通宝(初時北宋1111年)である。

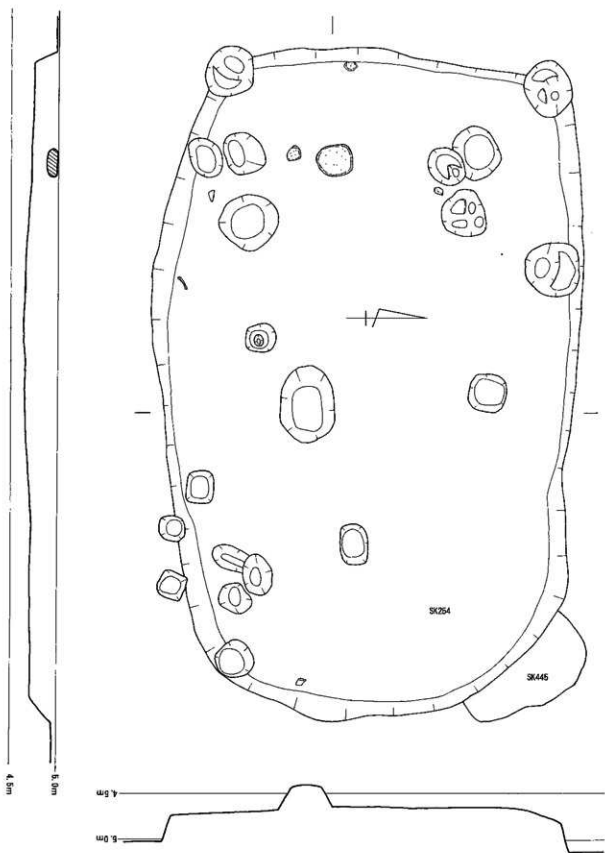
SK325(第46図) SK242と重複し、その西側に検出した粘土採掘坑と考えられる大型土坑である。東西方向に長く位置している。標高4.94mで検出した。南西部はSK63に壊されていた。床面は東に行くほど浅くなり、SK242bの床と連続した感じである。規模は東西4.3m、南北4.15mで、深さは20cm強である。SK242に比べてやや四角いが、位置関係・類似規模からしてほぼ連続的に掘り込まれた遺構であろう。第64図1がSK325から出土した。瓦質土器の鍋小片で14世紀の遺物である。第65図1はSK325から出土した元豊通宝(北宋1078年初鑄)である。

SK254(第50-51図) B60区からC60区にかけて東西方向に長く検出した粘土採掘坑である。標高5.04mで検出した。規模は東西7.05m、南北4.5m、深さは中央部がやや深く32cmである。埋没状態を土層断面(第51図)で見ると、一気に埋まった状態ではなく、時間を掛けて徐々に埋没したようである。検出標高から16世紀中葉~後半頃の遺構と思われる。

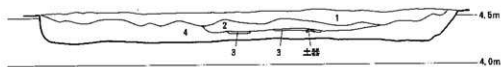
出土遺物(第52図1~3) 1は瓦質土器の火鉢である。口縁部に雷紋の刻印、胴下部にも雷紋が施されている。器面調整はナデ仕上げし、色調は黒灰色である。上部の紋様帯を挟んで上下は器面が剥落している。口径45.2cm、底径37.0cm、器高10.3cmである。2は中世6期の備前施権鉢である。口径29.4cm、底径12.0cm、器高9.4cm。この遺物の同一個体はSP270とSP445から出土した。3は凝灰岩製の輪羽口である。中心を貫通する穴が残り、実測図の左下図の面は黒いガラス状の釉着物が前面についている。

SP544 B61区にあり、標高4.98mで検出した柱穴類である。

出土遺物(第53図6) 6は凝灰岩製品の欠損品で平面形は四角く、容器状に削り込んでいる。現状



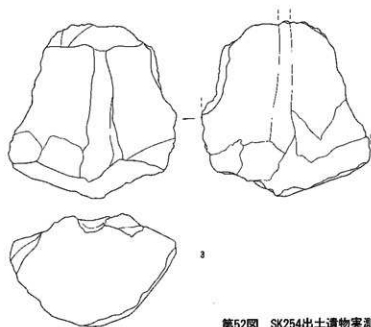
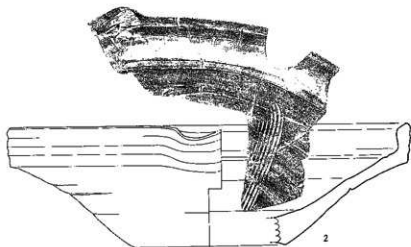
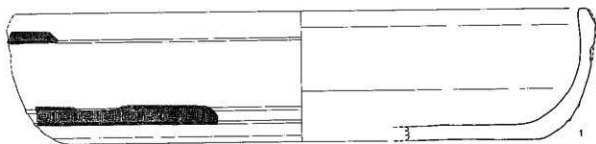
第50図 SK254実測図



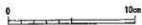
- 1 白色砂を点々と含む暗褐色土層。下層よりも黄味が強い。
 2 空中塵い暗褐色土層。
 3 黄褐色土。
 4 暗灰褐色土。

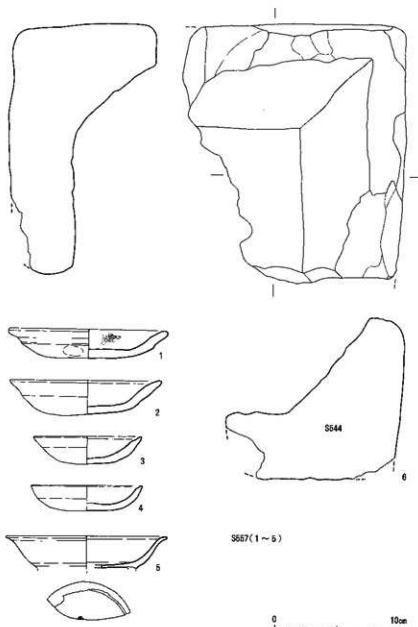


第51図 SK254層序



第52図 SK254出土遺物実測図





第53図 SP544・557出土遺物実測図

SP570 B61区の標高4.87mで検出した柱穴類である。鉄釘が1点出土した(第56図2)。

SK566(第55図) B60区にある土坑である。SK254を調査後、その下の標高4.87mで検出した。規模は2.03m×1.25m、床は中央が深く、深さ38cmである。SK566の調査後、SK706を下で検出した。

出土遺物(第56図1) SK566から出土した遺物は1だけである。景徳鎮窯系の青花皿である。

SP620 A60区の標高4.83mで検出した柱穴類である。長さ16cmの鉄釘1点(第56図3)が出土した。

で長さ20.2cm、幅14.0cm、厚さ5.0cmである。

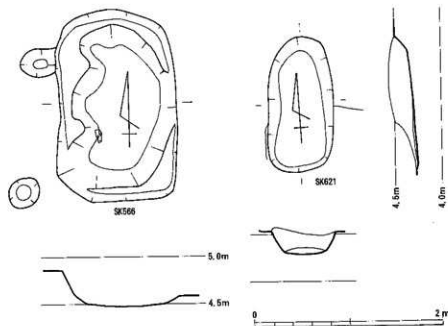
SP557 C60区で標高4.62mで検出した土坑である。

出土遺物(第53・54図1~5・7) 1~4は3期の京都系土師器である。1は完形品で、内面上部に煤が付着している。口径・器高は以下のとおりである。1が12.6cm×2.3cm、2が11.0cm×2.7cm、3が8.5cm×2.2cm、4が8.8cm×2.0cmである。7は銘不詳の銭貨である。図示していないが壮年馬の下顎骨(P3orP4)が出土している(第4分冊参照)。

SE587(第2・63図) B60区北西部にある井戸である。平面の半分以上が壁の向こうにあるため深掘りできず、途中までしか調査していない。検出標高は5.06mで、上面の幅は1.02m、井戸の本体である井側は木製桶を重ねたらしく縦方向に層が分かれ幅52cmである。木質物は検出できなかった。検出標高から16世紀第4四半期と思われる。



第54図 SP557出土銭貨拓影

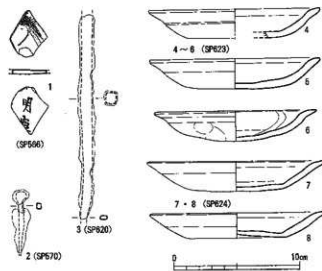


第55図 SK566・621実測図

SK621(第55図) C61区にありSK246と重複する楕円形上坑である。標高4.56mで検出した。規模は平面が1.42m×78cm、深さ32cmである。出土遺物はない。

SP623 C60区の標高4.55mで検出した柱穴類である。2期の京都系土師器が3点出土した。

出土遺物(第56図4~6)口径・器高は以下のとおりである。4は13.4cm・2.4cm、5は13.4cm・2.4cm、6は10.8cm・2.4cmである。



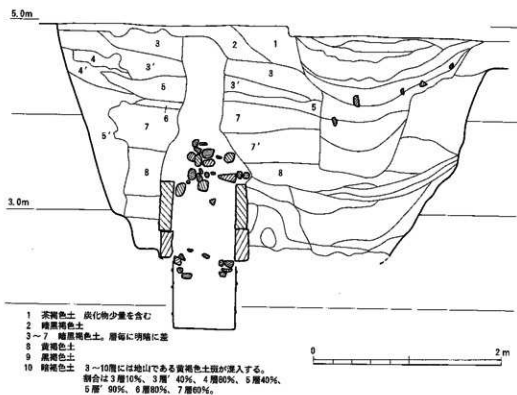
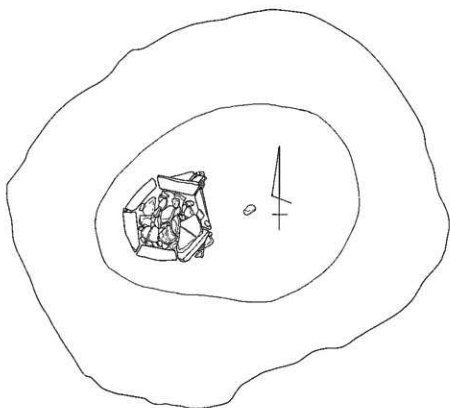
第56図 SK566他出土遺物実測図

SP624 C60区の標高4.54mで検出した柱穴類である。1期の京都系土師器2点が出土した。出土遺物(第56図7・8) 7は口径14.0cm、器高2.4cm、8は口径13.7cm、器高2.0cmである。

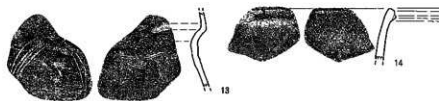
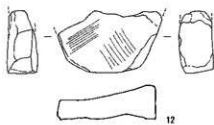
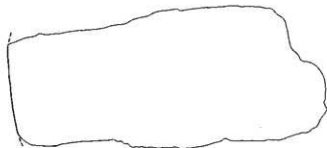
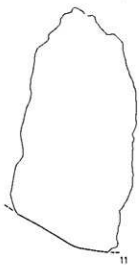
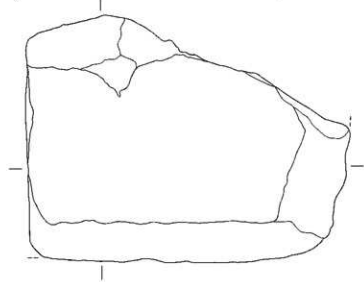
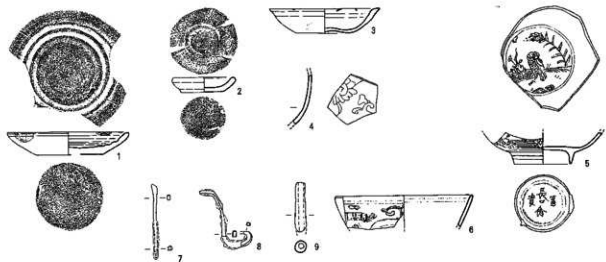
中層の遺構

内面にロクロ目を残す土師器を出土した遺構を目安にこの段階の遺構を説明する。上層の遺構と同じ面で検出したものも多い。

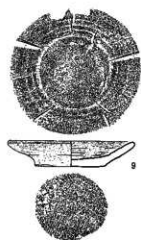
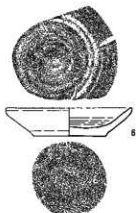
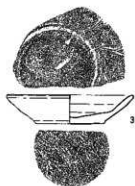
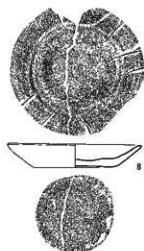
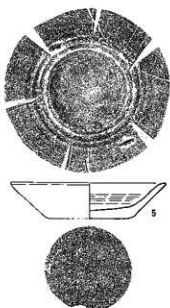
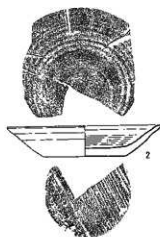
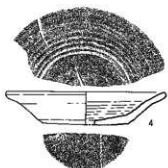
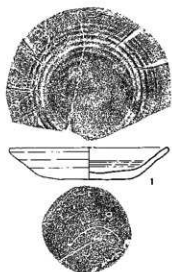
SE255(第57図) C60区南東部にある石組井戸である。標高4.92mで検出した。北西部をSK54に切られ、東部をSD624に切られ、南西部でSK780を切る遺構である。掘り方の平面形は楕円形を示す。半



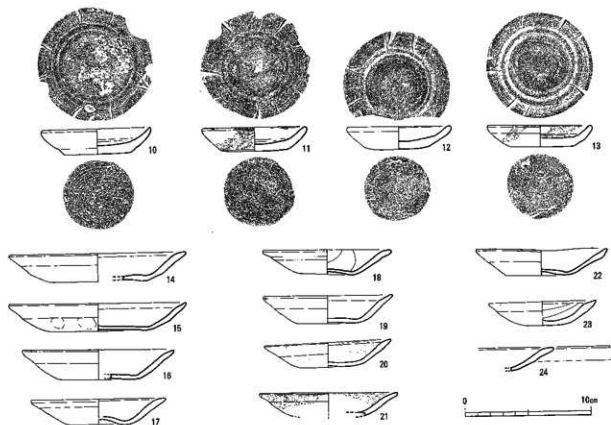
第57図 SK255実測図（平面図・断面図）



第58図 SK265出土遺物実測図



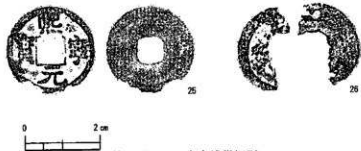
第59図 SX73出土遺物実測図①



第60図 SX73出土遺物実測図②

分に割って掘り下げたところ、東部にもう一つの土坑が掘り込んでいることが分かった。また、西側に寄って凝灰岩を板状に加工した石材を六角形に二段組み合わせた井側が出土した。土層の状況から石組井戸が最初に造られ、次に片側に井戸が掘り込まれたようである。最初の井戸をSE255aとし、最後のものをSE255bとする。井戸aは二段の井側の下に板材の桶を一段据えつけ、三ヶ所にタガを回していた。aの廃絶時には上部の板材を三段ほど抜き取ったらしい。井戸bについては上部と下部に別の井戸が存在した可能性があるが、木質、石材とも出土せず、詳細は不明である。出土遺物からSE255aは16世紀前葉の遺構である。

出土遺物（第58図1～14） 1・2は内面にロクロ目を残す在地系土師器である。1は口縁部に煤が付着し灯明皿として使われたことを示している。口径9.6cm、底径5.2cm、器高1.8cmで、色調は淡橙色である。2は口径5.0cm、底径3.2cm、器高1.2cmで、色調は淡橙色である。3は灯明皿とされた1期の京都系土師器である。口径8.7cm、器高1.9cmで、色調は淡黄色である。4は外面に沈線と花紋を描いた白磁碗、5は景徳鎮窯系の青花碗E群である。豊付以外は施釉されている。外底に長命富貴と記されている。底径4.5cm。6は景徳鎮窯系の青花碗である。7・8は鉄釘である。9は土師質の土鍾。10は灰白色の色調の瓦質土器甕で、口径40.8cmである。11は凝灰岩製の石塔か何かの破片である。現状で25.0cm×19.3cm、厚さ8.8cmである。12は天草砂岩製の砥石で平たい1面と両側面を砥面として使っている。13は縄紋



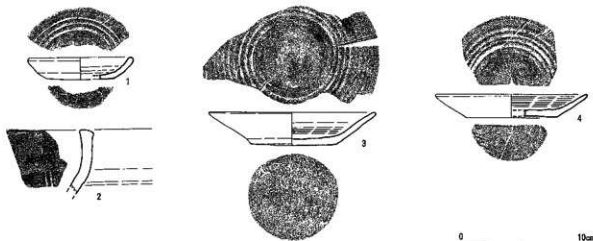
第61図 SX73出土錢貨拓影

時代晩期の深鉢である。肩部に沈線3本で弧状紋を描いている。14も晩期の深鉢で、刻み目のない突帯を廻らしている。

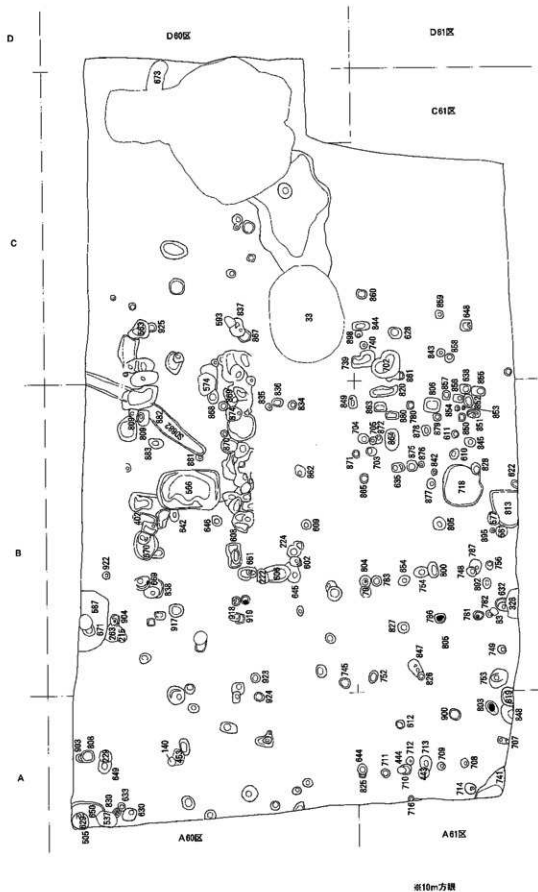
SK73 (第38図) A60区西部、SK36の北西側で遺物が平面的に集中出土した部分である。1期の京都系土師器と在地系土師器が共伴して出土した。16世紀前半の一括遺物である。

出土遺物 (第59～61図 1～26) 1～13は内面にロクロ目を残す在地系土師器で、1～12は坏、13は小皿である。皿は口径に比べて器高が低いものが目立つ。体部の傾斜が緩やかで、特に1などは底面から体部への移行が丸みを帯びており京都系土師器の影響を受けているとみられる。1・5は外底面から体部への移行部稜線をなくそうとした形跡が認められる。1は底部から体部への移行部はなで調整により鋭い稜線をなくし、口縁部は外湾する。口径12.6cm、底径9.4cm、器高2.5cmで、色調は橙色である。2は底部と体部の境に稜線を持ち、口縁部は体部よりも器壁が薄くなって外湾する。外底面には糸切り後に板状圧痕がつく。口径12.2cm、底径6.5cm、器高2.4cmで、色調は褐色である。3は底部の器壁が厚く、体部・口縁部は直線的に外反する。外底面には糸切り後にかすかに板状圧痕がつく。口径10.0cm、底径5.2cm、器高2.3cmで、色調は橙褐色である。4は器壁がほぼ均等な厚さであり、口縁部は外湾する。口径12.8cm、底径6.8cm、器高2.6cmで、色調は橙褐色である。5は底部の糸切り痕をなで消し、体部との境をなでなめらかにしている。器壁は体部よりも底部が厚い。口縁部は直線的に外反する。口径12.3cm、底径5.9cm、器高2.8cmで、色調は淡赤褐色である。6は底部の糸切り痕をなで消す。体部よりも底部の器壁が厚い。口径10.0cm、底径5.7cm、器高2.2cmで、色調は橙褐色である。7は底部の糸切り痕をなで消している。器壁はどこも均等な厚さで、口縁部は外湾する。口径12.8cm、底径7.0cm、器高2.4cmで、色調は橙褐色である。8は底部に板状圧痕がつき、口縁部は薄く直線的に外反する。口径10.5cm、底径6.3cm、器高1.9cmで、色調は橙褐色である。9は底部に板状圧痕がつき、体部は明瞭に底部と区別されている。口径10.0cm、底径5.4cm、器高2.0cmで、色調は橙褐色である。10は口縁部に煤が付着した灯明皿である。底部が厚く、口縁部が内湾する。口径8.6cm、底径5.3cm、器高2.0cmで、色調は橙褐色である。11も灯明皿である。口縁部は内湾している。口径8.3cm、底径5.3cm、器高1.9cmで、色調はぶい黄褐色である。12は糸切り痕をなで消している。口縁部は内湾している。口径8.3cm、底径3.2cm、器高1.8cmで、色調は暗褐色である。13は口径に比べて器高が低い。口縁部は内湾する。器面に広く煤が付着しており、灯明皿として使われている。口径8.3cm、底径4.7cm、器高1.7cmで、色調は橙褐色である。

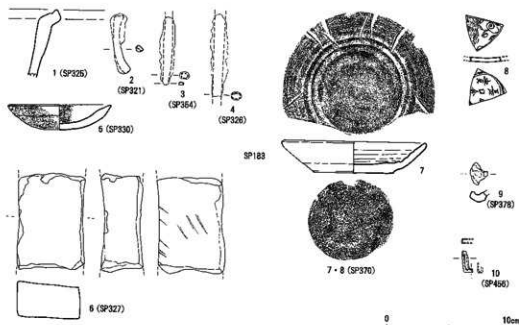
14～24は1期の京都系土師器である。14～24は薄手の土器で軽い。これらは内面にロクロ目を残しかつ糸切底である在地系土器とは胎土が異なる。在地系土器は胎土中に茶色い点状や黒い長石を



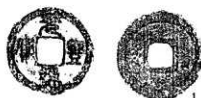
第62図 SK140・214・217出土遺物実測図



第63図 北調査区下層の中世遺構

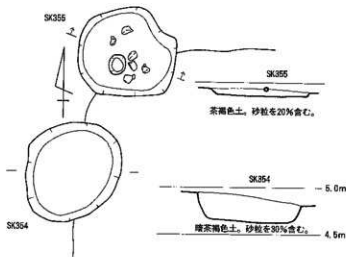


第64図 SP321他出土遺物実測図

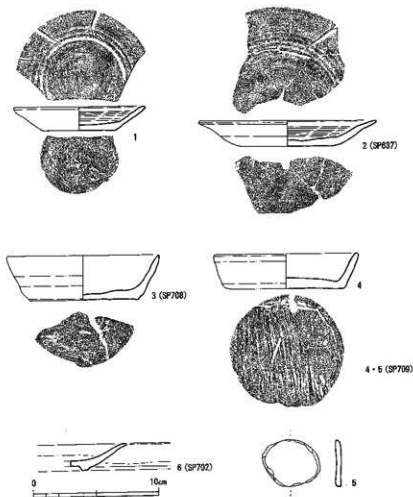


第65図 SK325出土鐵貨拓影

含み茶褐色に近い色を呈するが、薄手で軽い土器は淡い黄褐色で、胎土中に見て点状とした鉱物を見つけられない。20はその中でも白い色で、断面から覗く中心部断面は黒色である。14～16・18・20～22・24の色調は似た印象である。14は底部よりも口縁部の器壁が厚い。口径14.0cm、器高2.2cmで色調は淡黄褐色である。15は器壁が特に薄く、口縁上部の内面に段が廻る。口径14.0cm、器高2.2cmで色調はぶい黄褐色である。16は口縁部をやや外反させ、口径12.0cm、器高2.3cmで色調はぶい黄褐色である。17は底部が薄く上方に突き出る。体部は口縁部に向かって厚く、直線的に外反する。口径10.6cm、器高2.0cmで色調は淡黄褐色である。18は器壁が薄く口径10.2cm、器高1.9cmで色調はぶい橙色である。19は口縁上部の内面に稜線をもつ。口径10.2cm、器高2.2cmで色調は淡黄褐色である。20は口縁部器壁が厚い器形で、口径10.0cm、器高2.0cmで、色調は暗灰色である。21は両面に広く煤が付着した灯明皿である。口縁部が外側に外反する器形である。22は底部中央が上方に窪み、口縁部器壁が厚い。口径10.9cm、器高2.1cmで色調は淡黄色である。胎上に2mm大の石英少量を含む。23は灯明皿である。口縁部器壁が厚い。口径8.5cm、器高1.9cmで色調は浅黄褐色である。24は口縁部上面の平坦面が上面を向く。色調はぶい橙色である。



第66図 SK354・355実測図



第67図 SK636他出土遺物実測図

る。25は熙寧元宝（北宋1068年初鑄）、26は銘不明。

SP140 A60区の柱穴類である。

出土遺物（第62図1・2） 1は内面にロクロ目を残す在地系土師器皿である。口径8.4cm、底径5.2cm、器高1.7cm。2は瓦質土器の摺鉢で、内面に三条の播り目がついている。

SP214 B60区の柱穴類である。標高4.97mで検出した。

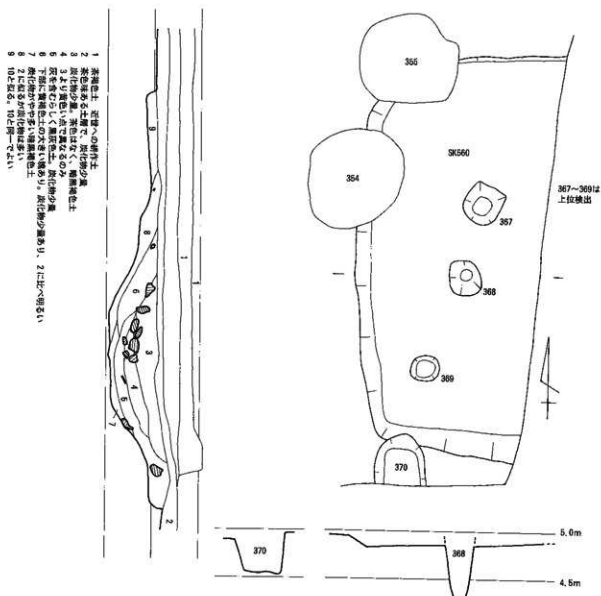
出土遺物（第62図3） 3は内面にロクロ目を残す在地系土師器である。長めの体部は器壁が薄く、全体的に外湾する。口径13.2cm、底径4.2cm、器高2.6cm。

SP217 C60区の柱穴類である。

出土遺物（第62図4） 4は内面にロクロ目を残す在地系土師器である。

SK326 B61区の標高4.98mで検出した柱穴類である。

出土遺物（第64図4） 第64図4はここから出土した鉄釘である。



第68図 SK560実測図

SP327 B61区の標高4.83mで検出した柱穴類である。

出土遺物(第64図6) 6は上下を欠損した天草砂岩製の砥石破片である。平たい両面と1側面を砥面として使っている。

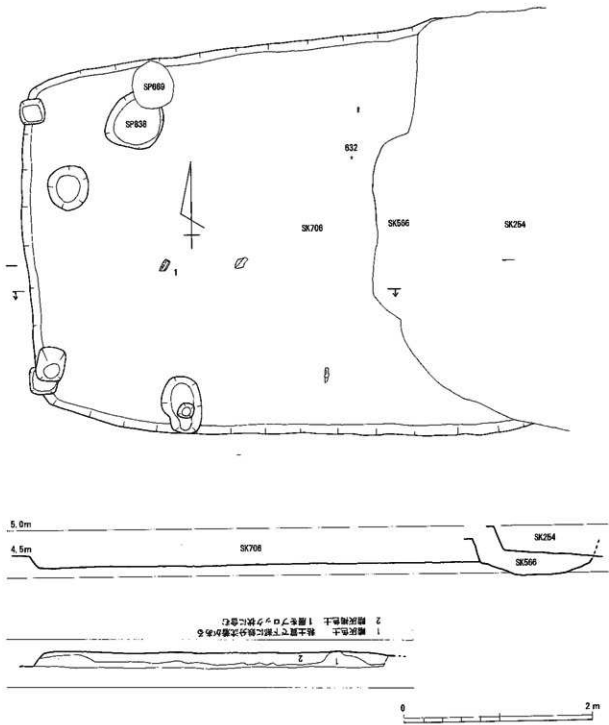
SP370 C61区の標高4.98mで検出した柱穴類である。

出土遺物(第64図7・8) 7は内面にクロロ目を残す在地系土師器である。体部は比較的短く、直線的である。口径11.4cm、底径6.4cm、器高2.5cmである。8は景徳鎮系の青花皿。

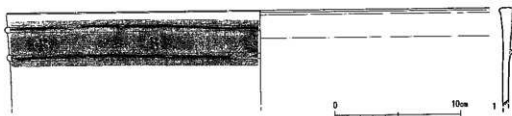
SP330 C62区の標高4.86mで検出した柱穴類である。

出土遺物(第64図5) 5は3期の京都系土師器である。内外面に煤が付着し、灯明皿として使われたことを示す。口径8.2cm、器高2.0cmである。

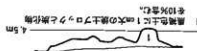
SP456 A60区の柱穴類である。標高4.98mで検出した。



第69図 SK706実測図



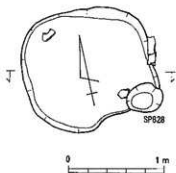
第70図 SK706出土遺物実測図



出土遺物(第64図10) 10は青銅製品で、板状のものを断面U字形に折り曲げ、全体を直角に折っている。



SK354(第66図) C61区北部にある円形土坑で、北東側にあるSK355と共にSK560の埋没後に掘り込まれている。標高4.95mで検出した。規模は平面が1.17m×2.03m、床面は平坦で深さ30cmである。



第71図 SK718実測図

が出土した。

出土遺物

(第64図

3) 鉄

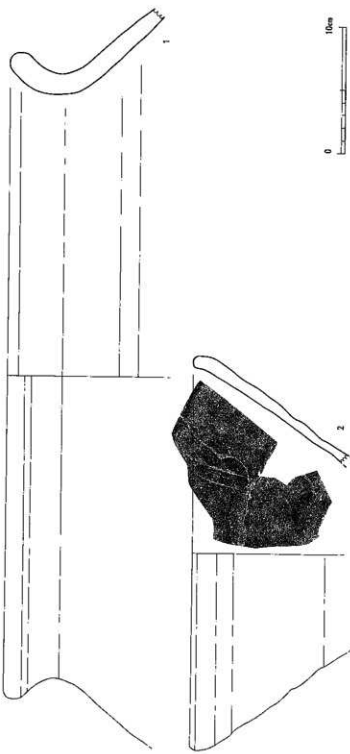
釘片1点

(長さ5.3

cm、幅0.5

cm、重さ

10.3g)



第72図 SK718出土遺物実測図

SK355(第66図) C61区にありSK354の北側にある同規模の円形土坑である。出土遺物は鎌で、図示できる年代の分かる遺物はない。

SP445 C60区の標高4.97mで検出した柱穴類である。

出土遺物(第135図1) 祥符元宝(北宋1009年初鑄)である。

SP636 C61区4.68mで検出した柱穴類である。

出土遺物(第67図1) 1は内面にロクロ目を残す在地系土師器である。長めの体部は器壁が薄く、全体的に外湾する。底面から体部への境目はなだらかに移行する。口径10.4cm、底径5.6cm、器高1.9cm。

SP637 C61区にあり、標高4.69mで検出した柱穴類である。

出土遺物(第67図2) 2は内面にロクロ目を残す在地系土師器である。長めの体部は器壁が薄

く、中程で外側に屈折し、全体に傾斜が強い。底部は糸切り放しであるが、京都系土師器を模倣した土器である。口径14.0cm、底径7.1cm、器高2.0cm。

SP702 C61区にあり、標高4.78mで検出した柱穴類である。

出土遺物(第67図6) 6は白磁皿である。両面とも口縁部の外側、体部の上半分だけに軸を施している。

SP708 A61区の4.72mで検出した柱穴類である。

出土遺物(第67図3) 3は在地系土師器で、口径12.0cm、底径8.4cm、器高3.5cmである。底部には糸切り離し後、板状圧痕がつく。

SP709 A61区にあり、標高4.73mで検出した柱穴類である。

出土遺物(第67図4・5) 4は在地系土師器で、口径11.4cm、底径8.5cm、器高2.8cmである。底部には糸切り離し後、板状圧痕がつく。5は石製品で、緑色の石材を磨いて円形に加工している。最大3.7cm、厚さ4mmである。

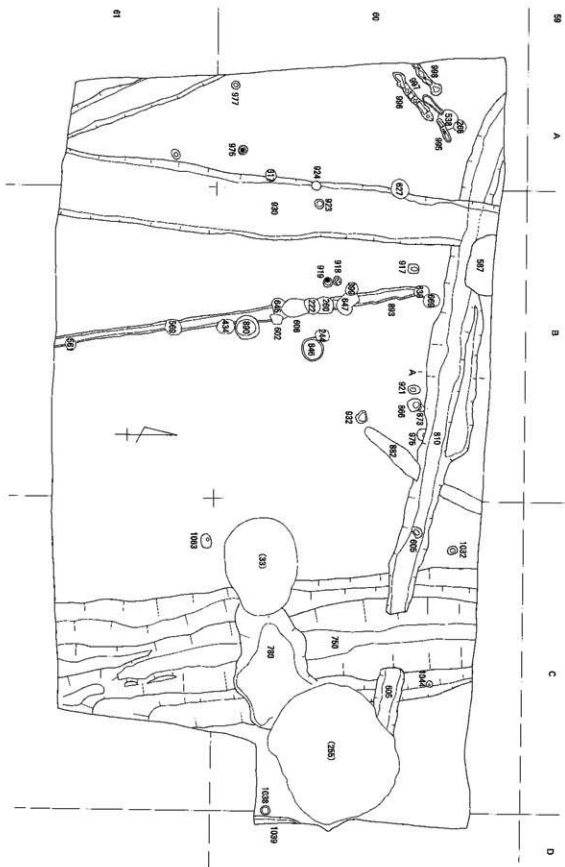
SK560(第68図) 北調査区の南東部、C61区にある方形土坑である。調査区の東壁土層図(第68図)にあるように、SK560の中央部分には後から別の深い廃棄土坑が掘り込まれている。図示していないが、元からの方形土坑をSK560a、後者をSK560bとする。両者とも年代の分かる遺物は出土していない。SK560aは形態の特徴、位置から粘土探掘坑であろう。

SK706(第69図) B60区中央部にあり、東西方向に長い大型土坑で、SK254と重複する粘土探掘坑である。標高4.94mで検出した。遺構の規模は東西5.4m以上、南北4.4m、床面は平坦で深さ18cm前後である。

出土遺物(第70図1) 1は瓦質土器の火鉢である。口縁部の2条の突帯の間に梅花紋の刻印がつく。口径38.0cm。

SK718(第71図) B61区にある隅丸方形の土坑である。SP828と重複する。標高4.74mで検出した。埋土に焼土の塊や炭化物を10%ほど含んでおり、廃棄土坑である。

出土遺物(第72図1・2) 1は瓦質土器の甕で、口径49.2cm、器面調整は横方向の回転ナデ。器面は淡い黄褐色を呈する。2は瓦質土器の楕鉢である。内面に一カ所だけ播り目がつく。この破片は他にSD750・SP751からも出土している。



第73図 最下層の遺構

下層の遺構

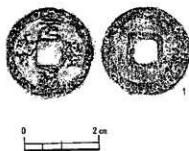
標高4.6mくらいから下になると、柱穴類の出土が減少し、検出遺構は溝状遺構が主体となる。これらを下層の遺構として報告する(第73図)。この段階の遺構群は14世紀から始まると考えている。SK780(第73・75図) C60区にあり、SD750埋没後に作られ、SE255・SE33に切られた不整形平面形の遺構で、現状での規模は東西4.1m、南北2.7m、深さ70cmである。埋土上半部には炭化物細片と土器細片を点々と含む褐色土が流入状態であられ、下半も自然流入土であった。出土遺物は銭貨1点しかないで、有機物の廃棄土坑であったか、粘土採掘坑の可能性もある。標高4.85mで検出した。埋土の観察によれば自然に埋没したようである。

出土遺物(第74図1) 1は天聖元宝(北宋1023年初鑄)である。

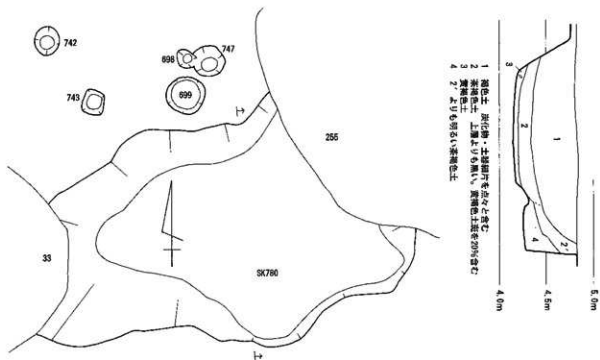
SD750(第76図) C区中央を南北に走る大型の溝状遺構である。床面は北に行くほど浅いことから、北から南に排水できる機能をもっていた遺構である。今回の南調査区を通り、第36次調査区でもこの延長部を検出している。遺構の規模は上面の幅が北端部で3.6m、北部調査区の中程で4.3m、で、深さは最大で1.3mである。上層観察によれば、数回の掘り返しを行ったようである。14世紀前葉に初めて掘られ、16世紀前葉には埋没していたようである。

出土遺物(第79～84図1～63) 1～14は在地系土器である。

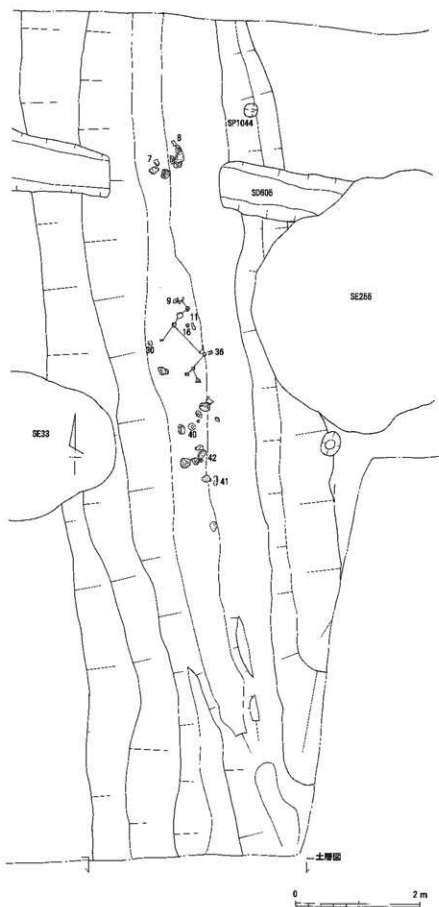
1～5は14世紀前葉頃、7～10は14世紀中葉～後葉の遺物である。1は体部の中位で器壁が薄くなる器形で、口縁部は厚くなる。口径12.8cm、底径8.6cm、器高3.8cmで、色調は淡橙色である。2は体部の中位で器壁が厚い器形で、口径12.2cm、底径8.6cm、器高3.1cmで、色調は橙色である。3は体部の下部から急に口縁部が屈折して立つ器形で、体部下部分から底部外周の器壁が厚い。4は底部から体部下部分の器壁が厚い。体部は中位よりも



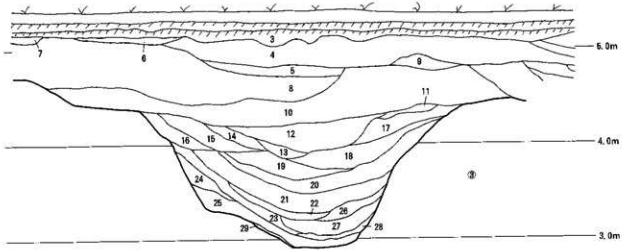
第74図 SK780出土銭貨



第76図 SK780実測図

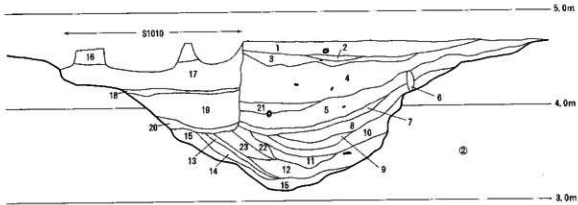


第76図 SK750実測図



- | | |
|------------|-------------------------|
| 1 暗褐色土層 | 耕作土 |
| 2 暗茶色土層 | 灰土 |
| 3 暗褐色土層 | 鉄分酸化層 |
| 4 暗黄褐色土層 | 炭化物・焼土粒をわずかに含む |
| 5 暗黄褐色土層 | 炭化物・焼土粒をわずかに含む |
| 6 暗茶色土層 | 焼土粒・炭化物を少量含む |
| 7 灰赤褐色土層 | 炭化物・焼土粒をわずかに含む |
| 8 暗黄褐色土層 | 炭化物・焼土粒・遺物を少量含む |
| 9 暗黄褐色土層 | 炭化物・焼土粒 やや混じる |
| 10 暗褐色土層 | 炭化物・焼土粒 やや混じる |
| 11 暗褐色粘質土層 | 固くしまる |
| 12 灰褐色土層 | 灰色粘土ブロックを多く含む |
| 13 暗灰褐色土層 | 暗灰色粘土ブロックを多く含む |
| 14 灰黄褐色土層 | 茶色土ブロックをわずかに含む |
| 15 明灰黄褐色土層 | マンガン粒・黄色土ブロックをやや含む |
| 16 明灰黄褐色土層 | 黄色土ブロックをわずかに含む。15層より明るい |

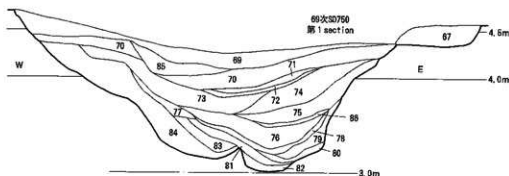
- | | |
|-------------|--------------------------------|
| 17 明灰黄褐色土層 | 15層と同一 |
| 18 暗灰黄褐色土層 | 炭化物・焼土粒をわずかに含む |
| 19 灰黄褐色土層 | 黄色土・暗灰色粘土ブロックが少量混じる |
| 20 灰黄褐色土層 | 19層より明るく、黄色土ブロック・マンガン粒がわずかに混じる |
| 21 明灰黄褐色土層 | 黄色土・灰色粘土ブロックが多く混じる |
| 22 暗黄褐色粘質土層 | 茶褐色粘土ブロックが多く混じる |
| 23 黄灰色粘土層 | 鉄分酸化粒が少量混じる |
| 24 黄褐色土層 | やや砂が混じる |
| 25 黄灰色粘土層 | 23層より明るい |
| 26 明灰褐色土層 | 黄色土・茶色土ブロックが少量混じる |
| 27 暗灰褐色土層 | 黄色土・茶色土ブロックを多く含む |
| 28 黄灰色粘土層 | 鉄分酸化粒が少量混じる |
| 29 灰色粘土層 | 鉄分酸化粒がやや混じる |



- | | |
|-------------|------------------------------------|
| 1 褐色土層 | 炭化物・焼土粒をやや含む |
| 2 暗褐色土層 | 3より細かい。炭化物・焼土粒をわずかに含む |
| 3 暗褐色土層 | 2より明るい。炭化物・焼土粒をわずかに含む |
| 4 暗黄褐色土層 | 炭化物・焼土粒を多く含む。遺物も多く包含している |
| 5 暗黄褐色土層 | 明黄褐色土ブロックがやや混じる。炭化物・焼土粒・遺物がやや包含される |
| 6 黒褐色土層 | 灰塵と考えられる |
| 7 黄灰色粘土層 | 砂混じりの粘土層で第3期(上層) 溝の底と考えられる |
| 8 暗黄褐色土層 | 10層より細かい。炭化物・焼土粒・黄褐色土ブロックを少量含む |
| 9 黄灰色土層 | 明黄褐色土ブロックをやや含む |
| 10 暗黄褐色土層 | 3層より明るい。暗黄褐色土・黒灰色粘土ブロックをやや含む |
| 11 暗黄褐色土層 | 鉄分酸化粒を少量含む。固くしまる |
| 12 暗黄褐色土層 | 鉄分酸化粒・明黄褐色土ブロックを多く含む |
| 13 褐色粘質土層 | 鉄分酸化粒を少量含む |
| 14 灰褐色粘質土層 | 固くしまる |
| 15 黄灰色粘土層 | 砂混じりの粘土層で第2期(中層) 溝の底と考えられる |
| 16 褐色土層 | 1層より細かい。炭化物・焼土粒をやや含む |
| 17 黄褐色粘質土層 | 炭化物・焼土粒多く混じる |
| 18 暗黄褐色粘質土層 | 炭を多量に含む |
| 19 灰黄褐色粘質土層 | 炭化物・焼土粒多く混じる |
| 20 暗黄褐色粘質土層 | 鉄分酸化粒を少量含む |
| 21 灰黄褐色土層 | 明黄褐色土ブロックがやや混じる |
| 22 暗黄褐色粘質土層 | 明黄褐色土ブロックを少量含む。固くしまる |
| 23 黄灰色粘質土層 | 明黄褐色土ブロックが多く混じる。固くしまる |



第77図 SD750層序図①



69	褐色土層	焼土粒・炭化物・遺物を多く含む	80	黒灰色粘土層	7層より明るい、大粒の鉄分酸化粒を少量含む
70	茶褐色土層	鉄分酸化粒・白色砂粒(黒石)をやや含む	81	褐色砂質土層	鉄分酸化粒をやや含む、薄い黒灰色粘土層も含まれる
71	暗茶褐色粘質土層	焼土粒・焼炭黒色土粒を少量含む	82	黄灰色砂層	細粒砂層で、薄い灰色粘土層を挟んでいる。第2期(中層)の溝底と考えられる
72	黒褐色粘土層	焼土粒をわずかに含む、固くしまっている。第3期(上層)の溝底と考えられる	83	灰黄褐色粘質土層	灰色粘土ブロックを含み、砂粒を少量混じっている
73	暗褐色粘土層	焼土粒をわずかに含む	84	暗灰色粘質土層	焼土粒・遺物を少量含む、第1期(下層)の溝底と考えられる
74	暗褐色粘質土層	明茶色土ブロックを多く含む、炭化物がわずかに混じる	85	黄褐色土層	焼土粒を少量含む
75	暗褐色粘土層	明茶色土・暗灰色土ブロックをやや含む、きめ細かい土層	86	褐色粘質土層	焼土粒を少量含む
76	暗茶褐色土層	褐色粘土ブロック・砂粒を少量含む			
77	灰黄褐色土層	褐色粘土ブロック・砂粒を少量含む			
78	黒灰色粘土層	鉄分酸化粒を多く含む			
79	黒灰色土層	鉄分酸化粒を多く含む			



第78図 SD750層序図②

やや下で上方に屈折して立ち、先端は尖る。口径14.2cm、底径9.0cm、器高4.2cmで色調は橙色である。5は体部下で器壁が最も厚く、上方に向かって細くなる。口径11.7cm、底径8.6cm、器高3.0cmで色調は淡橙色である。6は体部が底部近くで屈折してそこから直線的に外反し、口縁端部は内側をそぎ落としたように稜線が廻る。外底面は糸切り痕の上に板状圧痕がつく。7も体部下で屈折しそこから上は器壁が薄く、やや外湾して立つ。口径13.2cm、底径8.6cm、器高3.7cmで色調は橙色である。8は底部から体部への移行部が丸みを帯び、口縁部が外湾して立ち上がる器形である。器壁は口縁部先端に向かって細くなる。口径12.0cm、底径8.6cm、器高4.3cmで、色調は淡橙色である。9は8に似た特徴の土器である。器壁が全体にや薄いだけである。口径12.4cm、底径8.0cm、器高3.0cmで色調は淡黄褐色である。10は体部の特徴が8・9に似るが、底部が突出して段状を呈する点が特徴的である。口径12.7cm、底径7.6cm、器高3.9cmで色調は灰黄色である。11~14は小皿である。11は断面三角形の口縁部が外湾気味に立つ。口径7.8cm、底径6.4cm、器高1.2cmで色調はにぶい橙色である。12は口縁部の器壁がやや薄く、直線的に外反する。口径8.0cm、底径6.6cm、器高1.2cmで色調は橙色である。13は断面三角形の口縁部が内湾気味に立つ。口径8.0cm、底径6.7cm、器高1.3cmで色調はにぶい黄褐色である。14は底部よりも口縁部の器壁がやや厚い。口縁部は直線的に外反する。口径9.0cm、底径7.5cm、器高1.3cmで色調はにぶい橙色である。

15・16は16世紀前葉以降の京都系土師器であり、他と時期差がある。15は小皿で、底部の中央部が上方にふくらむ。口径4.9cm、器高1.5cmで、色調はにぶい橙色である。16は器壁が均等な厚さで、底部と体部が丸みを帯びて連続する器形である。口径16.0cm、器高2.5cmで、色調は暗褐色である。

以上のSD750出土遺物の遺物採り上げ状況をみると、京都系土師器は第81図上図の第10層から出土しており、SD750が完全に埋没した後の遺物である。また、14世紀の遺物は1・5と小皿12が下層出土、2・3・6が中層出土で、他に小皿11・14が中層出土である。以上、土師器の出土状態は土器の年代観に沿ったものであり、この溝状遺構が50年以上継続して機能したことを示している。

次に磁器を説明する。

17~19は同一個体である。17は第75次調査区のZ61区包含層出土、18は第2断面図の第8層出土、第77次調査区Y60区のSP1202・第6層、Z61区の4・5・6層から各1点出土している。19は北調査区のA60区・B61区包含層と第77次調査区のSP1172・1180・SK1580から出土した。破片が広域に散乱し、SD750からは18の2片が出土しただけである。20は龍泉窯系青磁碗である。蓮弁紋は鐏がある。21はへらで蓮弁の輪郭だけを描いている。22は20のような青磁碗の下半部である。23は青白い釉がかかった青磁合子の蓋である。24は白磁皿で見込みは蛇の目状に軸刺ぎされている。口径8.6cm、底径4.1cm、器高2.2cmで、体部外面の下半以下は無釉である。25は白磁碗、26は青磁合子の蓋で、型作りにより花紋を描いている。口径6.2cm、器高1.9cmである。27は沈線内に白色粘土を詰めて紋様とした朝鮮製青磁瓶である。

以上、磁器の出土状態は27が最上層出土、20・22が上層出土、25・26が中層出土で、他は一括採り上げである。34は青磁壺である。軸は高台周辺にはつかないが、外底面中央部分に少しだけ付く。この壺の破片はSD750下層から13片(第76図中に実線で示したもの)出土した他、第77次調査区のSD1211とY61区の5層包含層からも出土した。器高23.6cm以上、底径8.0cmである。35は同類の青磁壺である。軸が外面の2/3以上の部分につく。底径8.8cm。第3土層断面図の第17層から出土したので、これはかなり埋没が進行した段階である。

次に陶器・瓦質土器を説明する。

28~31・33は瀬戸美濃製の鉦皿で、28には片口部がある。口径部最大径は16.0cm、底径7.4cm。33だけが上層出土で、他は中層出土である。

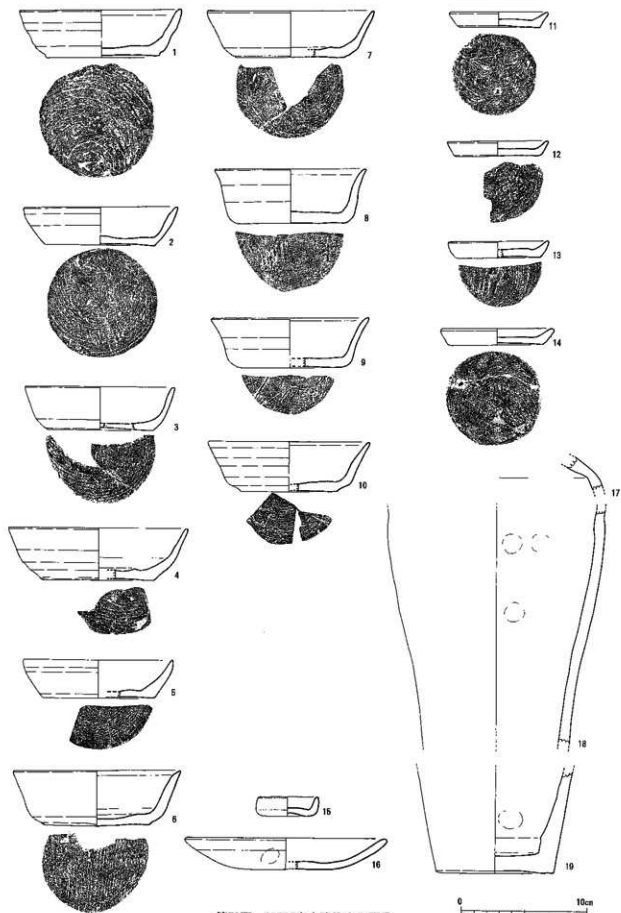
36~40は瓦質土器である。36は淡い黄褐色を呈する椀で、底部中央は上方にふくらみ、器面調整は回転による横方向のなで仕上げしている。口径15.7cm、底径4.2cm、器高4.8cmである。37は上層出土の鍋で、器面は内面が刷毛目、外面が指押さえである。体部は直線的に外傾し、口縁部は内面にやや稜線が生じる程度に外反する。口径28.0cm。38はなで仕上げた甕で、頸部は丸みをもって強く内側に締まる。口径41.4cm。色調は灰色である。39は下層出土の甕で、口径30.4cm。外面肩部は格子目叩き、他はなで調整している。胴は大きく張り出している。色調は淡黄色である。40は口径縁部が短く屈折して立つ鍋である。胴部と底部の境は外面に稜線があり、内外面とも刷毛目が施されている。口径部の最大径部から下は煤が付着する。口径31.6cm。

41~44は備前焼である。41・42は楕鉢で41の口径は28.0cm。6条の構。口径部の断面が単なる四角ではなく、上方が突出していること、口径部の器壁がやや厚いこと、b期の攪り目単位が8~11条になることからみて中世3a期(14世紀中葉~)に比定する。42は8条の構を使用。中世3b期(~15世紀前葉)に比定する。43は甕で、口径部は粘土を折り曲げて丸めており中世3期の遺物である。44は鉢で口径21.2cm、底径12.6cm、器高7.2cmである。他にSK40からも出土している。

45は常滑焼き甕で、口径43.0cm。中層から2片出土し、他にSP692から1片出土した。46・47は東播系須恵器こね鉢である。46は口径28.1cm、底径10.0cm、器高11.9cmで灰色を呈する。破片は出土した他、第77次調査区Y61区6層からも出土した。47は口径28.8cm、底径12.0cm、器高7.2cmである。中層から2片出土したが、他に北調査区のA60区2片・C60区1片も出土した。

48は弥生土器の甕で口径12.0cm。49は土師質の土鍋。50は丸瓦で上層出土。51は天草砂岩製砥石で、両面と長側面を使用。52~56・58は鉄釘、57は鉄鎌である。

59~62は銭貨で、59は銘不明、60は政和通宝(初鑄北宋1111年)、61は咸平元宝(北宋初鑄998年)、62は皇宋通宝(北宋1038年初鑄)、64は元祐通宝(北宋1086年初鑄)である。



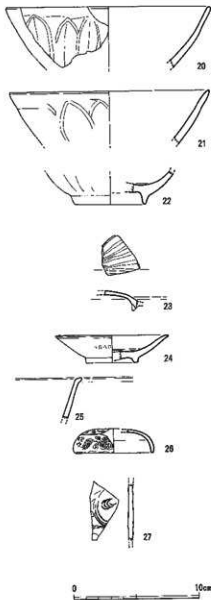
第79圖 S0750出土遺物実測図①

SD930 (第85図) B60区西部の北壁から南に直線的に延び、南調査区のA62区まで続く溝状遺構である。SD930の西側に位置する。検出標高は4.59mである。溝の断面は逆台形で、床面は平ら、壁も直線的に掘り込まれていた。規模は北部で幅1.0m、深さ40cm、南部で幅1.4m、深さ30cmであり、床面の標高は南の方が高い。規模の割に出土遺物は少ない。第86図は北調査区南面の土層である。4層・6層がSD930の埋土である。出土遺物から14世紀前葉の遺構である。

出土遺物(第87図1~8) 1~2は在地系土師器の坏、3~5は小皿である。坏は体部が内湾して立ち、14世紀前半~中頃である。1は底部の器壁が厚いのにく、口縁部が極端に薄い。体部から口縁部は内湾気味に立つ。口径12.3cm、底径9.0cm、器高2.4cmで、色調は橙色である。2は底部と体部の器壁はほぼ同じ厚さで、体部から口縁部は内湾して立ち、口縁部はやや器壁が厚い。口径12.0cm、底径9.0cm、器高3.0cmで、色調は橙色である。3は直線的に外反した薄い口縁部がやや長い小皿で、底部は糸切り痕の上に板状圧痕がつく。口径7.6cm、底径6.2cm、器高1.1cmで色調はにぶい黄橙色である。4は底部から口縁部の断面が三角形をなす小皿で、口径8.4cm、底径7.3cm、器高1.1cmで、色調は橙色である。5も底部から口縁部の断面が三角形をなし、口縁端部は平坦面をなす。口径8.4cm、底径7.3cm、器高1.1cmで色調は橙色である。

6は瓦質土器鍋で短い口縁部が屈折して外反するもので、内側には稜線がめぐる。器面調整は内面は横方向の刷毛ナデ、外面は刷毛目を上部は縦・斜め、下部は横方向に施している。口径21.0cm。外面全体に煤が付着し、鍋として火に掛けられたことを示す。

7は弥生時代後期の高坏、8は青磁碗である。緑色の釉が内面・外面上半部に掛かる。外面下半は無釉。底径5.4cmである。



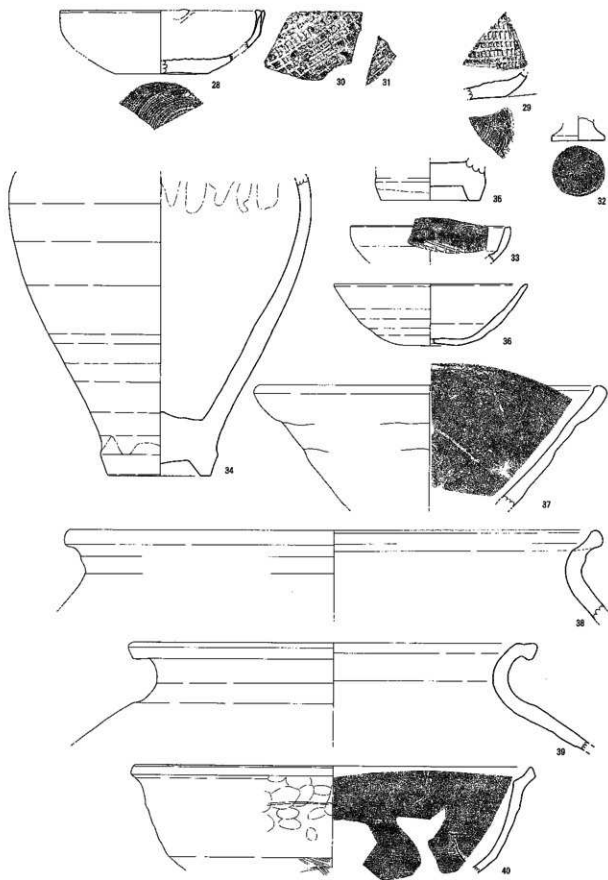
第80図 SD750出土遺物実測図②

SP935 C60区にある柱穴類である。

出土遺物(第88図1) 1は天草砂岩製の砥石である。両端が欠損し、使用面は上下の二面である。

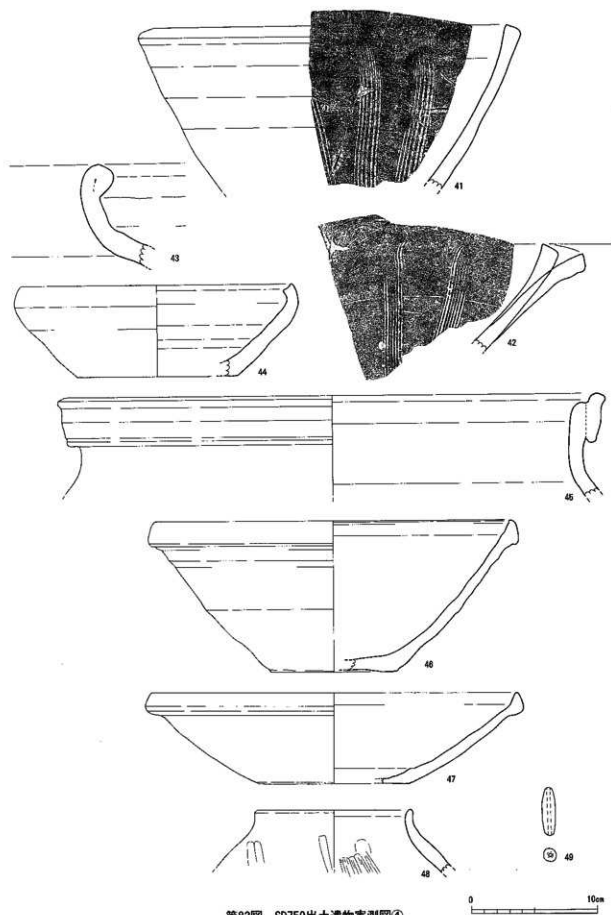
SP826 B61区にある柱穴類である。検出標高は4.70m。

出土遺物(第88図2) 1は瓦器小皿である。外底面はナデ調整され、高台は貼り付けられている。高台の断面は四角形で、内側は目立たず、三角形気味である。器面調整は横方向のナデで、淡い黄褐色を呈する。口縁部に煤が付着し灯明皿として使われたことが分かる。口径10.0cm、底径4.0cm、器高2.4cmである。

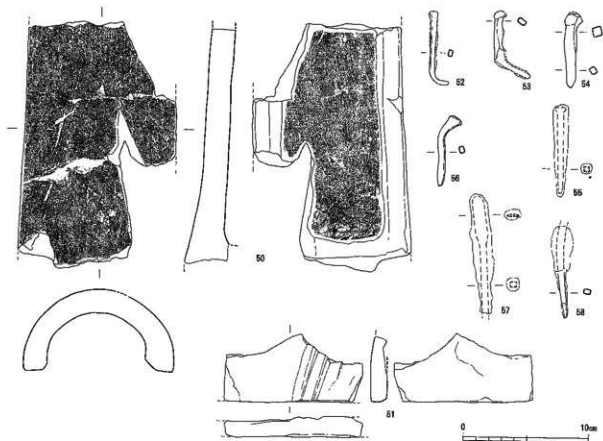


第81圖 SD750出土遺物実測図③

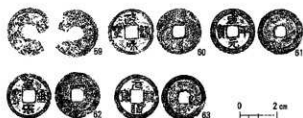




第82図 S0750出土遺物実測図④



第83図 SD750出土遺物実測図⑤

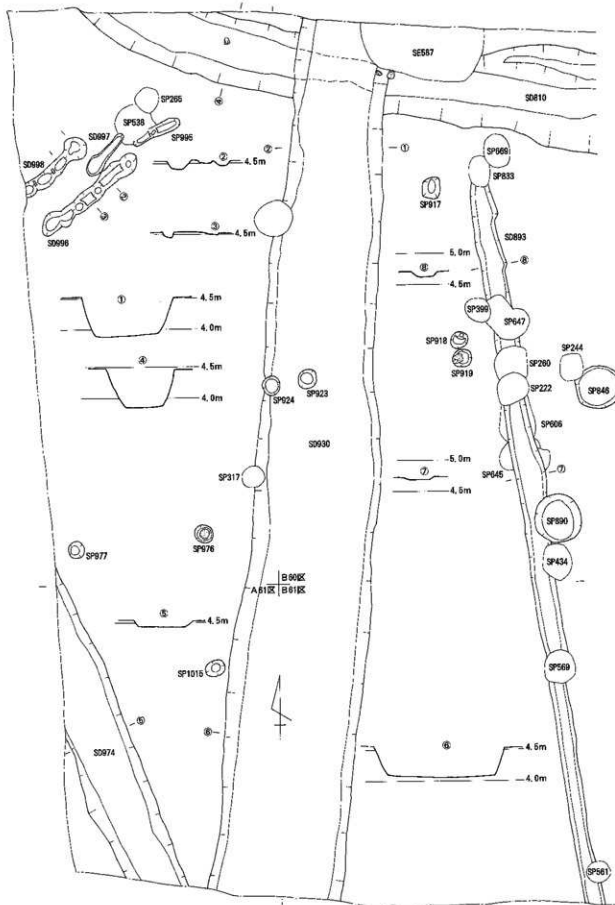


第84図 SD750出土銭貨拓影

SK810 (第73・85・89図) 北調査区北西部のA60区の外側から東側に曲がりながら始まり、調査区を横断する。途中、SD750とSE255に切られ、東端では確認出来なかったが、東側の第55次調査区でも検出しているので、連続的に続くと思われる。標高4.47mで検出した。溝の断面は両側壁は直線的で、床面は丸みを帯びている。遺構内からは全く遺物が出土しなかった。北調査区北壁土層区にあるようにSD810はSD930・SD750の掘り込み面よりも下層を掘り込み面としている。他遺構との重複関係から14世紀前葉以前であろう。

SD882 (第89図) 北部のC60区壁から始まり、SD810と交差してB60区で終わる溝状遺構である。検出した標高は4.63mである。SD810との先後関係は不詳だがSD882の方が古いとみて調査した。溝の幅は50cm前後あり、壁は浅く掘り込まれている。深さは約10cmである。遺構内からは全く遺物が出土しなかった。他遺構との重複関係から14世紀前葉以前であろう。

SK893 (第85図) SD930の東側にあり、B60区・61区にある直線的な細く浅い溝状遺構である。規模

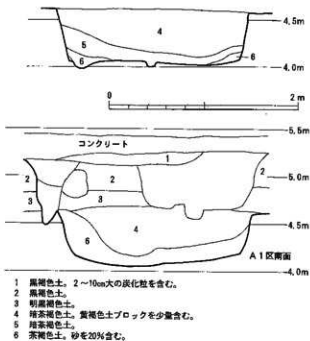


第85図 SK893・SD810・930実測図

は全長7.8m、幅25cm前後、深さ5cmほどである。南壁に消えるが、南調査区にはないので、中間で終わるのであろう。遺構内からは全く遺物が出土しなかった。他遺構との重複関係から14世紀後葉以前であろう。

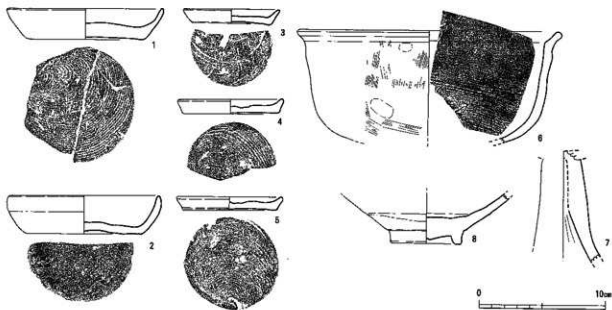
SD930 (第85図) B60・61区にある溝状遺構である。ほぼ南北方向に一直線の溝状遺構で、幅は南ほど広く、北調査区の南端で幅2.1m、北端近くで1.6mである。床面は平らで、北部がやや標高が高い。深さは最大60cmである。中世の移行確認面としては一番下の面、標高4.59mで検出した。第86図下図は調査区南壁におけるSD930の層序である。標高4.7m付近から掘り込まれているように見える。出土遺物から14世紀初頭頃の時期とみられる。

出土遺物 (第87図 1~7) 1~5は在地系土師器で、1・2は坏、3~5は小皿である。1・3~5には胎土に大きな特徴がある。これらの土器を作るのに用いた粘土には、白褐色粘土が少量混ぜられており、それがあある種の備前焼播鉢にあるような縞状になって観察できるのである。他には茶色の土粒が必ずある程度の量が混入している。1は底部の厚みが1cm強あるのに対し、口縁部は3mm前後と薄い。口径12.3cm、底径9.0cm、器高2.4cmで、色調は褐色である。2は底部中央が上にやや上がり、口縁部がやや厚く内湾する。口径12.0cm、底径9.0cm、器高3.0cmで、色調は褐色である。3は短い口縁部が細くなりつつ外反し、底部は糸切り裏の上に板状凹痕がつく。口径7.6cm、底径6.2

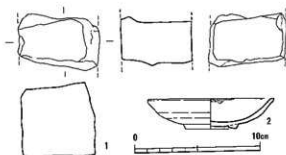


第86図 SD930の層序実測図

- 1 黒褐色土。2~10cm大の炭化粒を含む。
- 2 黒褐色土。
- 3 明褐色土。
- 4 暗褐色土。黄褐色土ブロックを少量含む。
- 5 暗褐色土。
- 6 茶褐色土。砂を20%含む。



第87図 SD930出土遺物実測図



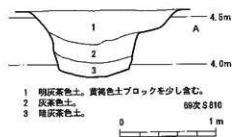
第88図 SP826・SP935出土遺物実測図

cm、器高1.1cmで、色調はよい黄褐色である。4は口縁部が厚く短く、断面形が三角形をなしている。口径8.4cm、底径7.3cm、器高1.1cmで、色調は褐色である。5は4と同様の器形で、口径8.4cm、底径7.3cm、器高1.1cmで、色調は褐色である。6は瓦質土器の鍋である。器面調整は内外面とも刷毛目で行い、部分的に指押さえ痕がつく。口縁部は短く外反し、内面は窪んでいる。口縁部最大径部分から下位には煤が付着している。口径21.0cm、現状の器高は8.7cmである。褐色を呈する。7は弥生時代中期頃の

の高坏脚部である。8は中国製青磁碗で、外面の一点波線以下は無軸である。底径5.4cm。

SK974 (第73図) 調査区南西部A61区にあり、南壁の西部から西壁の南部に消える溝状遺構である。検出標高は4.4m、幅は35cm前後、深さは約50cmである。出土遺物はない。南調査区で検出した斜行道路の側溝である。

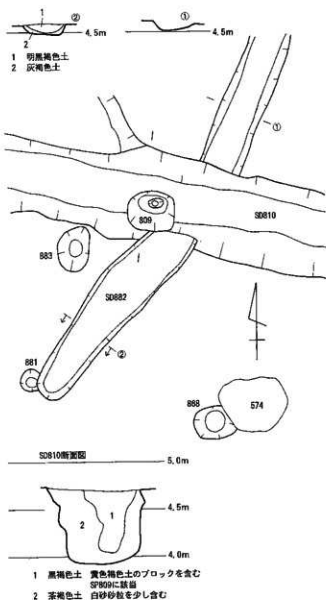
SK995~998 (第73・85図) 調査区北西部に並んで位置する細く短い溝状遺構群である。それぞれの溝は内部がいくつかに分かれている。出土遺物はない。道路跡にみられる特徴に似ている。



第90図 SD810層序図

掘立柱建物跡 北調査区内からは多数の柱穴類を検出したが、掘立柱建物跡として復元できた遺構は調査区内北西部の三カ所である。

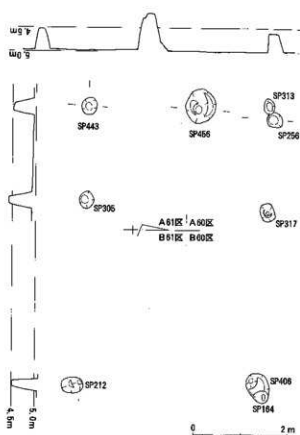
SB1 (第91図) SB1とした建物跡はA60区とB60区とにかけてあり、建物跡で



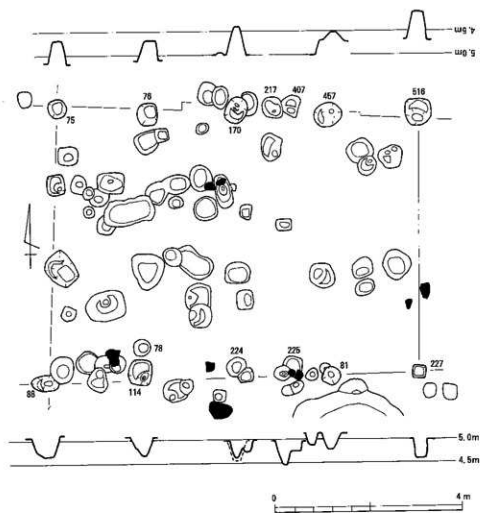
第89図 SD810・882実測図

はないかと思われる柱穴の分布状態が東西方向に認められた部分である。この部分では直線的に並ぶ柱穴列が重複しているので、建て替えが少なくとも一回は行われたらしい。南部に3個、北部に3個、西部に3個の柱穴からなり長軸を東西方向にもつ建物跡で東西6.8m、南北4.0mである。

SB2 (第93図) B60区にあり、SK706と重複するように東西方向に長軸をもつ。長軸を東西方向にもつ建物跡で東西9.8m、南北6.0mである。



第91図 掘立柱建物跡SB1実測図



第93図 掘立柱建物跡S82実測図

(2) 南調査区

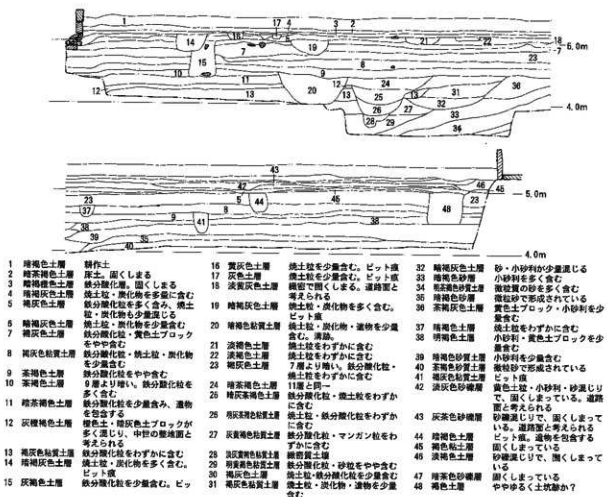
南調査区はA～D区、61区の南半分から63区までを含む東西約30m、南北約15mの長方形区域である。近世から縄文時代までの遺構・遺物を検出した。

第69次調査区の層序を説明する。標高5.1m～5.2m付近からは現在の地面及び、近世の耕作土が堆積していた。これらは重機を用いて削り取り、人力で作業を始めたのが標高5.1m～5.2m付近から下である。中世の遺構は標高4.5m付近まで連続して存在した。

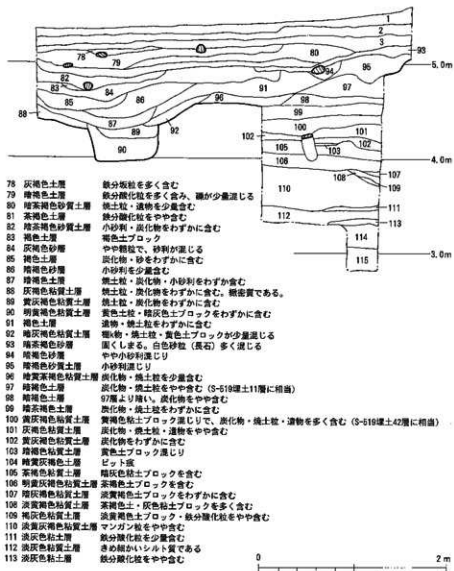
第94図は第69次南調査区の西壁層序図である。上図の左端には耕作地の境界をなすコンクリート壁の断面である。1層は表上の耕作土層で層厚は約20cmある。調査直前まで水田として使われていた土層である。2層は上面が硬化し、赤茶色に酸化した水田の床土である。3層も酸化して硬化している。調査では1・2層を電機で剥ぎ取り、それ以下を手作業で掘り下げた。下図の右側にあるのは第69次北調査区との間を流れていた水路断面である。

第106図は第69次南調査区の南壁層序図である。第69次調査区の南側には既に調査を終了した第41次調査区がある。そのため第41次調査区は一段低い土地となっており、今回の第69次調査区は一段高く残された状態であった。したがって、第69次調査区を南側から観察することが可能で、その南側の土層図を作成したのが第95図である。

第96図は北側の壁の一部である。現在の地表面から下層の層序である。



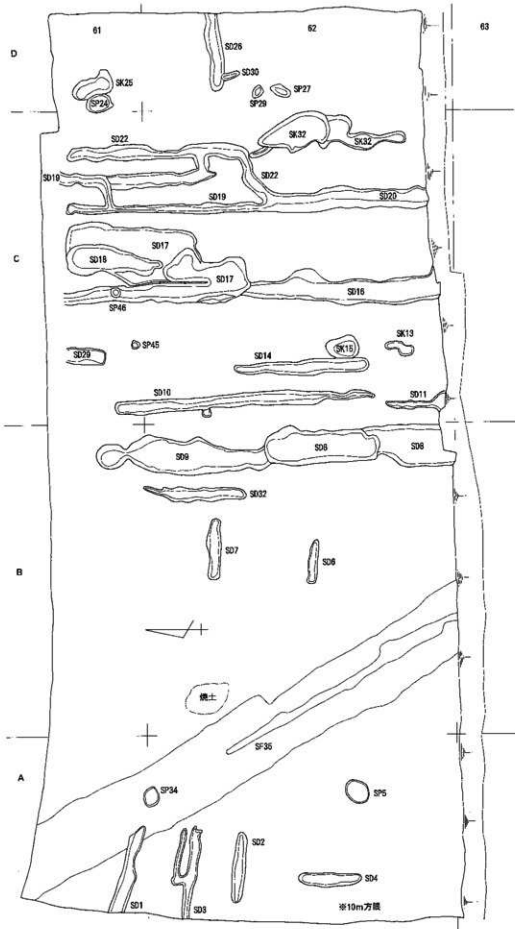
第94図 南調査区西壁層序図



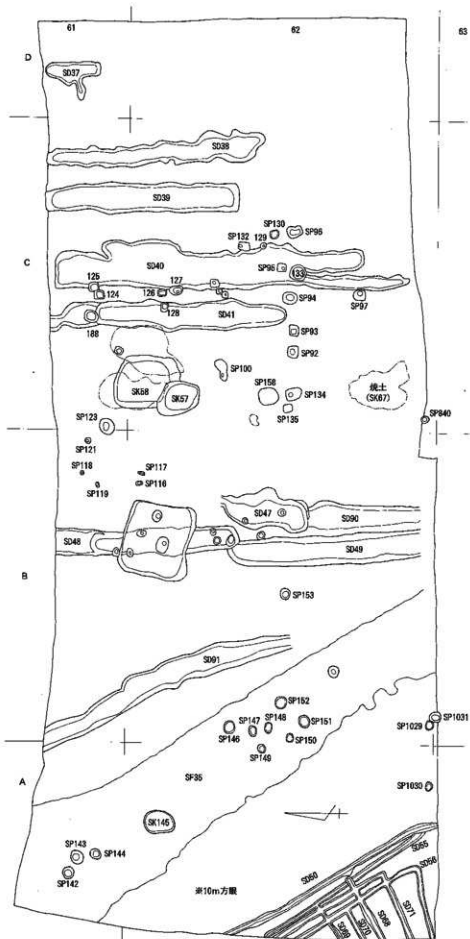
第96図 北壁層序図

表土を除去すると、水田の床土で硬い面となる。この上面を少しだけ重機で剥ぐと最初の遺構検出面となる。この面で検出したのが耕作痕とみられる第97図の遺構である。中央部から東部に北方向の浅い溝状遺構が並んで見つかり、西部では浅く短い溝状遺構が東西方向に軸をもって検出できた。これらは中世の道路跡。具体的には砂質が多く斜行分布する幅2.5mほどの層と重複する部分ではそれを掘り込んでいた。斜行部分は後述する中世の道路の痕跡である。道路機能が失われた後に耕作地となったものである。

さらにこれらの遺構を掘り終えると同様の溝状遺構が確認できた（第98図）。西部では南東か北西方向に軸をもつ溝状遺構群、それに直交する溝状遺構群を検出した。上層で認められた道路跡と重複する形で幅3～4m程度の砂質の目立つ層が同じ方向に分布する状態も認められた。重複する溝状遺構は耕作に伴って残されたと思われるが、水田耕作では横方向に連続して分布する溝は考えられないので、畑地であったと推定しておく。出土遺物には18世紀後半のものがあり、近世以降の畑地耕作痕であろう。A61区からB62区には砂が帯状に分布するのは、前回の第36次調査区でも検出した中世の道路跡である。下層では道路面に柱穴痕が11個掘り込まれており、これらは道路機能が失

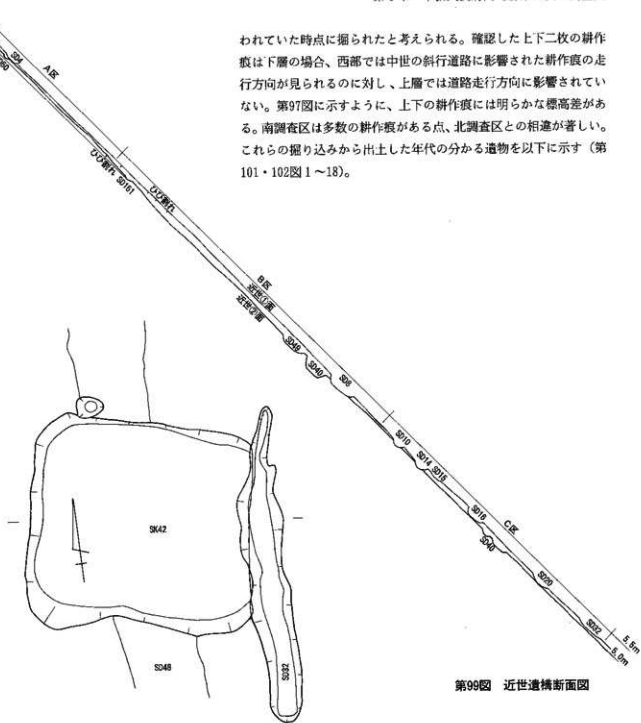


第97図 南調査区近世の遺構①

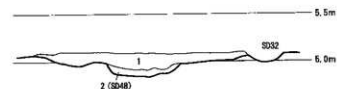


第98図 南調査区近世の遺構②

われていた時点に掘られたと考えられる。確認した上下二枚の耕作痕は下層の場合、西部では中世の斜行道路に影響された耕作痕の走行方向が見られるのに対し、上層では道路走行方向に影響されていない。第97図に示すように、上下の耕作痕には明らかな標高差がある。南調査区は多数の耕作痕がある点、北調査区との相違が著しい。これらの掘り込みから出土した年代の分かる遺物を以下に示す（第101・102図1～18）。



第99図 近世遺構断面図



- 1：茶褐色土：腐土・炭化物・焼けた壁土のブロックを多数に含む。粘性ややあり。しまりややあり。単一層。
 2：明灰色土：S-48のフク土。明灰色の粘土質土。粘性あり。しまりあり。
 ※S-429†S-49を切っている。

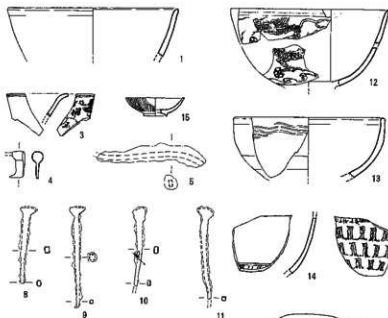


第100図 S032・SK42実測図

SD10 (第97図)

SD10は上層耕作痕であり、調査区の中央部、C区西端を南北方向に走る細長い溝状遺構である。標高5.15mで検出した。

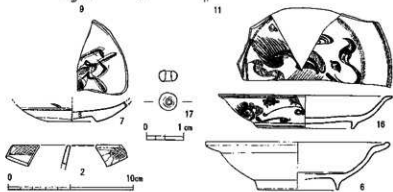
出土遺物(第101図1・6) 1は中国製の青磁碗である。口径13.3cm。6は中国製青磁皿である。口径14.4cm、底径7.2cm、器高3.8cm。



SD18 (第97図) C61区

北部の上層溝状遺構で、標高5.14mで検出した。2の18世紀後半肥前系染付けの筒型碗が出土した。

出土遺物(第101図2) 口縁部破片である。最上層で検出した溝状遺構群の時期を示す数少ない遺物の一つである。



第101図 近世遺構出土遺物実測図

SD20 (第97図) C62区東部にある上層溝状遺構である。標高5.18mで検出した。

出土遺物(第101図3~5・7) 3は中世の景德鎮系青花猪口、4は不詳の青銅製で、長さ2.1cm、重さ3.0g。5は鉄釘、7は中国南部の漳州窯系青花皿。



第102図 SP94出土銭貨拓影

SD26 (第97図) D62区東壁に消える東西方向の上層耕作痕である。標高5.15mで検出した。他の溝状遺構とは直交する方向に作られている。

SK32 (第100図) C62区東端にある上層耕作痕である。標高5.18mで検出した。8~11の鉄釘が出土した。

SD38 (第98図) C61・62区で検出した南北方向に長い溝状遺構である。17のガラス玉1点が出土した。

SD40 (第98図) C区中央を南北に走る幅広の下層耕作痕である。標高5.04mで検出した。
 出土遺物 (第101図12) 12は16世紀の上質な景徳鎮窯系青花碗で、口径12.3cm。器壁は薄く、紋様は精緻である。

SD41 (第98図) C区にあり、SD41の西側に平行して位置する下層耕作痕である。標高5.05mで検出した。磁器3点が出土した。
 出土遺物 (第101図13・14・16) 13は口縁部に拂描き波状紋をもつ青磁碗で、口径11.6cm。14は16世紀の景徳鎮系青花碗である。16は景徳鎮窯系の青花皿B1群で、口径13.7cm、底径7.5cm、器高2.6cm。

SK42 (第100図) B62区北端にある焼土・炭化物・焼けた壁土を廃棄した土坑である。標高5.1mで検出した。東西2.5m×南北2.3m、深さ13cm。他遺構との重複関係はSD32に切れ、SD48を切っている。年代を示す出土遺物はなく、初め中世の遺構と思われたが、完掘後に南から北にSD48が床面下にも続くことが分かり、近世の遺構と判明した。

SD48 (第98図) B61・62区を南北に走る下層耕作痕であり、SK42が後から切り込んでいる。標高5.1mで検出した。15は18世紀の磁器紅皿である。

SP94 (第98図) C62区にあり、SD41の南東側に位置し、標高4.99mで検出した柱穴類である。18はSP94出土の熙寧元宝(北宋1068年初鑄)である。

中世の遺構

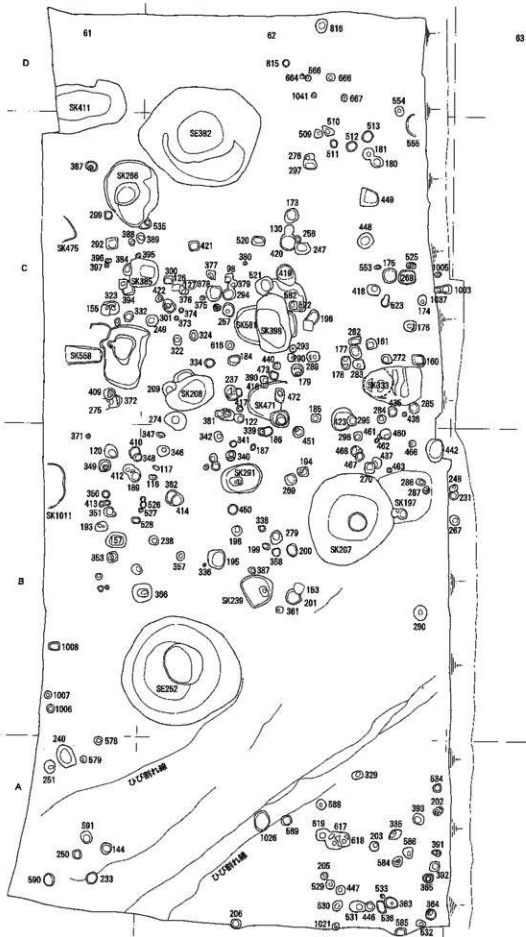
近世下層遺構確認面は、同時に中世の最も上の遺構確認面でもある。ここから下に向かって複数の遺構重複面がある。上層・中層・下層・最下層として説明するが、調査中は全体をそれぞれ一つの確認面として把握することはできなかった。

上層の遺構

ほぼ16世紀初めから18世紀末までの遺構である。

SK67 (第103・104図) C62区にある土坑である。初めは焼土の分布する状態(第98図SP134南側の点線範囲)であったが、掘り下げると焼土の入った楕円形土坑が現れた。土坑の検出標高は5.12mで、1.9m×1.2mの規模で床面は凹凸がある。火事にあった遺物を廃棄した土坑である。

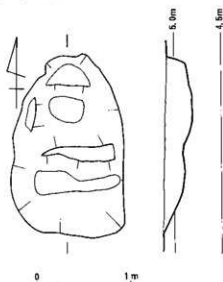
出土遺物 (第105・106図1~12) 1~4は鉄製品で鏝の一部である。同寸同大の鉄板が重なっており突の下部や、胸板の下、あるいは脚部上部を守る部分の部品であろう。1は長さ6cm、幅3.5cmほどの板が重なっている。板には小穴があいている。2は長さ5.5cm×幅3cm、厚さ0.2mm、重さ9.9gの鉄板で、小穴が三段あいている。各段は上から7・7・6穴だが、下段は錆びているため不詳。本来は7穴であろう。全体に屈曲している。3は2と同様の部品の破片である。長さ4.1cm+α、幅3.1cm、厚さ0.15cm、重さ8.1gである。4も2同様の部品である。三段にわたり小穴が6・6・7個あいている。錆のため不詳だが、本来各段7個であろう。5~7は青銅製品である。幅の狭い鉄板を筒の断面の半分になるように折り曲げている。5は一端が屈曲し且つ半円形に突出した部分があり、そこに小穴1をあけている。7も同様の折曲げがあり、中段で直に折り曲げられ、小穴がある。5~7は板状部材の周辺を縁取る部品であろう。8は鉄製品で、断面は四角であり釘であろう。



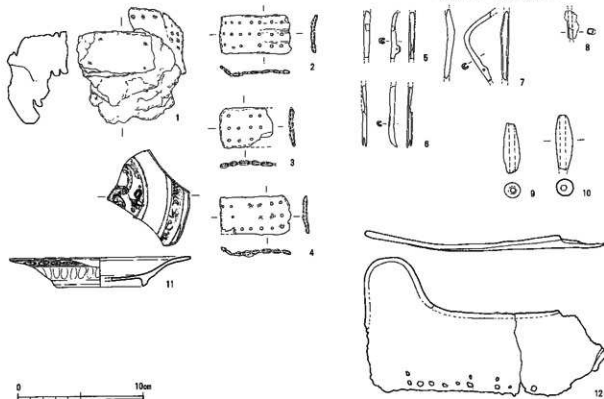
第103図 上層の中世遺構

9・10は土師質の上鉢である。11は中国景徳鎮窯系の青花皿である。青黒い発色で、口径14.1cm、底径6.4cm、器高2.3cmである。12は鎧胴部の部品で胸板である。胸を守る部分の上部である。主要部は一枚の鉄からできており、上部を銅の板で押さえている。また、下端には小穴が二列並ぶようだが錆のため全ては確認できない。13は天口元宝、14は不詳。

SK67で特徴的な点は鎧部品が出土したことである。1~4・12に加え、5~7の青銅部品もその一部であろう。焼土と共に廃棄されていたので、火車にあって燃えたものを廃棄したのであろう。



第104図 SK67実測図

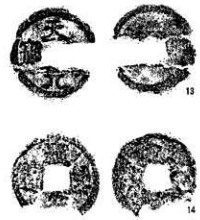


第105図 SK67出土遺物実測図

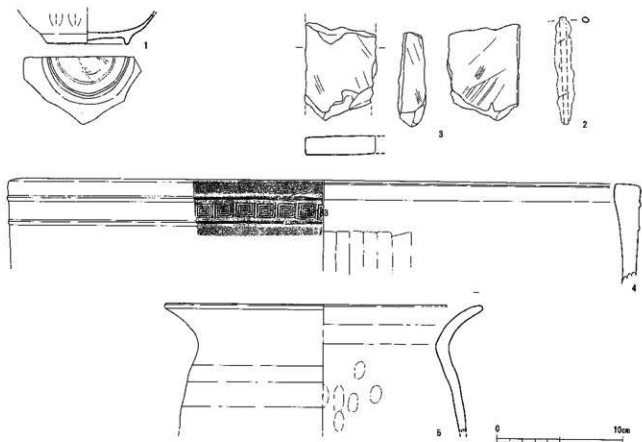
SK67は検出而が中世末期面であり、16世紀第4西半期の遺構である。

SP158 (第98図) C62区西部中央にあり、SD41の西側に位置する。位置は近世耕作痕と共に第98図に示す。その面の標高4.96mで検出した。

出土遺物 (第107図1~3) 1は青花碗底部である。外底面に「□明□造」の字がある。底径6.2cm。2は鉄釘、3は天草砂岩製の砥石で、両面と1側面が砥面として使われている。



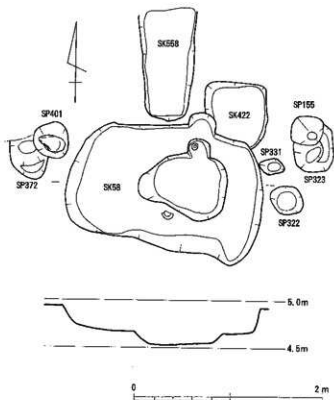
第106図 SK67出土銭貨拓影



第107図 SK158・252・186等出土遺物実測図

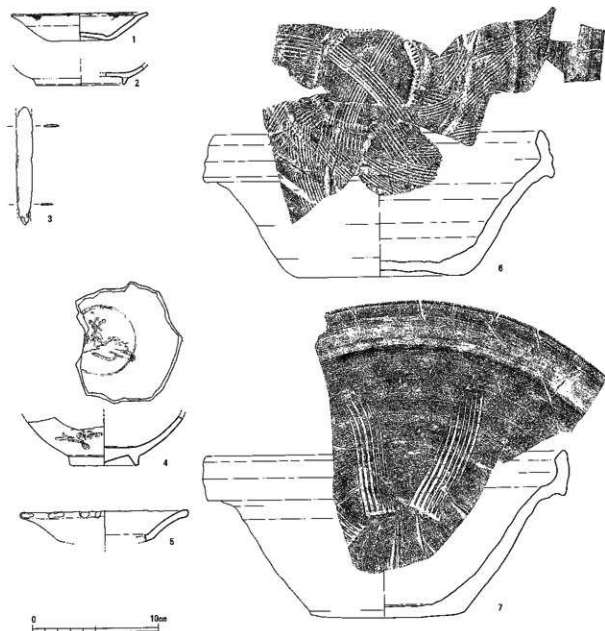
SP186(第98図) B62区とC62区の境界上にある柱穴類でSK471の西側に位置し、検出標高は4.95mである。

出土遺物(第107図4・5) 4は瓦質土器の火鉢で、口縁部外面に型押しした雷紋を連続的に並べる。この破片は他にSE252からも出土している。5は弥生時代後期の甕形土器である。



SK58A(第108図) C61南西部からC62区北西部の5.11mで検出した方形土坑である。SK57に切られ、上位には広く焼土層があり、この除去後に現れた方形土坑である。付近に同規模の近世初頭土坑SK422があるので、同時期かとも思えるが、それを証する遺物もないのでここで扱う。規模は南北2.13m、東西1.66m、深さ20cmである。出土した遺物の時期は16世

第108図 SK58実測図



第109図 SK58出土遺物実測図

紀第4四半期である。おそらく、その時期の火事ゴミを廃棄した土坑であろう。

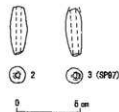
出土遺物（第109図2・4～7） 2は白磁皿で、底径6.8cm。豊付部以外は施釉。4は漳州窯系青花碗で底径5.4cm。豊付部以外は施釉。5は青磁椀花皿で口径13.0cm。6は近世1期（16世紀第3四半期末～17世紀第1四半期）の備前焼播鉢で、放射状播目に加えて斜め方向の播目が加わり、見込みにも播目が入る。口径25.8cm、底径13.0cm、器高11.3cm。12条の櫛を使っている。この個体はSK58から5片、SD19・SP271から各1片、C61区包含層から2片出土した。7は中世6期（16世紀初頭～16世紀第3四半期）の備前焼播鉢で、口径28.8cm、底径12.2cm、器高12.9cmである。7条の櫛を使っている。この個体は他にC62区包含層からも2片出土した（包含層遺物の方が大きい）。

SK58B（第108図） SK58の東側、C61区南西部の4.93mで検出した長方形土坑である。平面は1.1m×1.3m、中央部に重複する穴でない部分の深さは27cm。

出土遺物 (第109図1・3) 1は1期の京都系土師器で灯明皿として使われている。口径10.8cm、器高2.1cmで色調はにがい黄褐色である。3は青銅製の替(かんざし)であるが両端を失っている。



SP97 (第98図) C62区のSD40の南西側で検出した柱穴類である。
出土遺物 (第110図2・3) 2・3は土師質の土錘である。

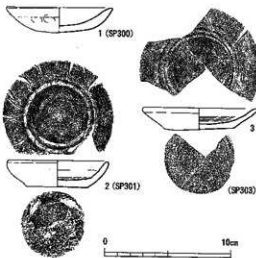


SK134 (第98図) C62区のSK67の北に位置し、標高4.95mで検出した柱穴類である。

出土遺物 (第110図1) 1は景徳鎮窯系の上質な青花碗で、口径13.2cm。

第110図 SP97・134出土遺物実測図

SP300 (第138図) C62区北部にあり、SK385の南側にある柱穴類である。標高4.76mで検出した。
出土遺物 (第111図1) 1は3期の京都系土師器である。



SP301 (第138図) C62区北西部、標高4.93mで検出した柱穴類である。

出土遺物 (第111図2) 2は内面にロゴロ目を残す在地系土師器で、口径8.0cm、底径4.9cm、器高2.1cmである。

第111図 SP300他出土遺物実測図

SP192 C62区4.68mで検出した柱穴類である。
出土遺物 (第113図1) 1は象嵌青磁である。

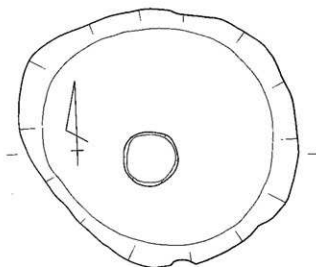
SP197 (第138図) SE207の南側に位置するB62区の柱穴類である。
出土遺物 (第113図2) 2は青磁碗である。口径13.2cm。

SP201 B62区の柱穴類である。

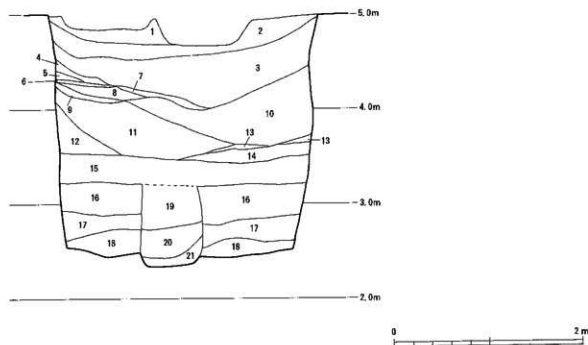
出土遺物 (第113図3) 3は土師質の土錘である。

SE207 (第112図) B62区、北調査区の中央南部にある井戸遺構である。検出標高は4.97m。SP197に切られている。平面形は円形で、規模は東西にやや長く3.0m、南北方向に2.8mである。最下層は標高3.32mである。縦半分に割って削り下げ、層序をみたところ検出面から2.5mほどは中央くぼみの堆積で、その下は厚さ30cmほどの均一な堆積がみられた(第15層)。この層を剥ぐと直径60cm程度の変色部分が現れ、これが井側であった。井側は深さ0.8mあり、井戸床面を若干掘り下げて設置した状況だったが、木質遺物は遺存しなかった。下部断面で筒状の部分が観察できたことから、この井戸は桶を重ねた型式であったと思われる、上部の井筒は撤去されたと思われる。

出土遺物 (第113図4・5) 4は井筒埋土から出土した凝灰岩軽石製の有孔円盤である。5は井筒の外から出土した弥生時代の変形土器底部である。



- | | | |
|----|----------|----------------------------|
| 1 | 黄土層 | 砂利・砂混じり、固くしまる |
| 2 | 暗茶色土層 | やや砂混じり |
| 3 | 暗褐色土層 | 暗茶土ブロック多数混じり、砂を多く含む |
| 4 | 暗黄褐色砂層 | やや小砂利を含む細砂層 |
| 5 | 暗褐色土層 | 3層と同一層 |
| 6 | 暗黄褐色砂層 | 単純細砂層 |
| 7 | 暗黄褐色砂層 | 4層と同一層 |
| 8 | 明茶色砂質土層 | 細砂を多く含む |
| 9 | 暗黄褐色砂層 | 小砂利を多く含む |
| 10 | 暗茶褐色砂質土層 | 暗茶土ブロックを多く含む |
| 11 | 暗黄褐色砂質土層 | 小砂利をやや含む |
| 12 | 暗黄褐色砂質土層 | 砂利を多く含む |
| 13 | 黄褐色砂層 | 灰色粘土ブロックを多く含む |
| 14 | 暗黄褐色砂質土層 | 12層と同一 |
| 15 | 黄褐色砂質土層 | 灰色粘土ブロックを多く含む |
| 16 | 暗黄褐色砂質土層 | 暗灰色粘土ブロックを多く含む |
| 17 | 反黄褐色砂質土層 | 暗灰色粘土ブロックをわずかに含む |
| 18 | 暗黄褐色砂質土層 | 暗灰色粘土ブロックをやや含む |
| 19 | 黄褐色砂質土層 | 細砂を多量に含む、暗灰色粘土ブロックがわずかに混じる |
| 20 | 暗茶褐色粘質土層 | 暗黄色粘土ブロックをわずかに含む、軟弱である |
| 21 | 暗茶褐色粘質土層 | 暗灰色粘土ブロックをやや含む |



第112図 SE207実測図

SE252 (第114・115図) B62区の北西部に中心がある井戸遺構である。検出標高は5.06m。検出面から下底までの深さは2.78mである。平面形は円形で、3.8m×3.5mの規模である。最下層は標高2.3mである。

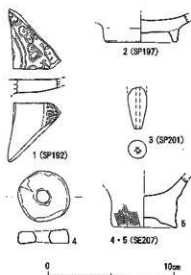
埋土を半割した層序は以下のとおりである。1層は砂質土層、2層は茶褐色土層、3層は茶褐色土層、4層は青灰色の純砂層、5層は小礫混じりの茶褐色砂質土層、6層は明茶色粘土ブロック小塊をわずかに含む暗茶褐色砂質土層、7層は灰色粘土層を含む茶褐色粘質土層、8層は水田土様の灰褐色土層、9層は砂・小石・茶褐色土(1~2cm大)珪が混合した砂層。凝灰岩の破片小片を若干含む。10層は小礫を多量に含む且つ中型の礫多数が混入した暗茶褐色土層。11層は茶色粘土のブロックを含む暗黄灰色砂質土層。12層は砂層に近い黄灰色砂質土層。

井刺や井筒は検出できなかったためそれらについては想像するしかないが、最下部に掘り込まれた円形部分の存在(85cm×105cm)から見て桶を底に設置し、上方に向かって桶を積み重ねた井戸で

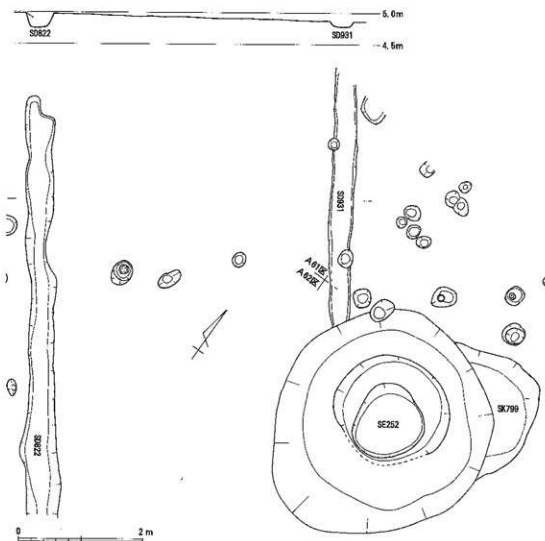
あったと推定する。石組井戸であれば、背後の控えが大きい筈であるのにそれがないのも、裏付けとなる。9層が上方から掘り込まれた様な断面であることから、桶は全て取り除かれたとみられる。

SE252からは人工遺物の他に陸獣の焼けた四肢骨1点が出土している。

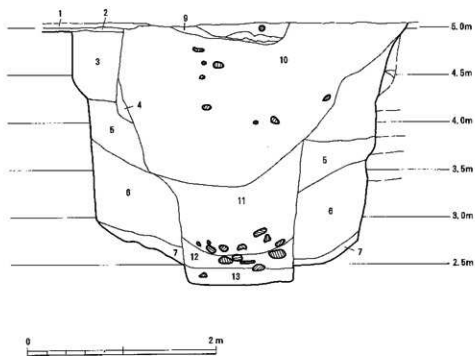
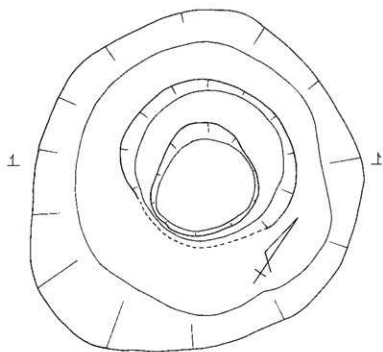
出土遺物(第116図1～8) 1は天草砂岩製の砥石である。図に示すように本来の形の一部であり、平たい面の両面を使用している。縦2.9cm、横4.3cm、厚さ1.0cm、重さ18.4gである。2は結晶片岩製の砥石で、薄く広い形が本来の物で、これは破片である。両面に残っている側面が使用されている。断面の薄い方が欠損している。縦7.7cm、横4.0cm、厚さ1.5cm、重さ65.7gである。3・4は土師質の土錘である。3は長さ5.0cm、重さ6.5g、4は長さ5.3cm、重さ8.7gである。5は鉄製の釘である。断面形は四角で、全体に



第113図 SP192他出土遺物実測図



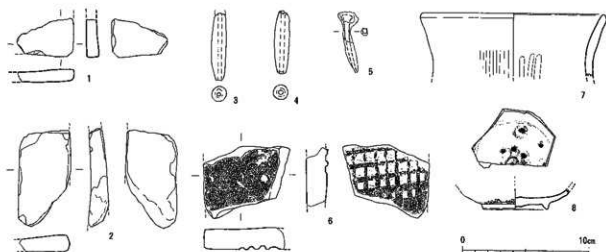
第114図 SE252位置図



第115図 SE252実測図

湾曲している。長さ4.7cm、断面の厚さ3mm、重さ5.5gである。6は格子目叩き・布目をもつ古代平瓦である。縦4.2cm、横6.2cm、厚さ1.6cmの破片である。7は弥生時代の壘形土器、口径14.3cm。8は中国南部漳州窯系の青花碗である。高台内部の中央部幅2cmくらいが露胎である。

SK266・298 (第117図) C61区の標高4.65mで検出した楕円形土坑である。中央に重なる小さい穴は、



第116図 SE252出土遺物実測図

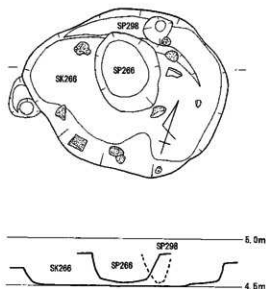
SK266埋設後に掘り込まれた遺構である。年代の分かる遺物は出土していない。

SP270 B62区の柱穴類である。標高4.95mで検出した。

出土遺物(第118図2) 2は滑州系系の青花皿である。

SK271 B63区にある柱穴類である。標高4.71mで検出した。

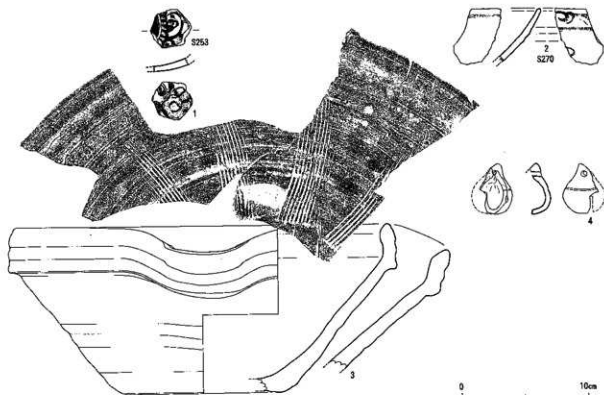
出土遺物(第118・119図3~5) 3は中世6期の備前焼播鉢である。11条の播り目具を使用し、口縁端部が上方に突出する。口径29.4cm、底径12.7cm、器高13.2cm。4は瓦質の鈴である。二つの型で作った部品を貼り合わせている。突出した部分に穿孔1個があり、肩部には沈線一条が廻る。5は銘不詳。



第117図 SK266等実測図

SP273 C62区にある柱穴類である。

出土遺物(第120図1~11・14・16・18) 1~7は3期の京都系土師器である。口径・器高・色調は次のとおりである。1(14.0cm・2.0cm・黄褐色)・2(12.6cm・2.6cm・淡黄色)・3(12.4cm・2.6cm・灰黄褐色)・4(8.8cm・1.8cm・淡黄色)・5(8.7cm・2.0cm・淡黄色)・6(8.8cm・1.8cm・濃い橙色)・7(8.8cm・2.0cm・濃い黄褐色)。8・9は施釉陶器の破片である。10・11は景徳鎮系系青花碗で、10は口径12.3cm、11は口径11.8cmである。14は中世3b期の備前焼播鉢である。口縁端部は内側及び外側に突出し、7条程度の播り目が放射状に入る。この破片がSD750からも出土している。16は内面だけに茶褐色釉のかかった中国製陶器皿で、見込みに黒軸による紋様がある。口径10.3cm、底径4.0cm、器高2.7cm。18は瀬戸美濃製の天目碗である。体部下半に軸が厚く垂れて

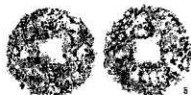


第118図 SK253・270・271出土遺物実測図

いる。底径4.3cm。

SK278 D62区の東端にある柱穴類である。SK141とSK321に囲まれた所に位置する。標高4.86mで検出した。

出土遺物(第120図15) 15は中国景徳鎮窯系の青花碗である。口縁部と体部に紋様があり、体部文様は芭蕉の葉である。口径14.4cm。



第119図 SK271出土鉢貨

SK291(第121図) A62区にある楕円形の土坑である。標高5.0mで検出した。土坑の規模は南北1.35m、東西93cmで、底部は中央に向かって窪んでおり、深さは50cmである。出土遺物はない。

SP333 C62区の柱穴類である。4.97mで検出した。縄紋土器が出土しているが、遺構の検出標高からみて混入である。

出土遺物(第122図5) 5は縄紋時代晩期の鉢形土器で、ヘラ磨きによる調整を行っている。3,000年くらい前の遺物である。中世大友城下町跡では縄紋時代晩期くらいからの遺物が中世の遺構に混入して出土する例がままあることから、下層にこの時期の遺物包含層が存在するのであろう。現実に、第69次A南調査区では中世遺構の下層を調査し、縄紋時代晩期から弥生時代・古墳時代の遺物を包含する薄い層を検出し、調査している。

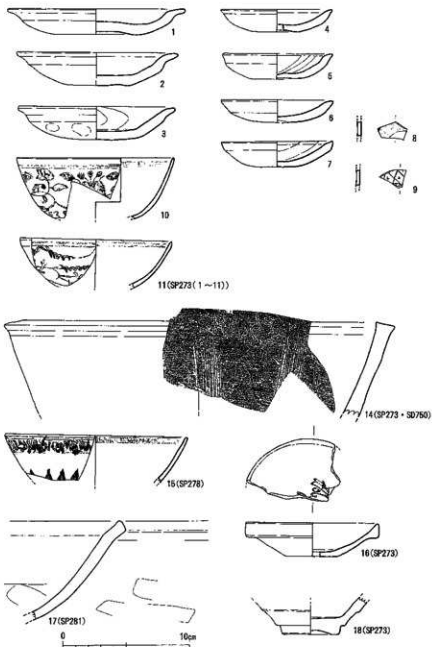
SK365 A62区の柱穴類である。標高5.11mで検出した

出土遺物(第122図6) 6は縄紋時代晩期の小型深鉢形土器である。口縁部は外反し、頸部で細く縮まる。胴部は上位に最大径があり、その直径は6.2cmである。口径7.5cm、現状の器高が5.0cmであ

る。色調は褐色を呈する。器面調整は内面から口縁部は横方向のナデ、以下は多方向のナデ。

SP378 C62区の標高4.89mで検出した柱穴類である。第64図9の銅製品が出土した。縦1.7cm、横1.4cm、重さ3.5gの遺物で、形は不整形で片面が窪んでいる。

SK779 北調査区の北東部、C61区とD61区に跨り存在する隅丸方形の土坑である。標高4.6mで検出した。人丁遺物の他、鳥類の四肢骨1点が出土した(第4分冊参照)。



第120図 SK273・278・281出土遺物実測図

出土遺物(第122図1~4) 1・2は3期の京都系土師器である。1は口径13.4cm、器高2.4cmで、色調は褐色である。口縁部の器壁がやや厚く、見込み部は上方に膨らみ気味である。2は口縁部に煤が付着する。口径12.6cm、器高2.6cmである。3は白磁皿で口径15.2cm、器高3.0cm、底径8.1cmで

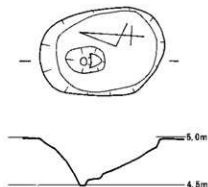
ある。外面下半は削り痕、軸は体部の上半分にだけ掛けられている。4は中国南部製の焼締陶器鉢である。

SK130 C62区にありSD40の東側に位置する柱穴類である。標高4.92mで検出した。

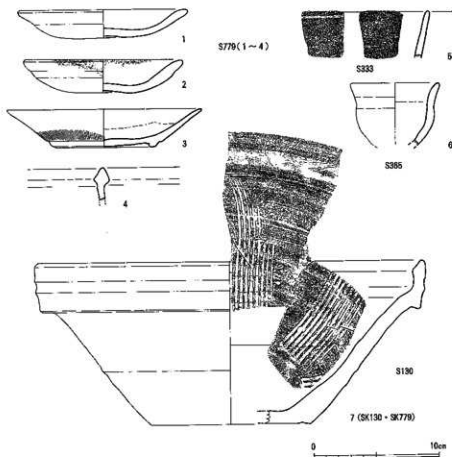
出土遺物(第122図7) 7は中世6期の備前焼播鉢である。9条の掃り目をもつ。この破片がほかにSK779からも出土している。

SK382(第123図) A61区にありSK266の南東側に位置する土坑で標高5.04mで検出した。南北4.0m、東西3.3m、深さ55cmの楕円形土坑である。16世紀中葉～後葉。

出土遺物(第125図1～11) 1は2期の京都系土師器で

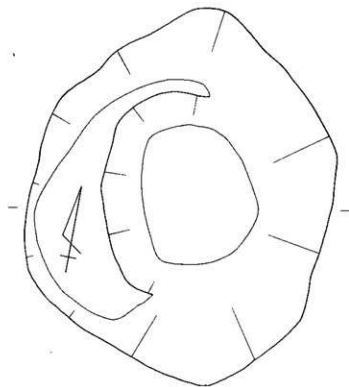


第121図 SK291実測図



第122図 SK130・SP333・365・378・779出土遺物実測図

ある。口径12.4cm、器高2.1cm。2は白磁碗、3は青銅製品の小柄、4は鉄製の釘状製品、5は鉄製の釘、6は景徳鎮窯系の青花碗C群で、破片がSK382に2片、SP271に1片、C62区包含層に1片出土した。口径12.5cm、底径4.1cm、器高5.6cm。7は同じくE群、8は景徳鎮窯系青花である。9は青花皿C群で、口径10.2cm、底径3.4cm、器高2.7cmである。10は青磁香炉、11は備前焼の瓶で、肩部に「太」字のヘラ文字がある。口径6.0cm、器高26.1cm以上である。



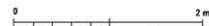
SK385 (第124図) C62区・D62区に位置する方形の土坑で、検出標高は4.86mである。規模は長さ95cm、幅90cm、深さ37cmである。

出土遺物 (第125図12・13) 12は瓦質土器火鉢の脚部である。13は土師器を再利用した円盤状製品である。

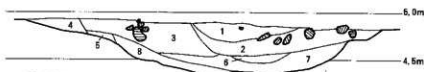
SK398 (第132図) C62区にある楕円形の土坑で、検出標高は4.91mである。

規模は長さ1.78m、幅1.25m、深さ47cmである。埋土上部には多量の焼土・炭化物が入っていた。遺構の所属時期は16世紀中葉～後葉である。

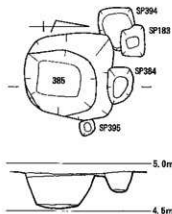
出土遺物 (第133図1～5) 1は1期の京都系土師器で器壁が薄く見込み部は上方に膨らむ。口径12.4cm、器高2.7cmで色調はぶい期橙色である。2は中世6期の備前焼播鉢である。口径27.2cm。9条単位の播り目を、中心から放射状に施している。この個体の破片は他にSK40・SK190・SK67・SK271・SK382の各遺構や中世の斜行道路跡93層からも出七した。口縁端部が外側に突出する特徴をもつ。3は7



第123図 SK382実測図



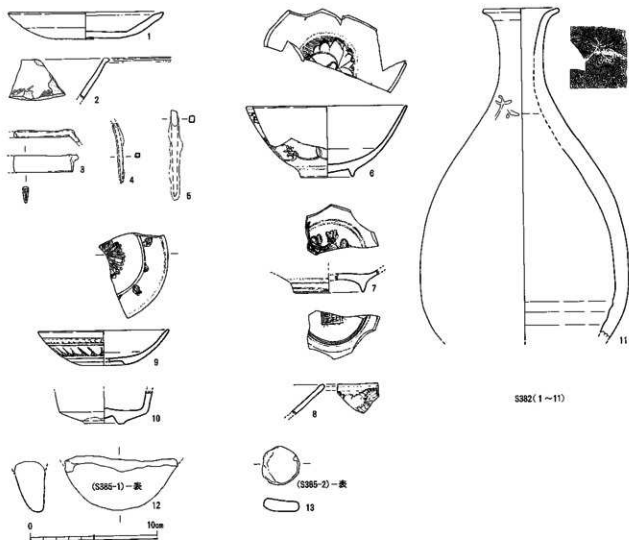
- 1 黄褐色土層 炭化穀分の小粒をやや含む
- 2 暗黄褐色土層 礫・遺物多く含む
- 3 褐色土層 炭化穀分の小粒を多く含む
- 4 橙褐色土層 鉄分多量に含む
- 5 黄褐色土層 鉄分わずかに含む
- 6 灰色土層 焼土・炭化物・灰多量に含む
- 7 暗褐色土層 焼土・炭化物少量含む
- 8 黒褐色土層 やや粘質を帯びる



第124図 SK385実測図

条単位の播り目をもつ中世6期の備前焼播鉢である。最大径0.3cm、底径14.1cmである。この個体も破片がSK581の他、C61区・D62区の包含層から出土した。4は中国南部製の 焼締陶器の鉢である。口縁部が外側に肥厚し、器面調整は口縁部上端から内面の上部1/3はへらなで、その他の部分はナデ調整である。この個体も破片がSK419・SK581の各遺構やC61区包含層から出土した。口径28.2cm、底径14.8cm、器高10.2cmである。色調は暗赤褐色を呈する。5は中国景德鎮窯系青花碗C群である。口縁部と底部の破片があるが、両者は接合しない。口径15.0cm、底径5.2cm。

SK419 C62区にあり、検出標高は4.88mである。



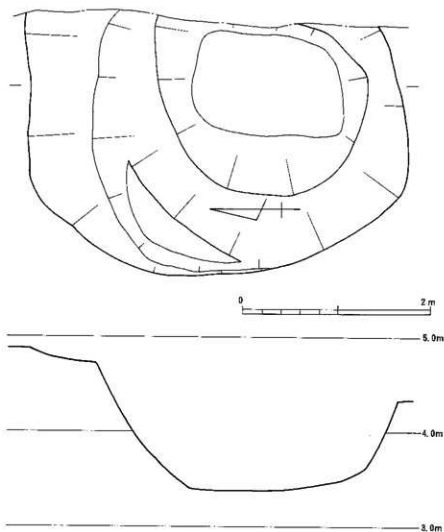
第125図 SK382・385出土遺物実測図

出土遺物(第134図1) 1は中国南部製の褐釉陶器で、出土部分にはないが、本来四耳壺である。口径11.6cm、最大径は胴中位よりもやや上にあるらしい。最大径38.8cm。色調は暗赤褐色である。破片はSK419の他、B60区や南調査区の包含層から2点、北調査区から1点、第75次調査区SK132からも出土した。

SP438 C62区にある柱穴類である。

出土遺物(第134図2) 2は中国景德鎮窯系の青花碗である。豊付が露胎で、他は施釉されている。底径6.5cm。

SP468 B62区にある柱穴類で、検出標高は4.96mである。



第126図 SK141実測図

出土遺物（第134図5） 5は京都系土師器の耳皿である。口径4.4cm、幅6.3cm、器高1.3cmを測り、色調はぶい黄褐色である。

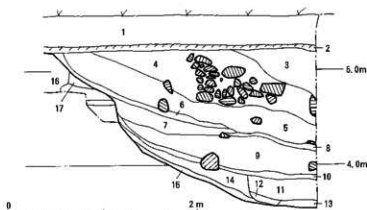
SP658 D62区のSK321の北西にある柱穴類である。標高4.69mで検出した。

出土遺物（第134図3） 3は2期の京都系土師器で口径10.2cmである。器壁は底部で薄く、口縁部は厚くなり、通例の京都系土師器のように外面を横方向になでつけることにより、体部と区別している。

SP668 C62区にある柱穴類で、検出標高は4.78mである。

出土遺物（第134図4） 4は1期の京都系土師器である。器壁は底部が極端に薄く、体部から口縁部に向けて次第に厚くなる。口縁部は上面に平坦面を廻らすように内面が屈折する。底部は上方に窪む特徴がある。口径10.4cm、器高2.2cmで、色調は淡黄色である。

SK141（第126・127図） D62区南東部に位置する円形の大型土坑である。遺構の東部は調査区外に出



- | | |
|----------|--|
| 1 暗褐色土層 | 耕種土 |
| 2 暗褐色土層 | 鉄分酸化層、固くしめる |
| 3 灰褐色土層 | 砂を多く含む、黄褐色土ブロックがやや混じる |
| 4 暗褐色土層 | 黄土粒・炭化物・鉄分酸化粒をやや含む、埋物を包含す |
| 5 淡灰褐色土層 | 小砂粒・鉄分酸化粒を多く含む（基本土層05層に対応） |
| 6 淡灰褐色土層 | 鉄分酸化粒をやや含む、きめ細かい土塊 |
| 7 明灰褐色土層 | 精細な粘土・黄色粘土ブロックを多く含む |
| 8 灰褐色土層 | 鉄分酸化粒をやや含む |
| 9 明褐色土層 | 暗灰色粘土ブロックを多数含む。大粒の鉄分酸化粒をやや含む。遺物・礫が混じる。（基本土層07層に対応） |
| 10 灰褐色土層 | 黄色粘土ブロックをやや含む |
| 11 暗褐色土層 | 炭化物をわずかに含む（基本土層09層に対応） |
| 12 暗褐色土層 | やや砂粒が混じる |
| 13 明褐色土層 | 黄土粒・炭化物・小砂粒をやや含む |
| 14 暗褐色土層 | 炭化物・黄土粒をわずかに含む |
| 15 明褐色土層 | 鉄分酸化粒が混じり、鉄分酸化層も見られる |
| 16 暗褐色土層 | 黄土粒・炭化物をやや含む |
| 17 暗褐色土層 | 黄土粒・炭化物をわずかに含む |

第127図 SK141東面層序図

3期であろう。小型の皿である7～9は口縁部に煤が付着し灯明皿として使われている。11・14・15は中世6期の備前焼で、11は壺で口径9.8cm、底径11.0cm、器高13.5cmである。14・15は播鉢で、14は口径29.0cm、底径14.0cm、器高13.0cmである。15条の櫛を使っている。15は口径27.4cmで10条の櫛を使用。12は埴輪で、内面の付着物が銅であることが金属分析で明らかになった。口径7.7cm、器高4.8cm。13は有溝土鏝である。16は鉄製品で釣り針状に曲がった物。17は黒い編が入った石製製の火打石である。18は中四景徳鎮窯系の青花碗、19は中国南部漳州窯形青花碗である。口縁部内面に青色の直線がある。20は青磁碗で口径10.0cm、底径4.3cm、器高3.5cmである。外面の高台よりも上に縦方向の削り出し痕が並ぶ。21は中四製の天目碗で、割れた断面に漆接合の痕跡がある。口径12.8cm。22は青磁破花皿、23は青磁の蓋で上面とその続きの側面だけに施軸。口径3.0cm、底径1.4cm、器高1.2cm。型押し整形による花柄がつく。24は漳州窯系の青花蕃荷底皿で口径11.4cm、底径4.6cm、器高2.7cm。25は青磁碗である。口径13.2cm。26は中世6期の備前焼で、口径38.0cm。27・28は瓦質土器の火鉢。27は口径40cm、28は底径32.4cmである。29は天草砂岩製の砥石である。二つの平面と一側面を使用。縦横8.0cm×4.7cm。

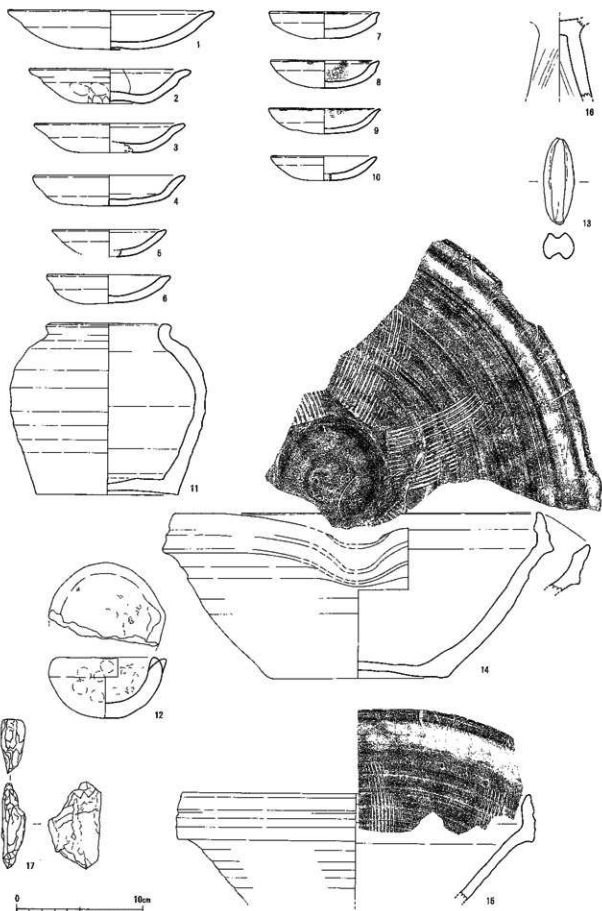
SK445 C60区にあり、標高4.97mで検出した土坑である。北調査区の遺構であるがここで説明する。出土遺物（第135図1）1は祥符元宝（北宋1009年初鋳）である。

SK411（第136図）北調査区のC・D61区にあり、遺構の北部は調査区外に出ている。現状では柵田

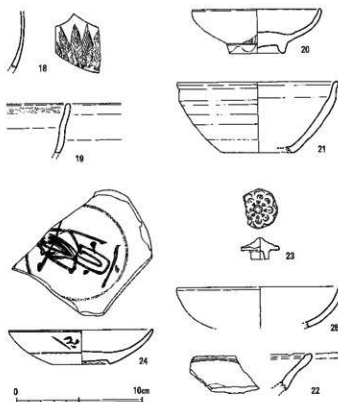
ている。平面的な検出標高は4.94mだが、調査区東壁の観察では標高5.2mまで追うことができる。規模は長さ4.1m、現状の幅2.8m、深さ1.55mである。SK141の埋土は中くぼみに堆積しており、さらにその上を近世の水田床土が水平に切る状態であるので本来はもっと上から掘り込まれていたと見られる。埋土が中くぼみで薄い層や厚い層があり、集中的に礫が入る層があるなどの点から、廃棄土坑、つまりゴミ穴であろう。

人工遺物の他にゴラ類の鯉蓋骨1点が出土している（第4分冊参照）。遺構の所属時期は16世紀中葉～後葉である。

出土遺物（第128～130図1～29）1～10は京都系土師器である。口径・器高は次のとおりである。1（16.4cm・3.1cm）・2（12.8cm・2.7cm）・3（12.0cm・2.3cm）・4（12.0cm・2.4cm）・5（8.4cm・1.9cm）・6（9.8cm・2.2cm）・7（8.7cm・2.1cm）・8（8.6cm・2.2cm）・9（8.8cm・2.0cm）・10（9.0cm・2.1cm）。これらは2期から



第128图 SK141出土物实测图①



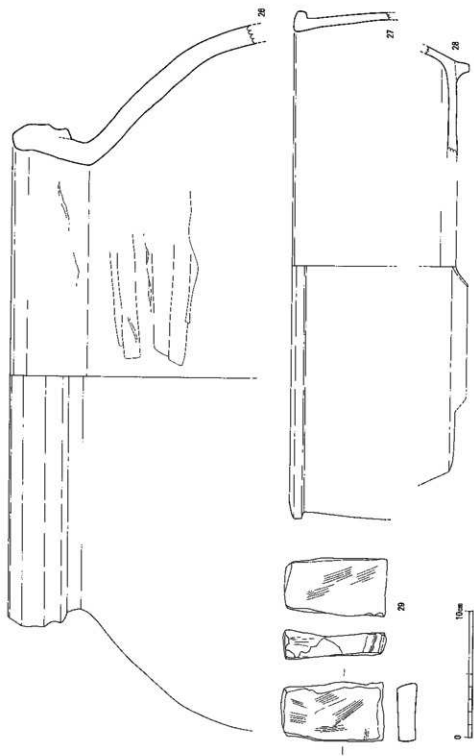
第129図 SK141出土遺物実測図②

形の土坑である。検出標高は北側壁面の観察では標高5.1mであるが、平面的には4.74mで検出した。16世紀後葉に属する。

出土遺物（第137図1～5） 1は3期の京都系土師器で、器壁が厚くなでにより口縁部をわずかに強調する。口径12.4cm、器高2.7cmで、色調は褐色である。2は中国龍泉窯系の青磁碗で、口縁部は強く外反し、胴部外面に蓮弁紋を削り出している。口径12.0cmでオリーブ色を呈する。3は景徳鎮窯系の青花蕃荷底皿である。口径10.7cm。4は軒丸瓦で、瓦当縁辺部に珠紋、中心に巴紋をもつ。5は瓦質土器の火鉢である。口縁部が帯状に立ち、外面に四カ所の刻み線がある。刻みから離れた位置の頸部に花紋の刻印が一カ所ついている。器面の調整はすべて横方向のなである。口径32.0cmで、色調は暗灰色である。

SK266（第103図） C61区にあり、SK382の北西側に位置する楕円形の土坑である。床面に段差がある。中心部に小型土坑が重複するが、これはSK266埋没後に掘り込まれたものである。標高4.85mで検出した。規模は長さ2.4m×幅1.75m、深さ25cm。出土遺物は礫・土器片があるが、年代の分かる遺物はない。

SD822（第138図） A62区の北西部付近から出現し南東方向に一直線に全長12.5m走る溝状遺構である。標高5.02mで検出した。南北方向に対して北から西に39度振れている。幅は90cm～60cm前後、深さは10cm前後である。東側に平行に走るSD931と一体の遺構であり、南側の第36次調査区から続く斜行道路の側溝である。検出標高はSD822の方が東側のSD931よりも10cm程度高いが両者は対をなすと考えられ、道路面の幅は4.9m～5.0mである。年代を表す出土遺物はない。



第130图 SK141出土遗物实测图③

SD931 (第138図) A61区からB62区に続き、SE252と重複して消える溝状遺構である。4.91mで検出した。幅は70cm前後である。南調査区での全長は約3mである。年代を表す出土遺物はない。



第131図 SP390出土鏡貨幣形

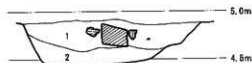
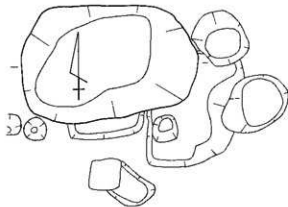
SP1034 B62区の標高4.63mで検出した柱穴類である。検出標高は低いが、16世紀第3四半期頃の京都系土師器が1点出土した。

出土遺物 (第162図3) 3は3期の京都系土師器である。

中層の遺構

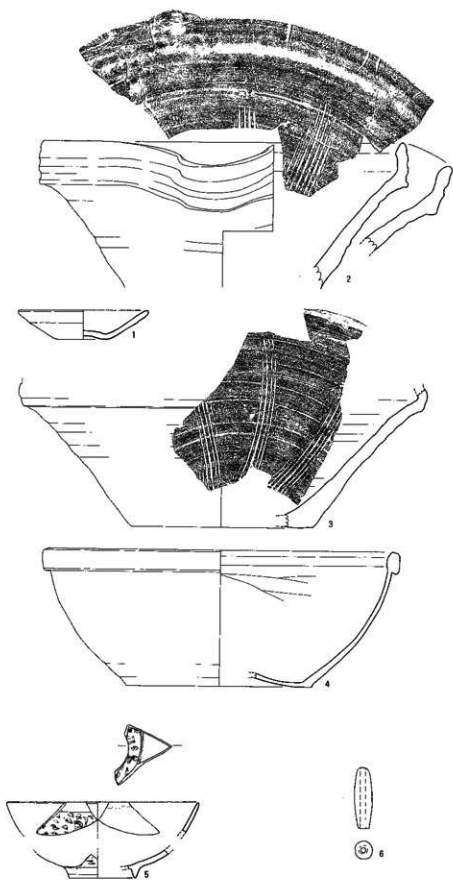
上層とした遺構を調査した後に調査した遺構である。ロクロ目を残す在地系土師器の段階の遺構を中心に説明する。

SK524 (第146図) C62・63区の境に位置する楕円形の土坑である。床面中央に直径1.4mの円形土坑が重複する他、2基の柱穴類が重複する。SK524の規模は長さ2.35m、幅1.8m、深さ20cmである。年代の分かる出土遺物はなかった。

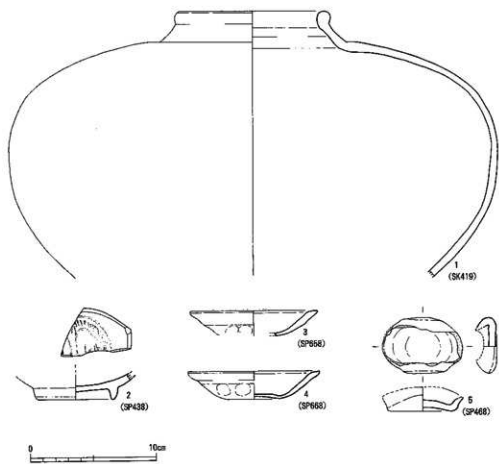


- 1 暗褐色土層。焼土・炭化物多量混入。礫は積っている。
- 2 暗褐色土層。焼土が少量混じる。

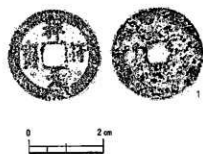
第132図 SK398実測図



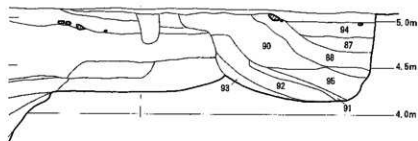
第133图 SK398出土遺物実測図



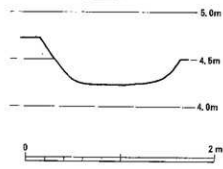
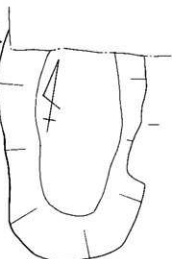
第134図 SK419等出土遺物実測図



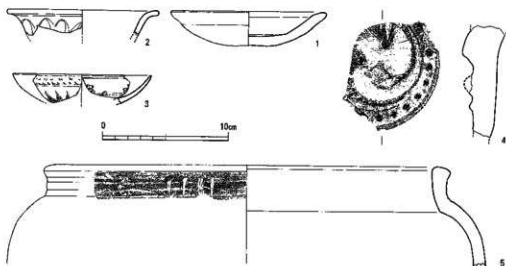
第135図 SP445出土銭貨拓影



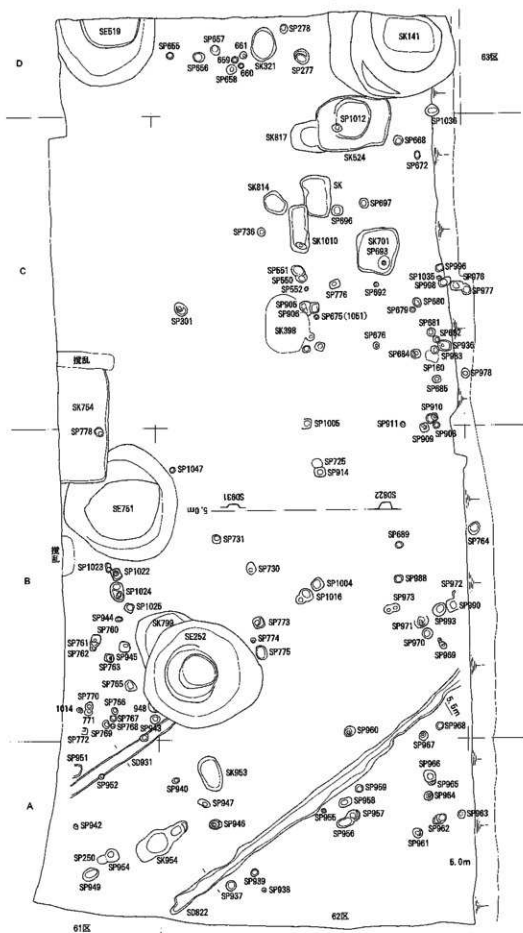
- 87 褐色砂質土層 白色砂粒（炭石）・鉄分酸化粒を多く含む
- 88 環褐色土層 鉄分酸化粒をやや含み、焼土粒・炭化物が少量混じる
- 89 暗灰褐色砂層 鉄分酸化粒をやや含み、小砂粒を少量混じる
- 90 暗褐色土層 焼土粒・炭化物、遺物をやや含む
- 91 暗灰色粘土層 焼土粒・炭化物を多量に含む
- 92 淡灰黄色粘質土層 鉄分酸化粒を多く含み、焼土粒・炭化物を少量含む
- 93 暗灰色粘質土層 焼土粒・炭化物をやや含む
- 94 淡灰黄褐色土層 鉄分酸化粒を多く含み、焼土粒がわずかに混じる
- 95 淡褐色粘質土層 焼土粒・炭化物をやや含む



第136図 SK411実測図

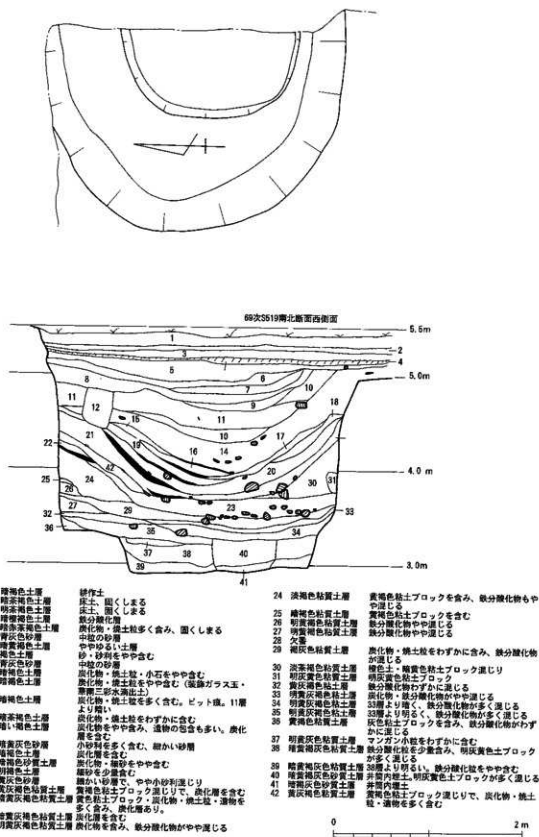


第137図 SK411出土遺物実測図



第138図 中層の中世遺構

SE519 (第139・140図) D61区北西にあり、遺構の半分は第75次調査区に含まれ、そこではSE445と称している遺構である。



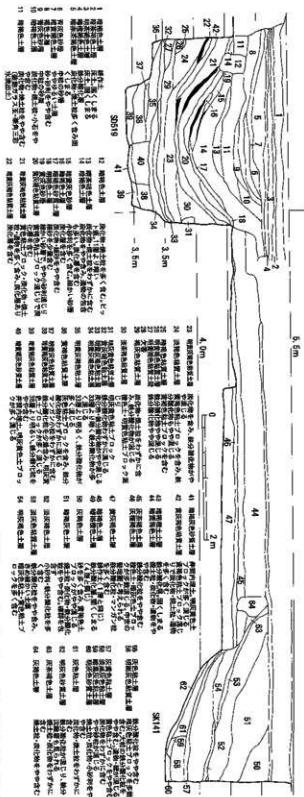
第139図 SE519実測図

検出面は東側の土層図によれば水田床土である酸化層から1枚下である。検出標高は5.08m。遺構は井戸であるが、井側や井筒の材料は残っておらず、廃絶に際して標高3.5m弱まで掘り下げて、それらを回収したらしい。その後の井戸跡は人工的に急速に埋められるようなことはなく、自然埋没に任せて廃棄上坑になったようである。層序図によれば北側から黒い灰層が何度も投げ捨てられている。遺構の規模は上面で南北3.2m以上、東西2.3m以上で、最深部の深さは標高2.9mである。

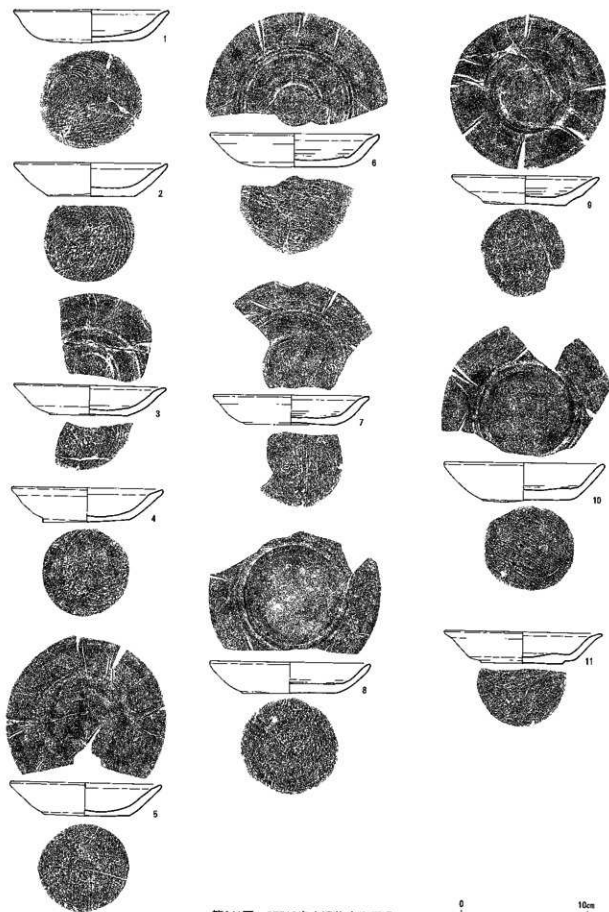
内部から出土した遺物は16世紀前葉に属する。鹿の骨も出土した。

出土遺物(第141~145図1~91) 1~20・22・23は底部糸切り底であり、一見、在地系土師器である。体部の傾きが強い傾向が顕著で、口縁端部が急に薄くなったり、同時に端部を外側に折り曲げたりしたものが多い。これらは在地系土師器を作っていた人が京都系土師器を模倣したとみられる。内面にクロク目を残す例は口縁端部が薄くなって外側に折曲がった例(3・6・7・8・13)と体部が直線的で端部が薄くならない例(8・10)があり、小型の皿は内湾する(20・22・23)。

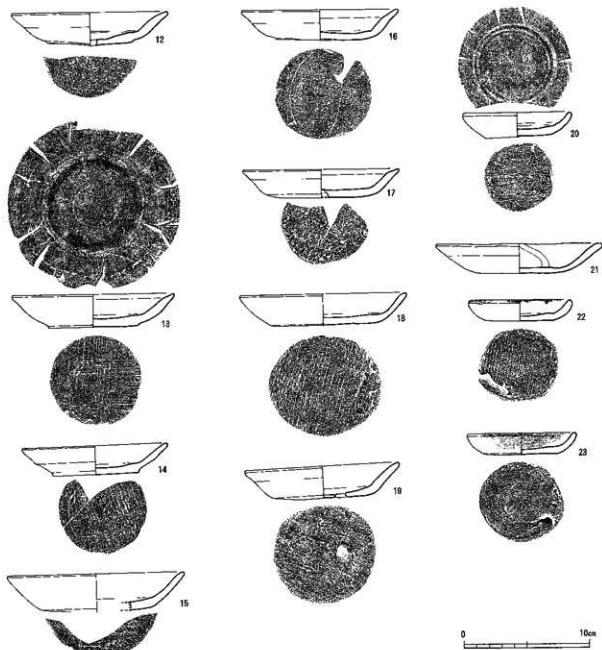
1は底部中央部の器壁がやや薄く、外底面はやや丸みを帯びている。底部は糸切り後に板状圧痕が一部につく。底部と体部の境界付近が厚くなる土器である。口縁部は緩やかに外反し、内側の上面には平坦面が覆るように先端部が細くなる。底部と体部とは丸みを帯びて連続する。境界付近はヘラ削りで調整するのはなく、なで調整により丸みをもたせている。口径12.2cm、底径は観察不能ほど京都系土師器に近い。器高は2.6cmで色調は黄褐色である。2は底部接地面は水平で糸切り離しのままである。体部は内湾気味に立ち、口縁内側上部を細くして、稜線が廻り、口縁端部は尖る。口径12.2cm、底径7.0cm、器高2.6cmで、色調は濃い黄褐色である。3は底部は糸切り離しのままで、体部との区別ははっきりしている。器壁は底部が薄く、体部の方が厚い。口縁内面が細まり、内面に稜線が廻る。また、内面下部には



第140図 南調査区の東壁実測図

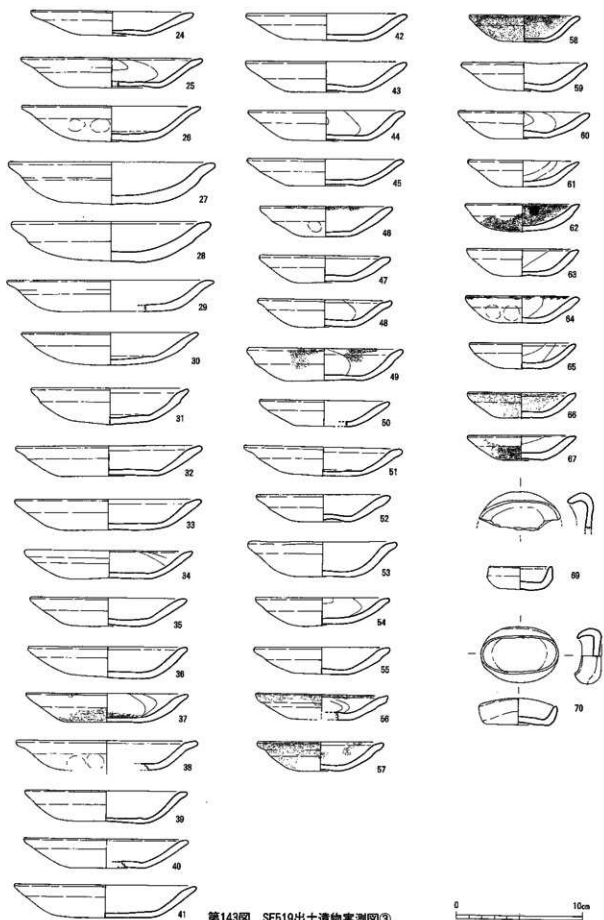


第141圖 SE519出土遺物実測図①

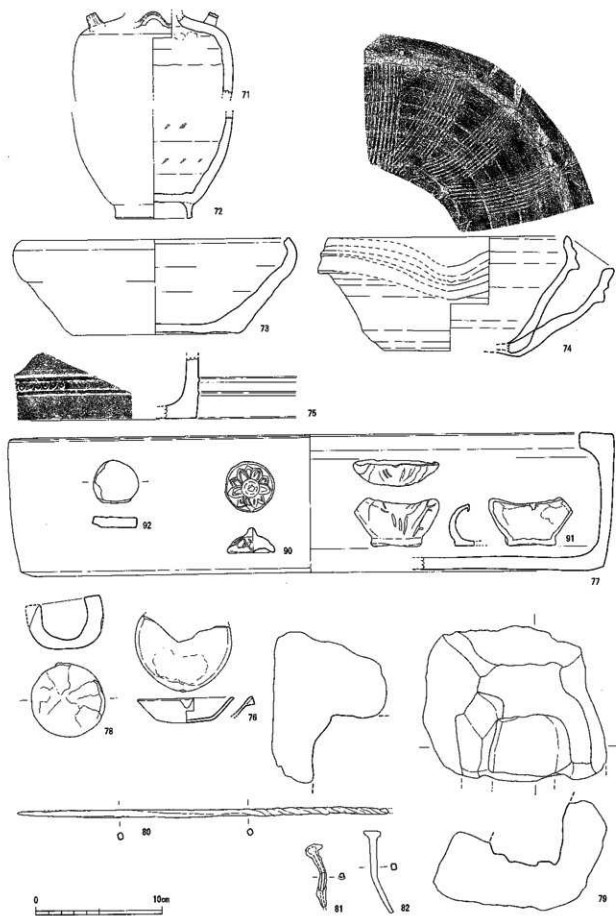


第142図 SE519出土遺物実測図②

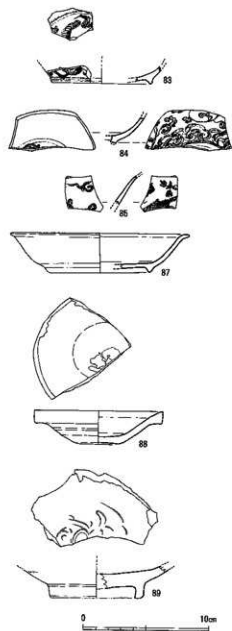
ロクロ目が残されている。口径12.0cm、底径6.2cm、器高2.3cmで、色調はにぶい黄橙色である。4は見込み中央部が内側で窪み、体部が厚くなる器形である。体部は内湾気味に立ち、口縁上部は内側で細くなり、稜線がつく。口径12.0cm、底径6.8cm、器高2.7cmで、色調はにぶい橙色である。5は底部の器壁が薄く、糸切り痕と板状圧痕がつく。底部と体部の移行部は明確に区別され、体部は相対的に厚い。口縁上部内面には稜線が廻る。口径12.0cm、底径6.9cm、器高2.6cmで、色調はにぶい橙色である。6は底部を糸切りした後、板状圧痕がつく。体部との移行は丸みを帯びており、底径を計測できない。口縁部内面には上部に稜線が廻り、口縁端部は外反する。内面にはロクロ目が残る。口径13.4cm、底径8.0cm、器高2.6cmで、色調はにぶい橙色である。7は底部を糸切りした後、板状圧痕がつく。体部との移行はなでにより丸みを帯びる。口縁部は外湾する。内面にはロクロ目が残る。口径12.4cm、底径7.3cm、器高2.3cmで色調はにぶい黄橙色である。8は底部を糸切りした



第143圖 SE519出土遺物実測図③

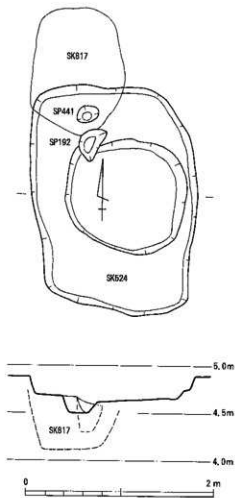


第144图 SE519出土遺物実測図④

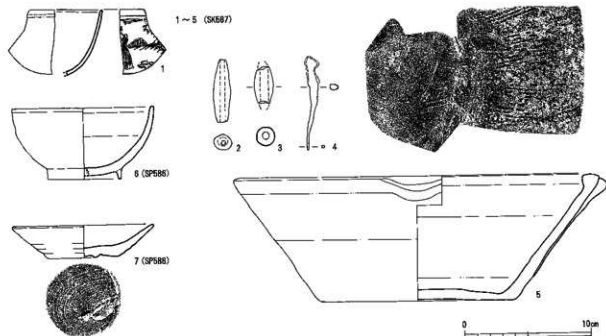


第145図 SE519出土遺物実測図⑤

後、板状圧痕がつく。器壁は底部で厚く、体部・口縁部の器壁は薄い。底部から体部への移行部は丸みを帯びて連続する。内面にはロクロ目が残る。口径12.8cm、底径7.4cm、器高2.5cmで色調はにぶい黄橙色である。9は糸切り底で板状圧痕がつく。内面にはロクロ目残り、体部と底部の境は明確である。口径11.6cm、底径7.6cm、器高2.3cmで色調はにぶい橙色である。10は内面にロクロ目を残すが見込み部は横方向になで消されている。底部の器壁が厚く、体部・口縁部は均一な厚さで有り、直線的に外反する。板状圧痕がつく。口径12.8cm、底径7.1cm、器高3.0cmで色調はにぶい橙色である。11は糸切り底で板状圧痕がつく。底部が下に突き出る。体部は横方向に生じ屈折して外反し、端部は外湾する。口径12.5cm、底径6.5cm、器高2.4cmで色調はにぶい橙色である。12も底部が突出気味で、体部は内湾し口縁部が外湾する。口径12.4cm、底径6.8cm、器高2.6cmで色調はにぶい橙色である。13は体部よりも下方に突出した底部をもち、糸切り底で板状圧痕が直交してつく。体部は内湾し、口縁部が外湾する。口径12.9cm、底径7.2cm、器高2.6cmで色調は褐色である。14は底部が下方に突出し、体部・口縁部が外反する。口径11.6cm、底径6.9cm、器高2.3cmで色調はにぶい黄褐色である。15は糸切り底で器壁が薄い土器である。底部から体部へは丸みを帯びて移行する。口径14.0cm、底径8.8cm、器高2.4cmで、色調は黄褐色である。16は糸切り底で、器壁は体部の方が厚い。底部と体部の境は丸みを帯び、口縁部が外反する。口径12.4cm、底径は計測不能、器高は2.4cmで色調はにぶい橙色である。17は浅い器形で、糸切り底には板状圧痕がつく。口縁部内面は稜線が廻る。口径12.4cm、底径は計測不能、器高2.2cmで色調はにぶい橙色である。18は糸切り痕と板状圧痕がつく。底部の器壁が体部よりもやや厚く、移行部は滑らかに連続する。口径13.2cm、底径8.5cm、器高2.5cmで色調はにぶい橙色である。19は底部は器壁が薄く、焼成後直径9mmの穿孔が一個ある。口縁部は外湾する。口径12.2cm、底径約8.0cm、器高2.5cmで色調はにぶい橙色である。20は小型の皿である。底部も口縁部も均等な厚さで、体部は内湾する。口径8.6cm、底径



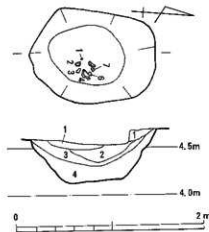
第146図 SK524実測図



第147図 SE587他出土遺物実測図

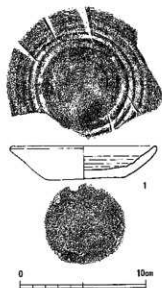
5.3cm、器高1.9cmで色調はにぶい橙色である。22は灯明皿である。糸切り底で板状圧痕がつき、口縁部は内湾する。口径8.0cm、底径5.4cm、器高1.7cmで色調はにぶい橙色である。23は灯明皿で、口径8.6cm、底径6.0cm、器高1.7cmで色調はにぶい橙色である。

21・24～70の47点は2期の京都系土師器である。21は1期あるいは2期の京都系土師器である。内面には板状粘土の接合痕

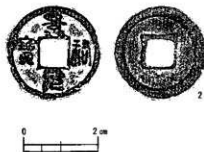


第148図 SK817実測図

がある。口径13.2cm、器高2.4cmで色調はにぶい橙色である。小皿は灯明皿としての用途が多い。71・72は同一個体の中国製陶器四耳壺である。肩部に二条の溝をもつ帯状の把手がつく。内面は無袖だが、見込みに自然袖が付く。底径は6.1cm。他にSD750 中層・上層から各4片、75次調査区のSS4から1片出土した。73・74は備前焼。73は鉢で口径21.0cm、底径13.0cm、器高7.5cm。他に近世耕作痕SD40とS130、75次SE445（同一遺構）上層からも出土した。74は75次SE445からも出土。口径19.0cm、底径10.0cm、器高9.3cm。75・77は瓦質土器火鉢で、77は口径47.8cm、底径46.2cm、器高10.8cm。76は鉄製の柄杓。口径7.6cm、器高1.9cm、重さ72.3gである。78は瓦質土器風炉の脚。79は凝灰岩製の五輪塔部品。80～82は鉄製品で、80は図の左が尖り、反対側はネジ曲げられている。長さ



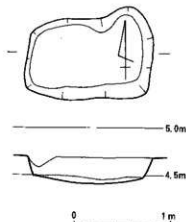
第149図 SK817出土遺物実測図



第150図 SK817出土銭貨拓影

80は図の左が尖り、反対側はネジ曲げられている。長さ

29.2cm、厚さ0.6×0.4cmである。重さ30.6g。81・82は釘。83～85は景徳鎮窯系の青花碗である。87は白磁皿で口径13.4cm、底径7.9cm、器高3.2cmである。88は陶器皿で見込みだけ施釉、他は露胎で、口径10.2cm、底径3.0cm、器高2.5cmである。89は青磁碗で、見込みに型押ししたの紋様がある。90は三彩の蓋で、色は緑色。直径4.0cm、高さ2.1cm。内面は型に押し込んだ指跡がそのまま残る。91は同じく三彩の鳥形水滴で、型合わせした半分である。底部の長さは4.0cm、残存長は6.7cmである。色は緑と黄褐色。92は土師質土器を加工した物。



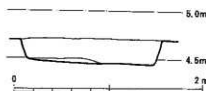
第151図 SK700実測図

以上の人工遺物の他に鹿の左大腿骨1点・イノシシ類の右上顎骨1点・犬歯片1点・ガン類の鳥口骨1点が出土している（第4分冊参照）。



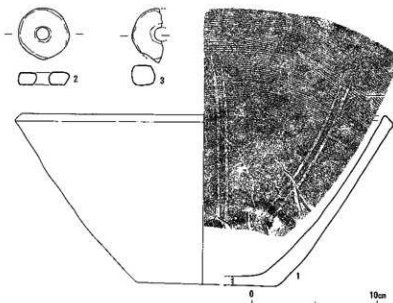
第152図 SK701実測図

SK817（第148図）北調査区の南東部、C62区に位置する楕円形の土坑である。南部の上部をSK524に切られているが、上部の一部が削られた程度である。長さ85cm、幅0.5m、深さ60cmを測る。埋土の堆積は中くぼみで、一気に埋めた状況ではなく、中央部分の上層から遺物が出土した。



出土遺物（第149・150図1・2）

1は内面にロクロ目を残す在地系土師器皿である。口径11.6cm、底径6.2cm、器高2.6cmである。2は景祐元室（北宋1034年初鑄）である。



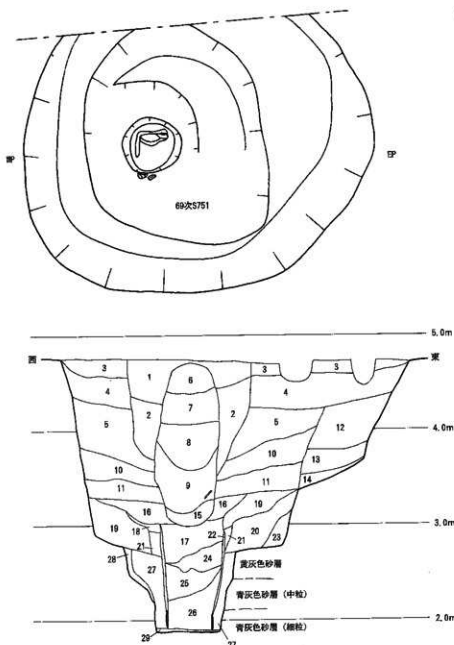
第153図 SK733出土遺物実測図

SK700（第151図）C62区にあり、標高4.71mで検出した土坑である。平面は長方形気味で、1.33m×1.0m、床面は中央がやや深く深さ28cm。出土遺物はない。

SK701（第152図）C62区にあり、標高4.72mで検出した土坑である。平面は方形気味で1.55m×1.33m、床面は平坦で深さ27cmである。出土遺物はない。

SP733 B62区の標高4.71mで検出した柱穴類である。

出土遺物（第153図1～3） 1は瓦質土器の播鉢で、内面は刷毛調整の後、2条の播目目が疎らにある。口径30.0cm、底径11.0cm、器高13.3cmである。2・3は凝灰岩製の紡錘車である。2は縦横4.0cm、厚さ1.0cm、重さ11.6g、3は半欠品で縦4.2cm、厚さ1.5cm、重さ6.2gである。

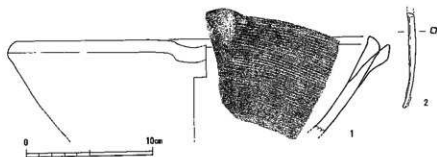


第154図 SE751実測図

SE751 (第154図) B61・62区にある井戸である。標高4.74mで検出した。井戸主要部は中心から西側にあり、最下部の標高は1.87mである。木質の板が一段方形に組まれた状態で一部検出できたが、残り具合は悪かった。土層断面図をとらなかったが、上部構造は桶を重ねるものであろう。
出土遺物 (第155図1・2)
 第155図1は東播系須恵器のこね鉢で、一ヵ所に注ぎ口がある。内面は刷毛目調整で口径は28.1cm。2は鉄製の釘である。断面は四角で現状の長さは7.5cm。

SD754 B61区・C61区の標高4.75mで検出した方形上坑の一部である。東部は電柱引張り線の攪乱土坑と重複していたが、残存部の東西方向幅は3.7m (推定復元幅は4m弱)で、南北方向に現れた範囲は1.6m、深さは最大29cmである。出土遺物は少なく、北調査区に接する位置であり、粘土採掘坑であろう。

出土遺物 (第156・157図1)
 1は陶器の急須注ぎ口である。色調は淡黄橙色を呈する。備前焼き。



第155図 SE751出土遺物実測図

SP773

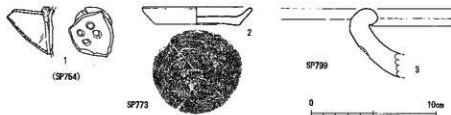
出土遺物 (第157図2)
 2は在地系土師器小皿で口縁部は長めで器壁が細く、外反する。口径8.6cm、底径6.6cm、器高1.4cmで色調はにびい黄橙色である。



第156図 SE751・SD754出土銭貨拓影

下層の遺構

ここで扱うのは中世段階の遺構としては、最も初期の遺構群である。ある標高の地面に並ぶ遺構として確認出来たわけではない。ほとんど溝状遺構である。東部を南北に走るSD750については北調



第157図 SK754・773等出土遺物実測図

査区の部分で報告したので、簡単な説明にしたい。西部では南東から北西方向の溝が多い。調査区南西部では、第41次調査区との境界周辺の未調査部分を拡張調査した。

SD750 (第163-2図) 北調査区に続く遺構で、出土遺物は北調査区部分で説明したように最初の段階は14世紀前半である。第163図は調査区の南断面を南側から作図したものである。すでに調査を終えた第41次調査区が一段低く存在したためである。第163-2図に図示したSK1010はSD750埋没後に掘り込まれた土坑である。南調査区ではSD750の検出標高は4.6m以下である。検出面の地山が古墳時代から縄紋時代の遺構・遺物包含層となっている。南調査区ではSD750の上面幅は北部で4.2m、南部で4.8mである。壁面は傾斜変換部がいくつかあり、掘り直して改修を繰り返したようである。底は中央部よりも若干北側の位置で段差があり、南が高く北が低くなっている。

出土遺物 南調査区のSD750から出土した骨がある。獣骨の歯の破片である。

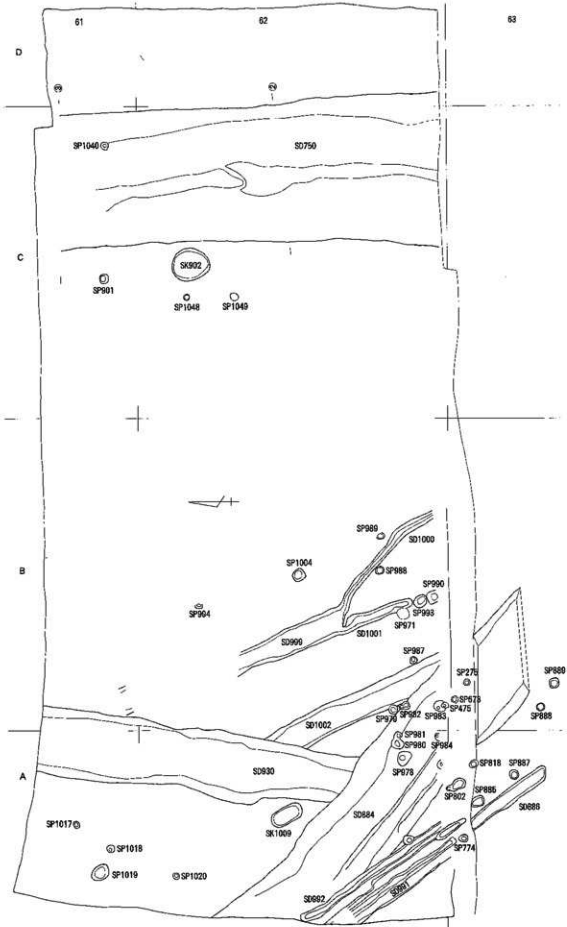
SK953 (第138図) A62区の標高4.65mで検出した土坑である。SE252の西側約1mに位置する。検出した標高と出土遺物からここで説明する。規模は長さ1.1m、幅35cm、深さ20cmの楕円形土坑である。

出土遺物 (第162図1) 1は口縁部がやや長めで、底部の厚さより若干器壁が薄い。底部には糸切り痕と板状瓦痕がつく。口径8.4cm、底径7.4cm、器高1.2cmである。14世紀代の遺物である。

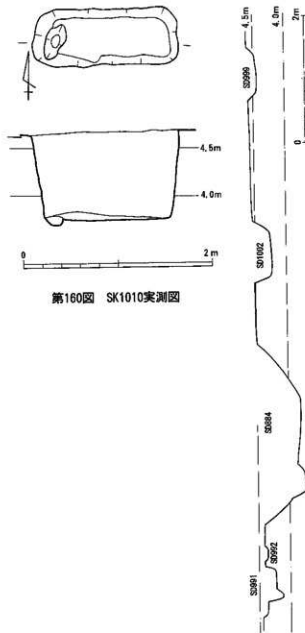
SP799 B61区にあり標高4.77mで検出した。

出土遺物 (第157図3) 3は陶器の甕である。口縁部上部を短く屈折させて頸部と区別する。

SK1010 (第160図) 位置は第138図に示した。C62区中央部にあり、SD750埋没後に掘られSK814の南西側に位置する平面長方形の土坑である。標高4.62mで検出した。西部にある柱穴類1個を除いた規模は東西に長さ1.57m、幅は3.2m、深さ94cmである。壁の角度が急で、床面は平らである。便所その他の機能をもった遺構と思われるが、性格は不明である。出土遺物がないので時期不明だが、検出標高からこの段階の可能性がある。



第158図 下層の中世遺構

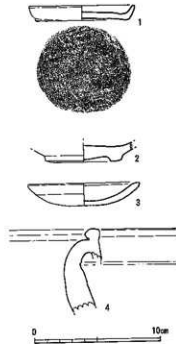


第160図 SK1010実測図

第161図 SD991～999横断面図

断した。

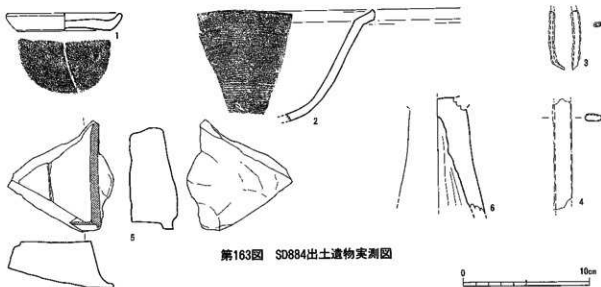
SP989 (第158・159図) B62区南部を北西から南東方向に湾曲して存在する小型の溝状遺構である。北部ではSD999と一体化している。床面の深さも同一であり、同時に存在した溝状遺構と思われる。年代の分かる出土遺物はない。



第162図 SP953他出土遺物実測図

SD999 (第158・159図) B62区にあり、北西から南東に向けた溝状遺構である。検出面の最高標高は4.56mで、底までの深さは15cm前後である。溝の走行方向は南北軸に対し、西に20度振れる。出土遺物はない。

SD1001 (第158・159図) B63区にあり、検出面の最高標高は4.62mである。SD930と分岐する位置からの長さは2.4mである。底までの深さは18cm前後で、



第163図 SD884出土遺物実測図

SD930の延長部であろう。

SD1002 (第158・159図)

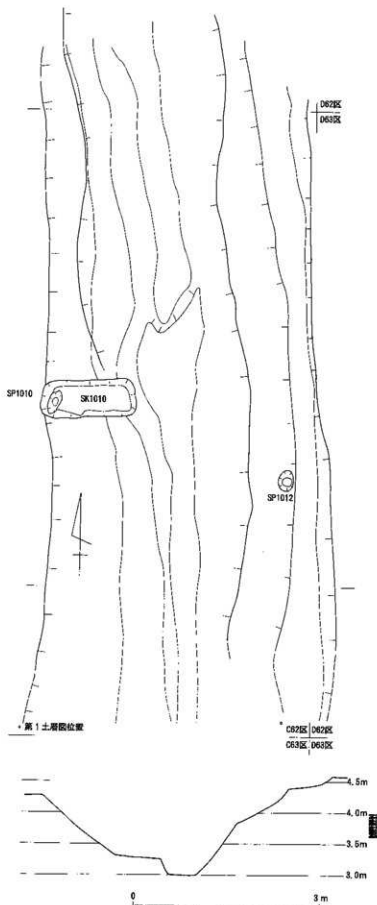
SD930に切れ、その東側にある溝状遺構である。検出面の最高標高は4.51mで、底までの深さは30cm前後である。出土遺物はない。溝の走行方向は、南北方向に対して北側が西に25度振れた方位である。東側のSD999と平衡に存在するので、ある時点の道路側溝かもしれない。二つの溝の間の平坦面の幅は1.9mである。

SD884 (第158・159・164図)

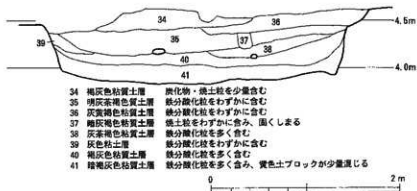
南調査区の南西部にあり、検出面の最高標高は4.55mである。輪郭は湾曲しているが、主軸を求めれば、南北軸に対して西側に49度振れている。上面幅は2.7m前後、深さは最大40cmである。床面まで下げると西側に偏ってもう一つの細い溝状遺構SD1016を検出した。第164図はSD884の北部(調査区の西壁面)の層序断面である。

出土遺物 (第163・166図 1～7)

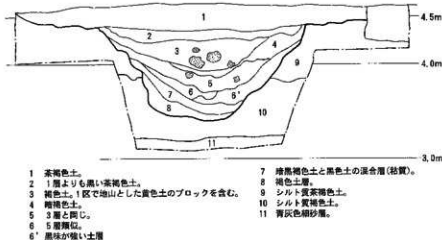
1は底部が厚く、口縁部が内湾気味に立つ土師器小皿である。口径9.2cm、底径7.2cm、器高1.4cmで、色調はにぶい橙色である。2は瓦質土器の銅である。同一個体の破片は道路部分の断面層序13層・21層からも



第163-2図 SD750実測図

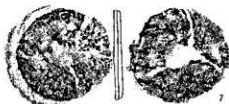


第164図 SD884北壁層序図



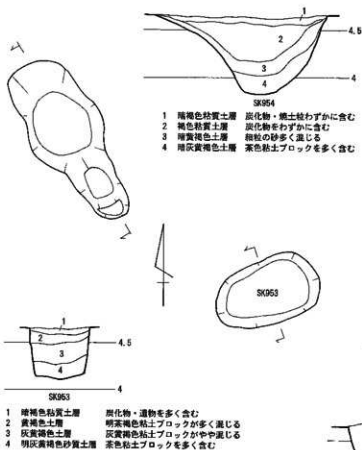
第165図 SD750層序図

出土した。内面の器面調整は刷毛目で、口縁上端から外面は煤が付着する。口縁部はやや長く折り返し、上端が突出する。3は青銅製品である。長さ4.6cm、幅4mm、重さ3.5gである。4は刀子状の青銅製品で、長さ6cm、幅1.3cm、重さ21.3gである。5は下関産赤間石に似た石材で、図の網部は鋸で切ったような箇所であり、ある程度切り込んだら折取っている。左上図の面は自然面である。反対側の面から側面は打撃剥離している。縦8.7cm、横8.3cm、重さ250.7gである。この種の加工痕ある石材は他にも出土している。6は弥生土器の高环脚部である。7は銘不詳の銅銭である。



第166図 SD884出土銭貨拓影

SD991・992(第158・159・161図) 南調査区南西部を平行して走る溝状遺構である。主軸方向は南北に対して西に35度振れる。二つの溝を通して断面を示した(第161図)ように、SD992は浅く、SD991は床面が三段に分かれている。3基の溝をほぼ同じ位置で作り直したわけである。西側のSD991の最高検出標高は4.46mで、東側のSD992は4.44mである。これらの南側の第36次調査区との境界付近の未調査部分を拡張した結果、同じ向きの溝SD886を検出した。検出標高は4.39mであり、底の標高は4.30mであり、SD991等よりも2.3cm低いだけである。



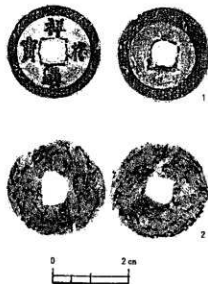
第167図 SK953・954実測図

出土遺物(第162図4) 4は常滑焼きの甕である。口縁部は上下に突出した帯状のものからなる。14世紀代の遺物である。

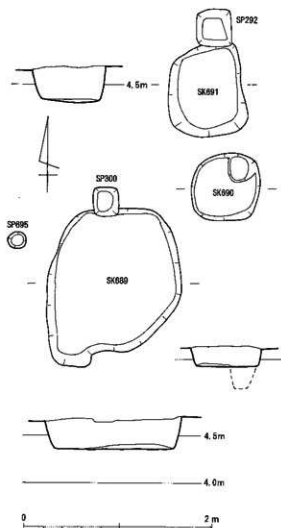
SK1009(第158・159図) SD930とSD884に挟まれた位置にある楕円形土坑である。検出した標高は4.52mで、土坑の規模は1.09m×54cm、深さは9cmである。出土遺物はない。

第5節 縄紋時代・弥生時代・古墳時代の調査

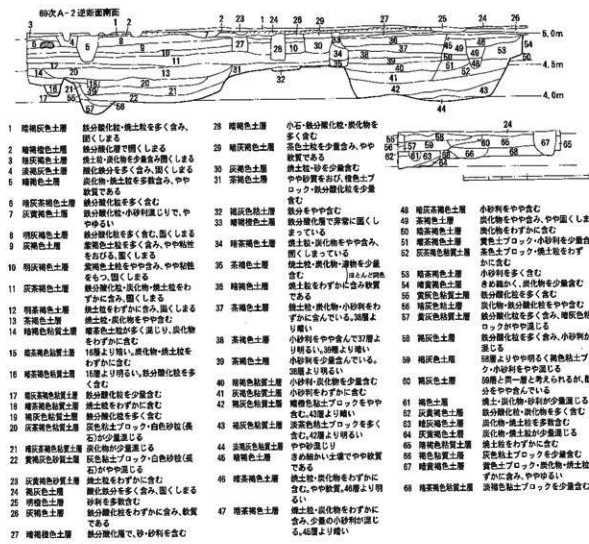
A調査区の南部でにおいて、中世の生活面の下層で縄紋時代・弥生時代・古墳時代の包含層を検出した。遺物の検出標高は4.3m～4.7mである(第172図では全ての遺物を投影させている)。遺物は第171図の遺構・遺物分布状態図に示すように、A調査区南部の中央部分で遺物がまばらに出土した。検出した遺



第168図 SK913出土銭貨拓影



第169図 SK689～691等実測図



第170図 南調査区道路断面図

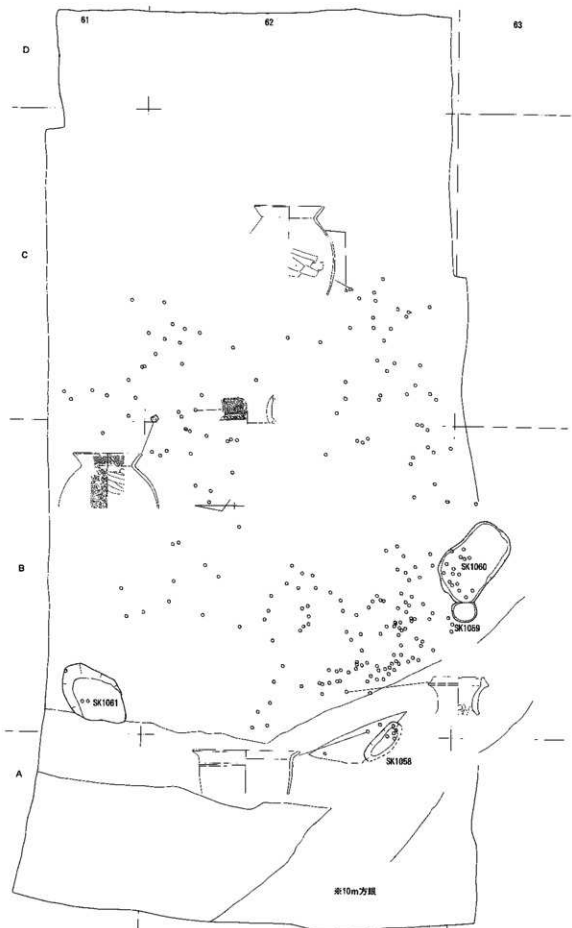
構は土坑4基である。遺構内から出土した遺物からみて、図化に耐えるものは存在しなかったが、遺構の時期はすべて弥生時代であり、縄紋時代に属する遺構は存在しない。

SK1058 (第175図) A62区南東部にある楕円形土坑である。長さ1.6m、幅0.5m、深さ0.25mを測る。南西部をSD884に切られていた。図化した遺物はない。

SK1059 (第176図) SK1058の南東側に位置し、B63区北部にある楕円形の土坑である。SK1060と重複する。長さ0.8m、幅0.65m、深さ0.2mを測る。図化した遺物はない。

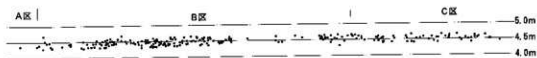
SK1060 (第176図) B63区北部にあり、SK1059と重複する隅丸長方形の土坑である。長さ2.7m、幅1.65m、深さ0.3mを測る。

包含層出土遺物 (第173図1~12) 1はSK1058の北東側から出土した弥生時代後期前葉の壘形土器である。口縁部は緩やかに外反し、胴上部に一条の突起がめぐる。器面はナデ調整している。2も弥生時代後期前葉前後の壘形土器である。内面は横方向に刷毛目調整している。外面は摩滅している

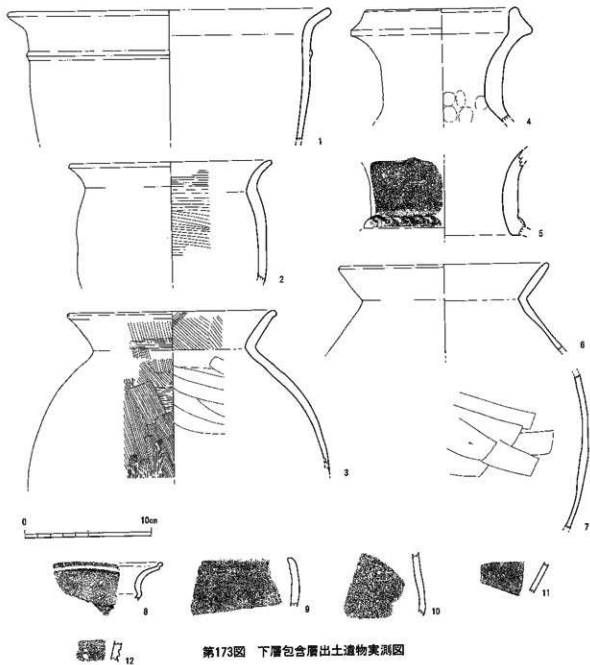


第171図 縄紋・弥生・古墳時代包含層の遺物・遺構

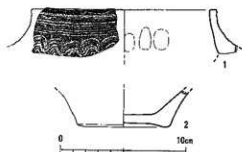
るが縦方向の刷毛目調整痕がわずかに残る。3はC62区北西端から出土した古墳時代前期の甕形土器である。外面と口縁部内面は刷毛目調整し、内面胴部はへら削りを加えて薄くしている。4はB62区西部から出土した弥生時代後期前葉の壺形土器である。二重口縁の発達初期の形を示す。器面調整はナデである。5はC61区北西部から出土した弥生時代後期の壺型土器頸部である。刻み目のある突帯一条がめぐる。6・7は同一個体の破片で、C62区から出土した古墳時代前期の甕形土器である。内面はへら削り、口縁部周辺は横方向のナデ調整。胴部外面は不詳。8～12は縄紋晩期の包含層出土。8・10～12はA2区、9はB61区で、前述の弥生土器等と共に出土した。



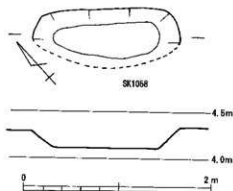
第172図 第171図の投影図



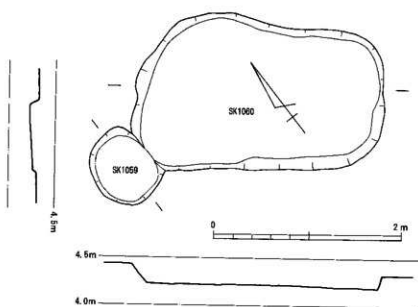
第173図 下層包含層出土遺物実測図



第174図 下層包含層等出土遺物実測図



第175図 SK1058実測図



第176図 SK1059・1060実測図

SK1061 (第177図) B61区南西部に位置する楕円形土坑である。西部をSD930に切られている。

SK205 (第圖) A62区にある土坑である。上層で検出した。

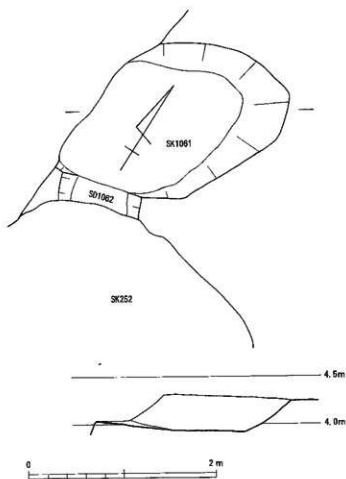
出土遺物 (第174図 1) 1は弥生時代後期の壺形土器である。複合口縁の部分にあたり、外面上部に横方向、その下に波状に柳掻き紋がつく。

SK208 (第圖) C62区にある平面形が楕円形の土坑である。上層で検出した遺構である。

出土遺物 (第174図 2) 2は深鉢底部である。器面調整はヘラナデしている。外底面が窪む特徴からみて縄紋時代後期末～晩期前葉の遺物である。

包含層出土遺物

遺構ではなく、包含層から出土した遺物を説明する。初めに番号をつけて採り上げた遺物を説明し、次に一括して採り上げた遺物を説明する。器種により掲載箇所が分かれるので①・②等で説明する。



第177図 SK1061実測図

土師器①

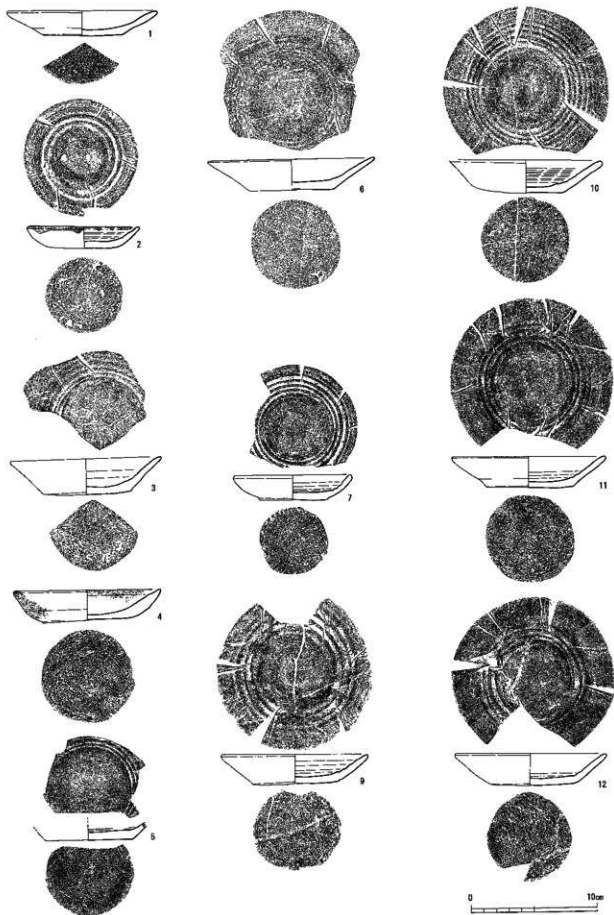
第178図1～12・第180図1～10・第181図1～29・第189図1～16は15世紀末葉、16世紀の土師器
 坏・皿類である。これらは在地系土師器と京都系土師器、さらに京都系土師器の影響を受け、それ
 を在地系技術で模倣製作したとみられる土師器の3種がある。A・B・Cに分けて記述する。A：
 内面にロクロ目を残す在地系土師器、B：在地系技術で京都系土師器を模倣した土器、C：京都系
 土師器である。Bの京都系土師器を模倣した土器の特徴は内面にロクロ目を残すこと、底部糸切り
 離しの痕跡をなで消そうとしていること、体部の傾きを強くすること、口縁部付近のロクロ目をな
 で消す傾向があること、口縁端部の内面に段差をつけるように細くすること等である。

第178図1～12 1～12は内面にロクロ目を残す土師器である。1は体部が強く傾斜し、一見京都系
 土師器を思わせるが、底部は糸切り離しであり、それをナデ消そうとしている。平坦な底部も明確
 に存在する。口径12.0cm、底径6.3cm、器高2.0cm、色調はにぶい黄橙色である。2は内面にロクロ
 目を残す在地系土師器小皿である。口縁上部の内外面に煤が付着しており、灯明皿として使われて
 いる。口径8.9cm、底径3.6cm、器高1.7cm、色調は橙色である。3は口縁部が薄くなりながら外湾す
 る。内面のロクロ目は口縁部付近ではナデ消されている。底部は糸切り離しを消している。口径12.0
 cm、底径4.0cm、器高2.8cm、色調は橙色である。4は底部糸切り離しのままで、体部は厚く、口縁
 部内面に段を作るように先端部が細くなっている。体部・口縁部の形は京都系土師器の形を踏襲し
 ている。口径11.6cm、底径7.0cm、器高2.4cmで、色調はにぶい橙色である。5は底部の糸切り痕を

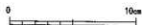
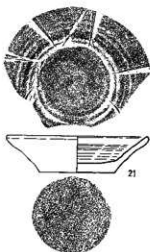
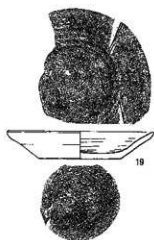
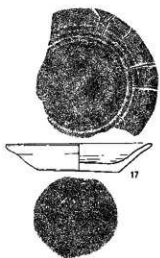
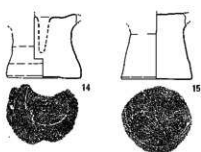
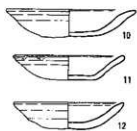
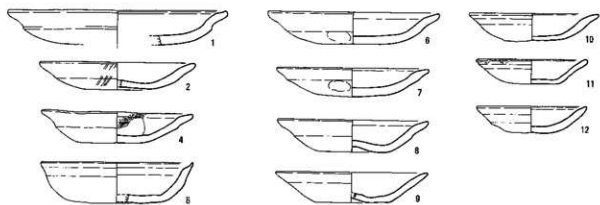
などで消し、内面にロクロ目が残る。底径6.8cm、色調は黄褐色である。6は底部が厚く、体部は薄くかつ直線的に外反する。糸切り痕をよくなで消している。内面のロクロ目は口縁部付近ではナデ消されている。底部と体部の区別は明瞭である。口径13.3cm、底径6.6cm、器高2.4cm、色調は橙色である。7は小皿である。口縁部は内湾し厚さは末端に至るまで均一である。内面には明瞭なロクロ目がつく。底部は糸切り難で、板状圧痕がつく。口径9.4cm、底径5.4cm、器高2.0cmで、色調はにぶい橙色である。8は底面が摩滅し、糸切り痕は観察できない。体部中位は薄く口縁部は厚くなっている。口径12.0cm、底径6.1cm、器高2.3cmで色調はにぶい黄褐色である。9は糸切り底で、内面には強くロクロ目が残る。底部から大きな角度で体部が開き、口縁部まで直線的である。口径11.6cm、底径6.8cm、器高2.3cmで、色調は褐色である。10は糸切り痕はなで消し気味で、内面のロクロ目を口縁部付近ではなで消している。体部から口縁部は直線的に広がり、器壁の厚さは均等である。口径12.0cm、底径4.5cm、器高2.6cmで、色調は暗褐色である。11は内面のロクロ目は口縁部付近ではナデ消されている。体部から口縁部は直線的に広がり、器壁の厚さは均等である。口径12.2cm、底径9cm、器高2.5cmで、色調はにぶい橙色である。12は内面のロクロ目は口縁部付近ではナデ消されている。底部から体部はなだらかに連続し、口縁部はやや外湾気味に広がり、器壁の厚さは均等である。底部の糸切り痕はなで消されている。

第179図 1~21 1~12は京都市系土師器である。3期のものが多いが、9・11等の薄手土器は2期にさかのぼる例であろう。1は口縁部強しく外湾し、体部との境にはっきりした稜線をもつ。口径17.4cm、器高2.2cmで色調はにぶい黄褐色である。2は底部がやや右上方に突出し、体部と口縁部が厚く断面はS字状に屈曲する。口径12.4cm、器高2.1cmで色調は褐色である。3も2に類似した器形である。口径10.4cm、器高2.2cmで色調は淡黄褐色である。4は口縁端部に平坦面があるように屈折し、内面には粘土板の接合痕が残る。底部は丸みを帯びる。内面には煤が付着し、灯明皿として使われたことが分かる。口径12.5cm、器高2.5cm、で色調はにぶい橙色である。5は口径と底径の差が少なく、体部の傾きも弱い。口縁端部は内側が急激に細まり、外方に突出する。口径12.1cm、器高3.0cmで色調は淡黄色である。6は器壁の厚さが均等で、口縁部はやや長い。口径13.6cm、器高2.5cmで色調はにぶい橙色である。7は口縁部が短く、底部は丸みを帯びる。口径12.0cm、器高2.3cmで色調はにぶい橙色である。8は見込み部分が上方に突出し、口縁部はやや外湾し、器壁の厚みは均等である。口径12.0cm、器高2.5cmで色調は褐黄色である。9も見込み部が上方に突出するもので、比較的薄手である。体部は直線的に外反し、口縁部との違いは強調されない。口径12.0cm、器高2.4cmで色調は灰黄褐色である。10~12は小型の製品である。10は底部よりも体部・口縁部が厚く、口縁部は緩やかに外湾する。口径10.2cm、器高2.1cmで色調は淡黄色である。11は全体的に薄手で、口縁部は外反する。口縁部には煤が付着し灯明皿である。口径8.8cm、器高1.9cmで色調は淡黄色である。12は厚手で、体部は内湾し、口縁上部の内側に溝が廻る。口径8.7cm、器高2.1cmである。14~16は底部を糸切り難した燭台である。14は口縁部に該当する部分が欠損するが本来は16のような器形である。上部から下に向かって貫通しない穴が設けられ、器高4.8cm、底径5.6cmで色調はにぶい褐色である。15は現存部分には穴が空いていないが、欠損部にあるのであろう。底径5.4cm、器高5.2cmで色調はにぶい橙色である。16は1/2残存する場合である。口径7.0cm、底径5.6cm、器高6.6cmで色調は淡褐色である。

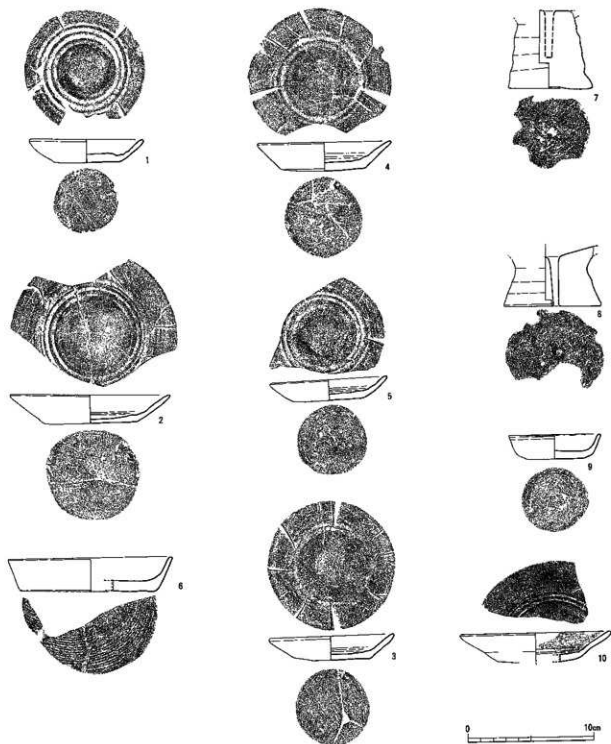
17~19・22は京都市系土師器を在地技術で模倣したことが顕著なものである。17は底部が厚いのに対し、体部・口縁部は薄く、口縁部が外反する。底部の糸切り痕はなで消され、内面のロクロ目は口縁部付近をなで消している。口径11.6cm、底径6.4cm、器高2.2cmで色調は褐色である。18は糸切り痕をなで消し、内面のロクロ目は口縁部付近をなで消す。底部と体部の境は滑らかに移行し、底部・体部の厚みに顕著な差はない。口径10.8cm、底径6.4cm、器高1.9cmで色調は褐色である。19は



第178図 包含層出土遺物実測図①



第179圖 包含層出土遺物実測図②



第180図 包含層出土遺物実測図③

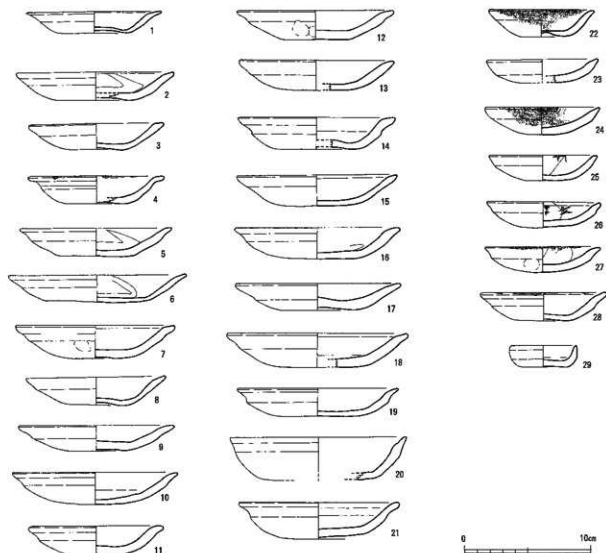
器壁の厚さが均一で、糸切り痕はなで消され、口縁部は外反する。口径11.6cm、底径6.4cm、器高2.2cmで色調は橙色である。20は内面にロクロ目を残す小皿である。糸切りの底部は逆台形に張り出し、口縁部が内湾気味に立ち上がる。内面は半球状をなし、内面に煤が付着し、灯明皿として使われている。口径6.2cm、底径5.0cm、器高1.9cmで色調は濃い黄橙色である。21は糸切り痕をなで消し、体部・口縁部が外湾する在地系土師器である。器壁は底部が厚く、体部・口縁部は均一である。口

径11.2cm、底径5.9cm、器高2.9cmで色調は橙色である。22は3期の京都系土師器である。底部よりも体部が厚く、口縁部が内湾気味に立ち上がる。口径11.4cm、底径6.0cm、器高2.2cmで色調は淡黄色である。

第180図1~10 1~5・10は在地系技術で京都系土師器を模倣したもの、6・9は在地系土師器杯、7・8は燗台である。1は底部が内側に盛り上がり厚く、体部・口縁部が均一な厚さで直線的に外反する。底部の一切り痕は明瞭には残らず、板状圧痕がある。口径9.0cm、底径4.5cm、器高2.0cmである。2は底部糸切り痕をなで消し、体部・口縁部が直線的に外反する環である。体部と底部の移行部は明瞭な稜線で区別されている。口径12.6cm、底径6.8cm、器高2.2cmで色調は淡黄褐色である。3は底部の糸切り痕がなで消され、器壁は均一な厚さで、体部が直線的に外反する。口径9.8cm、底径6.0cm、器高1.9cmで色調は橙色である。4は底部と体部の境界が明瞭に区別され、口縁部は直線的に外反する。ロクロ目は口縁部付近をなで消している。口径10.6cm、底径3.0cm、器高2.3cmで色調は橙色である。5は口径と底径の差が少ない製品で、器壁は底部が厚く、体部から口縁部はやや内湾気味である。口径9.2cm、底径3.6cm、器高1.7cmで色調は淡黄褐色である。6は14世紀代の上師器杯である。口径13.0cm、底径10.6cm、器高2.6cmで色調は褐色である。7・8は土師器の燗台である。7は回転台を使用して脚部を連続的に上げて痕跡が溝状につき、底部は糸切り離しである。底径6.6cm、現状で器高6.2cmで、色調はにぶい褐色である。8は脚部が短く、台形状に張り出す。上面は中央に向かって窪み、中央部の穴は貫通している。口径7.7cm、器高は現状で4.6cmで、色調は褐色である。渠内の燗台については小柳和宏の分類があり(小柳1994)、14世紀から16世紀を1~6類に分類している。69次調査区でみられる燗台の大部分は「底部が極端に厚く、口縁部の伸びが小さい形態のもの」であり、これらはすべて小柳の6類に分類される。したがって、ほとんどの燗台は16世紀に比定できる。ただ、第180図8は脚部が薄く小柳分類5類に該当し15世紀前半前後まで遡る例である。

9は糸切り底で体部へ緩やかに続く小皿である。口縁部に煤が付着した灯明皿である。口径7.2cm、底径4.4cm、器高1.9cmで、色調は明褐色である。10は内面のロクロ目の口縁部付近をなで消した京都系土師器系土師器を模倣した環である。口径12.3cm、色調は淡褐色である。

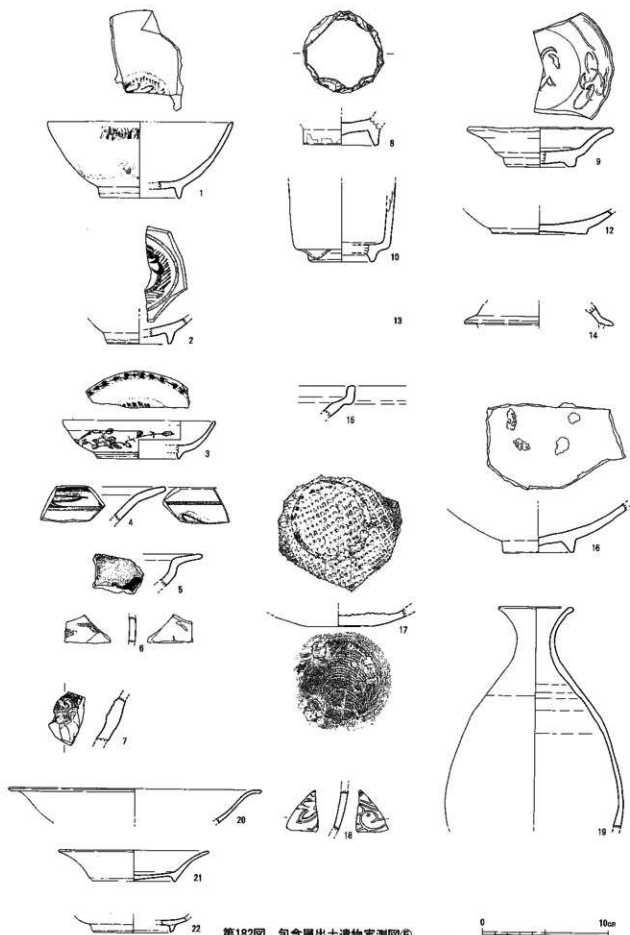
(**第181図1~29**) 1~29は京都系土師器である。1は底部が極端に薄く、底面は上に窪んでいる。体部は相対的に厚く、口縁部は外湾し尖る。口径10.7cm、器高1.7cmで、色調は灰黒色である。2は3期で器壁はほぼ同じ厚さで体部と口縁部の差は目立たない。内面に粘土接合痕が残る。口径12.4cm、器高2.2cmで色調は褐色である。3は口縁部が内側に厚く、口径10.6cm、器高2.1cmで色調は淡黄褐色である。4は口縁部が強く外湾し、体部との区別は明瞭である。口径10.7cm、器高2.3cmで色調は淡黄色である。口縁部に煤が付着した灯明皿である。5は口縁部が薄く外湾し、内面に粘土接合痕が残る。口径12.0cm、器高2.2cmで色調は淡黄褐色である。6は器壁が薄く、内面に粘土接合痕が残る。口径14.1cm、器高2.2cmで色調は黄褐色である。7は器壁が均等に厚く、口縁部端の内面に平坦面が廻る。口径12.6cm、器高2.1cmで色調はにぶい褐色である。8は底部中央が上方に窪み、口縁部内側が厚い。口径11.0cm、器高2.2cmで色調は暗褐色である。9は浅い器形で器壁は均等に厚い。口径12.4cm、器高2.0cmで色調は黄褐色である。10は内面の断面が丸く、口縁部外面は段差がある。口径13.1cm、器高2.4cmで色調は淡褐色である。11は小型で器壁は均等に厚い。口径10.5cm、器高2.3cmで色調は褐色である。12は口縁部が細く外方に突き出す。口径12.4cm、器高2.4cmで色調は黄褐色である。13は器壁が均等に厚く、口径12.4cm、器高2.4cmで色調はにぶい黄褐色である。14は体部が急角度で立ち、口縁部との境界に稜線がある。口径10.4cm、器高3.3cmで色調は淡黄褐色である。15は器壁が薄く、口縁部だけがやや厚くなる。口径12.8cm、器高2.4cmで、色調は赤褐色である。16は器壁が厚く、口縁部内面が屈曲する。口径13.0cm、器高2.5cmで色調は淡黄褐色である。17は口縁部



第181図 包含層出土遺物実測図④

が細く外反する。口径13.2cm、器高2.1cmで色調は褐色である。18は口縁部が短く外湾し、細くなる。口径14.4cm、器高2.2cmで色調はにぶい黄褐色である。19は浅い杯で、口縁部が明瞭に屈曲する。口径12.8cm、器高2.2cmで色調は淡褐色である。20は体部の立ち上がり方が急傾斜で、口縁部が急に細くなる。口径14.0cm、器高はほぼ3.4cmと深い。色調は淡黄褐色である。21は器壁の厚さが底部から口縁部まで均等で、若干口縁部を外湾させている。口径12.7cm、器高2.9cm。11と22～28は小口縁の土器である。22は内外面の口縁部を中心に煤が付着した灯明皿である。底部外周中央は上方に強く窪んで器壁が薄い。口径8.4cm、器高2.2cmで色調は橙色である。23は口径8.8cm、器高1.9cmで色調は灰黄褐色である。24は内外面の口縁部を中心に煤が付着した灯明皿である。口径9.2cm、器高2.2cmで色調は褐色である。25は口縁部の一部に煤が付着する。口径8.6cm、器高2.0cmで色調はにぶい黄褐色である。26も内面に一部煤が付着する。口径9.0cm、器高2.0cmで色調は淡黄褐色である。27・28は口縁部内外面に煤が付着する。口径9.2cm、器高2.0cmで色調はにぶい黄褐色である。28は口径10.0cm、器高2.2cmで色調は淡黄褐色である。29は小型品で口径5.9cm、器高1.7cmで色調は褐黄色である。

京都系土師器の時期は1・22が1期、8・9が2期、2～5・7・10～21・23・29が3期である。
※小柳和宏1994「豊後国田原別符の調査Ⅰ」大田村文化財調査報告書 第1集



第182图 包含层出土物实测图⑤

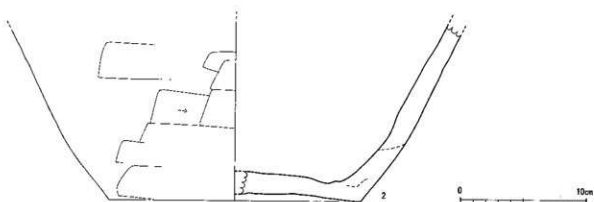
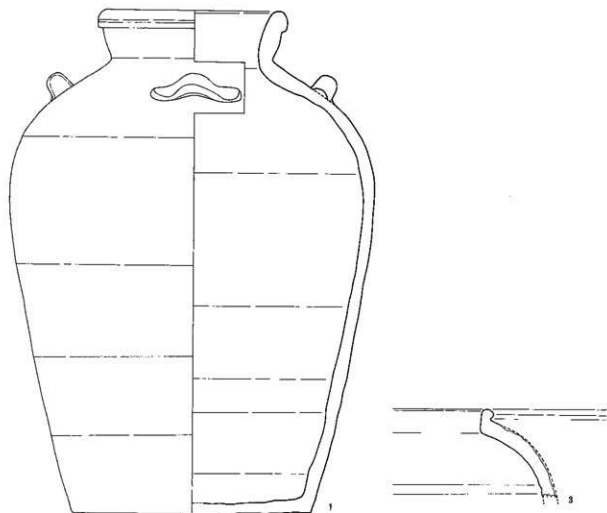
陶磁器①

第182図～第184図・第190図～第192図・第200図は陶磁器である。16世紀の遺物が多いが一部にそれ以前のものがみられる。ここでは第182図を説明する。

(第182図1～22) 1は中国漳州窯系の青花碗で口径14.5cm、底径6.4cm、器高6.0cmである。2も漳州窯系の青花碗で見込みは下に窪み底径は5.0cmである。3は中国景德鎮窯系の青花皿E群で、口径12.0cm、底径6.4cm、器高3.0cmである。以上の1～3は高台下半部だけが無釉。4は景德鎮窯系の青花皿F群である。5～7は華南三彩で、5は盤の口縁部付近で釉は緑色である。6は両面に緑釉が掛かる。7は型作りの破片で、外面に立体的な唐草がある。8は中国製青磁碗の底部から高台部分の破片である。疊付部だけが無釉。底径5.8cm。上から見て円形になるように底部を周辺から打ち欠いている。9は中国製青磁紋花皿で、口径8.1cm、底径5.0cm、器高3.1cmである。10は青磁香炉の口縁部を欠く部分である。疊付部以外は施釉され、底部外面に一カ所三角形の脚がつく。胴部最大径は8.3cm、底径5.0cmである。12は中国宋代の越州窯青磁碗である。削り出された外面は平坦で、中央部がやや窪む。施釉は全面に施されている。底径7.5cm。13は青磁皿口縁部である。内面に縦方向の連続的な窪みが並び、釉の色調は緑灰色である。14は青磁蓋ものの蓋である。最大径は12.0cmである。15は青磁皿であろう。16は朝鮮製陶器碗で色調は白、釉内に気泡があり、全面に施釉されている。見込みに四ヶ所、重ね焼き時の砂目積み痕が残る。17は瀬戸美濃製の陶器皿である。内面に格子状の刻みがあり、中央部に円形の重ね焼き痕がつく。底部は糸切り難しである。底径6.0cm。18は朝鮮王朝高麗青磁碗である。紋様は沈線内に白・黒粘土を入れ表現している。内面は花紋で、黒と白が同じ程度に使われ、外面は黒は破片上端部に一ヶ所だけで、他は白色である。19は朝鮮製陶器の舟徳利で底部を欠く。口径5.9cm、現状の器高は17.0cm、胴部最大径は14.0cmである。第75次調査区のS381からも破片が出土した。20は白磁皿である。口径20.0cm。21は白磁皿E2群で、口径11.8cm、底径6.6cm。疊付付近は無釉。22は白磁皿の底部である。疊付付近は無釉。底径6.0cm。

(第183図1～3) 1～3は備前焼陶器である。1は口縁部が外傾してつき、口縁端部は外面下部に稜線をもってやや厚い。体部は最大径が上部にあり、体部下端は高さ10cmほどへう削りの後で消している。胴部に粘土紐を貼り付けて耳としている。口縁部内面から外面の最大径までと内底面には自然釉が掛かる。口径14.2cm、器高39.6cm、底径19.0cm、最大径29.0cmである。中世4期(15世紀前半～15世紀第2四半期)から中世5期(15世紀第3四半期～15世紀末)の遺物である。2は備前焼の底部である。底径20.0cm。同一個体の破片は第69次A調査区と第75次調査区S171からも出土した。3は極端に短い口縁部がほぼ垂直に立ち、体部は肩しかないが丸みを帯びている。外面は二次的被熱のため弾けている。中世6期(16世紀初頭から16世紀第3四半期)の小型壺である。

(第184図1～5) 1～5は備前焼陶器である。1～4は播鉢で、1は9条単位の掃り目をもつ小型品で口径19.8cm、2は11条単位の掃り目を放射状に9ヶ所入れている。口縁端部は外側に向かって細まる。口径22.7cm、底径11.0cm、器高10.5cmである。3は口縁部が内抱え気味に立ち、上端は尖る。11条単位の掃り目をもつ。口径28.2cm、底径11.0cm、器高10.6cmである。4は口縁部が短く外上方に尖る。10条単位の掃り目を放射状に施した後、斜め方向の掃り目を加えている。5は徳利である。1は中世6期でも古い方、2・3は新しい方である。4は6期b(ほぼ16世紀第3四半期頃)である。

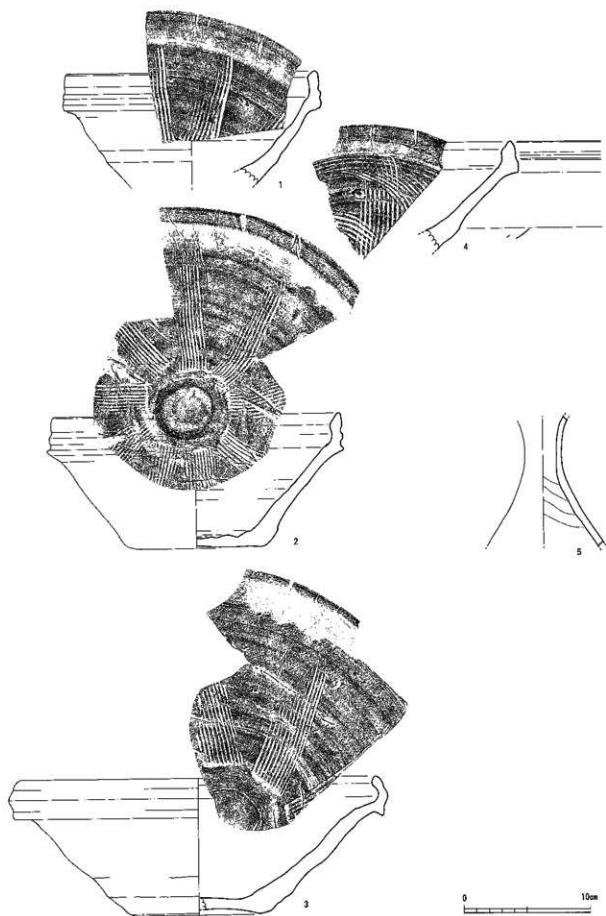


第183図 包含層出土遺物実測図⑥

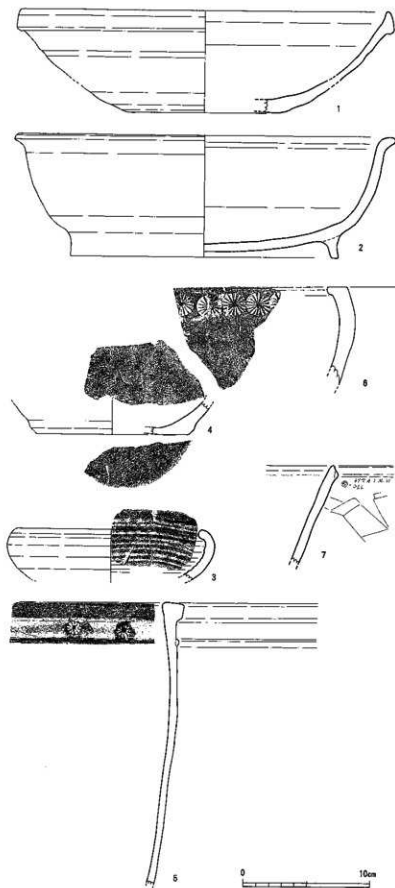
瓦質土器類

第185図1～7・第198図1～9は瓦質土器である。先ず第185図について説明する。

(第185図1) 1は東播磨系須恵器のこね鉢である。口縁部が断面三角形をなし、外側で段差がつく。



第184図 包含層出土遺物実測図⑦



第185図 包含層出土遺物実測図④

器面調整は回転などによる。色調は灰白色である。口径29.3cm、底径11.0cm、器高8.0cmに復元できた。2～7は瓦質土器である。2は高台を貼り付けた鉢で、口縁部は強く外湾する。口径30.0cm、底径23.0cm、器高9.5cm。3は口縁部が内湾する鉢で、内面にはロクロ目が強く残る。色調は橙色である。口径14.4cm。4は鉢の底部で底径12.0cm。5・6は火鉢で菊花紋の刻印がある。5は円筒形に近い器形の火鉢で、口縁上部は断面四角で2cmほど下に一条の貼付け突帯が廻る。6は器壁が厚く、上部が内湾する器形で、器面は丁寧な調整が行われている。7は体部が直線的で、口縁部外側に一条の突帯をつけた鉢である。器面調整は外面が板状工具による削りであり、口縁部内外と内面は横方向の調整である。

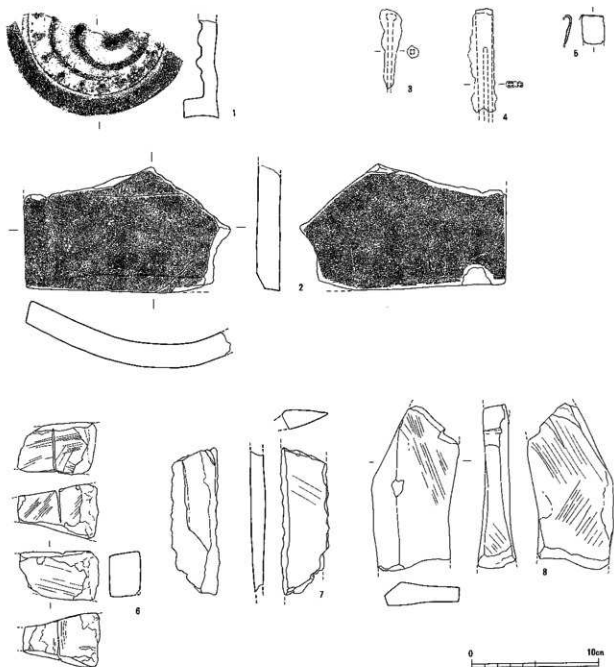
瓦①

(第186図1・2)

1は巴紋を中心にもち、周囲に列点を巡らす軒先瓦である。色調は灰褐色を呈する。2は平瓦。外面である左図下側は幅1.5cmほどへら削りして斜めに削り取っている。

金属・石製品

(第186図3～8) 3は鉄製の釘である。断面は四角形である。現状で長さ6.1cm、重さ15.8gである。4は鉄製品で、図上部は板状、途中から二俣に分かれる。長さ8.6cm、幅1.1cm、重さ20.2gである。5は青銅の板状製品である。幅1.7cmで厚さ1mm強の板を折り曲げたもの。重さ1.8g。6は天草砂岩製



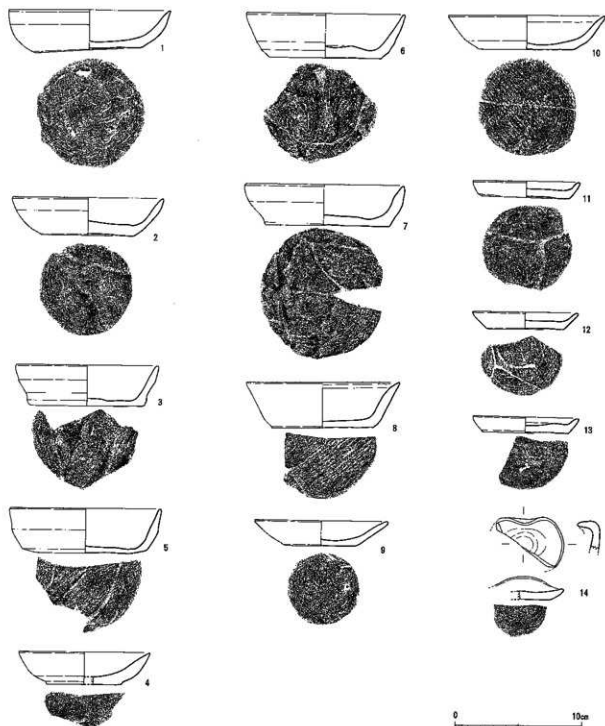
第186図 包含層出土遺物実測図⑨

の砥石で、本来長い砥石の半分である。三面に連続的な溝が廻る。長方形断面の四面を作業面にしている。長さ6.2cm、幅3.6cm。7は結晶片岩製の砥石で断面三角で、二面を作業面とする。8は天草砂岩製の砥石で、平たく長い製品の一端を欠損する。長さ24.9cm、幅5.9cm、重さ245.3gである。

土師器②

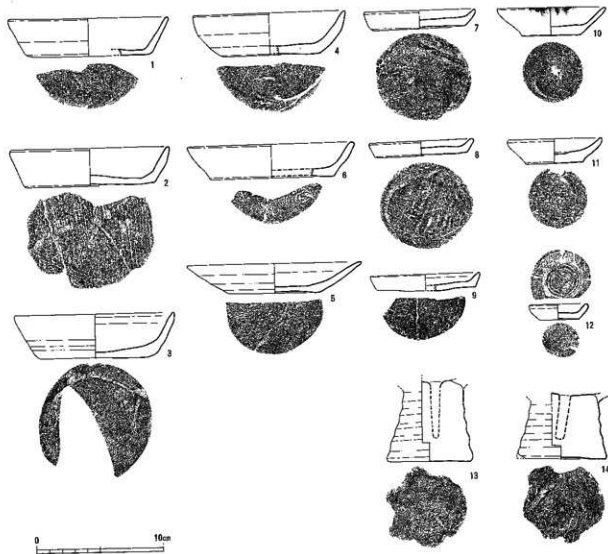
第187～189図の土師器について説明する。

(第187図 1～14) 1～3・5～8は坏である。1は体部の中位が厚く、口縁部先端に向かって尖る。口径12.8cm、底径8.4cm、器高3.5cmで色調は淡黄色である。2は底部が厚く体部が薄く、口縁部はやや厚くなる土器である。体部の傾斜は1同様緩やかである。口径12.0cm、底径7.2cm、器高3.0cmで色調はにぶい橙色である。1・2は14世紀前葉に属す。3は体部の傾斜が急で口径と底径の差



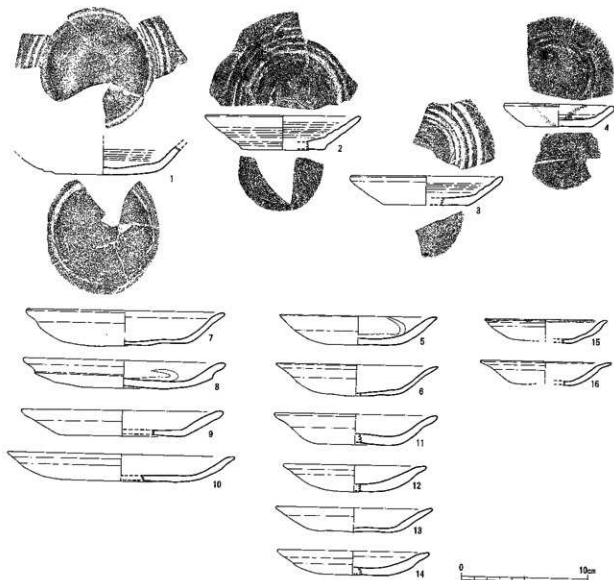
第187図 包含層出土遺物実測図④

が少ない。口径11.4cm、底径9.1cm、器高3.7cmで色調はにぶい橙色である。5は体部中位が厚い特徴をもち、口径と底径の差が少ない。口径12.0cm、底径9.8cm、器高3.5cmで、色調は黄褐色である。6は底部が厚く体部の立ち上がり部は緩やかで、そこから口縁部まで直線的に外反する。14世紀末～15世紀前葉に属す。7は体部中位が厚い特徴をもち、口径と底径の差が少ない。口径12.7cm、底径9.9cm、器高3.2cmで、色調はにぶい橙色である。以上の3～7は14世紀中葉～後葉の土器である。8は底部の器壁が薄く、体部は直線的に外反し口縁端部に至って内側が薄くなる。底部は糸切り後、板状止痕がつく。口径12.2cm、底径8.0cm、器高3.6cmで、色調はにぶい黄褐色を呈する。14世紀末



第188図 包含層出土遺物実測図①

～15世紀前葉の遺物である。9は糸切り底で体部が直線的に緩やかな傾斜で外反する。口径10.6cm、底径5.4cm、器高2.0cmで色調は橙色である。11～13は小皿である。口径・底径・器高・色調は次のとおりである。11(8.4cm・7.0cm・1.3cm・にぶい橙色)、12(8.4cm・6.2cm・1.4cm・にぶい黄橙色)、13(8.4cm・6.8cm・1.3cm・にぶい橙色)。14は糸切り底の小皿の相対する口縁部二ヵ所を内側に折り曲げた箸置きである。橙色を呈する。4は糸切り底をなで消し、内面を半球形に仕上げ、口縁端部を尖らしている。体部・口縁部は回転で調整している。口径10.4cm、底径6.0cm、器高2.6cmで、色調は黄褐色である。10は底部を糸切りし、その後板状圧痕がつく。体部・口縁部は回転で調整している。体部の傾斜は緩やかで、見込み部とは滑らかに連続する。口縁内面に稜線が廻る。口径12.4cm、底径7.5cm、器高2.2cmで色調はにぶい黄褐色である。4・10は在地系上器器制作者が京都系上器器を模倣した七器である。



第189図 包含層出土遺物実測図⑩

(第188図1~14) 1~4・6は坏である。1は体部が直線的に外反し、口径と底径の差が少ない。口径12.7cm、底径10.0cm、器高3.0cmで色調は灰褐色である。2は体部中位が厚い特徴をもつ。底部には板状圧痕がつく。口径12.6cm、底径10.1cm、器高3.0cmで色調は淡黄色である。3は底部と体部の境界あたりが厚く、体部は直線的に伸びる。底部には糸切り痕と板状圧痕がつく。4は体部中位から上が尖り、体部外面観が内湾気味である。5は口径と底径の差が大きい器形で、長く薄い体部が直線的に傾斜する。底部には糸切り痕と板状圧痕がつく。胎土に赤茶色土粒を多量に含む。口径13.8cm、底径6.4cm、器高2.3cmで色調は橙色である。6は体部の下部が薄く上部が厚くなる七器で、口径と底径の差が小さい。口径13.2cm、底径9.7cm、器高2.6cmで、色調は淡黄褐色である。7~9は器高が低く体部が短い小皿である。7・8は底部に糸切り痕と板状圧痕がつく。口径・底径・器高・色調は次のとおりである。7(8.8cm・7.5cm・1.4cm・橙色)、8(8.3cm・7.3cm・1.3cm・濃い橙色)、9(8.7cm・3.0cm・1.3cm・淡黄色)。10~12は7等よりも新しい時期の小皿である。10は底部が厚く、体部が薄い土器で、体部が直線的に外反する。口縁部両面に煤が付着した灯明皿である。口径8.7cm、底径4.6cm、器高2.2cmで、色調は橙色である。11は底部が厚く、体部から口縁部が内湾

気味に立ち上がる。口径7.6cm、底径4.6cm、器高1.9cmで、色調は橙色である。12は内面にロクロ目を残す。口径4.6cm、底径2.8cm、器高1.2cmで、色調は橙色である。13・14は濁合である。脚部は回転台を使用して仕上げた跡が外面に渦巻き状に残る。13は上面まで残り、器高6.5cm、底径6.4cmで色調はにぶい橙色である。14は13に比べて低く、器高5.1cm、底径7.0cmで、色調は淡黄色である。

第188図は14世紀・15世紀の土師器である。1は15世紀末～15世紀前葉、2・4・6は14世紀前葉、3は14世紀初頭、5・10・11は15世紀後葉、12は16世紀第1四半期頃の遺物である。

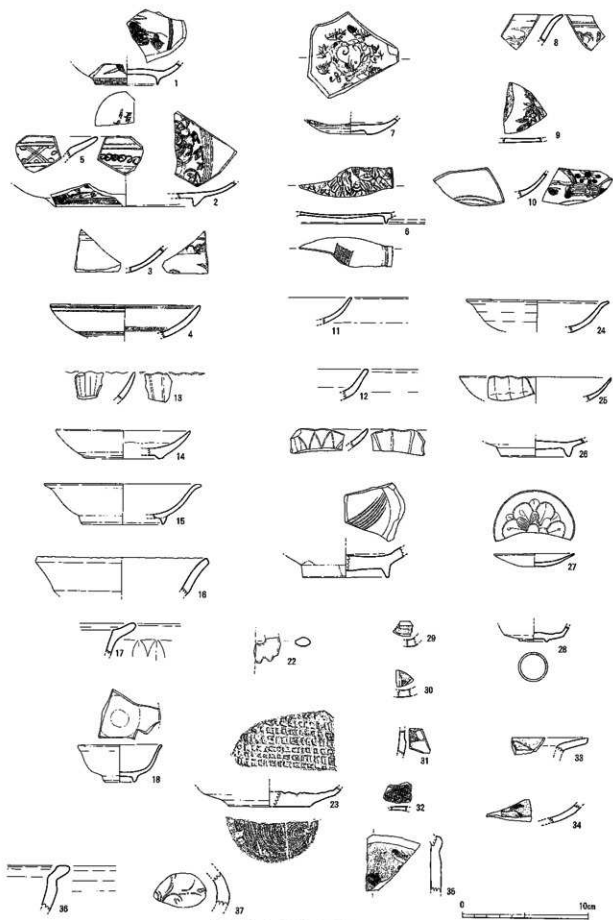
(第189図1～16) 1～4は内面にロクロ目を残す土器である。1は底部に糸切り痕と板状圧痕がつく。口縁部を欠くが、底部から体部への移行部分が滑らかであり、京都系土師器模倣土器であろう。口径13cm以上、底径7.4cmで色調は淡黄色である。2は底部に糸切り痕と板状圧痕があり、体部は直線的に外反する。口径12.3cm、底径6.0cm、器高2.7cmで、色調は橙色である。3は2と似る。口径12.0cm、底径6.7cm、器高2.3cmで、色調は褐灰色である。4は線状の煤痕が両面につく灯明皿である。底部は糸切り痕だけである。口径8.8cm、底径5.0cm、器高1.8cmで、色調は黄褐色である。

5～16は京都系土師器である。ここには全体的に薄手のものが多い。5は内面に粘土板の接合痕が残り、体部と口縁部の境界は明瞭ではない。口径12.4cm、器高2.3cmで色調は淡黄褐色である。6は器壁が特に薄く、口径12.8cm、器高2.4cmで、色調は淡黄色である。7は器壁が薄く口縁部内面に弱い稜線がつくように口縁上部を外側に折り曲げている。底部は下にやや突出している。口径15.8cm、器高2.3cmで、色調は黄褐色である。8は口縁部を強く外湾させ、器高の低い土器である。内面には粘土板の接合痕が残る。口径6.0cm、器高2.2cmで色調は淡黄褐色である。9は底部の器壁が薄く、体部・口縁部が厚い土器である。底部も体部も直線的であるのが特徴となっている。口径16.0cm、器高2.0cmで、色調は淡黄褐色である。10は底部は直線的で、そこから連続的に滑らかに体部へ移行する。口径18.0cm、器高2.1cmで、色調は淡黄褐色である。11は底部が上方に膨らみ、体部中位がやや厚くなる特徴がある。口径11.2cm、器高1.8cmで、色調は橙色である。12は全体に器壁が厚く、底部が下方にふくらむ器形である。口縁部は横方向のなでにより、体部と区別する。口径11.3cm、器高2.1cmで、色調は淡黄褐色である。13は器壁が薄く、直線的な底部からやや厚手の体部が直線的に外反する。口径12.4cm、器高1.9cmで、色調は淡黄褐色である。14は器壁がやや厚く、底部は下方にふくらむ。口径11.9cm、器高1.9cmで、色調は淡褐色である。15は器壁が薄く、底部は下方にふくらむ。口径9.6cm、器高1.8cmで、色調は淡褐色である。16は器壁が薄く底部中央は右上方に膨らみ気味で、口縁部は外側に折れ曲がる。口径10.3cm、器高1.8cmで、色調は淡褐色である。

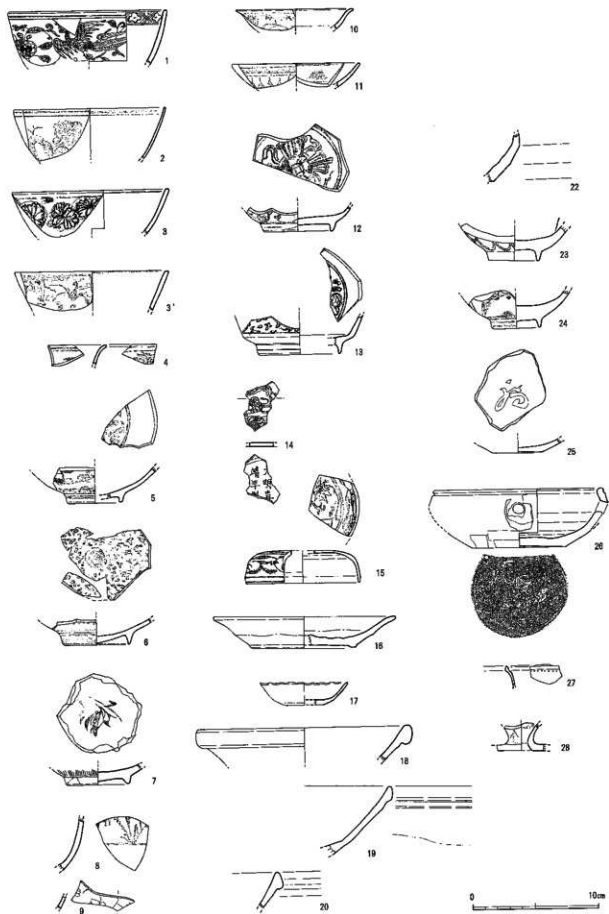
陶磁器②

第190図～第193図について説明する。

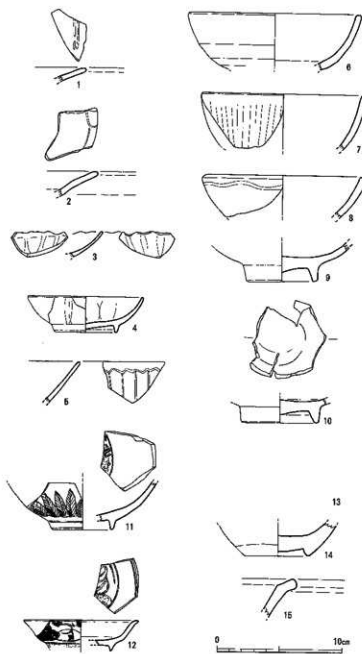
(第190図1～37) 1～10は中国製青花である。1は中国製景德鎮窯系の龍頭芯碗で、見込みに人物が描かれている。底径5.0cmで、畳付だけが無釉である。2は景德鎮窯系皿で畳付周辺が露胎、底径は11.0cmである。3は中国製の五彩皿である。4は漳州窯系の皿で、口径11.8cm。6は景德鎮窯系皿で精巧に描かれている。7は景德鎮窯系の皿C群で、底径2.5cm。8は五彩碗。9は景德鎮窯系皿の見込み部分の破片である。10は景德鎮窯系碗の底部破片。11は白磁皿で、外面の下部1cmほどが露胎。12・13は青磁皿、14は生焼けの厚手の白磁皿で、見込みに蛇の目輪刺ぎがあり、外面は高台周辺は露胎である。口径10.6cm、底径5.6cm、器高2.3cm。15は白磁皿である。畳付周辺は露胎。口径12.4cm、底径6.4cm、器高3.2cm。16は青磁皿で口径13.4cm。釉に貫入が入る。17は青磁鉢で、外面に筋連弁紋をもち、貫入がある。18は白磁猪口で、見込みに蛇の目輪刺ぎがあり、畳付周辺も露胎である。口径6.6cm、底径2.3cm、器高2.9cm。20は青磁菊花皿で、外面は蓮弁紋。21は龍泉窯系青



第190圖 包含層出土遺物実測図⑬



第191图 包含層出土遺物実測図⑩



第192図 包含層出土遺物実測図⑤

gである。2は上下が錆に覆われているので、完全であるかは不明。現存の長さは3.5cm、軸の幅が2mm、重さが2.7gである。3は直角に曲がった釘である。まっすぐであれば長さは9cmである。軸の幅は長方形で、3mm×5mmで、重さは8.1gである。4は頭部を欠損し、湾曲していない。長さ5.2cm、軸の幅は2mm重さは2.5gである。5は頭部が環状になり、先端近くで直角に曲がっている。現存の長さは7.3cmだが、まっすぐだとすれば長さは8.8cmである。軸の断面はほぼ四角で幅4mm、重さ8.1gである。6は先端が湾曲している。頭部は錆に覆われ不詳である。長さ4.2cm、軸幅2mm、重さ4.8gである。7は鉄製の板状製品で、片側に刃があり、幅1.4cmと狭いので刀子であろう。長さ5.5cm、重さ8.9gである。8・12は青銅製の厚さ1mm前後の板状製品である。容器の破片か。8は縦1.5cm、横2.1cm、重さ1.2gである。12は縦1.3cm、横2.0cm、重さ0.6gである。9は鉄製品で、頭部は扁平、軸部断面は長方形である。全体がS字状に屈曲している。長さ6.4cm、軸部の幅は1.1

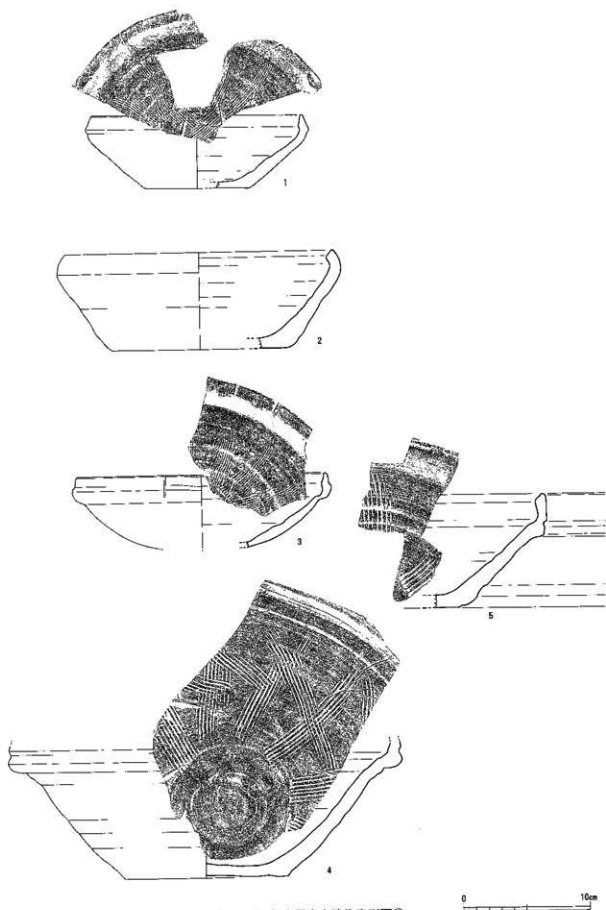
磁耳付き瓶の耳(把手)である。22は中四同安窯系の青磁碗で、内面に柳描き紋がある。23は瀬戸美濃製の卸皿で、施釉部分は内面と外面の上部1cmくらい。底径6.6cm。24は青磁碗で口径11.3cm。25は白磁菊花皿で、口径12.0cm。26は高台全部が残る白磁皿である。内面は施釉し、外面の上部5mmほどは施釉。底径5.5cm。27は型押し整形による白磁小皿である。底部周辺は露胎で、口径6.4cm、底径2.0cm、器高1.0cmである。28は白磁碗で、見込み蛇の目軸割きがあり、外面は鼻付と高台外側が露胎である。量付には砂目積み痕がある。底径2.2cm。29~35は華南三彩の破片である。36は瀬戸美濃製陶器鉢。37は沈線紋の古瀬戸瓶。

(第191図1~28) 1~7は13世紀の鎌違弁紋の龍泉窯系青磁鉢(第190図17)、14世紀~15世紀の白磁碗(第191図18~20)・青磁碗(第190図21)や龍泉窯系青磁瓶(第190図37)等の古い時期の遺物である。逆に、第191図23~24は18世紀前葉頃の遺物である。

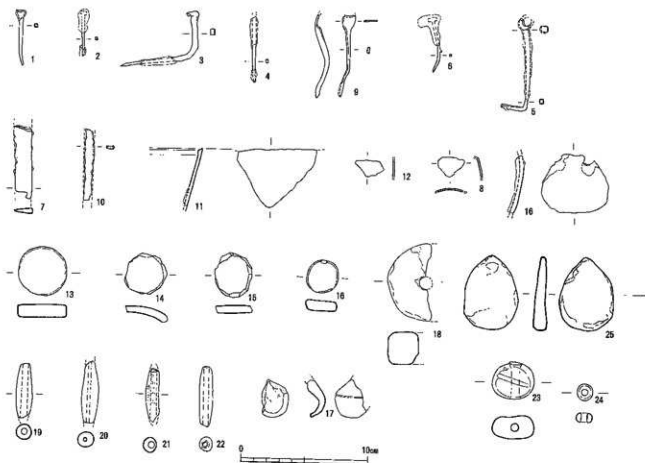
金属製品

鉄製品・青銅製品がある。

(第194図1~12・16) 1~6は鉄製の釘である。すべて断面が四角で、頭が残るものは頭部も四角である。曲がった釘が多いことからみて、何かに打ち付けられていたものが木質部が朽ちてしまい、釘だけが単独で出土したのであろう。1は頭部側はまっすぐだが先端側が少し湾曲している。長さ4.3cm、軸部分の厚さは3mm、重さは1.6



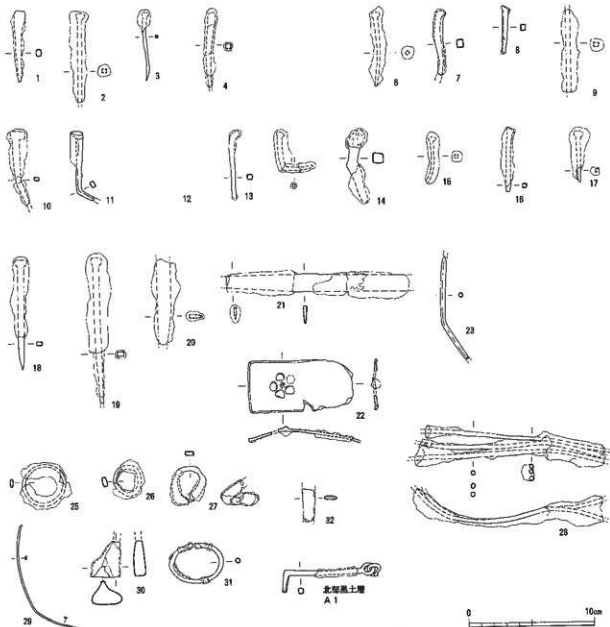
第193図 包含層出土遺物実測図⑬



第194図 包含層出土遺物実測図①

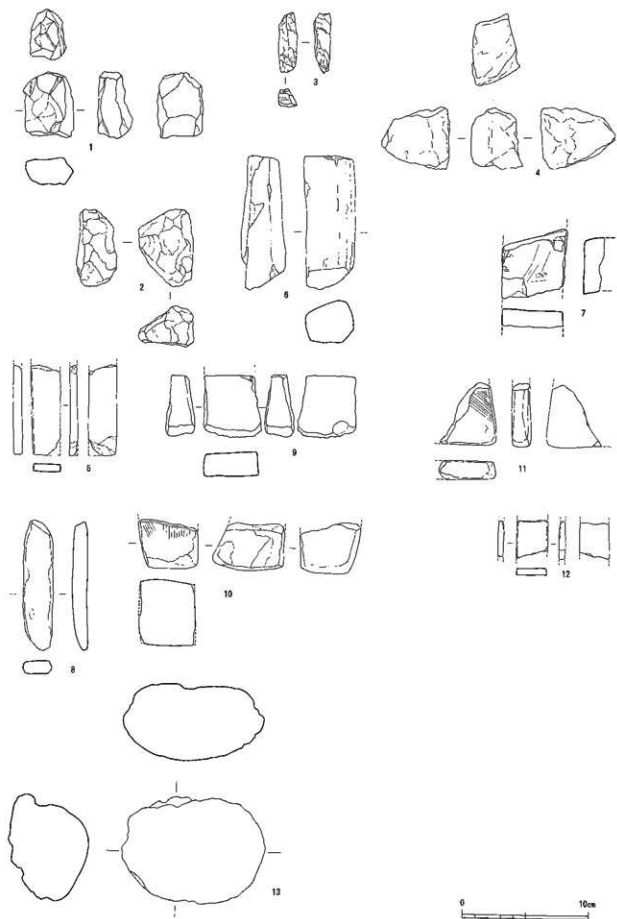
cmで厚みは2mm前後、重さは4.0gである。10は青銅製の厚さ2mmで長さ5.5cmの製品で、両端を欠損する。重さ2.5gである。11は鉄製品で容器状に湾曲しており、上部は平端面が廻る。鉄錆であろう。縦4.6cm、横6.1cm、重さ20.4gである。16は厚さ4mmの鉄製品で、湾曲している。縦4.5cm、横5.2cm、重さ28.1gである。25はA区の包含層から出上した青銅製のメダイである。上部が尖り気味の楕円形で、長さ1.93cm、幅1.48cm、厚さ4.5mmで、重さは4.5gである。肉眼では見えないがX線で平面上部に穴が空いていることが分かった。磁石は第186図6～8・第196図5～12である。用いられた石材は熊本県の天草砂岩が5点、大分県南部海岸地帯産の結晶片岩製が3点、産地不明の砂岩1点であり、天草砂岩が最も多く使われている。紡錘車は第194図18は凝灰岩軽石製の1点だけであり、土製品はない。火打ち石は第196図1～4があり、石英製が2点、杵築市山香の六太郎産石材である六太郎石（基本的に黄褐色・茶褐色でチャートに類似する。日出町早水台遺跡のいわゆる前期旧石器の一部にも類似の石材が使われている）が2点ある。

(第195図1～33) 1～19は鉄製の釘である。1は直線のままの釘である。錆に覆われて表面は不詳である。長さ5.6cm、重さ7.3gである。2は直線的な釘で、先端を欠損する。長さ7.0cm、重さ17.8g。3は全体的に少し湾曲した釘で、長さ5.3cm、軸の断面は四角で厚さ2mm、重さ2.4gである。4は錆に覆われ、少し湾曲した釘で先端を欠損する。長さ5.8cm、重さは9.0gである。5はL字に屈折し、錆に覆われている。長さ5.4cm、重さ7.5gである。6は錆に覆われて不詳。重さ13.5gである。7は軸部と頭部が連続的で、断面は長方形である。S字状に屈曲し、先端を欠く。長さ5.0cm、厚さ6mm、重さ6.5gである。8は軸の頭部を少しだけ敲いて作り出した釘で、先端を欠く。長さ3.8



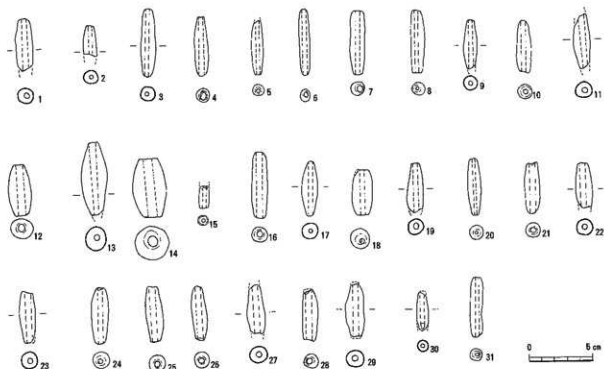
第195図 包含層出土遺物実測図⑨

cm、軸断面は3mm×5mmで、重さは1.9gである。9は両端を欠損し、錆に覆われているため不詳。現存部の長さは6.5cm、重さは20.6gである。10は片側に湾曲し先端を欠き、錆に覆われている。長さは7.7cm、重さは12.4gである。11は先端近くで屈折する。断面は長方形で、長さ6.0cm、厚さ3mm×5mm、重さ8.2gである。12は先端を欠き、錆に覆われている。長さ5.8cm、重さ14.6gである。13は軸の一端を折り曲げ頭部としており、先端を欠く。長さ5.5cm、軸部の厚さは4mm、重さは6.0gである。14は先端と頭部を錆に覆われている。断面は他の釘よりも太く8mmである。長さ5.8cm、重さ17.6gである。15は片側に湾曲する小型釘で、全体が錆に覆われている。16は軸部の一端を敲いて頭部とし、長さ5.0cm、幅3mm、重さ8.4g。17は小型釘で、長さ4.1cm、重さ8.1gである。18は頭部側を錆に覆われ、先端近くの断面は長方形で、長さ8.7cm、重さ15.5gである。19は長く曲がっていない釘で、先端の少しを欠く。軸部の断面は長方形である。長さ11.4cm、厚さ5mm、重さ41gである。20は鉄製で、片側に刃がつき、先端が細くなるので刀子である。長さ6.6cm、幅1.1cm、重さ16.2gである。21は鉄製刀子で、長さ14.4cm、最大幅1.2cm、重さ37.8gである。22は鉄製の板状



0 10cm

第196图 包含层出土物实测图⑨



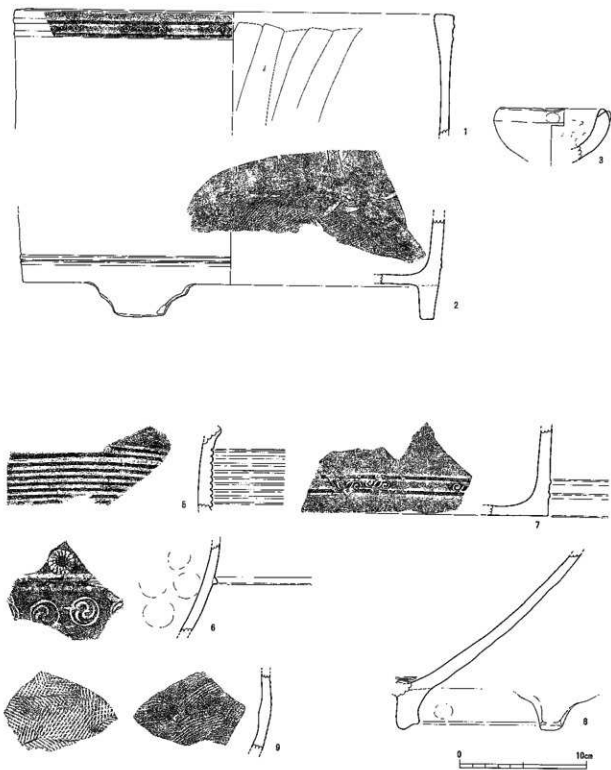
第197図 包含層出土遺物実測図②

製品で、片割を欠損し、側面からみると屈折している。片側に寄り梅花状に4つの穴が空き、一カ所は錆びて不詳である。長さ8.3cm、幅4.0cm、重さ18.8gである。23は青銅製の棒状製品で、断面は円形である。両端を欠損し、断面の厚さは4mm、長さは8.1cmである。筭であろうか。25・26は環状の鉄製品である。25は縦3.5cm、横3.3cm、断面は幅7mm、厚さ3mm、重さは17.8gである。26は縦横2.3cm、断面の幅7mm、厚さ3mm、重さ9.8gである。27は環状の鉄製品である。断面長方形の材料を折り曲げている。28は断面円形の棒状の鉄が3本円着したもので、長さは15.0cm、重さは56.6gである。29は断面楕円形の棒状青銅製品が湾曲したものである。現状で長さ9.3cm、重さ2.4g。一直線にすると長さは約11.5cmになる。性格は不明である。30は長さ2.8cm、幅2.3cm、重さ9.5gの厚みのある青銅製品である。31は断面円形の青銅製棒を環状に折り曲げたものである。端部は接合しておらず1mm程度の空白がある。縦3.1cm、横4.2cm、厚さ3mm、重さ6.7gである。32は板状の青銅製品で、両端を欠損する。長さ2.6cm、幅1.0cm、厚さ2mm、重さ2.1gである。33は断面四角の棒の一端を環状に折り曲げ、そこに別の環状鉄製品を繋いだ鉄製品である。一端は直角に折れ曲がる。長さ7.9cm、断面の厚さ4mm、重さ8.9gである。

石製品 石製品には紡錘車・火打ち石・砥石・臼等がある。

(第194図18) 18は軽石製の紡錘車である。半分を欠損する。表面を磨いて円形に整形し、中央に直径1.0cmの穴を貫通させている。本体の直径は6.1cm、厚さは2.5cm、重さは23.9gであり本来の重さは50g程度である。

(第196図1～13) 1～4は火打ち石である。1・2は大分県北部の杵築市山香町六太郎に産出する六太郎石である。六太郎石は茶褐色・黄色を呈しチャートや珪化木のような石材である。1は縦4.9cm、横3.7cm、厚さ2.8cm、重さ68.7gで、すべての面は打ち刺がされた剥離面である。2は縦6.1cm、横3.1cm、厚さ3.3cm、重さ94.2gである。3・4は石英製の火打ち石である。3は縦4.7cm、横



第198図 包含層出土遺物実測図②

1.5cm、厚さ1.4cm、重さ10.1gである。4は縦4.8cm、横5.7cm、厚さ4.1cm、重さ123.7gである。

5～12は砥石である。5は扁平で直線的な砥石で、一端及び残っている部分の先端を一部欠損する。石材は天草砂岩を用い、二つの平坦面と側面二つは作業面として使われている。平坦面の本来の中央に近い部分はより使用が激しく、薄くなっている。現状の長さは7.2cm、幅は2.3cm、厚さは

7mm、重さは20.2gである。6は結晶片岩製の砥石である。結晶片岩は大分県南部の豊後水道沿岸に分布する石材である。6は断面が丸いので、自然礫を材料にしたと思われる。作業部分は断面の半分（上左図・上右図の面）だけであり、他の半分は自然面のままである。一端は欠損しているように見えるが、節理で離れており、現状が本来の形であろう。長さ10.5cm、幅3.9cm、厚さ3.3cm、重さは211.7gである。7は頁岩製か？ 石材の質は緻密で両端を欠損した中央部分が出土した。左断面は長方形だが、実際に使用した作業面は一面だけである。現状の長さは5.5cm、幅5.0cm、厚さは1.6cm、重さは64.4gである。8は結晶片岩の自然礫を利用したと思われる砥石である。作業面は平面を図示した面の一面だけであり、他は自然の礫面である。欠損はない。長さ10.0cm、幅4cm、厚さ1.2cm、重さ47.2gである。9は石材名不詳で、本来長方形の砥石が1/3程度出土したとみられる。二つの平面と二つの側面を作業面として使っている。欠損側は薄くなっており、この部分の厚さは1.2cm、本来の厚さが残る端部は厚さ2.3cmである。現状の長さは4.8cm、幅は4.5cm、重さ69.7gである。10は天草砂岩製の砥石である。長方形の製品の一端が少しだけ出土した。断面は長方形だが、実際に作業面とされたのは三面だけである。断面図の左側の面は使用されていない。現状の大きさは縦3.8cm、横4.5cm、重さ141.7gである。11は天草砂岩製の扁平な砥石である。板状の製品の片隅の破片が出土した。12は緻密な石材を用いた小型の扁平な砥石である。本来の製品の両端を欠損した部分が出土している。断面形は長方形で、厚さは5mm、縦2.9cm、横2.5cm、重さは6.7gである。統計的に集めた訳ではないが、中世大友城下町跡から出土する砥石は大分県南部海岸産の結晶片岩、熊本県天草地域に産する砂岩の一種が主に使われている。

13は軽石製品である。自然のままの形を利用していると見られる。片面が盛り上がっており、その部分は表面がすり減っているため、何らかの用に役立てたのであろうと思われる。長さ11.2cm、幅8.2cm、厚さ5.9cm、重さ121.2gである。

土鏝

上節質の土鏝をここで扱う。

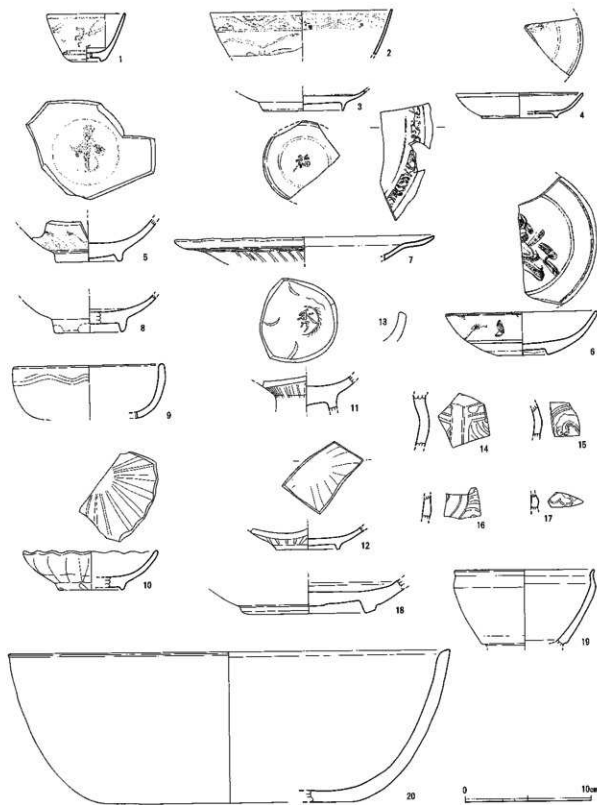
(第197図1～31) 1～31は包含層出土の全ての土鏝である。大型品と小型品、その中間のものが見られる。量的に多いのは小型品である。一端を欠損する資料が多いが、すべての長さと重量を列挙する。1 (8.1g・4.0cm)、2 (3.1g・8.2cm)、3 (6.2g・5.4cm)、4 (5.8g・4.7cm)、5 (3.8g・4.2cm)、6 (4.4g・5.2cm)、7 (7.9g・5.0cm)、8 (5.8g・5.0cm)、9 (3.5g・3.8cm)、10 (5.6g・4.1cm)、11 (5.4g・4.2cm)、12 (11.0g・4.0cm)、13 (23.6g・5.7cm)、14 (33.7g・5.2cm)、15 (1.3g・1.2cm)、16 (7.7g・5.2cm)、17 (5.7g・4.3cm)、18 (9.4g・3.6cm)、19 (6.2g・3.9cm)、20 (5.8g・4.5cm)、21 (5.1g・4.0cm)、22 (4.9g・3.6cm)、23 (5.8g・4.2cm)、24 (7.2g・4.5cm)、25 (6.7g・4.4cm)、26 (4.1g・4.3cm)、27 (6.4g・4.0cm)、28 (4.1g・4.1cm)、29 (5.8g・4.2cm)、30 (2.8g・3.0cm)、31 (5.6g・4.7cm)。

各種の相違点は全長と重量のどちらにも重きを置いて生じたのか見てみると、欠損していない資料は小型品の場合、長さは4cm大～5cm大に収まり、重量は4g～7gまでに収まる。大型品の場合には長さは5cm大が1点であり、小型品と差異はない。大型品の重量は33g大であり、小型品の数値からは飛び抜けている。したがって、長さよりも重量に重きを置いて作り分けたとみられる。

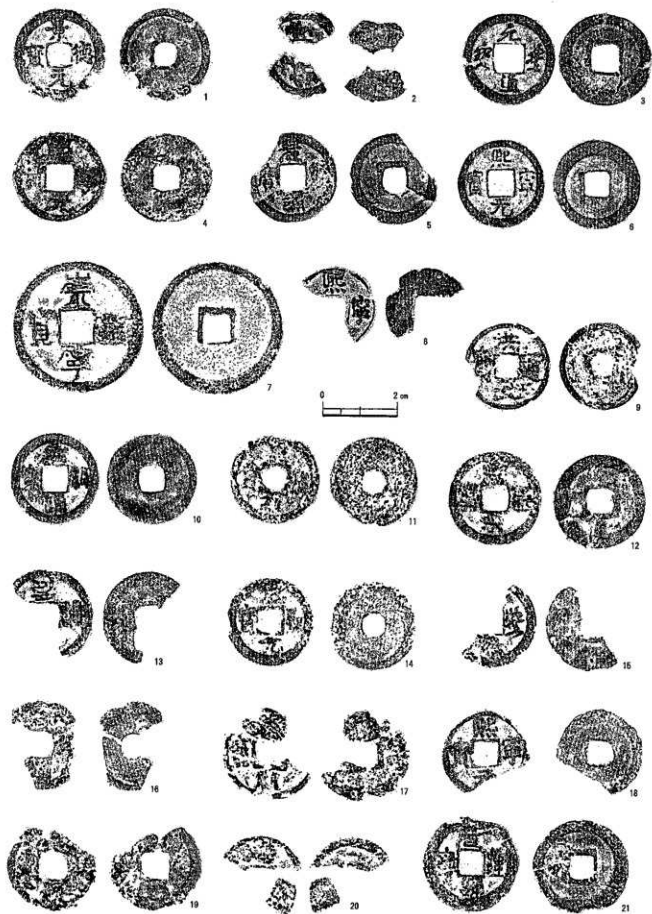
瓦質土器②

包含層出土品で一括採り上げた瓦質土器である。

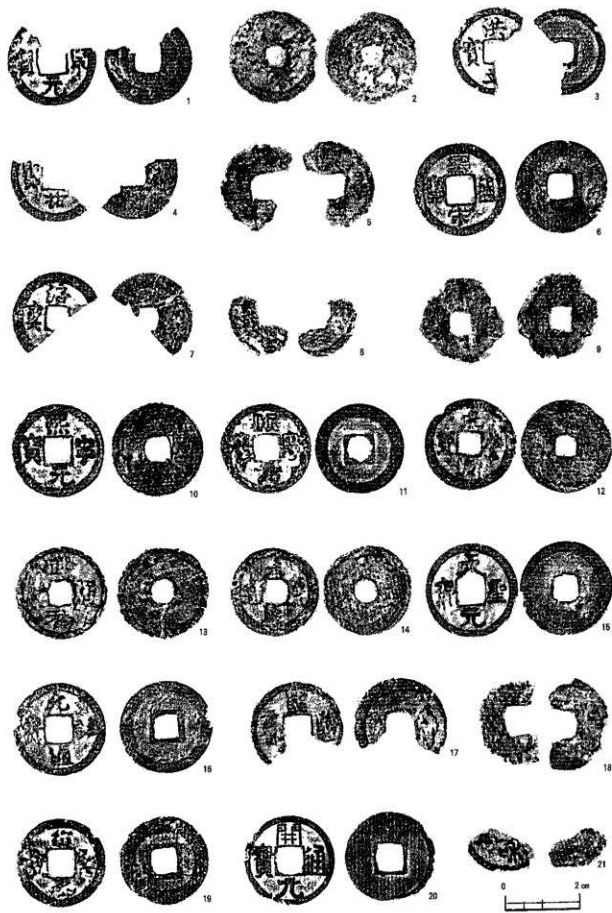
(第198図1～9) 1は在地系の火鉢である。口縁部内側はやや器壁が厚く、口縁部外面に二条の細い突帯を貼り付け、その間に双頭線手紋の刻印を間隔を空けて並べている。器面調整は外面は丁



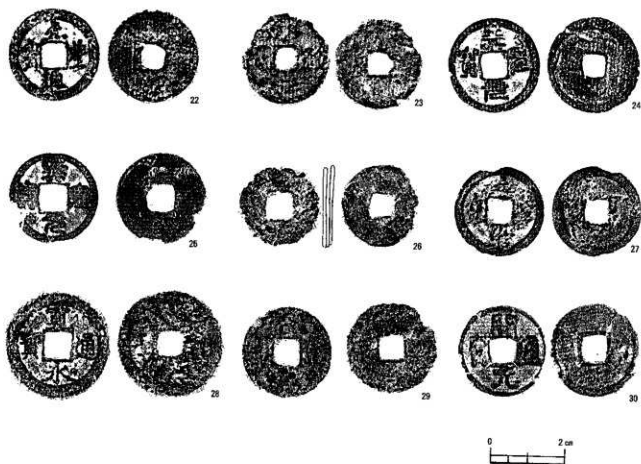
第200図 包含層出土遺物実測図②



第201圖 北朝查區包含層錢貨



第202図 南調査区包含層銭貨①



第203図 南調査区包含層銭貨②

翠なまで仕上げし、内面は縦方向のヘラ削りを行い口縁部周辺を横方向新なで仕上げしている。口径は35.0cmで、色調は暗灰色である。2は1のような火鉢の底部である。内面底部は刷毛目調整のままであり、周囲はなで仕上げしている。外底面には離れ砂が付着する。その他の器面は丁寧なで仕上げである。脚が3箇所につくとみられる。底径は32.8cmで色調は灰褐色である。3は増場である。一箇所に注ぎ口があり、胎土には砂粒が多い。口径8.0cmで、色調は灰褐色である。5は火鉢の胴部である。外面には断面が半円形になる突帯状の効果を出した飾りを9段重ねている。内面の器面調整はなで仕上げである。色調はにぶい黄橙色を呈する。6は火鉢の胴部破片である。器面調整は内面が指押さえ、外面が横方向のなで仕上げで、紋様として破片の中央部分に突帯を一条廻らせ、その上位に菊花の刻印を押し、突帯の下位には門の中に巴紋を入れた刻印を横方向に並べている。色調はにぶい黄橙色を呈する。7は1・2と同様の火鉢の底部である。外底面には離れ砂が付着している。器面調整は内面がなで、外面が丁寧なで仕上げである。外面の底部近くには1に類似する刻印を押しているが、刻印の細部紋様は微妙に異なる。8は脚をもつ鉢である。器面調整は内面の底部には刷毛目痕が残り、その上はなで仕上げしている。外面は指押さえやなで調整している。色調は灰色である。9は須恵質の甕で、色調は暗灰色を呈する。内面には青波紋に似た当て具痕がつき、外面には平行紋の叩き板の跡が全面についている。

(第200図20) 20は鉢である。同一體体の破片がS36・S369からも出土した。器面調整は外底面はなで、口縁部周辺は横方向のなで、体部外面は摩滅して観察不能。内面の大部分は摩滅している。口径は35.0cm、器高は11.8cmで、色調は淡黄色である。

石製品②

包含層一括で採り上げた石臼が2点ある。

(第199図1・2) 1は凝灰岩製の石臼である。出土したのは全体の1/4程度の破片で、側面には石臼を回すための棒を差し込む穴が半分みられる。また、穀物等を入れる穴の一部がある。上面は周辺部が盛り上がるように中央部を窪め、下面には刻線が並ぶ。復元最大径は21.6cm、高さは10.8cmである。2は安山岩製の石臼である。図に示すように全体の1/5程度の破片であり、棒を差し込む側面の穴や、穀物を流し込む穴はこの破片にはない。1に比べて直径が大きく、低い。用途が異なるのであろう。復元径は27.6cm、高さは7.6cmである。

陶磁器③

番号をつけて採り上げた陶磁器類の続きである。

(第200図1～19) 1は中国景德鎮窯系の青花小杯である。底部は蒼釉底であり、斜めになった骨付部だけは無釉である。口径6.2cm、底径2.2cm、器高3.8cm。2は景德鎮窯系の青花碗で、器壁が薄く、紋様は精緻である。同一個体の破片が第75次S130・S113からも出土した。口径14.4cm。3は景德鎮窯系の青花碗である。骨付だけが無釉で、底径6.4cm。外底面に二重の円を描き、福の字を記している。4は景德鎮窯系の青花皿E群である。高台前部だけが無釉で、骨付には砂が付着する。口径10.0cm、底径6.0cm、器高2.0cmである。5は中国南部の漳州窯系青花碗である。高台の外側下半分から内側は無釉で、底径5.3cmである。6は景德鎮窯系の青花皿C群である。高台に該当する部分だけが無釉である。口径12.0cm、底径4.0cm、器高3.4cm。7は景德鎮系青花の輪花皿である。口径23.5cm。8は白磁碗である。高台の外側から内部は無釉で、底径5.6cmである。釉には貫入がみられる。9は青磁碗で、口縁部には櫛掻き波状紋がある。口径12.0cmで、色調は灰色である。10は青磁菊花皿である。高台の外側には釉が部分的に垂れているが、それよりも内側は無釉である。口径10.6cm、底径5.0cm、器高3.1cmで色調はうすい灰黄色である。11は龍泉窯系の青磁碗である。すべての表面は釉が掛けられている。12は青磁菊花皿である。骨付から内側は露胎で、底径9.0cmである。13は青磁碗の口縁部破片である。14～17は同一個体の青磁破片である。ロクロ整形されており、外面に立体的な紋様がある。このうち15はSE519から出土した。18は削り出し高台の陶器である。高台内面から内側は露胎で、底径9.0cm。19は瀬戸美濃製の天目碗である。口径11.0cm。

銭貨

銭貨のほとんどは宋銭であり、他には初鋳年が唐代にさかのぼる開元通宝が2点や明代の洪武通宝もみられる。

(第201図1～21) 1は景德元宝(北宋1004年初鋳)。2は不明。3は元豊通宝(北宋1078年初鋳)。4は熙寧元宝(北宋1068年初鋳)。5は元祐通宝(北宋1086年初鋳)。6は熙寧元宝(北宋1068年初鋳)。7は崇寧重宝(北宋1103年初鋳)。8は熙寧元宝(北宋1068年初鋳)。9は洪武通宝(明1368年初鋳)。10は元祐通宝(北宋1086年初鋳)。11は12は13は14は15は元豊通宝(北宋1078年初鋳)。16は不明。17は不明。18は熙寧元宝(北宋1068年初鋳)。19不明。20は不明。21は元祐通宝(北宋1086年初鋳)。

(第202図1～21) 1は熙寧元宝(北宋1068年初鋳)。2は不明。3は洪武通宝(明1368年初鋳)。4は元祐通宝(北宋1086年初鋳)か。5は不明。6は皇宋通宝(北宋1038年初鋳)。7は淳化元宝(北宋990年初鋳)か。8は不明。9は不明。10は熙寧元宝(北宋1068年初鋳)。11は熙寧元宝(北宋1068年初鋳)。12は元豊通宝(北宋1078年初鋳)。13は熙寧元宝(北宋1068年初鋳)か。14は不明。15は天聖元宝(北宋1023年初鋳)。16は元祐通宝(北宋1086年初鋳)。17は元豊通宝(北宋1078年初鋳)。

拓影は天地逆。18は不明。19は不明。20は開元通宝（唐621年初鑄）。21は政和通宝（北宋1111年初鑄）か。

（第203図22～30）22は元豊通宝（北宋1078年初鑄）。23は不明。24は大聖元宗（北宋1023年初鑄）。25は熙寧元宝（北宋1068年初鑄）。26は二枚重なっている。銘不明。27は不明。28は日本の寛永通宝（1636年初鑄）である。29は不明。30は開元通宝（唐621年初鑄）。

ガラス製品

中心を穿孔した玉が2点出土している（第194図23・24）。複数の色ガラスを組み合わせるようなことはなく、単純な色である。23は黒い色で扁平、横から穿孔している。1.1cm×1.0cmで厚さは0.6cm、重さは1.0gである。24は緑灰色で、0.4cm四方で厚さは0.3cm、重さは0.1gである。第186図9は淡黄色を呈し、4mm×4mm、厚さは2mm、重さは0.1g未満である。

遺構一覽表

第1表 中世大友府内町跡第69次A調査区遺構一覧表①

本報告での 遺構番号	旧遺構番号	遺構の性情	遺構の位置	検出 標高	遺構の時期	特記事項
SD1	S1	耕作痕	A61区	5.21		
SD2	S2	耕作痕	A62区	5.19		
SD3	S3	耕作痕	A62区	5.19		区がのっているものだけ遺構補正しい
SD4	S4	耕作痕	A62区	5.17		
SK5	S5	耕作痕	A62区	5.16		
SD6	S6	耕作痕	B62区	5.22		
SD7	S7	耕作痕	B62区	5.15		
SD8	S8	耕作痕	B62区	5.13		
SD9	S9	耕作痕	B62区	5.12		
SD10	S10	耕作痕	C61・62区	5.15		
SD11	S11	耕作痕	C61区	5.06		
SK13	S13	耕作痕	C62区	5.18		
SD14	S14	耕作痕	C62区	5.13		
SK15	S15	耕作痕	C62区	5.14		
SD16	S16	耕作痕	C61・62区	5.19		
SD17	S17	耕作痕	C61・62区	5.16		
SD18	S18	耕作痕	C61・62区	5.14		
SD19	S19	耕作痕	C61・62区	5.14		SK38A・SP271 遺物と接合
SD20	S20	耕作痕	C62区	5.18		
SD21	S21	耕作痕	C61・62区	5.13		
SD22	S22	耕作痕	C61・62区	5.13		
SK24	S24	耕作痕	D61区	5.12		
SK25	S25	耕作痕	B61区	5.12		
SD26	S26	耕作痕	D62区	5.15		
SK27	S27	耕作痕	D62区	5.14	D62区にもある	
SP28	S28	柱穴類	D62区	5.12	D62区にもある	
SD29	S29	耕作痕	C61区	5.19		
SP30	S30	柱穴類	D62区	5.15		
SK31	S31	土坑	C60区	5.24	16C 後葉	B60区 5.21も SK42を切る
SK32-1	S32	耕作痕	C62区	6.18		
SD32-2	S32	耕作痕	B62区	5.13		
SE33	S33	井戸	C60区	6.1	16世紀後葉	六角石組み井戸
SP34	S34-1	柱穴類	A61・62区	5.21	六角石組	
SP34	S34-2	耕作痕	A61・62区	5.21		
SP35	S35		A61・62区	6.2	道路	
SK36	S36	土坑	A60区	5.16	16世紀前葉	段々上層器・京都系土師器1期
SD37	S37	耕作痕	D61区	5.27		
SD38	S38	耕作痕	C61・62区	5.1		
SD39	S39	耕作痕	C61・62区	5.03		
SD40	S40	耕作痕	C61・62区	5.04		
SD41	S41	耕作痕	C61・62区	5.05		
SK42	S42	廢棄土坑	B62区	5.1		SD32に「切られ」、SD48を切る
SD43	S43	溝状遺構	B60区			
SP44	S44	柱穴類	B61区	5.24	近世以降	
SP45	S45	柱穴類	C61区	5.17		
SP46	S46	耕作痕	C61区	5.1		
SD47	S47	耕作痕	B62区	5.06		
SD48	S48	耕作痕	B61・62区	5.1		
SD49	S49	耕作痕	B62区	5.09		
SD50	S50		A62区	5.12		
SK51	S51	土坑	B61区	5.19		
SK52	S52	土坑	B60区			
SK53	S53	土坑	B60区			
SK54	S54	廢棄土坑	C60区	5.02	16世紀第4前半期	
SD55	S55	溝状遺構	A62区	5.12		
SD56	S56	溝状遺構	A62区	5.14		
SK57	S57	土坑	C62区	5.07		
SK58A	S58	土坑	C62区	5.11		交叉層様 (SD19 + SP271)
SK58B	S58	土坑	C 61区	4.93		Aの北東側下層検出
SK59	S59	土坑				
SK60	S60	土坑	C60区	5.02		
SK61	S61	土坑	C60区	5.03		
SK62	S62	土坑	C60区	5.05	16世紀第4前半期	京都系土師器3期
SK63	S63	土坑	B・C61区	5.1	16世紀第4前半期	粗

第1表 中世大友府内町跡第69次A調査区遺構一覧表②

本報告での遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	検出標高	遺構の時期	特記事項
SK64	S64	土坑	C・C60区	5.1		
SK65	S65	土坑	B61区	5.1	16世紀第4四半期	
SK66	S66	土坑			16世紀第3四半期	京都系土師器2・3期
SK67	S67	土坑	C62区	5.12		他
SD68	S68	溝状遺構	A62区	5.13		
SD69	S69	溝状遺構	A62区	5.11		
SD70	S70	溝状遺構	A62区	5.12		
SD71	S71	溝状遺構	A62区	5.14		
SP72	S72	柱穴類	C61区	5.13		
SK73	S73		A60区	5.06	16世紀前半	段々土師器・京都系土師器1期
SP74	S74	柱穴類	B60区	5.14		
SP75	S75	柱穴類	B60区	4.98		
SP76	S76	柱穴類	B60区	4.99		
SK77	S77	土坑	B60区	4.96		
SE78	S78		B60区			
SE79	S79		B61区	5.1		
SK80	S80	土坑	A60区			
SK81	S81	土坑	B60区	5.16		
SK82	S82	土坑	A61区	5.19		
SP83	S83	柱穴類	B61区	5.17		出土遺物なし
SP84	S84	柱穴類	B61区	5.11		
SK85	S85	土坑	B60区			
SK86	S86	土坑	B60区	5.05		
SK87	S87	土坑	B60区			
SP88	S88	柱穴類	B60区	5.1		
SP89	S89	柱穴類	B61区	5.14		
SD90	S90	耕作痕	B62区	4.97		
SD91	S91	耕作痕	AB61・62区	5.05		
SP92	S92	柱穴類	C62区	4.99		
SP93	S93	柱穴類	C62区	4.98		
SK94	S94	土坑	C62区	4.99		
SP95	S95	柱穴類	C62区	4.9		
SP96	S96	柱穴類	C62区	4.91		
SK97	S97	土坑	C62区	5.01		土師2点
SP98	S98	柱穴類	C62区	4.85		
SK99	S99	土坑	B60区	5.14		
SP100	S100	柱穴類	C62区			
SP101	S101	柱穴類	B62区	4.71		
SP102	S102	柱穴類	B62区	4.99		
SP103	S103	柱穴類	B62区	4.85		
SP104	S104	柱穴類	B62区	4.82		
SP105		柱穴類	B62区	4.83		
SP106	S106	柱穴類	B62区	4.83		
SP107	S107	柱穴類	B62区	4.96		
SP108	S108	柱穴類	B62区			
SD109	S109	溝状遺構	B62区	4.94		
SK110	S110	土坑	B61区	5.04		
SK111	S111	土坑	B60区	5.2		
SD112	S112	溝状遺構	B61区	5.23		
SD113	S113	溝状遺構	B60区	5.01		
SK114	S114	土坑	B60区			
SP115	S115	柱穴類	B62区	4.95		
SP116	S116	柱穴類	B62区	4.98		
SP117	S117	柱穴類	B62区	4.94		
SP118	S118	柱穴類	B61区	4.93		
SP119	S119	柱穴類	B61区	4.96		
SP120	S120	柱穴類	A61区	5.03		
SP121	S121	柱穴類	B61区	4.94		
SD122	S122	溝状遺構	B62区	4.99		
SP123	S123	柱穴類	B・C61区	4.93		
SP124	S124	柱穴類	C61区	5		
SP125	S125	土坑	C61区	4.95		
SP126	S126	柱穴類	C62区	4.94		砥石1点出土
SK127	S127		C62区	4.99		

第1表 中世大友府内町跡第69次A調査区遺構一覧表③

本報告での 遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	検出 標高	遺構の時期	特記事項
SP128	S128	土坑	C62区	4.98		
SP129	S129	柱穴類	C62区	5.01		
SP130	S130	柱穴類	C62区	4.82		16(前~)中
SK131	S131	土坑	B60区	5.1		
SP132	S132	柱穴類	C62区	5.01		
SD133	S133	溝状遺構	C62区	4.91		
SK134	S134	土坑	C62区	4.95		
SP135	S135	柱穴類	C62区	4.95		
SP136	S136	柱穴類	B61区	5.15		
SK137	S137	土坑	B61区	5.1		景徳観音系青花碗
SP138	S138	柱穴類	B61区	5.06		
SP139	S139	柱穴類	B61区	5.07		
SK140	S140	土坑	A60区		段々土師器	
SK141	S141	土坑	D62区	4.94	16世紀第1四半期	
SP142	S142	柱穴類	A62区	5.05		
SP143	S143	柱穴類	A62区	5.05		
SP144	S144	柱穴類	A62区	5.05		
SP144	S144	柱穴類	A61区	5.05		
SK145	S145	土坑	A62区	5.11		
SP146	S146	柱穴類	B62区	5.07		
SK147	S147	土坑	B62区	5.06		
SK148	S148	土坑	B62区	5.05		
SK149	S149	土坑	A62区	5.07		
SP150	S150	井戸	B62区	5.07		
SD151	S151	溝状遺構	B62区	5.08		
SK152	S152	土坑	B62区	5.07		
SK153	S153	土坑	B62区	5.09		
SK154	S154	土坑	B60区	5.02		
SP155	S155	柱穴類	C61区	4.91		
SP156	S156	柱穴類	C62区	4.85		
SK157	S157	土坑	B61区	4.96	16世紀第4四半期	京都系土師器2点
SP157		柱穴類	A60区	5.1		
SP158	S158	土坑	C62区	4.96		
SP159	S159	柱穴類	C62区	5.01		
SP160	S160	柱穴類	C62区	4.98		
SE161	S161		C62区	5.02		
SK162	S162	土坑	B60区	5.06	16世紀第4四半期	
SP163	S163	柱穴類	B60区	5.05		
SP164	S164	柱穴類	B60区	5.01		
SD165	S165	溝状遺構	B60区	5		
SK166	S166	土坑	B61区	5.07		
SK167	S167	土坑	B60区	5		
SP168	S168	柱穴類	B60区	4.99		
SP169	S169	柱穴類	B60区	4.99		
SD170	S170	溝状遺構	C60区			
SK171	S171	土坑	B60区	5.09		
SK172	S172	土坑	C61区	4.73		
SP173	S173	柱穴類	C62区	4.89		
SP174	S174	柱穴類	C62区	5.09		
SP175	S175	柱穴類	C62区	4.94		
SP176	S176	柱穴類	C62区	4.93		
SP177	S177	柱穴類	C62区	4.99		
SP178	S178	柱穴類	C62区	4.99		
SP179	S179	柱穴類	C62区	4.95		
SP180	S180	柱穴類	C62区	4.94		
SP181	S181	柱穴類	C62区	4.94		
SP182	S182	柱穴類		4.05		
SP183	S183	柱穴類	C61区	4.92		
SP184	S184	柱穴類	C62区	4.95		
SP185	S185	柱穴類	C62区	4.94		
SP186	S186	柱穴類	C62区	4.95		
SP187	S187	柱穴類	A62区	4.88		
SK188	S188	土坑	C61区	4.99		
SP189	S189	柱穴類	B61区	4.98		

第1表 中世大友府内町跡第69次A調査区遺構一覧表④

本報告での遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	検出標高	遺構の時期	特記事項
SP190	S190	柱穴類				
SP191	S191	柱穴類	B62区	5.07		
SP192	S192	柱穴類	C62区	4.68		朝鮮王朝青磁
SP193	S193	柱穴類	B61区	4.96		
SP194	S194	柱穴類	B62区	4.99		
SK195	S195	土坑	A62区	5.09		
SP196	S196	柱穴類	C62区	4.91		
SK197	S197	柱穴類	B62区	4.98		SF207の南
SP198	S198	柱穴類	A62区	4.81		
SP199	S199	柱穴類	B62区	4.85		
SP200	S200	柱穴類	B62区	4.81		
SP201	S201	柱穴類	B62区	5.01		
SP202	S202	柱穴類	A62区	5.05		
SP203	S203	柱穴類	A62区	5.07		
SP204	S204	柱穴類	A62区	4.83		
SP205	S205	柱穴類	A62区	5.06		
SP206	S206	柱穴類	A62区	5.06		
SE207	S207		B62区	5		種は出土せず
SK208	S208	土坑	C62区	5.05		
SD209	S209	溝状遺構	C62区	5.05		
SD210	S210	溝状遺構	B61区	5.09	16世紀第3四半期	
SK211	S211	土坑	B61区	5.05		
SD212	S212	溝状遺構	B61区	5.09		
SP213	S213	柱穴類	B61区	5.06		
SP214	S214	柱穴類	B60区	4.97	16世紀第1四半期	
SP215	S215	柱穴類	B60区	4.97		
SP216	S216	柱穴類	C60区			
SP217	S217	柱穴類	B・C60区		16世紀第1四半期	
SK218	S218	土坑	B60区	5.02		
SP219	S219	柱穴類	B60区	5.01		
SK220	S220	土坑	B60区	5.03		
SK221	S221	土坑	B60区	5.01		瓦質土器火鉢2点・こね鉢1点
SP222	S222	柱穴類	B60区	5		
SK223	S223	土坑	B60区	5.01		
SP224	S224	柱穴類	B60区	5		
SK225	S225	土坑	B60区	4.99		
SP226	S226	柱穴類	B61区	5.06		
SD227	S227		B60区	5		
SP228	S228	柱穴類	B60区	5.01		
SP229	S229	柱穴類	A60区	4.71		
SP230	S230	柱穴類	A60区	4.98		
SP231	S231	柱穴類	B63区	4.89		
SP232	S232	柱穴類	B61区	5.07		
SK233	S233		A61区	5.03		
SK234	S234	土坑	A61区	5.17		
SD235	S235	敷治	A60区	5.07	16世紀第4四半期	
SK236	S236	土坑	A60区	5.07	16世紀第4四半期	
SK237	S237	土坑	B62区	4.95		
SP237		柱穴類	C62区	4.95		
SP238	S238	柱穴類	A62区	4.86		
SK239	S239	土坑	B62区	5		
SD240	S240	溝状遺構	A61区	5.05		
SK241	S241	土坑	B60区	4.97		
SK242	S242	粘土探堀坑	C60・61区	4.98	16世紀第4四半期	
SK243	S243	土坑			16世紀第3四半期	京都系土師器1点
SP244	S244	柱穴類	B60区	4.96		
SK245	S245	土坑	B60区	4.98	16世紀第3四半期	京都系土師器1点・鉄釘1点
SK246	S246	腐葉土坑	C・D60区	4.8	16世紀第3四半期	
SP247	S247	柱穴類	C62区	4.87		
SP248	S248	柱穴類	B63区	5.01		
SP249	S249	柱穴類	C62区	4.92		
SD250	S250	溝状遺構	A61区	5.04		
SK251	S251	土坑	A61区	5.07		
SP252-1	S252		B62区	4.98		

第1表 中世大友府内町跡第69次A調査区遺構一覧表⑤

本報告での遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	検出標高	遺構の時期	特記事項
-2			B61・62区	4.98		
SK253	S253	土坑	A60区	4.87		
SK254	S254	粘土探堀坑	B・C60区	5.04	16世紀中葉～後葉	
SE255	S255	井戸	C60区	4.92	16世紀前半	六角石組
SP256	S256	柱穴類	A60区	4.96		
SD257	S257	溝状遺構	C62区	4.91		
SP258	S258	柱穴類	C62区	4.95		
SK259	S259	土坑	B60区	4.95		
SP260	S260	柱穴類	B60区	4.96		
SD108	S261					
SP261	S261	柱穴類	B60区	4.95		
SP262	S262	柱穴類	B60区	4.98		
SK263	S263	土坑	B60区	4.98		
SP264	S264	柱穴類	A・B60区	4.99		
SP265	S265	柱穴類	A60区	4.98		
SK266	S266	土坑	C61区	4.85		
SP267	S267	柱穴類	B63区	4.98		
SP268	S268	柱穴類	C62区	4.93		
SP269	S269	柱穴類	B62区	4.98		
SP270	S270	柱穴類	B62区	4.95		
SP271	S271	柱穴類	C62区?		16中	SD19・SK58Aと接合
SP272	S272	柱穴類	C62区	4.93		
SK273	S273	土坑			京都Ⅱ・Ⅲ	
SK274	S274	土坑	C62区	4.99		
SP275	S275	柱穴類	B63区	4.4		
SP275	S275	柱穴類	C61区	4.9		
SP276	S276	柱穴類	C62区	4.9		
SP277	S277	柱穴類	D62区	4.88		
SP278	S278	柱穴類	D62区	4.86		
SP279	S279	柱穴類	B62区区	4.81		
SP280	S280	柱穴類	B62区	5.07		
SK281	S281	土坑	C61・62区	4.76		
SP282	S282	柱穴類	C62区	5.03		
SP283	S283	柱穴類	C62区	5.01		
SP284	S284	柱穴類	C62区	4.96		
SP285	S285	柱穴類	C62区	5.05		
SP286	S286	柱穴類	B62区	4.83		
SP287	S287	柱穴類	B62区	4.84		
SP288	S288	柱穴類	B62区	4.8		
SP289	S289	柱穴類	C62区	5.03		
SP290	S290	柱穴類	C62区	5.02		
SK291	S291	土坑	A62区	5		
SP292	S292	柱穴類	C61区	5.05		
SP293	S293	柱穴類		5.01		
SP294	S294	柱穴類	C62区	4.9		
SP295	S295	柱穴類	C62区	4.93		
SP296	S296	柱穴類	B62区	4.94		
SP297	S297	柱穴類	C62区	4.9		
SK298	S298	土坑				
SP299	S299	柱穴類	C61区	4.84		
SP300	S300	柱穴類	C62区	4.89		3期の京都系土師器1点
SP301	S301	柱穴類	C62区	4.93		在地系クロロ目土師器
SK302	S302	土坑	A61区	4.96		
SK303	S303	土坑	A61区	4.98		在地系クロロ目土師器
SK304	S304	土坑	A61区	4.96		
SK305	S305	土坑	A61区	4.93		
SK306	S306	土坑	A61区	4.94		
SK307	S307	土坑	A61区	4.97		
SK308	S308	土坑				
SK309	S309	土坑	A61区	4.95		
SK310	S310	土坑	A61区	4.99		
SK311	S311	土坑	A61区	4.97		
SP312	S312	柱穴類	A60区	4.86		
SP313	S313	柱穴類	A60区	4.99		

第1表 中世大友府内町跡第69次A調査区遺構一覧表④

本報告での 遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	検出 標高	遺構の時期	特記事項
SP314	S314	柱穴類	A60区	4.99		
SP315	S315	柱穴類	A60区	4.98		
SK316	S316	土坑	A60区	5		
SP317	S317	柱穴類	B60区	4.97		
SP318	S318	柱穴類	A60区	4.97		
SK319	S319	土坑	A60区	4.98		
SP320	S320	柱穴類	A60区	4.96		
SK321	S321	土坑	B62区	4.87		
SP322	S322	柱穴類	C62区	4.91		
SP323	S323	柱穴類	C61区	4.92		
SP324	S324	柱穴類	C62区	4.91		
SK325	S325	粘土埋堀坑	B61区			
SP326	S326	柱穴類	B61区	4.98		
SP327	S327	柱穴類	B61区	4.83		鉄釘2点 天草砂岩製砥石1点
SK328	S328	土坑	B61区	4.92		
SP329	S329	柱穴類	A62区	4.97		
SP330	S330	柱穴類	C62区	4.86	京都市～	
SP331	S331	柱穴類	C61区	4.92		
SP332	S332	柱穴類	C61区	4.93		
SK333	S333	土坑	C62区	4.97		
SP334	S334	柱穴類	C62区	4.94		
SP335	S335	柱穴類	A62区	5.07		
SP336	S336	柱穴類	A62区	4.98		
SP337	S337	柱穴類	B62区	4.97		
SP338	S338	柱穴類	B62区	4.99		
SP339	S339	柱穴類	B63区	4.95		
SP340	S340	柱穴類	A62区	4.9		
SP341	S341	柱穴類	A62区	4.96		
SP342	S342	柱穴類	A62区	4.97		
SP343	S343	柱穴類	A61区	4.88		
SP344	S344	柱穴類	A62区	4.98		
SP345	S345	柱穴類	A62区	4.98		
SP346	S346	柱穴類	A62区	4.96		
SP347	S347	柱穴類	A62区	4.98		
SP348	S348	柱穴類	B61区	4.88		
SP349	S349	柱穴類	B61区	4.96		
SP350	S350	柱穴類	B61区	4.95		
SP351	S351	柱穴類	B61区	4.95		
SP352	S352	柱穴類	B61区	4.95		
SP353	S353	柱穴類	B61区	4.95		
SK354	S354	土坑	C61区	4.95		土師1点 州土遺物なし
SK355	S355	土坑	C61区	4.93		
SP356	S356	柱穴類	B61区	5.05		
SP357	S357	柱穴類	A62区	4.96		
SP358	S358	柱穴類	B62区	4.82		
SK359	S359	土坑	B60区	4.98		
SK360	S360	土坑	B60区	4.99		
SP361	S361	柱穴類	B62区	5		
SP362	S362	柱穴類	A62区	4.99		
SP363	S363	柱穴類	A62区	5.03		
SP364	S364	柱穴類	A62区	5.1		
SP365	S365	柱穴類	A62区	5.11		
SP366	S366	柱穴類	A62区	4.99		
SP367	S367	柱穴類	C61区	4.95		
SP368	S368	柱穴類	C61区	4.96		
SP369	S369	柱穴類	C61区	4.94	16世紀第4四半期末～17世紀第1四半期 段々土師器	
SK370	S370	土坑	C61区	4.98		
SP371	S371	柱穴類	B61区	4.92		
SP372	S372	柱穴類	B61区	4.88		
SP373	S373	柱穴類	C62区	4.9		
SP374	S374	柱穴類	C62区	4.91		
SP375	S375	柱穴類	C62区	4.9		
SP376	S376	柱穴類	C62区	4.91		
SP377	S377	柱穴類	C62区	4.87		

第1表 中世大友府内町跡第69次A調査区遺構一覧表⑦

本報告での 遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	検出 標高	遺構の時期	特記事項
SK378	S378	土坑	C62区	4.89		
SP379	S379	柱穴類	C62区	4.89		
SP380	S380	柱穴類	C62区	4.83		
SP381	S381	柱穴類	B62区	4.97		
SP381	S381	柱穴類	C62区	4.97		
SK382	S382	土坑	C・D62区	4.86	京都II期	
SP383	S383	柱穴類	A61区	5.04		
SP383	S383	柱穴類	B61区	5.05		
SP384	S384	柱穴類	C61区	4.91		
SK385	S385	土坑	C61・62区	4.92		
SP386	S386	柱穴類	B61区	4.97		
SP387	S387	柱穴類	C61区	4.79		
SP388	S388	柱穴類	C61区	4.88		
SP389	S389	柱穴類	C61区	4.87		
SP390	S390	柱穴類	C62区	4.93		
SP391	S391	柱穴類	A62区	5.1		
SP392	S392	柱穴類	A62区	5.12		
SP393	S393	柱穴類	A62区	5.07		
SP394	S394	柱穴類	C61区	4.92		
SP395	S395	柱穴類	C61区	4.92		
SP396	S396	柱穴類	C61区	4.9		
SP397	S397	柱穴類	C61区	4.9		
SK398	S398	土坑	C62区	4.91	16中	S40 + S67 + S271 - S398 + S419 + S581
SK399	S399	土坑	B60区	4.94		
SP400	S400	柱穴類	B60区	4.95		
SP401	S401	柱穴類	B60区	4.98		
SP402	S402	柱穴類	B60区	5.01		
SP403	S403	柱穴類	B60区	4.96		
SP404	S404	柱穴類	B60区	4.96		
SP405	S405	柱穴類	A60区	4.97		
SP406	S406	柱穴類	B60区	5.01		
SP407	S407	柱穴類	B60区	5.02		
SP408	S408	柱穴類	A60区	4.96		
SP409	S409	柱穴類	C61区	4.92		
SP410	S410	柱穴類	A61区	4.88		
SK411	S411	土坑	C・D61区	4.74	京都III期～	
SP412	S412	柱穴類	B61区	4.97		
SP413	S413	柱穴類	B61区	4.95		
SP414	S414	柱穴類	A62区	4.97		
SP415	S415	柱穴類	B62区	4.95		
SP416	S416	柱穴類	C62区	4.93		
SP417	S417	柱穴類	B62区	4.96		
SP418	S418	柱穴類	C62区	4.95		
SK419	S419	土坑	C62区	4.88		
SP420	S420	柱穴類	C62区	4.89		
SP421	S421	柱穴類	C62区	4.85		
SK422	S422	土坑	C62区	4.92		
SK423	S423	土坑	C62区	4.94		
SP424	S424	柱穴類	C60区	4.86		
SP425	S425	柱穴類	C60区	4.89		
SP426	S426	柱穴類	C60区	4.68		
SP427	S427	柱穴類	C60区	4.69		
SP428	S428	柱穴類	C60区	4.88		
SP429	S429	柱穴類				
SP430	S430	柱穴類	C60区	4.69		
SP431	S431	柱穴類	C60区	4.63		
SP432	S432	柱穴類	B60区	4.97		
SP433	S433	柱穴類	B61区	4.96		
SP434	S434	柱穴類	B60区	4.98		
SP435	S435	柱穴類	C62区	4.94		
SP436	S436	柱穴類	C62区	4.95		
SP437	S437	柱穴類	B62区	4.9		
SP438	S438	柱穴類				
SK439	S439	廃棄土坑	C60区		16世紀第3四半期	

第1表 中世大友府内町跡第69次A調査区遺構一覧表⑧

本報告での 遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	検出 標高	遺構の時期	特記事項
SP440	S440	柱穴類	C62区	4.95		
SK441	S441	土坑	C62区	4.57		
SK442	S442	土坑	B62区	5.01		
SP443	S443	柱穴類	A61区	4.76		
SP444	S444	柱穴類	A61区	4.75		
SK445	S445	土坑	C60区	4.97		SE254に切られる
SP446	S446	柱穴類	A62区	5.13		
SP447	S447	柱穴類	A62区	5.12		
SP448	S448	柱穴類	C62区	4.91	京都	
SK449	S449	土坑	C62区	4.89		
SP450	S450	柱穴類	A62区	4.89		
SP451	S451	柱穴類	B62区	4.94		
SP452	S452	柱穴類	A60区	5		
SP453	S453	柱穴類	A60区	4.98		
SP454	S454	柱穴類	A60区	4.96		
SP455	S455	柱穴類	A60区	4.95		
SP456	S456	柱穴類	A60区		16世紀第4四半期	
SP457	S457	柱穴類	B60区	4.99		
SP458	S458	柱穴類	C60区			
SP459	S459	柱穴類	C60区			
SP460	S460	柱穴類	B62区	4.83		
SP461	S461	柱穴類	B62区	4.82		
SP462	S462	柱穴類	B62区	4.82		
SP463	S463	柱穴類	B62区	4.94		
SP464	S464	柱穴類	B60区	4.96		
SP465	S465	柱穴類	C60区			
SP466	S466	柱穴類	B62区	4.98		
SP467	S467	柱穴類	B63区	4.83		
SP468	S468	柱穴類	B62区	4.96		
SP469	S469	柱穴類	C60区			
SP470	S470	柱穴類	C60区			
SK471	S471	土坑	C62区	4.93		
SP472	S472	柱穴類	C62区	4.97		
SP473	S473	柱穴類	C62区	4.95		
SP474	S474	柱穴類	B61区	5.04		
SK475	S475	土坑	C61区	4.86		
SP476	S476	柱穴類	C60区			
SP477	S477	柱穴類	C60区	4.87		
SP478	S478	柱穴類	C60区	4.92		
SP479	S479	柱穴類	C60区	4.91	16世紀第3四半期	京都系土師器
SP480	S480	柱穴類	C60区	4.92		
SP481	S481	柱穴類	C60区	4.93		
SP482	S482	柱穴類	C60区	4.89		
SP483	S483	柱穴類	C60区	4.9		
SP484	S484	柱穴類	B61区	4.87		
SP485	S485	柱穴類				
SP486	S486	柱穴類	B61区	5		
SP487	S487	柱穴類	B61区	5.08		
SP488	S488	柱穴類	B61区	5.07		
SP489	S489	柱穴類	B61区	5.07		
SP490	S490	柱穴類	B61区	4.99		
SP491	S491	柱穴類	B61区	4.99		
SP492	S492	柱穴類	B60区	4.72		
SP493	S493	柱穴類	B60区	4.96		
SP494	S494	柱穴類	C60区			
SP495	S495	柱穴類	A61区	4.98		
SP496	S496	柱穴類	B60区	4.99		
SP497	S497	柱穴類	B60区	4.98		
SP498	S498	柱穴類	B60区	4.93		
SP499	S499	柱穴類	B60区	4.99		
SP500	S500	柱穴類	B60区	4.97		
SP501	S501	柱穴類	B60区	4.99		
SP502	S502	柱穴類	A60区	4.98		
SP503	S503	柱穴類	A60区	4.97		

第1表 中世大友府内町跡第69次A調査区遺構一覧表⑨

本報告での 遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	検出 標高	遺構の時期	特記事項
SP504	S504	柱穴類	A60区	4.72		
SP505	S505	柱穴類	A60区	4.96		
SP506	S506	柱穴類	A60区	4.96		
SP507	S507	柱穴類	A60区	4.96		
SP508	S508	柱穴類				
SP509	S509	柱穴類	C82区	4.84		
SP510	S510	柱穴類	C62区	4.84		
SP511	S511	柱穴類	C82区	4.87		
SP512	S512	柱穴類	C62区	4.9		
SP513	S513	柱穴類	C82区	4.92		
SP514	S514	柱穴類	C80区			
SP515	S515	柱穴類	C60区	4.88		
SP516	S516	柱穴類	B80区	4.75		
SP517	S517	柱穴類	C60区	4.87		
SP518	S518	柱穴類	B61区	4.84		
SP519	S519	井戸	D61・E2区	4.62	段々土師器・京型I	
SP520	S520	柱穴類	C62区	4.89		
SK521	S521	土坑	C62区	4.87		
SP522	S522	柱穴類	C62区	4.88		
SP523	S523	柱穴類	C62区	4.92		
SK524	S524	土坑	C・D62区	4.92		
SP525	S525	柱穴類	C62区	4.93		
SP526	S526	柱穴類	A62区	4.94		
SP527	S527	柱穴類	A62区	4.94		
SP528	S528	柱穴類	A61区	4.95		
SP529	S529	柱穴類	A62区	4.97		
SP530	S530	柱穴類	A62区	4.96		
SP531	S531	柱穴類	A62区	4.96		
SP532	S532	柱穴類	A62区	4.93		
SP533	S533	柱穴類	A62区	5.03		
SP534	S534	柱穴類	A62区	4.9		
SP535	S535	柱穴類	C62区	4.78		
SP536	S536	柱穴類	A62区	4.94		
SP537	S537	柱穴類	A60区	4.94		
SP538	S538	柱穴類	A60区	5.01		
SP539	S539	柱穴類				
SP540	S540	柱穴類				
SP541	S541	柱穴類	A60区			
SP542	S542	柱穴類	B61区	4.85		
SP543	S543	柱穴類	B61区	4.99		
SP544	S544	柱穴類	B61区	4.98		凝灰岩製品1点
SP545	S545	柱穴類	BC60区	4.83		
SP546	S546	柱穴類	C61区	4.82		
SP547	S547	柱穴類	C60区	4.84		
SP548	S548	柱穴類	C60区			
SP549	S549	柱穴類	B61区	4.78		
SP550	S550	柱穴類	C62区	4.57		
SP551	S551	柱穴類	C62区	4.54		
SP552	S552	柱穴類	C62区	4.59		
SP553	S553	柱穴類	C62区	4.94		
SP554	S554	柱穴類	D62区	4.93		
SK555	S555	土坑	C62区	4.93		
SK556	S556	魔堂土坑			16世紀第3四半期	SK357の南
SK557	S557	魔堂土坑	C60区	4.62	16世紀第3四半期	
SK558	S558	土坑	C61区	4.89		
SP559	S559	柱穴類	B61区	4.85		
SK560	S560	稻十塚掘坑	C61区	5.05		遺物なし
SP561	S561	柱穴類	B61区	4.84		
SP562	S562	柱穴類	B60区	4.66		
SP563	S563	柱穴類	C60区	4.71		
SP564	S564	柱穴類	C60区	4.73		
SP565	S565	柱穴類	B60区	4.89		
SK566	S566	土坑	B60区	4.87		景徳鎮窯系の青花皿
SP567	S567	柱穴類	A・B60区	4.9		

第1表 中世大友府内町跡第69次A調査区遺構一覧表①

本報告での 遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	検出 標高	遺構の時期	特記事項
SP568	S568	柱穴類	C60区	4.72		
SP569	S569	柱穴類	B61区	4.84		
SP570	S570	柱穴類	B61区	4.87		鉄釘1点
SP571	S571	柱穴類	B61区	4.86		
SP572	S572	柱穴類	C60区	4.97		
SP573	S573	柱穴類	D60区			
SP574	S574	柱穴類	B60区	4.71		
SP575	S575	柱穴類	B60区	4.72		
SP576	S576	柱穴類	B60区	4.71		
SP577	S577	柱穴類	B61区	4.85		
SP578	S578	柱穴類	A61区	5.02		
SP579	S579	柱穴類	A61区	5.02		
SK580	S580	土坑	C62区	4.89		
SK581	S581	土坑	C62区	4.92		
SK582	S582	土坑	C62区	4.9		
SK583	S583	土坑	C62区	4.69		
SP584	S584	柱穴類	A62区	4.9		
SP585	S585	柱穴類	A62区	4.96		
SP586	S586	柱穴類	A62区	4.92		
SP587	S587	井戸	B60区	4.86	16世紀第4四半期	
SP588	S588	柱穴類	A62区	4.94	在地系組	
SP589	S589	柱穴類	A62区	4.96		
SP590	S590	柱穴類	A61区	4.98		
SP591	S591	柱穴類	A61区	5.04		
SP592	S592	柱穴類	C60区	4.75		
SP593	S593	柱穴類	C60区	4.74		
SP594	S594	柱穴類	B60区	4.72		
SP595	S595	柱穴類	B60区	4.71		
SP596	S596	柱穴類				
SP597	S597	柱穴類	B60区	4.88		
SP598	S598	柱穴類	B60区	4.88		
SP599	S599	柱穴類	B60区	4.9		
SP601	S601	柱穴類	B60区	4.89		
SP602	S602	柱穴類	B60区	4.85		
SP603	S603	柱穴類				
SP604	S604	柱穴類				
SD605	S605	溝状遺構	C60区	4.52		
SK606	S606	土坑	B60区	4.85		
SP607	S607	柱穴類	B60区	4.86		
SK608	S608	土坑	B60区	4.86		
SP609	S609	柱穴類	B60区	4.86		
SP610	S610	柱穴類	B61区	4.84		
SP611	S611	柱穴類	B61区	4.82		
SP612	S612	柱穴類	A61区	4.85		
SP613	S613	柱穴類	A61区	4.82		
SP614	S614	柱穴類	A60区	4.86		
SP615	S615	柱穴類	A62区	4.96		
SP616	S616	柱穴類	C62区	4.93		
SP617	S617	柱穴類	A62区	4.95		
SP618	S618	柱穴類	A62区	4.95		
SP619	S619	柱穴類	A62区	4.96		
SP620	S620	柱穴類	A60区	4.83		鉄釘1点
SK621	S621	土坑	C60区	4.56		出土遺物なし
SP622	S622	柱穴類	B61区	4.76		
SD623	S623	廃棄土坑	C60区	4.55	16世紀第3四半期	京都系土師器3点
SP624	S624	廃棄用	C60区	4.54	16世紀第2四半期	京都系土師器2点
SK625	S625	廃棄土坑	C60区	4.46	京都1期	
SP626	S626	柱穴類	B61区	4.85		
SP627	S627	柱穴類	A・B60区	4.83		
SP628	S628	柱穴類	C61区	4.72		
SP629	S629	柱穴類	A69区	4.59		
SP630	S630	柱穴類	A60区	4.75		
SP631	S631	柱穴類	A・B60区	4.82		
SP632	S632	柱穴類	B61区	4.86		

第1表 中世大友府内町跡第69次A調査区遺構一覧表①

本報告での 遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	検出 標高	遺構の時期	特記事項
SP633	S633	柱穴類	A60区	4.81	4.76m	
SP634	S634	柱穴類	C60区	4.79		
SP635	S635	柱穴類	B61区	4.83		
SP636	S636	柱穴類	C61区	4.68	16世紀第1四半期	
SP637	S637	柱穴類	C61区	4.69	16世紀第1四半期	
SP638	S638	柱穴類	B61区	4.79		
SP639	S639	柱穴類	C61区	4.82		
SP640	S640	柱穴類	B60区	4.61		
SP641	S641	柱穴類	A60区	4.95		
SP642	S642	柱穴類	B60区	5.01		
SP643	S643	柱穴類	A60区	4.88		
SP644	S644	柱穴類	A61区	4.86		
SP645	S645	柱穴類	B60区	4.86		
SP646	S646	柱穴類	B60区	4.86		
SP647	S647	柱穴類	B60区	4.86		
SP648	S648	柱穴類	C61区	4.74		
SP649	S649	柱穴類	A60区	4.67		
SK650	S650	土坑	A60区			
SP651	S651	柱穴類	B60区	4.83		
SP652	S652	柱穴類	B60区	4.88		
SP653	S653	柱穴類	B60区	4.88		
SP654	S654	柱穴類	B61区	4.97		
SP655	S655	柱穴類	D62区	4.69		
SP656	S656	柱穴類	D62区	4.9		
SP657	S657	柱穴類	D62区	4.9		
SP658	S658	柱穴類	D62区	4.69	京都1・II期	
SP659	S659	柱穴類	D62区	4.69		
SP660	S660	柱穴類	D62区	4.69		
SP661	S661	柱穴類	D62区	4.7		
SP662	S662	柱穴類	D62区	4.75		
SP663	S663	柱穴類	D62区	4.71		
SP664	S664	柱穴類	C63区	4.69		
SP665	S665	柱穴類	C63区	4.69		
SP666	S666	柱穴類	C63区	4.69		
SP667	S667	柱穴類	C63区	4.6	京都1期	
SP668	S668	柱穴類	C62区	4.78		
SP669	S669	柱穴類	B60区	4.9		
SP670	S670	柱穴類	B60区	4.89		
SP671	S671	柱穴類	B60区	4.54		
SP672	S672	柱穴類	C62区	4.78		
SK673	S673	廃棄土坑	C・D60区	4.9		
SP674	S674	柱穴類	B63区	4.24		
SP675	S675	柱穴類	C62区	4.72		
SP676	S676	柱穴類	C62区	4.75		
SP677	S677	柱穴類	C62区	4.75		
SP678	S678	柱穴類	C62区	4.76		
SP679	S679	柱穴類	C62区	4.73		
SP680	S680	柱穴類	C62区	4.73		
SP681	S681	柱穴類	C62区	4.75		
SP682	S682	柱穴類	C62区	4.75		
SP683	S683	柱穴類	C62区	4.75		
SP684	S684	柱穴類	C62区	4.73		
SP685	S685	柱穴類	C62区	4.73		
SP686	S686	柱穴類	C62区	4.73		
SP687	S687	柱穴類	C62区	4.75		
SP688	S688	柱穴類	C62区	4.72		
SK689	S689	土坑	C62区	4.7		
SK690	S690	土坑	C62区	4.64		
SK691	S691	土坑	C61区	4.69		
SP692	S692	柱穴類	C62区	4.72		
SP693	S693	柱穴類	C62区	4.63	SK701の床	
SP694	S694	柱穴類	C62区	4.75		
SP695	S695	柱穴類	C62区	4.66		
SP696	S696	柱穴類	C62区	4.71		

第1表 中世大友府内町跡第69次A調査区遺構一覧表②

本報告での 遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	検出 標高	遺構の時期	特記事項
SP697	S697	柱穴類	C62区	4.71		
SP698	S698	柱穴類	C60区	4.74		
SP699	S699	柱穴類	C60区	4.77		
SK700	S700	土坑	C62区	4.71		
SK701	S701	土坑	C62区	4.72		
SP702	S702	柱穴類	C61区	4.78		
SP703	S703	柱穴類	B61区	4.71		
SP704	S704	柱穴類	B61区	4.78		
SP705	S705	柱穴類	B61区	4.75		
SK706	S706	粘土保壚坑	B60区	4.94		瓦質土器火鉢1点
SP707	S707	柱穴類	A61区	4.75		
SP708	S708	柱穴類	A61区	4.72		在地系土師器1点
SP709	S709	柱穴類	A61区	4.73		在地系土師器1点
SP710	S710	柱穴類	A61区	4.75		
SP711	S711	柱穴類	A61区	4.73		
SP712	S712	柱穴類	A61区	4.75		
SP713	S713	柱穴類	A61区	4.76		
SP714	S714	柱穴類	A61区	4.73		
SP715	S715	柱穴類	A60区	4.75		
SP716	S716	柱穴類	A61区	4.93		
SP717	S717	柱穴類	B60区	4.82		
SK718	S718	土坑	B61区	4.74		陶甎土坑(ゴミ穴のこと)
SP719	S719	柱穴類	B60区	4.74		
SP720	S720	柱穴類	C62区	4.74		
SP721	S721	柱穴類	B62区	4.74		
SP722	S722	柱穴類	B62区	4.73		
SP723	S723	柱穴類	B62区	4.72		
SP724	S724	柱穴類	B62区	4.7		
SP725	S725	柱穴類	B62区	4.71		
SP726	S726	柱穴類	B62区	4.73		
SP727	S727	柱穴類	B62区	4.73		
SP728	S728	柱穴類	B62区	4.72		
SP729	S729	柱穴類	B62区	4.7		
SP730	S730	柱穴類	B62区	4.72		
SP731	S731	柱穴類	B62区	4.73		
SP732	S732	柱穴類	B62区	4.68		
SP733	S733	柱穴類	B62区	4.71		
SP734	S734	柱穴類	B62区	4.7		
SP735	S735	柱穴類	B62区	4.68		
SP736	S736	柱穴類	C62区	4.7		
SP737	S737	柱穴類	B62区	4.68		
SP739	S739	柱穴類	C61区	4.77		
SP740	S740	柱穴類	C61区	4.64		
SK741	S741	土坑	A61区	4.65		
SP742	S742	柱穴類	C60区	4.71		
SP743	S743	柱穴類	C60区	4.7		
SP744	S744	柱穴類	C60区	4.69		
SP745	S745	柱穴類	B60区	4.79		
SP746	S746	柱穴類	B60区	4.66		
SP747	S747	柱穴類	C60区	4.69		
SP748	S748	柱穴類	B61区	4.73		
SP749	S749	柱穴類	B61区	4.75		
SD750	S750	溝状遺構	C61・C62区	4.28	14世紀前葉～	
SB751	S751	井戸	B61・B62区	4.74	種構造	
SP752	S752	柱穴類	B61区	4.74		
SP753	S753	柱穴類	B61区	4.75		SP210のF
SK754	S754	土坑	B・C61区	4.75		
SP755	S755	柱穴類	B60区	4.81		
SP756	S756	柱穴類	B61区	4.76		
SP759	S759	柱穴類	B61区	4.75		
SP760	S760	柱穴類	B61区	4.74		
SP761	S761	柱穴類	B61区	4.72		
SP762	S762	柱穴類	B61区	4.72		
SP764	S764	柱穴類	B63区	4.98		

第1表 中世大友府内町跡第69次A調査区遺構一覧表⑬

本報告での 遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	検出 標高	遺構の時期	特記事項
SP765	S765	柱穴類	B61区	4.91		
SP766	S766	柱穴類	B61区	4.77		
SP767	S767	柱穴類	B61区	4.7		
SP768	S768	柱穴類	B61区	4.59		
SP769	S769	柱穴類	B61区	4.7		
SP770	S770	柱穴類	B61区	4.7		
SP771	S771	柱穴類	B61区	4.69		
SP772	S772	柱穴類	B61区	4.69		
SP773	S773	柱穴類	B62区	4.74	在地系皿	
SP774	S774	柱穴類	A63区	4.41		
SP775	S775	柱穴類	B62区	4.85		
SP776	S776	柱穴類	B62区	4.88		
SP777	S777	柱穴類	B62区	4.69		
SP778	S778	柱穴類	B61区	4.57		SK754のド
SK779	S779	土坑	C・D61区	4.6	京都Ⅱ・Ⅲ	SK130の遺物と接合
SK780	S780	土坑	C60区	4.85		大聖元宮(北宋1023年初跡)
SP781	S781	柱穴類	B61区	4.75		
SP782	S782	柱穴類	B61区	4.96		
SP783	S783	柱穴類	B61区	4.73		
SP784	S784	柱穴類	A60区	4.78		
SP785	S785	柱穴類	A60区	4.75		
SP786	S786	柱穴類	B61区	4.7		
SP787	S787	柱穴類	B61区	4.75		
SP788	S788	柱穴類	B61区	4.69		
SP789	S789	柱穴類	B62区	4.69		
SP790	S790	柱穴類	B62区	4.67		
SP791	S791	柱穴類	B62区	4.64		
SP792	S792	柱穴類	B62区	4.66		
SP793	S793	柱穴類	B62区	4.66		
SP794	S794	柱穴類	C60区	4.81		
SP795	S795	柱穴類	B62区	4.67		
SP796	S796	柱穴類	B62区	4.67		
SP797	S797	柱穴類	B62区	4.67		
SP798	S798	柱穴類	B62区	4.89		
SK799	S799	土坑	B61区	4.77		
SP800	S800	柱穴類	B61区	4.72		
SD801	S801	柱穴類	A62・63区	4.38		
SP802	S802	柱穴類	A63区	4.37		
SP803	S803	柱穴類	A61区	4.76	石あり	
SP804	S804	柱穴類	B61区	4.75		
SP805	S805	柱穴類	B61区	4.74		
SP806	S806	柱穴類	B61区	4.69		
SP807	S807	柱穴類	A60区	4.75		
SP808	S808	柱穴類	A60区	4.64		
SP809	S809	柱穴類	B60区	4.62		
SD810	S810	溝状遺構	A～C60区	4.47	14世紀前葉以前	出土遺物なし
SP811	S811	柱穴類				
SP812	S812	柱穴類				
SK813	S813	土坑	B61区	4.76		
SK814	S814	土坑	C62区	4.7		
SP815	S815	柱穴類	C63区	4.75		
SP816	S816	柱穴類	C63区	4.71		
SK817	S817	土坑	C62区	4.72	段々土跡部	
SP818	S818	柱穴類	A63区	4.35		
SK819	S819	土坑	A61区	4.76		
SK820	S820	土坑	B61区	4.69		
SP821	S821	柱穴類	C61区	4.71		
SD822	S822	柱穴類	A・B60区	5.01		
SP823	S823	柱穴類	A60区	4.69		
SP824	S824	柱穴類	A60区	4.67		
SP825	S825	柱穴類	A61区	4.74		瓦葺小皿1点
SP826	S826	柱穴類	B61区	4.7		
SP827	S827	柱穴類	B61区	4.71		
SP828	S828	柱穴類	B61区	4.88		

第1表 中世大友府内町跡第69次A調査区遺構一覧表①

本報告での 遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	検出 標高	遺構の時期	特 記 事 項
SP829	S829	柱穴類	A60区	4.7		
SP830	S830	柱穴類	A60区	4.66		
SP831	S831	柱穴類	B60区	4.73		
SP832	S832	柱穴類	C61区	4.71		
SP833	S833	柱穴類	B60区	4.73		
SP834	S834	柱穴類	B60区	4.63		
SP835	S835	柱穴類	B60区	4.62		
SP836	S836	柱穴類	B60区	4.63		
SP837	S837	柱穴類	C60区	4.61		
SP838	S838	柱穴類	B60区	4.54		
SP840	S840	柱穴類	C62区	5.07		
SP842	S841	柱穴類	B61区	4.75		
SP843	S842	柱穴類	A61区	4.76		
SP843	S843	柱穴類	C61区	4.65		
SP844	S844	柱穴類	C61区	4.72		
SP845	S845	柱穴類	B61区	4.68		
SP846	S846	柱穴類	B60区	4.73		
SP847	S847	柱穴類	B61区	4.72		
SP848	S848	柱穴類	A61区	4.76		
SP849	S849	柱穴類	B60区	4.65		
SP850	S850	柱穴類	B61区	4.63		
SP851	S851	柱穴類	B61区	4.64		
SP852	S852	柱穴類	B61区	4.65		
SP853	S853	柱穴類	B61区	4.69		
SP854	S854	柱穴類	B61区	4.63		
SP855	S855	柱穴類	B61区	4.64		
SP856	S856	柱穴類	B61区	4.65		
SP857	S857	柱穴類	B61区	4.65		
SP858	S858	柱穴類	C61区	4.64		
SP859	S859	柱穴類	C61区	4.64		
SP860	S860	柱穴類	C61区	4.6		
SP861	S861	柱穴類	C61区	4.67		
SP862	S862	柱穴類	B60区	4.67		
SP863	S863	柱穴類	B61区	4.65		
SP864	S864	柱穴類	B61区	4.66		
SP865	S865	柱穴類	B61区	4.62		
SP866	S866	柱穴類	B60区	4.57		
SP867	S867	柱穴類	C60区	4.62		
SP868	S868	柱穴類	B60区	4.58		
SP869	S869	柱穴類	B60区	4.56		
SP870	S870	柱穴類	B60区	4.6		
SP871	S871	柱穴類	B61区	4.64		
SP872	S872	柱穴類	B61区	4.65		
SP873	S873	柱穴類				
SP874	S874	柱穴類	B60区	4.59		
SP875	S875	柱穴類	B61区	4.65		
SP876	S876	柱穴類	B61区	4.65		
SP877	S877	柱穴類	B61区	4.65		
SP878	S878	柱穴類	B61区	4.67		
SP879	S879	柱穴類	B61区	4.66		
SP880	S880	柱穴類	B61区	4.65		
SP881	S881	柱穴類	B60区	4.6		
SP882	S882	溝状遺構	B・C60区	4.63	14世紀前半以前	
SP883	S883	柱穴類	B60区	4.93		
SD884	S884	柱穴類	A・B64区	4.45	A62/B3.4.51	在地系圃
SP885	S885	柱穴類	A64区	4.4		
SD886	S886	柱穴類	A64区	4.4		
SP887	S887	柱穴類	A64区	4.38		
SP888	S888	柱穴類	B64区	4.39		
SP889	S889	柱穴類	B64区	4.38		
SP890	S890	柱穴類	B60区	4.69		
SK891	S891	土坑	C60・61区	4.61		
SP892	S892	柱穴類	B61区	4.69		
SD893	S893	溝状遺構	B60・61区		14世紀後半以前	

第1表 中世大友府内町跡第69次A調査区遺構一覧表①

本報告での 遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	検出 標高	遺構の時期	特 記 事 項
SP894	S894	柱穴類	B63区	4.59		
SP895	S895	柱穴類	B61区	4.74		
SP896	S896	柱穴類	B60区	4.73		
SP897	S897	柱穴類	B60区	4.64		
SP898	S898	柱穴類	C61区	4.63		
SP899	S899	柱穴類	A60区	4.68		
SP900	S900	柱穴類	A61区	4.57		
SP901	S901	柱穴類	C61区	4.42		
SK902	S902	土坑	C62区	4.38		
SP903	S903	柱穴類	A60区	4.48		
SP904	S904	柱穴類	B60区	4.53		
SP905	S905	柱穴類	C62区	4.62		
SP906	S906	柱穴類	C62区	4.6		
SD907	S907	溝状遺構	B62区	4.98		
SP908	S908	柱穴類	B・C62区	4.7		
SP909	S909	柱穴類	B・C62区	4.72		
SP910	S910	柱穴類	C62区	4.55		
SP911	S911	柱穴類	C62区	4.68		
SP912	S912	柱穴類	C62区	4.62		
SP913	S913	柱穴類	C62区	4.63		
SP914	S914	柱穴類	B62区	4.64		
SP915	S915	柱穴類	B62区	4.61		
SP916	S916	柱穴類	B62区	4.63		
SP917	S917	柱穴類	B60区	4.56		
SP918	S918	柱穴類	B60区	4.61		
SP919	S919	柱穴類	B60区	4.63		
SP920	S920	柱穴類	B60区	4.54		
SP921	S921	柱穴類	B60区	4.57		
SP922	S922	柱穴類	B60区	4.53		
SP923	S923	柱穴類	B60区	4.57		
SP924	S924	柱穴類	A660区	4.59	4.59	
SP925	S925	柱穴類	C60区	4.59		
SP926	S926	柱穴類	B62区	4.97		
SP927	S927	柱穴類	B62区	4.8	SD907の床で検出	
SP928	S928	柱穴類	B62区	4.68	SD907の床で検出	
SP929	S929	柱穴類	B62区	4.68	SD907の床で検出	
SD930	S930	溝状遺構	B60・61区	4.59	14世紀前半～	在地系皿
SD931	S931	溝状遺構	A61～B62区	4.91		
SD932	S932	溝状遺構	B60区	4.6		
SP933	S933	柱穴類	C60区	4.59		
SP934	S934	柱穴類	C60区	4.47		
SK935	S935	土坑	C60区	4.58		天草砂岩製砥石1点
SP936	S936	柱穴類	C62区	4.79		
SP937	S937	柱穴類	A62区	4.7		
SP938	S938	柱穴類	A62区	4.68		
SP939	S939	柱穴類	A62区	4.7		
SP940	S940	柱穴類	A62区	4.66		
SP941	S941	柱穴類	B61・62区	4.69		
SP942	S942	柱穴類	A61区	4.71		
SP943	S943	柱穴類	B61区	4.65		
SP944	S944	柱穴類	B61区	4.69		
SP945	S945	柱穴類	B61区	4.65		
SP946	S946	柱穴類	B62区	4.69	石	
SP947	S947	柱穴類	B62区	4.66		
SP948	S948	柱穴類	B61区	4.45		
SP949	S949	柱穴類	A61区	4.67		
SP950	S950	柱穴類	A61区	4.71		
SP951	S951	柱穴類	A61区	4.69		
SP952	S952	柱穴類	A61区	4.68		
SK953	S953	土坑	A62区	4.65		在地系皿
SK954	S954	土坑	A61・62区	4.65		
SP955	S955	柱穴類	A62区	4.66		
SP956	S956	柱穴類	A62区	4.67		
SP957	S957	柱穴類	A62区	4.59		

第1表 中世大友府内町跡第69次A調査区遺構一覧表⑥

本報告での 遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	検出 標高	遺構の時期	特 記 事 項
SP958	S958	柱穴類	A62区	4.68		
SP959	S959	柱穴類	A62区	4.68		
SP960	S960	柱穴類	B62区	4.68		
SP961	S961	柱穴類	A62区	4.7		
SP962	S962	柱穴類	A62区	4.69		
SP963	S963	柱穴類	A62区	4.67		
SP964	S964	柱穴類	A62区	4.67		
SP965	S965	柱穴類	A62区	4.67		
SP966	S966	柱穴類	A62区	4.65		
SP967	S967	柱穴類	B62区	4.68		
SP968	S968	柱穴類	B62区	4.72		
SP969	S969	柱穴類	B62区	4.71		
SP970	S970	柱穴類	B62区	4.7		
SP971	S971	柱穴類	B62区	4.69		
SP973	S973	柱穴類	B62区	4.68		
SD974	S974	溝状遺構	A61区	4.4 m	14世紀前後	南調査区に続く
SP975	S975	柱穴類	A61区			
SP976	S976	柱穴類	A60区	4.55		
SP976	S976	柱穴類	C62区	4.71		
SP977	S977	柱穴類	A60区	4.57		
SP977	S977	柱穴類	C63区	4.61		
SP978	S978	柱穴類	C62・63区	4.72		
SP978	S978	柱穴類	A62区	4.53		
SP979	S979	柱穴類	B62区	4.64		
SP980	S980	柱穴類	C62区	4.82		
SP980	S980	柱穴類	A62区	4.52		
SP981	S981	柱穴類	A62区	4.52		
SP982	S982	柱穴類	B62区	4.57		
SP983	S983	柱穴類	B62区	4.53		
SP984	S984	柱穴類	A62区	4.52		
SP985	S985	柱穴類	A62区	4.5		
SP986	S986	柱穴類	A62区	4.46		
SP987	S987	柱穴類	B62区	4.58		
SP988	S988	柱穴類	B62区	4.63		
SP989	S989	柱穴類	B62区	4.63		
SP990	S990	柱穴類	B62区	4.64		
SD991	S991	溝状遺構	A62区	4.41		
SD992	S992	溝状遺構	A62区	4.44		
SP993	S993	柱穴類				
SP994	S994	柱穴類				
SP995	S995	溝状遺構	B62・63区	4.59		
SD995	S995	溝状遺構	A60区	4.53		
SD996	S996	溝状遺構	A60区	4.54		
SP996	S996	柱穴類	C62区	4.61		
SD997	S997	溝状遺構	A60区	4.55		
SD998	S998	溝状遺構	A60区	4.54		
SP998	S998	柱穴類	C62区	4.7		
SD999	S999	溝状遺構	B62区	4.62		
SD1000	S1000	溝状遺構	B62区	4.66		
SD1001	S1001	溝状遺構	B62区	4.62		
SB1002	S1002	溝状遺構	A・B62区	4.57		
SP1003	S1003	柱穴類	C62区	4.7		
SP1004	S1004	柱穴類	B62区	4.62		
SP1005	S1005	柱穴類	C62区	4.64		
SP1006	S1006	柱穴類	B61区	4.84		
SP1007	S1007	柱穴類	B61区	4.85		
SP1008	S1008	柱穴類	B61区	4.8		
SK1009	S1009	柱穴類	A62区	4.52		
SK1010	S1010	土坑	C62区	4.62		
SK1011	S1011	土坑	B61区	4.94		
SP1012	S1012	柱穴類	C62区	4.49		
SP1013	S1013	柱穴類				
SP1014	S1014	柱穴類	B61区	4.69		
SP1015	S1015	柱穴類	A61区	4.56		

第1表 中世大友府内町跡第69次A調査区遺構一覧表①

本報告での 遺構番号	出遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	検出 標高	遺構の時期	特 記 事 項
SD1016	S1016	講伏遺構	A62区	4.48		
SP1017	S1017	柱穴類	A61区	4.45		
SP1018	S1018	柱穴類	A61区	4.45		
SP1019	S1019	柱穴類	A61区	4.45		
SP1020	S1020	柱穴類	A62区	4.45		
SP1021	S1021	柱穴類	A62区	4.84		
SP1022	S1022	柱穴類	B61区	4.64		
SP1023	S1023	柱穴類	B61区	4.65		
SP1024	S1024	柱穴類	B61区	4.67		
SP1025	S1025	柱穴類	B61区	4.66		
SP1026	S1026	柱穴類	A62区	4.98		
SP1027	S1027	柱穴類	A62区	4.69		
SP1028	S1028	柱穴類	A62区	4.87		
SP1029	S1029	柱穴類	B62区	5.13		
SP1030	S1030	柱穴類	A62区	4.97		
SP1031	S1031	柱穴類	B62区	5.14		
SP1032	S1032	柱穴類	C60区	4.58		
SP1033	S1033	柱穴類	B62区	5		
SP1034	S1034	柱穴類	B62区	4.63		
SP1035	S1035	柱穴類	C62区	4.67		京都Ⅱ・Ⅲ期
SP1036	S1036	柱穴類	D62区	5.12		
SP1037	S1037	柱穴類	C62区	4.71		
SP1038	S1038	柱穴類	CD60区	4.58		
SK1039	S1039	土坑	D60区	4.58		
SP1040	S1040	柱穴類	C61区	4.35		
SP1041	S1041	柱穴類	B62区	4.63		
SP1042	S1042	柱穴類				
SP1043	S1043	柱穴類	D62区	4.58	C60区 4.58	
SP1044	S1044	柱穴類	C60区	4.38		
SP1045	S1045	柱穴類	B62区	4.63		
SP1046	S1046	柱穴類	B62区	4.63		
SP1047	S1047	柱穴類	B62区	4.64		
SP1048	S1048	柱穴類	C62区	4.67		
SP1049	S1049	柱穴類	C62区	4.63		
SP1050	S1050	柱穴類				
SP1051	S1051	柱穴類	C62区	4.5		
SP1052	S1052	柱穴類				
SP1053	S1053	柱穴類				
SP1054	S1054	柱穴類				
SP1055	S1055	柱穴類				
SP1056	S1056	柱穴類				
SP1057	S1057	柱穴類				
SP1058	S1058	柱穴類	A・B62区	4.33		
SP1059	S1059	柱穴類	B62/63区	4.34		
SP1060	S1060	柱穴類	B62/63区	4.45		
SK1061	S1061	土坑	B61区	4.41		
SP1062	S1062	柱穴類	B61・62区	4.39		
SP1063	S1063	柱穴類	C61区	4.63		

遺物一覽表

第2表 中世大友府内町跡第69次A調査区遺物一覧表①

探出No.	器種	生産地 (材料)	法量 (単位cm)			遺構名	出土地区・接合・他から出土した 同一個体・特徴等	
			口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚・高)			
第101図1	青磁	碗	中国	13.3		SD10	南調査区	
第101図5	染付け	陶製刷	肥前			SD18	南調査区 18世紀後半	
第101図3	青花	碗	筑後鎮			SD20	南調査区	
第101図4	銅製品	不明				SD20	南調査区	
第101図5	鉄製品	釘	在地	8.5	0.5	SD20	南調査区	
第101図6	青磁	皿		14.4		3.8	SD26	南調査区
第101図7	青花	皿	漳州窯		3.8		SD32	南調査区
第101図8	鉄製品	釘	在地	5.9	0.4	7.5g	SD32	南調査区
第101図9	鉄製品	釘	在地	9.9	0.5	6.4g	SD32	南調査区
第101図10	鉄製品	釘	在地	6.1	0.6	5.7g	SD32	南調査区
第101図11	鉄製品	釘	在地	7.2	0.3	5.5g	SD32	南調査区
第101図12	青花	碗	景德鎮	12.3			SD40	南調査区
第101図13	青磁	碗		11.6			SD41	南調査区
第101図14	青花	碗	景德鎮				SD41	南調査区
第101図15	白磁	紅皿	肥前	4.6	1.8	1.4	SD48	南調査区
第101図16	青花	皿	景德鎮					南調査区
第101図17	ガラス	玉						南調査区
第7図1	京都系土師器	皿		8.4		2.2	SK31	北調査区
第7図2	白磁	碗	中国	12.4			SK31	北調査区
第7図3	白磁	碗	中国	13.2			SK31	北調査区
第7図4	青備系土師器	碗		10.6	3.2	4.8	SK31	北調査区
第7図5	陶器	播鉢	備前焼	28.7			SK31	北調査区
第7図6	鉄製品	釘	在地	6.4	0.4	6.2g	SK31	北調査区
第7図7	銅製品	棒状		7.4	0.2	0.7g	SK31	北調査区
第7図8	銅製品	火打石	水島	3.7	1.9	14.3g	SK31	北調査区
第7図9	青花	碗	中国	12.2			SK31	北調査区
第7図10	青磁	碗	中国	13			SK31	北調査区
第7図11	青花	碗	漳州窯	12	5	6.2	SK31	北調査区
第8図12	銅製品	鉄貨	政和通宝	2.4		2.1g	SK31	北調査区
第8図13	銅製品	鉄貨	大福通宝	2.2		1.5g	SK31	北調査区
第8図14	銅製品	鉄貨	開元通宝	2.2		1.8g	SK31	北調査区
第8図15	銅製品	鉄貨				1.5g	SK31	北調査区
第8図16	銅製品	鉄貨	紹聖元宝	2.3		1.5g	SK31	北調査区
第9図1	鉄製品	釘	在地				SK32	北調査区
第9図2	鉄製品	釘	在地				SK32	北調査区
第9図3	鉄製品	釘	在地				SK32	北調査区
第9図4	鉄製品	釘	在地				SK32	北調査区
第9図5	磁器	青花皿					SK32	北調査区
第13図1	青花	皿	景德鎮	12.2	6.4	2.5	SK33	北調査区
第13図2	青花	碗	漳州窯	6.8			SK33	北調査区
第13図3	白磁	碗	中国		6.9		SK33	北調査区
第13図4	陶器	天日茶碗	瀬戸美濃	5.7	2.4	2.5	SK33	北調査区
第13図5	青花	碗	漳州窯		4.4		SK33	北調査区
第13図6	青磁	鉢	龍泉窯				SK33	北調査区
第13図7	青磁	鉢	中国				SK33	北調査区
第13図8	五彩	碗	中国				SK33	北調査区
第13図9	華南三彩	鉢	中国				SK33	北調査区
第13図10	陶器	播鉢	備前		12.7		SK33	北調査区
第13図11	瓦質土器	こね鉢		22			SK33	北調査区
第13図12	瓦質土器	火鉢					SK33	北調査区
第13図13	瓦質土器	火鉢					SK33	北調査区
第13図14	瓦質土器	火鉢					SK33	北調査区
第13図15	石製品	火打石	石英	3.2	3.2	15.8g	SK33	北調査区
第13図16	石製品	砥石	大草砂岩	13	7	254.1g	SK33	北調査区
第13図17	鉄製品	釘	在地	7.7	0.6	12.8g	SK33	北調査区
第13図18	鉄製品	刺	在地			28.4g	SK33	北調査区
第13図19	青磁	瓶	中国	5.6			SK33	北調査区
第13図20	瓦	平瓦	在地	10.5	8.7	3.8	SK33	石瓦混入
第13図21	ガラス	玉		0.35	0.4	0.1g	SK33	北調査区
第14図22	瓦	丸瓦	在地	22	14.2	2.3	SK33	北調査区

第2表 中世大友府内町跡第69次A調査区遺物一覧表②

探出No	器種	生産地 (材料)	注(単位cm)			遺物名	出土地区・接合・他から出土した 同一器種・特徴等		
			口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚・重)				
第14図23	瓦	丸瓦	在地	22.4	13.2	2.3	SK33	北調査区	
第15図24	瓦	丸瓦	在地	12	10.3	2.3	SK33	北調査区	
第42図1	在地系土師器	皿	在地	13.9	8.2	2.6	SK36	北調査区	
第42図2	在地系土師器	皿	在地	10.2	5.4	1.7	SK36	北調査区	
第42図3	京都系土師器	皿	在地	14		2.4	SK36	北調査区	
第42図4	京都系土師器	皿	在地	10.2			SK36	北調査区	
第42図5	青瓦	皿	京都府	12.7			SK36	北調査区	
第42図6	瓦質土器	火鉢	在地		32		SK36	北調査区	
第42図7	石製品	砥石	結晶片岩	10	2.4	151g	SK36	北調査区	
第42図8	石製品	上臼	安山岩	28	14.1	30.3	SK36	北調査区	
第10図1	京都系土師器	皿	在地	16		2.9	SK54	北調査区	
第11図2	京都系土師器	皿	在地	12.4		2	SK54	北調査区	
第11図3	京都系土師器	皿	在地	13.6		2.6	SK54	北調査区	
第11図4	京都系土師器	皿	在地	12		2.7	SK54	北調査区	
第11図5	京都系土師器	皿	在地	8.8		2	SK54	北調査区	
第11図6	京都系土師器	皿	在地	8.8		1.8	SK54	北調査区	
第11図7	青花	碗	中国				SK54	北調査区	
第11図8	青磁	瓶	中国		9		SK54	北調査区	
第11図9	鉄製品	刀子	在地	7.3	1.2	4.0g	SK54	北調査区	
第11図10	石製品		凝灰岩	17	22	11	SK54	北調査区	
第11図11	瓦質土器	茶碗		13.2			SK54	北調査区	
第11図12	石製品	砥石			3.8	235.6g	SK54	北調査区	
第10図14	陶器	摺鉢	備前	29	12.2	12.4	SK54	近世1期	
第109図1	京都系土師器	皿	在地	10.8		2.1	SK58	南調査区	
第109図2	白磁	皿	中国			6.8	SK58	南調査区	
第109図3	青銅製品	存		9.2 +	1.2	6.9g	SK58	南調査区	
第109図4	青花	碗	津州窯		5.4		SK58	南調査区	
第109図5	青磁	皿	中国	13			SK58	南調査区	
第109図6	摺鉢	備前	23.8	13.0	11.3		SK58	南調査区	
第109図7	陶器	摺鉢	備前	28.8	12.2	12.9		SK58	南調査区
第15図24	京都系土師器	皿	在地	8.5		1.9	SK62	北調査区	
第15図25	京都系土師器	皿	在地	8.4			SK62	北調査区	
第18図1	京都系土師器	皿	在地	11.9		2.5	SK63	北調査区	
第18図2	京都系土師器	皿	在地	11.7		2.4	SK63	北調査区	
第18図3	京都系土師器	皿	在地	8.4		2	SK63	北調査区	
第18図4	青磁	碗	中国				SK63	北調査区	
第18図5	瓦質土器	鉢					SK63	北調査区	
第18図6	瓦質土器	鉢		35.4	15	9.8	SK63	北調査区 S369	
第18図7	陶器	甕	備前				SK63	北調査区	
第18図8	石製品	上臼		33.8			SK63	北調査区	
第18図9	土師器	土師	在地	3.3	1.3	7.6g	SK63	北調査区	
第18図10	鉄製品	釘	在地	7	0.4	17.8g	SK63	北調査区	
第18図11	鉄製品	釘	在地	4.5	0.4	5.2g	SK63	北調査区	
第18図12	瓦	平瓦	在地	29	13.5	1.9	SK63	北調査区	
第19図13	陶器	甕	備前	18.9	19.5	30.2		SK63	北調査区
第21図14	鉄製品	鐵器品	在地	52	14.4	2300g		SK63	北調査区
第23図1	京都系土師器	皿	在地	13.2		2.7	SK66	北調査区	
第23図2	京都系土師器	皿	在地	12		2	SK66	北調査区	
第23図3	青花	甕	中国		3.8		SK66	北調査区	
第23図4	土師器	甕	在地				SK66	北調査区	
第23図5	土師器	土師	在地	3.5	1.6	10g	SK66	北調査区	
第105図1	鉄製品	鉾	在地			296.4g	SK67	南調査区	
第105図2	鉄製品	鉾	在地	5.5	3	9.9g	SK67	南調査区	
第105図3	鉄製品	鉾	在地	4.1	3.1	8.1g	SK67	南調査区	
第105図4	鉄製品	鉾	在地	5.4	3	12.3g	SK67	南調査区	
第105図5	銅製品	鉾					SK67	南調査区	
第105図6	銅製品	鉾					SK67	南調査区	
第105図7	銅製品	鉾		5.5	0.4	2.0g	SK67	南調査区	
第105図8	銅製品	鉾		2.1	0.3	2.7g	SK67	南調査区	

第2表 中世大友府内町跡第69次A調査区遺物一覧表③

探出No	器 種		生 産 地 (材料)	法 量 (単位:cm)			遺 構 名	出土地区・接合・他から出土した 同一個体・特徴等
				口径 (長)	底径 (輪)	器高 (厚・直)		
第105図9	土師質	十福	在地	4	1.3	5.1g	SK67	南調査区
第105図10	土師質	十福	在地	4.3	1.3	5.9g	SK67	南調査区
第105図11	青花	皿	漳州窯	14.1	6.4	2.3	SK67	南調査区
第105図12	鉄製品	皿	在地				SK67	南調査区
第106図13	銅製品	銭貨	大1元宝	2.3		1.5g	SK67	北調査区
第106図14	銅製品	銭貨				1.3g	SK67	北調査区
第59図1	在地系土師器	皿	在地	12.6	9.4	2.5	SK73	北調査区
第59図2	在地系土師器	皿	在地	12.2	6.5	2.4	SK73	北調査区
第59図3	在地系土師器	皿	在地	10	5.2	2.3	SK73	北調査区
第59図4	在地系土師器	皿	在地	12.8	2.6	6.8	SK73	北調査区
第59図5	在地系土師器	皿	在地	12.9	5.9	2.8	SK73	北調査区
第59図6	在地系土師器	皿	在地	10	5.7	2.2	SK73	北調査区
第59図7	在地系土師器	皿	在地	12.8	4.8	2.4	SK73	北調査区
第59図8	在地系土師器	皿	在地	10.5	6.3	1.9g	SK73	北調査区
第59図9	在地系土師器	皿	在地	10		2	SK73	北調査区
第60図10	在地系土師器	皿	在地	8.6	5.3	2	SK73	北調査区
第60図11	在地系土師器	皿	在地	8.3	5.3	1.9g	SK73	北調査区
第60図12	在地系土師器	皿	在地	8.3	3.2	1.8	SK73	北調査区
第60図13	在地系土師器	皿	在地	8.3	4.7	1.7	SK73	北調査区
第60図14	京都系土師器	皿	在地	14		2.2	SK73	北調査区
第60図15	京都系土師器	皿	在地	14		2.2	SK73	北調査区
第60図16	京都系土師器	皿	在地	12		2.3	SK73	北調査区
第60図17	京都系土師器	皿	在地	10.6		21	SK73	北調査区
第60図18	京都系土師器	皿	在地	10.2		1.9	SK73	北調査区
第60図19	京都系土師器	皿	在地	10.2		2.2	SK73	北調査区
第60図20	京都系土師器	皿	在地	10		2	SK73	北調査区
第60図21	京都系土師器	皿	在地	10.9			SK73	北調査区
第60図22	京都系土師器	皿	在地	10.9		2.1	SK73	北調査区
第60図23	京都系土師器	皿	在地	8.5		1.9g	SK73	北調査区
第60図24	京都系土師器	皿	在地				SK73	北調査区
第61図25	銅製品	銭貨	藤原元宝	2.3		2.0g		北調査区
第61図26	銅製品	銭貨	不明			1.1g		北調査区
	十師質	瓦		2.9	2.8	11.4g	SK74	半欠。中心を孔が貫通する。
第110図2	土師質	土師	在地	3.7	1.3	5.3g	SK97	南調査区
第110図3	土師質	土師	在地	3.8	1.3	5.1g	SK97	南調査区
第41図1	石製品	砥石	結晶片岩	12	4.8	0.6	SK126	北調査区 82.2g
第122図7	陶器	罎鉢	備前	30.4	12.6	12.8	SK130	南調査区 S779・C62区にも
第110図1	磁器	青花碗	景德鎮	13.2			SK134	南調査区
第140図1	在地系土師器	皿	在地	8.4	5.2	1.7	SK140	南調査区
第140図2	瓦質土器	罎鉢					SK140	南調査区
第128図1	京都系土師器	皿	在地	16.4		3.1	SK141	南調査区
第128図2	京都系土師器	皿	在地	12.8		3.7	SK141	南調査区
第128図3	京都系土師器	皿	在地	12.0		2.3	SK141	南調査区
第128図4	京都系土師器	皿	在地	12.0		2.4	SK141	南調査区
第128図5	京都系土師器	皿	在地	8.4		1.9	SK141	南調査区
第128図6	京都系土師器	皿	在地	9.8		2.2	SK141	南調査区
第128図7	京都系土師器	皿	在地	8.7		2.1	SK141	南調査区 煤付着
第128図8	京都系土師器	皿	在地	8.6		2.2	SK141	南調査区 煤付着
第128図9	京都系土師器	皿	在地	8.8		2.9	SK141	南調査区 煤付着
第128図10	京都系土師器	皿	在地	9.0			SK141	南調査区
第128図11	陶器	罎	備前	9.8	11.0	13.5	SK141	南調査区
第128図12	土師質	罎埴	在地	7.7		4.8	SK141	南調査区
第128図13	土師質	十福	在地	6.7	2.4	28.4g	SK141	南調査区
第128図14	陶器	罎鉢	備前	29.0	14.0	13.0	SK141	南調査区
第128図15	陶器	罎鉢	備前	27.4			SK141	南調査区
第128図16	鉄製品		在地	3.2	0.3	5.8g	SK141	南調査区
第128図17	石製品	火打石	石英	6.7	1.8	52.3g	SK141	南調査区 黒い錆が入る
第129図18	磁器	青花碗	景德鎮				SK141	南調査区
第129図19	磁器	青花碗	漳州窯				SK141	南調査区
第129図20	磁器	青磁碗	中福	10.0	4.3	3.5	SK141	南調査区

第2表 中世大友府内町跡第69次A調査区遺物一覧表④

発掘No.	器種	生産地 (材料)	法量(単位cm)			遺構名	出土地区・接合・他から出土した 同一個体・特徴等	
			口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚・重)			
第129図21	陶器	天日碗	中国	12.8		SK141	南調査区	
第129図22	磁器	青磁梅花皿	中国			SK141	南調査区	
第129図23	磁器	青磁蓋	中国	3.0	1.4	1.2	SK141	南調査区
第129図24	磁器	青花皿	神州窯	11.4	4.6	2.7	SK141	南調査区
第129図25	磁器	青磁碗	中国	13.2			SK141	南調査区
第130図26	陶器	鉢	備前	38.0			SK141	南調査区 中層砂層出土
第130図27	瓦質土器	火鉢	在地	40.0			SK141	南調査区
第130図28	瓦質土器	火鉢	在地		32.4		SK141	南調査区
第130図29	石製品	砥石	天草砂岩	8.0	4.7	115.3g	SK141	南調査区
第41図2	京都系土師器	皿	在地	13.2	5.5	2.4	SK157	北調査区
第41図3	京都系土師器	皿	在地	13.0		2.6	SK157	北調査区
第106図1	磁器	青花碗	中国		6.2		SK158	北調査区
第106図2	鉄製品	釘	在地	8.5	0.5	0.4	SK158	南調査区 10.3g
第105図3	石製品	砥石	天草砂岩	7.3	5.5	120.7g	SK158	南調査区
第25図1	銅製品	銭貨	不明	2.4		1.5g	SK159	北調査区
第24図1	京都系土師器	皿	在地	8.8		1.7	SK162	北調査区 煤付着
第24図2	瓦質土器	鍋	在地				SK168	北調査区
第23図2	銅製品	銭貨	皇東通宝	2.4		2.1g	SK169	北調査区 1088年初跡
第24図3	陶器	魚形水注	備前	2.6	5.9		SK171	北調査区
第24図4	鉄製品	釘	在地	5.0	0.3	3.2g	SK171	北調査区
第27図1	土師質	土鉢	在地	2.9	1.0	2.9g	SK184	北調査区
第105図4	瓦質土器	火鉢	在地	50.0			SK186	南調査区
第106図5	弥生土器	甕	在地	25.2			SK186	南調査区
第113図1	磁器	青磁皿	朝鮮				SK192	南調査区 白い家紋
第113図2	白磁	碗	中国	5.5			SK197	南調査区
第113図3	土師質	土鉢	在地	3.2	1.5	5.9g	SK201	南調査区
第174図1	弥生土器	甕	在地	14.6			SK205	南調査区
第113図4	石製品	紡錘車	凝灰岩	3.9	4.1	9.7g	SK207	南調査区
第113図5	弥生土器	甕	在地		5		SK207	南調査区
第174図2	縄紋土器	鉢	在地		6.4		SE208	南調査区 後晩期
第27図2	京都系土師器	皿	在地	18.4			SK210	北調査区
第29図1	銅製品	銭貨	天徳元宝	2.4		1.9g	SK211	南調査区 1023年初跡
第214図3	在地系土師器	皿	在地	13.2	4.2	2.6	SK214	南調査区
第214図4	在地系土師器	皿	在地	12	7.2	1.2	SK217	南調査区
第43図1	瓦質土器	火鉢	在地		32.5		SK221	北調査区
第43図2	瓦質土器	火鉢	在地		39		SK221	北調査区
第43図3	瓦質土器	鉢	在地		17.8		SE221	北調査区
第48図1	土師質	土鉢	在地	4	1.1	4.3g	SK242	北調査区
第49図1	銅製品	銭貨	政和通宝	2.3		1.9g	SK242	北調査区 1111年初跡
第45図1	京都系土師器	皿	在地	12.4		2.9	SK243	北調査区
第45図2	京都系土師器	皿	在地	13.1		2.2	SK245	北調査区
第45図7	鉄製品	釘	在地	7.2	0.6	0.4	SK245	北調査区 9.0g
第45図4	京都系土師器	皿	在地	13.7		2.5	SK246	北調査区
第45図5	京都系土師器	皿	在地	10		2	SK246	北調査区
第45図6	京都系土師器	皿	在地	9			SK246	北調査区
第45図8	青磁	碗	中国				SK246	北調査区
第116図1	石製品	砥石	天草砂岩	4.3	2.9	18.4g	SK252	北調査区
第116図2	石製品	砥石	納越片岩	7.7	4.0	1.3	SK252	南調査区 65.7g
第116図3	土師質	土鉢	在地	5.0	1.2	6.5g	SK252	北調査区
第116図4	土師質	土鉢	在地	5.3	1.2	8.7g	SK252	北調査区
第116図5	鉄製品	釘	在地	4.7	0.4	5.5g	SK252	北調査区
第116図6	瓦	平瓦	古代	4.2	6.2	1.6		北調査区
第116図7	弥生土器	甕	在地	14.3			SK252	北調査区
第116図8	磁器	青花皿	神州窯		5		SK252	北調査区
第118図1	磁器	青花碗	景徳窯				SK253	北調査区
第52図1	瓦質土器	鉢					SK254	北調査区
第52図2	陶器	楯鉢	備前	29.4	12.0	9.4	SK254	北調査区
第52図3	石製品	判門	凝灰岩	13.5	13.6	1.25kg	SK254	北調査区
第58図1	在地系土師器	皿	在地	9.6	5.2	1.8	SK255	北調査区
第58図2	在地系土師器	皿	在地	5	3.2	1.2	SK255	北調査区

第2表 中世大友府内町跡第69次A調査区遺物一覧表⑤

押図No	器種	生産地	注量(単位cm)			遺構名	出土地区・接合・他から出土した同一個体・特徴等	
			口径(長)	底径(幅)	高さ(厚・重)			
第58図3	京都系土師器	皿	在地	8.7	4.3	1.9	SK255	北調査区 煤付層
第58図4	磁器	碗					SK255	北調査区
第58図5	磁器	青花碗	景徳鎮		4.5		SK255	北調査区
第58図6	磁器	青花碗	景徳鎮	10.7			SK255	北調査区
第58図7	鉄製品	釘	在地	5.8	0.3	2.9g	SK255	北調査区
第58図8	鉄製品	釘	在地	5.7	0.3	5.7g	SK255	北調査区
第58図9	土師器	土鏃	在地	3.9	0.9	2.6g	SK255	北調査区
第58図10	瓦質土器	釜		40.8			SK255	北調査区
第58図11	石製品		凝灰岩	25	19.3	8.8	SK255	北調査区
第58図12	石製品	砥石	大草砂岩	7.7	4.9	109.8g	SK255	北調査区
第58図13	弥生土器	壺	在地				SK255	北調査区
第58図14	縄紋土器	鉢	在地				SK255	北調査区
第118図2	磁器	青花皿	漳州窯				SK270	南調査区
第118図4	土製	鈴		2.9	2.7	9.4g	SK271	南調査区
第118図3	陶器	挫鉢	備前	29.4	12.7	13.2	SK271	南調査区
第119図5	銅製品	銭貨		2.3		2.2g	SK271	南調査区
第120図1	京都系土師器	皿	在地	14		2	SK273	南調査区
第120図2	京都系土師器	皿	在地	12.6		2.6	SK273	南調査区
第120図3	京都系土師器	皿	在地	12.4		2.6	SK273	南調査区
第120図4	京都系土師器	皿	在地	8.8		1.8	SK273	南調査区
第120図5	京都系土師器	皿	在地	8.7		2	SK273	南調査区
第120図6	京都系土師器	皿	在地	8.8		1.8	SK273	南調査区
第120図7	京都系土師器	皿	在地	8.8		2	SK273	南調査区
第120図8	磁器		中国				SK273	南調査区
第120図9	磁器		中国				SK273	南調査区
第120図10	磁器	青花碗	景徳鎮	12.4			SK273	南調査区
第120図11	磁器	青花碗	景徳鎮	11.8			SK273	南調査区
第120図16	陶器	皿	中国	10.3	4	2.7	SK273	南調査区 茶褐色釉
第120図18	陶器	大目碗	瀬戸美濃		4.3		SK273	南調査区
第120図14	陶器	挫鉢	備前	31.0			SK273	南調査区
第120図15	磁器	青花皿	景徳鎮	14.4			SK278	南調査区
第120図17	瓦質土器	鍋					SK281	南調査区
第111図1	京都系土師器	皿	在地	8.4		2.0	SK300	南調査区
第111図2	在地系土師器	皿	在地	8.0	4.9	2.1	SK301	南調査区
第111図3	在地系土師器	皿	在地	9.0	2.3	1.7	SK303	南調査区
第64図2	鉄製品	釘		4.5	0.5	7.0g	SK321	北調査区
第64図1	瓦質土器	鍋					SK325	北調査区
第64図3	鉄製品	釘		6.5	0.6	17.4g	SK326	北調査区
第64図6	石製品	砥石		7.7	5.0	209g	SK327	北調査区
第65図1	銅製品	銭貨	元豐通宝	2.3		2.6g	SK325	1078年初鋳
第64図5	京都系土師器	皿	在地	8.2		2.0	SK330	北調査区
第122図5	縄紋土器	浅鉢	在地				SK283	北調査区
第64図3	鉄製品	釘		5.3	0.5	10.3g	SK354	北調査区
第64図3	鉄製品	釘					SK359	北調査区
第122図6	弥生土器	鉢	在地	7.5			SK365	南調査区
第30図1	京都系土師器	皿	在地	12.8		2.2	SK369	北調査区
第30図2	磁器	青花碗	景徳鎮				SK369	北調査区
第30図3	弥生土器	壺	在地				SK369	北調査区
第30図4	陶器	挫鉢	備前	28.9	9.4	14.5	SK369	交叉すり白
第64図7	在地系土師器	皿	在地	11.4	6.4	2.5	SK370	北調査区
第64図8	磁器	青花皿	景徳鎮				SK370	北調査区
第64図9	銅製品			1.7	1.4	3.5g	SK378	北調査区
第125図1	京都系土師器	皿	在地	12.4		2.1	SK382	南調査区
第125図2	磁器	白磁碗	中国				SK382	南調査区
第125図3	銅製品	小柄		5.1	1.3	7.3g	SK382	南調査区
第125図4	鉄製品	釘状		4.7	0.3	2.4g	SK382	南調査区
第125図5	鉄製品	釘		6.8	0.4	10.8g	SK382	南調査区
第125図6	磁器	青花碗	景徳鎮	12.5	4.1	5.6	SK382	南調査区

第2表 中世大友府内町跡第69次A調査区遺物一覧表④

神田№	器種	生産地 (材料)	法尺(単位cm)			造柄名	出土地区・陪合・他から出土した 同一個体・特徴等	
			口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚・重)			
第125図7	磁器	青花碗	景徳鎮		5.4	SK382	南調査区	
第125図8	磁器	青花碗	景徳鎮			SK382	南調査区	
第125図9	磁器	青花皿	景徳鎮	10.2	3.4	2.7	SK382	南調査区
第125図10	磁器	青磁香か	中国		3.2		SK382	南調査区
第125図11	陶器	甕	在地	6.0			SK382	南調査区 「木」の刻字
第125図12	瓦質土器	火鉢の脚	在地				SK385	南調査区
第125図13	土師器	メンコ	在地	3.0	2.8	8.8g	SK385	南調査区
第131図1	銅製品	銭貨	元豊通宝	2.5		2.2g	SK390	南調査区
第133図1	在地系土師器	皿	在地	10.4			SK398	南調査区
第133図2	陶器	撰鉢	備前				SK398	S40・S67・S130・S271・S382・道路跡中央93層
第133図3	陶器	撰鉢	備前		14.1		SK398	南調査区 S581も
第133図4	焼埴陶器	鉢	中国南部	28.2	14.8	10.7	SK398	南調査区 S419・S581も
第133図5	磁器	青花碗	景徳鎮	15.0	5.2		SK398	南調査区
第133図6	土師器	土鍋	在地	4.8	1.4	10.6g	SK398	南調査区
第137図1	京都系土師器	皿	在地	12.4		2.7	SK411	南調査区
第137図2	磁器	青磁碗	龍泉窯	12.0			SK411	南調査区
第137図3	磁器	青花皿		10.7			SK411	南調査区
第137図4	瓦	軒丸瓦	在地				SK411	南調査区
第137図5	瓦質土器	壺		32.0			SK411	南調査区
第134図1	焼埴の陶器	壺	中国南部	11.6	38.8		SK419	南調査区 接合SK192も
第134図2	磁器	青花碗	景徳鎮		5.2		SK438	南調査区
第36図1	在地系土師器	皿	在地	8.6	5.7	2.4	SK439	灯明皿
第36図2	京都系土師器	皿	在地	13.2		2.1	SK439	北調査区
第36図3	京都系土師器	皿	在地	10.4		2.0	SK439	北調査区
第36図4	京都系土師器	皿	在地	12.8		2.8	SK439	北調査区
第36図5	京都系土師器	皿	在地	10.4		2.3	SK439	北調査区
第36図6	京都系土師器	皿	在地	8.2		2.2	SK439	灯明皿
第36図7	磁器	白磁皿	中国	14.5	7.8	2.7	SK439	北調査区
第36図8	陶器	撰鉢	備前	28.0			SK439	北調査区
第36図9	銅製品			2.0	2.1	4.8g	SK439	北調査区
第135図1	銅製品	銭貨	祥符元宝	2.4		3.5g	SK445	北調査区
第64図10	銅製品			1.6	0.4	0.4g	SK458	北調査区
第134図5	京都系土師器	耳皿	在地	4.4	6.3		SK468	南調査区
第141図1	在地系土師器	皿	在地	12.2	7.7	2.6	SK519	南調査区 糸切後、板戸痕。京都系土師器模倣
第141図2	在地系土師器	皿	在地	12.2	7.0	2.6	SK519	糸切後、板戸痕。京都系土師器模倣
第141図3	在地系土師器	皿	在地	12.0	6.2	2.3	SK519	糸切後、板戸痕。京都系土師器模倣
第141図4	在地系土師器	皿	在地	12.0	6.8	2.7	SK519	糸切後、板戸痕。京都系土師器模倣
第141図5	在地系土師器	皿	在地	12.0	6.9	2.6	SK519	京都系土師器模倣
第141図6	在地系土師器	皿	在地	13.4	8.0	2.6	SK519	糸切後、板戸痕。京都系土師器模倣
第141図7	在地系土師器	皿	在地	12.4	7.3	2.3	SK519	糸切後、板戸痕。京都系土師器模倣
第141図8	在地系土師器	皿	在地	12.8	7.4	2.5	SK519	糸切後、板戸痕。京都系土師器模倣
第141図9	在地系土師器	皿	在地	11.6	7.6	2.3	SK519	糸切後、板戸痕。京都系土師器模倣
第141図10	在地系土師器	皿	在地	13.8	7.1	3.1	SK519	南調査区 糸切後、板戸痕
第141図11	在地系土師器	皿	在地	12.5	6.5	2.4	SK519	南調査区 糸切後、板戸痕
第142図12	在地系土師器	皿	在地	12.4	6.8	2.6	SK519	南調査区 糸切後、板戸痕。京都系土師器模倣
第142図13	在地系土師器	皿	在地	12.9	7.2	2.6	SK519	南調査区 糸切後、板戸痕。京都系土師器模倣
第142図14	在地系土師器	皿	在地	11.6	6.9	2.3	SK519	南調査区 糸切後、板戸痕。京都系土師器模倣
第142図15	在地系土師器	皿	在地	14.0	8.8	2.9	SK519	南調査区 糸切後、板戸痕
第142図16	在地系土師器	皿	在地	12.4	7.0	2.4	SK519	南調査区 糸切後、板戸痕。京都系土師器模倣
第142図17	在地系土師器	皿	在地	12.4	7.1	2.2	SK519	南調査区 糸切後、板戸痕。京都系土師器模倣
第142図18	在地系土師器	皿	在地	13.2	8.5	2.5	SK519	南調査区 糸切後、板戸痕。京都系土師器模倣
第142図19	在地系土師器	皿	在地	12.2	8.0	2.5	SK519	南調査区 糸切後、板戸痕。京都系土師器模倣
第142図20	在地系土師器	皿	在地	8.6	5.3	1.9	SK519	南調査区 糸切後、板戸痕
第142図21	京都系土師器	皿	在地	13.2		2.4	SK519	南調査区
第142図22	在地系土師器	皿	在地	8.0	5.4	1.7	SK519	南調査区 糸切後、板戸痕
第142図23	在地系土師器	皿	在地	8.6	6.0	1.7	SK519	南調査区 糸切後、板戸痕
第143図24	京都系土師器	皿	在地	12.8		1.9	SK519	南調査区
第143図25	京都系土師器	皿	在地	14.4		2.3	SK519	南調査区
第143図26	京都系土師器	皿	在地	14.2		2.8	SK519	南調査区
第143図27	京都系土師器	皿	在地	16.4		3.3	SK519	南調査区

第2表 中世大友府内町跡第69次A調査区遺物一覧表⑦

種別No.	器 種	生 産 地 (材料)	注 量 (単位cm)			遺 跡 名	出土地区・接合・他から出土した 同一個体・特徴等	
			口径 (径)	底径 (幅)	厚さ (厚・重)			
第143図28	京都系土師器	皿	在地	15.8		3.1	SK519	南調査区
第143図29	京都系土師器	皿	在地	16.4		2.5	SK519	南調査区
第143図30	京都系土師器	皿	在地	14.0		2.6	SK519	南調査区
第143図31	京都系土師器	皿	在地	12.4		2.9	SK519	南調査区
第143図32	京都系土師器	皿	在地	14.8		2.4	SK519	南調査区
第143図33	京都系土師器	皿	在地	14.8		2.4	SK519	南調査区
第143図34	京都系土師器	皿	在地	13.8		2.2	SK519	南調査区
第143図35	京都系土師器	皿	在地	12.8		2.1	SK519	南調査区
第143図36	京都系土師器	皿	在地	12.6		2.4	SK519	南調査区
第143図37	京都系土師器	皿	在地	12.8		2.3	SK519	南調査区
第143図38	京都系土師器	皿	在地	14.4		2.3	SK519	南調査区
第143図39	京都系土師器	皿	在地	12.8		2.4	SK519	南調査区 金色の装母少量
第143図40	京都系土師器	皿	在地	13.0		2.3	SK519	南調査区
第143図41	京都系土師器	皿	在地	14.4		2.6	SK519	南調査区
第143図42	京都系土師器	皿	在地	12.4		2.2	SK519	南調査区
第143図43	京都系土師器	皿	在地	12.8		2.4	SK519	南調査区
第143図44	京都系土師器	皿	在地	12.4		2.4	SK519	南調査区
第143図45	京都系土師器	皿	在地	12.4		2.1	SK519	南調査区
第143図46	京都系土師器	皿	在地	10.6		2.4	SK519	南調査区 煤付着
第143図47	京都系土師器	皿	在地	10.2		2.1	SK519	南調査区
第143図48	京都系土師器	皿	在地	10.6		2.2	SK519	南調査区
第143図49	京都系土師器	皿	在地	12.4		2.5	SK519	南調査区 煤付着
第143図50	京都系土師器	皿	在地	10.4		2.0	SK519	南調査区
第143図51	京都系土師器	皿	在地	12.6		2.3	SK519	南調査区
第143図52	京都系土師器	皿	在地	10.6		2.1	SK519	南調査区
第143図53	京都系土師器	皿	在地	12.6		2.8	SK519	南調査区
第143図54	京都系土師器	皿	在地	10.6		2.2	SK519	南調査区
第143図55	京都系土師器	皿	在地	10.8		2.1	SK519	南調査区
第143図56	京都系土師器	皿	在地	10.5		2.0	SK519	南調査区 煤付着
第143図57	京都系土師器	皿	在地	10.0		2.3	SK519	南調査区 煤付着
第143図58	京都系土師器	皿	在地	8.8		2.1	SK519	南調査区 煤付着
第143図59	京都系土師器	皿	在地	10.5		2.2	SK519	南調査区
第143図60	京都系土師器	皿	在地	10.4		2.1	SK519	南調査区
第143図61	京都系土師器	皿	在地	8.8		2.1	SK519	南調査区
第143図62	京都系土師器	皿	在地	9.0		2.2	SK519	南調査区 内外面に煤付着
第143図63	京都系土師器	皿	在地	8.8		2.2	SK519	南調査区
第143図64	京都系土師器	皿	在地	9.0		2.1	SK519	南調査区
第143図65	京都系土師器	皿	在地	8.4		2.0	SK519	南調査区
第143図66	京都系土師器	皿	在地	8.6		2.0	SK519	南調査区
第143図67	京都系土師器	皿	在地	8.6		2.0	SK519	南調査区 外面に煤付着
第143図68	京都系土師器	皿	在地				SK519	南調査区
第143図69	京都系土師器	皿	在地	5.0		1.9	SK519	南調査区
第143図70	京都系土師器	皿	在地	4.4	6.2	2.1	SK519	南調査区
第144図71	京都系土師器	皿	在地	3.3	3.5	12.2g	SK519	南調査区
第144図72	陶器	四耳壺	備前		6.1		SK519	南調査区 S750にも
第144図73	陶器	鉢	備前	21.0	7.5	13.0	SK519	南調査区
第144図74	陶器	播鉢	備前	19.0	10.0	9.3	SK519	南調査区 柳殻は10木
第144図75	瓦質土器	火鉢	在地				SK519	南調査区
第144図76	銅製品	柄杓		7.6		1.9	SK519	南調査区 72.3g
第144図77	瓦質土器	火鉢	在地	47.8	46.2	10.8	SK519	南調査区
第144図78	瓦質土器	風炉	在地			4.1	SK519	南調査区
第144図79	石製品	五輪塔		13.6	11.8		SK519	南調査区
第144図80	鉄製品			29.2	0.6	30.6g	SK519	南調査区
第144図81	鉄製品	釘		4.7	0.3	4.6g	SK519	南調査区
第144図82	鉄製品	釘		6.5	0.4	12.9g	SK519	南調査区
第145図83	磁器	青花皿	景德鎮			7.6	SK519	南調査区
第145図84	磁器	青花碗	景德鎮				SK519	南調査区
第145図85	磁器	青花碗	景德鎮				SK519	南調査区
第145図86	磁器	碗	中国			3.8	SK519	南調査区
第145図87	磁器	白磁皿	中国	13.4	7.9	3.2	SK519	南調査区

第2表 中世大友府内町跡第69次A調査区遺物一覧表⑧

神図№	器種	生産地 (材料)	法量(単位cm)			遺構名	出土地区・接合・他から出土した 同一個体・特徴等	
			口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚・重)			
第145図88	陶器	皿	10.2		2.5	SK519	南調査区	
第33図6	石製品	容器	20.2	14	5	SK544	北調査区	
第32図1	磁器	白磁碗		7		SK548	円形に加工	
第34図1	在地系土師器	皿	11.7	5.1	2.5	SK566	京都系土師器を模倣したもの	
第34図2	京都系土師器	皿	12.6	4.5	2.5	SK566	北調査区	
第34図3	京都系土師器	皿	12.4		2.7	SK566	北調査区	
第34図4	京都系土師器	皿	12.8		2.1	SK566	外面に煤付着	
第34図5	京都系土師器	皿	9.3		2.2	SK566	北調査区	
第34図6	京都系土師器	皿	8.8		2.2	SK566	北調査区	
第53図1	京都系土師器	皿	12.6		2.3	SK557	内面に煤付着	
第53図2	京都系土師器	皿	11.9		2.7	SK557	北調査区	
第53図3	京都系土師器	皿	8.5		2.2	SK557	北調査区	
第53図4	京都系土師器	皿	8.8		2.0	SK557	北調査区	
第53図5	磁器	白磁皿	12.6	7.8	4.6	SK557	北調査区	
第54図1	銅製品	銭貨	2.3		3.1R	SK557	北調査区	
第56図1	磁器	青花皿				SK566	北調査区	
第56図2	鉄製品	釘	中国	0.4	7.0g	SK370	北調査区	
第147図6	土師器	碗	古備系	11.2	5.9	5.6	SK586	南調査区
第147図1	磁器	青花碗	景徳鎮				SK587	南調査区
第147図2	土師器	土鉢	在地	4.9	1.3	7.2g	SK587	北調査区
第147図3	土師器	土鉢	在地	3.8	1.5	5.2g	SK587	南調査区
第147図4	鉄製品	釘	中国	7.0	0.7	8.5g	SK587	南調査区
第147図5	瓦質土器	捕鉢		29.0	14.3	9.8	SK587	南調査区 見込みのすり目は最後
第56図3	鉄製品	皿	在地	11.2	5.5	2.5	SK588	南調査区
第56図4	京都系土師器	皿	中国	16.0	0.8	31.2g	SK620	北調査区
第56図5	京都系土師器	皿	在地	13.4	2.4	2.4	SK623	北調査区
第56図6	京都系土師器	皿	在地	13.4	2.4	2.4	SK623	北調査区
第56図7	京都系土師器	皿	在地	12.8	2.4	2.4	SK623	北調査区
第56図8	京都系土師器	皿	在地	14	2.4	2.4	SK624	北調査区
第56図9	京都系土師器	皿	在地	13.7	2.0	2.0	SK624	北調査区
第67図1	在地系土師器	皿	在地	10.4	5.6	1.9	SK636	北調査区
第67図2	折衷系土師器	皿	在地	14.0	7.1	2.0	SK637	内面段々、外面糸切難し
第134図3	京都系土師器	皿	在地	10.2			SK658	南調査区
第134図4	京都系土師器	皿	在地	10.4		2.2	SK668	南調査区
第67図6	磁器	白磁皿	中国				SK702	北調査区
第70図1	瓦質土器	火鉢	在地	38.0			SK706-4	北調査区
第67図3	在地系土師器	皿	在地	12.0	8.4	3.5	SK708	北調査区
第67図4	在地系土師器	皿	在地	11.4	8.5	2.8	SK709	糸切痕、取付痕
第67図5	石製品			3.7	0.4		SK709	緑色の石
第72図1	瓦質土器	甕		49.2			SK718-3	北調査区
第72図2	瓦質土器	捕鉢		30.7			SK718	接合 SK750 + SK751
第153図1	瓦質土器	捕鉢	在地	30.0	11.0	13.3	SK733	南調査区
第153図2	石製品	紡錘車	在地	4.0	4.0	11.6g	SK733	南調査区
第153図3	石製品	紡錘車	在地	4.2	2.3	6.2g	SK733	南調査区
第79図1	在地系土師器	皿	在地	12.8	8.6	3.8	SD750	北調査区
第79図2	在地系土師器	皿	在地	12.2	8.6	3.0	SD750	底面に板圧痕
第79図3	在地系土師器	皿	在地	11.8	8.4	3.4	SD750	北調査区
第79図4	在地系土師器	皿	在地	14.2	9.0	4.2	SD750	北調査区
第79図5	在地系土師器	皿	在地	11.7	8.6	3.0	SD750	北調査区
第79図6	在地系土師器	皿	在地	13.2	8.2	4.4	SD750	底面に板圧痕
第79図7	在地系土師器	皿	在地	13.2	8.6	3.7	SD750	北調査区
第79図8	在地系土師器	皿	在地	12.0	7.3	3.9	SD750	北調査区
第79図9	在地系土師器	皿	在地	12.7	7.6	3.9	SD750	北調査区
第79図10	在地系土師器	皿	在地	7.8	6.4	1.2	SD750	北調査区
第79図11	在地系土師器	皿	在地	8.0	6.6	1.2	SD750	北調査区
第79図12	在地系土師器	皿	在地	8.0	6.7	1.3	SD750	北調査区
第79図13	在地系土師器	皿	在地	8.0	6.7	1.3	SD750	北調査区
第79図14	在地系土師器	皿	在地	9.0	7.5	1.3	SD750	北調査区
第79図15	京都系土師器	皿	在地	4.9		1.5	SD750	北調査区
第79図16	京都系土師器	皿	在地	16.0		2.5	SD750	北調査区

第2表 中世大友府内町跡第69次A調査区遺物一覧表④

押込No	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	出土地区・接合・他から出土した 同一層位・特徴等	
			口径 (径)	底径 (幅)	高さ (厚・高)			
第79図17	磁器	中国				SD750	77次S1202と接合	
第79図18	磁器	中国				SD750	前後17.2cm	
第79図19	磁器	中国			9.2	SD750	北調査区	
第80図20	磁器	青磁碗	龍泉窯	16.0		SD750	北調査区	
第80図21	磁器	青磁碗	龍泉窯	15.6		SD750	北調査区	
第80図22	磁器	青磁碗	龍泉窯		5.5	SD750	北調査区	
第80図23	磁器	青白磁蓋	中国			SD750	北調査区	
第80図24	磁器	白磁皿	中国	8.6	4.1	2.2	SD750	北調査区
第80図25	磁器	白磁碗	中国			SD750	北調査区	
第80図26	磁器	青磁合子	中国	6.2		1.9	SD750	北調査区
第80図27	磁器	青白磁蓋	朝鮮			SD750	北調査区	
第81図28	陶器	卍皿	瀬戸美濃	28	7.4		SD750	北調査区
第81図29	陶器	卍皿	瀬戸美濃				SD750	北調査区
第81図30	陶器	卍皿	瀬戸美濃				SD750	北調査区
第81図31	陶器	卍皿	瀬戸美濃				SD750	北調査区
第81図32	陶器?				4.2		SD750	北調査区
第81図33	陶器	卍皿	瀬戸美濃				SD750	北調査区
第81図34	磁器	青磁碗	龍泉窯		8		SD750	77次S1211と接合
第81図35	磁器	青磁碗	龍泉窯		7.7		SD750	北調査区
第81図36	瓦質土器	皿		15.7	4.2	4.8	SD750	北調査区
第81図37	瓦質土器	こね鉢		28.0			SD750	北調査区
第81図38	瓦質土器	甕		41.4			SD750	北調査区
第81図39	瓦質土器	甕		30.4			SD750	北調査区
第81図40	瓦質土器	鍋		36.6			SD750	北調査区
第82図41	陶器	漆鉢	備前	28.0			SD750	北調査区
第82図42	陶器	漆鉢	備前				SD750	北調査区
第82図43	陶器	甕	備前				SD750	北調査区
第82図44	陶器	鉢	備前	21.2	12.6	7.2	SD750	北調査区
第82図45	陶器	甕	常滑	43.0			SD750	北調査区
第82図46	須恵質	こね鉢	東播磨	28.1	10.0	11.9	SD750	北調査区
第82図47	須恵質	こね鉢	東播磨	28.8	12.0	7.2	SD750	北調査区
第82図48	弥生土器	甕	在り	12.0			SD750	北調査区
第82図49	土師質	土鍋	在り	3.8	1.0	4.2g	SD750	北調査区
第83図50	瓦	軒丸瓦	在り	18.7	11.9	1.9	SD750	北調査区
第83図51	石製品	砥石	天草砂岩	10.8	5.0	1.2	SD750	北調査区
第83図52	鉄製品	釘	中国	5.8	0.4	6.0g	SD750	北調査区
第83図53	鉄製品	釘	中国	6.5	0.4	18.4g	SD750	北調査区
第83図54	鉄製品	釘	中国	6	0.7	6.3g	SD750	北調査区
第83図55	鉄製品	釘	中国	6.8	0.5	6.0g	SD750	北調査区
第83図56	鉄製品	釘	中国	5.6	0.4	8.1g	SD750	北調査区
第83図57	鉄製品	釘	中国	9.2		30.8g	SD750	北調査区
第83図58	鉄製品	釘	中国	7.2	0.6	13.8g	SD750	北調査区
第84図59	銅製品	銭貨	不明	2.4		1.9g	SD750	北調査区
第84図60	銅製品	銭貨	政和通宝	2.4		3.0g	SD750	北調査区
第84図61	銅製品	銭貨	カン平元寶	2.4		2.8g	SD750	988年初鋳
第84図62	銅製品	銭貨	皇宋通宝	2.3		2.8g	SD750	北調査区
第84図63	銅製品	銭貨	元祐通宝	2.3		3.3g	SD750	1086年初鋳
第155図1	瓦質土器	こね鉢		28.1			SD751	南調査区
第155図2	鉄製品	釘		7.3	0.5	7.8g	SD751	南調査区
第156図3	銅製品	銭貨	不明	2.4		1.3g	SD751	南調査区
第156図4	銅製品	銭貨	元符通宝	2.4		2.6g	SD754	南調査区 1098年初鋳
第157図1	陶器	急須					SD754	南調査区
第157図2	在地系土師器	皿	在り	8.6	6.6	1.4	SK773	南調査区
第122図1	京都系土師器	皿	在り	13.4		2.4	SK779	南調査区
第122図2	京都系土師器	皿	在り	12.6		2.6	SK779	南調査区
第122図3	磁器	白磁皿	中国	15.2	8.1	3.0	SK779	南調査区
第122図4	焼締磁器	鉢	中国				SK779	南調査区
第75図1	銅製品	銭貨	中国	2.3		2.9g	SK780	1023年初鋳
第157図3	陶器	甕	中国				SK799	南調査区
第149図1	在地系土師器	皿	在り	11.6	6.2	2.6	SK817	南調査区

第2表 中世大友府内町跡第69次A副産区遺物一覧表①

発掘No	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	出土地区・接合・他から出土した同一個体・特徴等	
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚・深)			
第150図2	銅製品	銭貨	楕円下宝	2.4		2.9g	SK817	南調査区 1034年初層
第88図2	土師土器	甕	吉備系	10.0	4.0	2.4	SK826	北調査区
第165図1	在地系土師器	皿	在地	9.2	7.2	1.4	SK884	南調査区
第165図2	瓦質土器						SE884	南調査区道路中央23層にも
第165図3	銅製品	釘状		4.6	0.4	3.5g	SE884	南調査区
第165図4	銅製品	刀子		8.6	1.3	21.3g	SK884	南調査区
第165図5	石製品		赤岡石	8.7	8.3	250.7g	SK884	南調査区 溝を削って作り、切断
第165図6	弥生土器	高杯	在地				SK884	
第166図7	銅製品	銭貨	不明	2.4		5.0g	SK894	南調査区
第168図1	銅製品	銭貨	梓杵元宝	2.4		2.4g	SK913	南調査区
第87図1	在地系土師器	皿	在地	12.3	9.0	2.4	SK930	北調査区
第87図2	在地系土師器	皿	在地	12.0	9.0	3.0	SK930	北調査区
第87図3	在地系土師器	皿	在地	7.6	6.2	1.1	SK930	北調査区
第87図4	在地系土師器	皿	在地	8.4	7.3	1.1	SK930	北調査区
第87図5	在地系土師器	皿	在地	8.4	7.3	1.1	SK930	北調査区
第87図6	瓦質土器	甕		21.0			SK930	北調査区
第87図7	弥生土器	高杯	在地				SK930	北調査区
第87図8	磁器	青磁碗	中国		5.4		SK930	北調査区
第88図1	石製品	砥石	天草砂岩	6.4	3.8		SE935	224.2g
第162図1	在地系土師器	皿	在地	8.4	7.4	1.2	SK953	南調査区
第162図2	磁器	青磁碗	中国		6.0		SE979	南調査区
第162図4	陶器	甕	富得				SE991	南調査区
第162図5	銅製品	銭貨	不明	2.4		2.0g	SK991	南調査区
第162図3	京都系土師器	皿	在地	8.8		1.8	SP1034	南調査区
第178図1	在地系土師器	皿	在地	12.0	6.3	2.0	A126	京都市土師器横敷
第178図2	在地系土師器	皿	在地	9.0	3.6	1.7	A279	南調査区
第178図3	在地系土師器	皿	在地	12.0	4.0	2.8	A259	南調査区 京都系土師器横敷
第178図4	在地系土師器	皿	在地	11.6	7.0	2.4	A371	南調査区 京都系土師器横敷
第178図5	在地系土師器	皿	在地		6.8		A316	南調査区
第178図6	在地系土師器	皿	在地	13.3	6.6	2.4	A353	南調査区
第178図7	在地系土師器	皿	在地	9.4	5.4	2.0	A443	南調査区
第178図8	在地系土師器	皿	在地	12.0	6.1	2.3	A530	南調査区
第178図9	在地系土師器	皿	在地	11.6	6.8	2.3	A375	南調査区 京都系土師器横敷
第178図10	在地系土師器	皿	在地	12.0	4.5	2.6	A589	南調査区 京都系土師器横敷
第178図11	在地系土師器	皿	在地	12.2	6.9	2.5	A545	南調査区 京都系土師器横敷
第178図12	在地系土師器	皿	在地	12.0	6.4	2.6	A543	南調査区 京都系土師器横敷
第179図1	京都系土師器	皿	在地	17.4		2.2	95層	南調査区
第179図2	京都系土師器	皿	在地	12.1		2.1	95層	南調査区
第179図3	京都系土師器	皿	在地	10.4		2.2	D62区	南調査区
第179図4	京都系土師器	皿	在地	12.5		2.3	92層	南調査区 貸付倉
第179図5	京都系土師器	皿	在地	12.1	4.5	3.2	北部黒土層	南調査区
第179図6	京都系土師器	皿	在地	13.6		2.5	90層	南調査区
第179図7	京都系土師器	皿	在地	12.0		2.3	91層	南調査区
第179図8	京都系土師器	皿	在地	12.0		2.5	95層	南調査区
第179図9	京都系土師器	皿	在地	12.0		2.4	北部黒土層	南調査区
第179図10	京都系土師器	皿	在地	10.2		2.1	A246	南調査区
第179図11	京都系土師器	皿	在地	8.8		1.9	A60区	南調査区
第179図12	京都系土師器	皿	在地	8.7		2.1	北部黒土層	南調査区
第179図14	在地系土師器	燗台	在地		5.6		C62区	南調査区
第179図15	在地系土師器	燗台	在地		5.4		C62区	南調査区
第179図16	在地系土師器	燗台	在地	7.0	3.6	6.6	道路中央	南調査区 93層
第179図17	在地系土師器	皿	在地	11.6	6.4	2.2	A351	南調査区
第179図18	在地系土師器	皿	在地	10.8	6.4	1.9	51層	南調査区 京都系土師器横敷
第179図19	在地系土師器	皿	在地	11.6	6.4	2.2	A347	南調査区 京都系土師器横敷
第179図20	在地系土師器	皿	在地	6.2	5.0	1.9	C61区	南調査区
第179図21	在地系土師器	皿	在地	11.2	5.9	2.9	A271	南調査区
第180図1	在地系土師器	皿	在地	9.0	4.5	1.5	A646	南調査区
第180図2	在地系土師器	皿	在地	12.6	6.8	2.2	A640	南調査区 京都系土師器横敷
第180図3	在地系土師器	皿	在地	9.8	2.3	1.9	A635	南調査区 京都系土師器横敷
第180図4	在地系土師器	皿	在地	10.6	3.0	2.3	A630	南調査区 京都系土師器横敷

第2表 中世大友府内町跡第69次A調査区遺物一覧表①

神図No	器 種	生 産 地 (材料)	法 量 (単位cm)			遺 構 名	出上地区・接合・他から出上した 同一器体・特徴等	
			口径 (長)	底径 (幅)	器厚 (厚・重)			
第180図5	在地系土師器	皿	在地	9.2	8.6	1.7	A624	南調査区 京都系土師器模倣
第180図6	在地系土師器	皿	在地	13.0	10.6	2.6	A655	南調査区
第180図7	在地系土師器	盥台	在地		6.6	6.2	A363	南調査区
第180図8	在地系土師器	盥台	在地			7.7	A500	南調査区
第180図9	在地系土師器	皿	在地	7.2	4.4	1.9	A643	南調査区
第180図10	折衷系土師器	皿	在地				A530	南調査区 京都系土師器模倣
第181図1	京都系土師器	皿	在地	10.7		1.7	A20/24/33	南調査区
第181図2	京都系土師器	皿	在地	10.4		2.2	A286	南調査区
第181図3	京都系土師器	皿	在地	10.6		2.1	A107	南調査区
第181図4	京都系土師器	皿	在地	10.7		2.2	A217	南調査区 煤付黄
第181図5	京都系土師器	皿	在地	12.0		2.2	A229	南調査区
第181図6	京都系土師器	皿	在地	14.1		2.2	A217	南調査区
第181図7	京都系土師器	皿	在地	12.6		2.1	A652	南調査区
第181図8	京都系土師器	皿	在地	11.0		2.2	A227	南調査区
第181図9	京都系土師器	皿	在地	13.1		2.5	A532	南調査区
第181図10	京都系土師器	皿	在地	13.1		2.5	A626	南調査区
第181図11	京都系土師器	皿	在地	10.5		2.3	A30	南調査区
第181図12	京都系土師器	皿	在地	12.4		2.4	A551	南調査区
第181図13	京都系土師器	皿	在地	12.4		2.4	A281	南調査区
第181図14	京都系土師器	皿	在地	10.4		3.5	A497	南調査区
第181図15	京都系土師器	皿	在地	12.8		2.4	A430	南調査区
第181図16	京都系土師器	皿	在地	13.0		2.5	A627	南調査区
第181図17	京都系土師器	皿	在地	13.2		2.1	A487	南調査区
第181図18	京都系土師器	皿	在地	14.4		2.2	A489	南調査区
第181図19	京都系土師器	皿	在地	12.8		2.2	A623	南調査区
第181図20	京都系土師器	皿	在地	14.0		3.3	A108	南調査区
第181図21	京都系土師器	皿	在地	12.7		2.9	A310	南調査区
第181図22	京都系土師器	皿	在地	8.4		2.2	A2-128	南調査区 煤付黄
第181図24	京都系土師器	皿	在地	8.8		1.9	A247	南調査区
第181図25	京都系土師器	皿	在地	9.2		2.2	A568	南調査区
第181図26	京都系土師器	皿	在地	8.6		2.0	A436	南調査区
第181図27	京都系土師器	皿	在地	9.2		2.0	A439	南調査区
第181図28	京都系土師器	皿	在地	10.0		2.2	A629	南調査区
第181図29	京都系土師器	皿	在地	3.9		1.7	A531	南調査区
第182図1	磁器	青花碗	中国	14.5	6.4	6.0	S254	南調査区
第182図2	磁器	青花碗	中国			5	A140	南調査区
第182図3	磁器	青花皿	中国	12.0	6.4	3.0	A244	南調査区
第182図4	磁器	青花皿	景德鎮				A426	南調査区
第182図5	陶器	陶器	華南三彩				A69	南調査区
第182図6	陶器	陶器	華南三彩				A95	南調査区
第182図7	陶器	陶器	華南三彩				A163	南調査区
第182図8	磁器	青磁碗	中国			5.8	A634	南調査区
第182図9	磁器	青磁鉢	中国	11.6	5.0	3.1	A649	南調査区
第182図10	磁器	青磁香炉	中国			5.0	A60	南調査区
第182図11	磁器	青磁皿	小国	14.0			A573	南調査区
第182図12	磁器	青磁皿	越州窯			7.5	A226	南調査区
第182図13	磁器	青磁皿	中国				A61	南調査区
第182図14	磁器	青磁皿	中国	11.8			A62	南調査区
第182図15	磁器	青磁	中国				A299	南調査区
第182図16	陶器	碗	朝鮮			5.6	A390	南調査区 見込みに砂目模み跡
第182図17	陶器	おろし皿	瀬戸美濃			6.0	A61	南調査区 道路版築土
第182図18	磁器	碗	高麗				A503	南調査区
第182図19	陶器	船徳利	朝鮮	5.9			A239	南調査区 75次S381も同一器体
第182図20	磁器	白磁皿	小国	20.0			A236	南調査区
第182図21	磁器	白磁皿	中国	11.8			A298	南調査区
第182図22	磁器	白磁皿	中国			6.0	A148	南調査区
第183図1	陶器	壺	備前	14.2	19.0	39.6	A576	南調査区
第183図2	陶器	壺	備前			20.0		南調査区
第183図3	陶器	壺	備前					南調査区
第184図1	陶器	壺鉢	備前	19.8			A274	南調査区

第2表 中世大友府内町跡第69次A調査区遺物一覧表②

探出No.	器 種	生産地 (材料)	法量(単位cm)			遺構名	出土地区・様合・他から出土した 同一個体・特徴等	
			口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚・重)			
第184図2	陶器	備前	22.7	11.0	10.5	A308・604	南調査区 すり目8木	
第184図3	陶器	備前	28.2	11.0	10.6	A278・533	南調査区 537～539	
第184図4	陶器	備前				A348	南調査区 交又すり目	
第184図5	陶器	備前				A611	南調査区	
第185図1	須虫器	こね鉢	29.3	11.0	8.0	A60・645	南調査区	
第185図2	瓦質土器	こね鉢	30.0	23.0	9.5	A454・457・458・608	南調査区	
第185図3	瓦質土器	鉢	14.4			A257	南調査区	
第185図4	瓦質土器	鉢		12.0		A280	南調査区	
第185図5	瓦質土器	火鉢				A133・390・391	393～397・406・75次S204-2	
第185図6	瓦質土器	火鉢				A477	南調査区	
第185図7	瓦質土器	鉢				A98	南調査区	
第185図8	瓦	軒丸瓦	中国			A609	南調査区	
第186図2	瓦	平瓦	中国	16.2	9.7	1.8		南調査区
第186図3	鉄製品	釘	中国	6.1	0.5	15.8g	A121	南調査区
第186図4	鉄製品		中国	8.6	1.1	20.2g	A504	南調査区
第186図5	銅製品	板状製品		2.3	1.7	1.8g	A118	南調査区
第186図6	石製品	砥石	天草砂岩	6.2	3.6	119.3g	A478	南調査区 四面使用
第186図7	石製品	砥石	結晶片岩	11.0	3.6	87.5g	A44	南調査区
第186図8	石製品	砥石	天草砂岩	13.0	5.9	245.3g	A556	南調査区
	ガラス	玉		0.4	0.2	0.1g	A580	南調査区 淡い黄色
第187図1	在地系土師器	皿	在地	12.8	8.4	3.5	20層	南調査区 道路中央断面前段
第187図2	在地系土師器	皿	在地	12.0	7.2	3.0	52層	南調査区
第187図3	在地系土師器	皿	在地	11.4	9.1	3.7	20層	南調査区 板圧痕
第187図4	在地系土師器	皿	在地	10.4	6.0	2.6	C61区	南調査区
第187図5	在地系土師器	皿	在地	12.0	9.8	3.5	25層	南調査区
第187図6	在地系土師器	皿	在地	12.6	8.0	3.5	2層	南調査区
第187図7	在地系土師器	皿	在地	12.7	9.9	3.2	2断面5～8層	南調査区
第187図8	在地系土師器	皿	在地	12.2	8.0	2.6	70層	南調査区 板圧痕
第187図9	在地系土師器	皿	在地	10.6	5.4	2.0	C62区	南調査区
第187図10	在地系土師器	皿	在地	12.4	7.5	2.2	D61区	南調査区 板圧痕
第187図11	在地系土師器	皿	在地	8.4	7.0	1.3	52・67層	南調査区
第187図12	在地系土師器	皿	在地	8.4	6.2	1.4	83層	南調査区
第187図13	在地系土師器	皿	在地	8.4	6.8	1.3	52層	南調査区
第187図14	在地系土師器	耳皿	在地	3.6	2.4		D61区	南調査区
第188図1	在地系土師器	皿	在地	12.7	10.0	3.0	A62区	南調査区
第188図2	在地系土師器	皿	在地	12.6	10.1	3.0	A62区	南調査区
第188図3	在地系土師器	皿	在地	12.6	8.4	3.4	B61区	南調査区
第188図4	在地系土師器	皿	在地	12.0	7.9	3.3	A62区	南調査区
第188図5	在地系土師器	皿	在地	13.8	6.4	2.3	B61区	南調査区
第188図6	在地系土師器	皿	在地	13.2	9.7	2.6	C60区	南調査区
第188図7	在地系土師器	皿	在地	8.8	7.5	1.4	A62区	南調査区
第188図8	在地系土師器	皿	在地	8.3	7.3	1.3	A62区	南調査区
第188図9	在地系土師器	皿	在地	8.7	3.0	1.3	B61区	南調査区
第188図10	在地系土師器	皿	在地	8.7	4.6	2.2	A62区	南調査区 煤付着
第188図11	在地系土師器	皿	在地	7.8	4.6	1.9	A62区	南調査区
第188図12	在地系土師器	皿	在地	4.6	3.0	1.2	B60区	南調査区 内面に段状のロクロ目
第188図13	在地系土師器	燗台	在地	6.5	6.4		B62区	南調査区
第188図14	在地系土師器	燗台	在地		7.0		B61区	南調査区
第189図1	在地系土師器	皿	在地		3.2		C60区上層層	南調査区 京都系土師器模倣
第189図2	在地系土師器	皿	在地	12.3	6.0	2.7	B61区	南調査区
第189図3	在地系土師器	皿	在地	12.0	6.7	2.3	B61区	南調査区
第189図4	在地系土師器	皿	在地	8.8	5.0	1.8	B62区	南調査区 煤付着
第189図5	京都系土師器	皿	在地	12.4		2.3	C60区	南調査区
第189図6	京都系土師器	皿	在地	12.8		2.5	C60区	南調査区
第189図7	京都系土師器	皿	在地	15.8		2.3	A617	南調査区
第189図8	京都系土師器	皿	在地	16.0		2.2	C60区	南調査区
第189図9	京都系土師器	皿	在地	16.0		2.0	C60区	南調査区
第189図10	京都系土師器	皿	在地	18.0		2.1	C60区	南調査区
第189図11	京都系土師器	皿	在地	11.2		1.8	B61区	南調査区
第189図12	京都系土師器	皿	在地	11.3		2.1	C60区	南調査区

第2表 中世大友府内町跡第69次A調査区遺物一覧表③

探出No	器種	生産地 (材料)	重量(単位cm)			遺構名	出上地区・接合・他から出土した 同一個体・特徴等
			口径 (長)	底径 (幅)	高さ (厚・重)		
第189図13	京都系土師器	皿	在地	12.4		1.9	C60区 南調査区
第189図14	京都系土師器	皿	在地	11.9		1.9	B60区 南調査区
第189図15	京都系土師器	皿	在地				南調査区
第189図16	京都系土師器	皿	在地				南調査区
第190図1	磁器	青花碗	景徳鎮		5.0		B61区 南調査区
第190図2	磁器	青花皿	景徳鎮		11.0		C61区 南調査区
第190図3	磁器	五彩皿	中国				Q60区 B地点
第190図4	磁器	青花皿	?州窯	11.8			92層 南調査区
第190図5	磁器	青花皿	景徳鎮				C60区 南調査区
第190図6	磁器	青花皿	景徳鎮				南調査区
第190図7	磁器	青花皿	景徳鎮		2.5		C60区 南調査区
第190図8	磁器	五彩皿	中国				B60区 南調査区
第190図9	磁器	青花碗	景徳鎮				A60区 南調査区
第190図10	磁器	青花碗	景徳鎮				C60区 南調査区
第190図11	磁器	白磁皿	中国				C61区 南調査区
第190図12	磁器	青磁皿	中国				C61区 南調査区
第190図13	磁器	青磁皿	中国				D61区 南調査区
第190図14	磁器	白磁皿	中国	10.6	5.6	2.3	D61区 南調査区
第190図15	磁器	白磁皿	中国	12.4	6.4	3.2	C62区 南調査区
第190図16	磁器	青磁皿	中国	13.4			D61区2層 南調査区
第190図17	磁器	青磁皿	中国				79層 南調査区
第190図18	磁器	白磁猪口	中国	6.6	2.3	2.9	A62区 南調査区
第190図19	陶器?						B62区 南調査区 オリーブ灰色
第190図20	磁器	青磁菊花皿					B61区 南調査区
第190図21	磁器	青磁皿	同安窯				16層 南調査区 楊漆き
第190図22	磁器	青磁瓶	中国				A296 南調査区 把手
第190図23	陶器?	おろし皿	瀬戸美濃		6.6		C60区 南調査区
第190図24	磁器	白磁皿	中国				検出面 北調査区
第190図25	磁器	白磁菊花皿	中国	12.0			C60区 南調査区
第190図26	磁器	白磁皿	中国		5.5		A160 南調査区
第190図27	磁器	白磁皿	中国	6.4	2.0	1.0	B61区 南調査区
第190図28	磁器	白磁皿	中国		2.2		C60区 南調査区
第190図29	陶器		華南三彩				A61区 南調査区
第190図30	陶器		華南三彩				A61区 南調査区
第190図31	陶器		華南三彩				A61区 南調査区
第190図32	陶器		華南三彩				A61区 南調査区
第190図33	陶器	盤	華南三彩				A60区 南調査区
第190図34	陶器	盤	華南三彩				A60区 南調査区
第190図35	陶器	盤	華南三彩				A60区 南調査区
第190図36	陶器	鉢	瀬戸美濃				A60区 南調査区
第190図37	陶器	瓶	古瀬戸				A641 南調査区
第191図1	磁器	青花碗	景徳鎮	12.4			B61区 南調査区 75次一併・77次100区も磁器あり
第191図2	磁器	青花碗	景徳鎮	12.0			C61区 南調査区
第191図3	磁器	青花碗	景徳鎮	12.4			C61区 南調査区
第191図4	磁器	青花碗	景徳鎮	12.2			D61区 南調査区
第191図5	磁器	五彩碗	景徳鎮		4.2		C62区 南調査区
第191図6	磁器	青花碗	景徳鎮		5.2		B61区 南調査区
第191図7	磁器	青花皿	?州窯		4.4		B62区 南調査区
第191図8	磁器	染付け碗	肥前				B61区1面 南調査区
第191図9	磁器	白磁碗	中国				A60区 南調査区 沈船紋
第191図10	磁器	青花皿	景徳鎮	9.4			C62区 南調査区
第191図11	磁器	青花皿	景徳鎮	10.2			C62区 南調査区
第191図12	磁器	青花皿	景徳鎮		5.2		B61区 南調査区
第191図13	磁器	青花碗	景徳鎮		6.2		B62区 南調査区
第191図14	磁器	青花皿	景徳鎮				B61区 南調査区
第191図15	磁器	青花皿	景徳鎮		9.0		B61区1面 南調査区
第191図16	磁器	白磁皿	中国	14.4	8.4	2.3	C62区 南調査区
第191図17	磁器	白磁菊花皿	中国	6.9	2.8	1.8	C62区 南調査区
第191図18	磁器	白磁碗	中国	16.6			B62区 南調査区
第191図19	磁器	白磁碗	中国				B61区2面 南調査区

第2表 中世大友府内町跡第69次A調査区遺物一覧表①

検出No.	器種	生産地 (材料)	法量(単位:cm)			遺構名	出土地区・礎合・他から出土した 同一個体・特徴等	
			口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚・重)			
第191図20	磁器	白磁碗	中国			C61区	南調査区	
第191図21	陶器	華南三彩	中国			表面採集	南調査区	
第191図22	陶器	大目碗	瀬戸尖處			D62区	南調査区	
第191図23	磁器	染付け碗	肥前		4.0	C61区1面	南調査区 18世紀	
第191図24	磁器	染付け碗	肥前		3.8	C61区1面	南調査区 18世紀	
第191図25	磁器	青磁	中国		3.8	B61区2面	南調査区	
第191図26	陶器	鉢	備前	13.4	7.4	C60区	南調査区 穿孔1	
第191図27	磁器	白磁	中国			C61区2面	南調査区	
第191図28	磁器	五彩	中国			C61区	南調査区	
第192図1	磁器	青磁皿	中国				南調査区	
第192図2	磁器	青磁皿	中国				南調査区	
第192図3	磁器	青磁皿	中国				南調査区	
第192図4	磁器	青磁皿	中国				南調査区	
第192図5	磁器	青磁碗	中国				南調査区	
第192図6	磁器	青磁碗	中国				南調査区	
第192図7	磁器	青磁碗	中国				南調査区	
第192図8	磁器	青磁碗	中国				南調査区	
第192図9	磁器	青磁碗	中国				南調査区	
第192図10	磁器		中国				南調査区	
第192図11	磁器	青花碗	中国				南調査区	
第192図12	磁器	青花皿	中国				南調査区	
第192図14	磁器		中国				南調査区	
第192図15	磁器		中国				南調査区	
第193図1	陶器	播鉢	備前	16.7	8.2	5.7	C61区	南調査区 交叉すり目
第193図2	陶器	鉢	備前	21.2	14.0	7.7	92・95層	南調査区 内面は摩滅
第193図3	陶器	播鉢	備前	19.6			92層・75次S182	
第193図4	陶器	播鉢	備前	12.9		10.9	C60区	南調査区
第193図5	陶器	播鉢	備前				D62区2層	南調査区
第194図1	鉄製品	釘	在池	4.3	0.3	1.6g	C61区	南調査区
第194図2	鉄製品	釘	在池	3.5	0.2	2.7g	C61区	南調査区
第194図3	鉄製品	釘	在池	9.0	0.4	8.1g	C61区	南調査区
第194図4	鉄製品	釘	在池	5.2	0.2	2.5g	C61区2面	南調査区
第194図5	鉄製品	釘	在池	7.3	0.3	8.1g	C61区	南調査区
第194図6	鉄製品	釘	在池	4.2	0.2	4.8g	C62区2層	南調査区
第194図7	鉄製品	刀子	在池	5.5	1.4	8.9g	C61区	南調査区
第194図8	銅製品		在池	2.1	1.5	1.2g	C61区	南調査区
第194図9	鉄製品		在池	6.4	1.1	4.0g	C62区	南調査区
第194図10	銅製品		在池	5.5	0.8	2.5g	C62区	南調査区
第194図11	鉄製品	編	在池	2.1	4.6	20.4g	C62区	南調査区
第194図12	銅製品		在池	2.0	1.3	0.6g	C62区	南調査区
第194図13	土師質	メンコ	在池	3.8	1.1	21.8g	道路中央12層	
第194図14	土師質	メンコ	在池	3.2	0.6		A62区2層	破片加工品
第194図15	土師質	メンコ	在池	2.9	0.6		A62区2層	破片加工品
第194図16	鉄製品	鍋?		5.2	4.5	28.1g	A448	南調査区
第194図17	土師質	鉢		3.0	2.2	4.1g	C62区	南調査区
第194図18	石製品	紡錘車	縣石	6.1	2.5	23.9g	A62区2層区	南調査区
第194図19	十師質	十師	在池	4.1	1.2	7.2g	C61区	南調査区
第194図20	十師質	十師	在池	4.8	1.3	8.3g	C61区	南調査区
第194図21	土師質	上師	在池	4.1	1.1	4.2g	C61区	南調査区
第194図22	土師質	上師	在池	4.8	1.1	5.8g	C61区1面	南調査区
第194図23	ガラス	玉		1.0	0.6	1.0g		南調査区
第194図24	ガラス	玉		0.4	0.3	0.1g		南調査区 10月26日A2
第195図1	鉄製品	釘	在池	5.6	0.4	7.3g	B61区	南調査区
第195図2	鉄製品	釘	在池	7.0	0.4	17.8g	D61区	南調査区
第195図3	鉄製品	釘	在池	5.3	0.2	2.4g	D61区	南調査区
第195図4	鉄製品	釘	在池	5.8	0.5	9.0g	49層	南調査区
第195図5	鉄製品	釘	在池	5.5	0.3	3.8g	S4	南調査区
第195図6	鉄製品	釘	在池	5.8	0.3	13.5g	B60区	南調査区
第195図7	鉄製品	釘	在池	5.0	0.5	6.5g	B62区2層	南調査区
第195図8	鉄製品	釘	在池	3.8	0.4	8.9g	C60区	南調査区

第2表 中世大友府内町跡第69次A調査区遺物一覧表⑤

探検No	器 種	生 産 地 (材料)	法 線 (単位cm)		遺 構 名	出土地区・接合・他から出土した 同一個体・特徴等		
			口径 (長)	底径 (幅)				
第195図9	鉄製品	釘	在 地	6.5	0.4	20.6g	49層	南調査区
第195図10	鉄製品	釘	在 地	6.7	0.4	12.1	B61区	南調査区
第195図11	鉄製品	釘	在 地	6.0	0.5	8.2g	C60区	南調査区
第195図12	鉄製品	釘	在 地	5.8	0.4	14.6g	No. 323	南調査区
第195図13	鉄製品	釘	在 地	5.3	0.4	6.0	C60区	南調査区
第195図14	鉄製品	釘	在 地	5.8	0.5	17.6g	C60区	南調査区
第195図15	鉄製品	釘	在 地	4.0	0.3	5.6g	B60区	南調査区
第195図16	鉄製品	釘	在 地	5.0	0.3	8.4g	2層	南調査区
第195図17	鉄製品	釘	在 地	4.1	0.3	8.1g	65層	南調査区
第195図18	鉄製品	釘	在 地	8.7	0.5	15.9g	B61区4面	南調査区
第195図19	鉄製品	釘	在 地	11.4	0.5	41g	70層	南調査区
第195図20	鉄製品	小柄	在 地	6.6	1.1	18.2g	B60区	南調査区
第195図21	鉄製品	刀子	在 地	14.4	1.2	37.9g	88層	南調査区
第195図22	鉄製品	鍔製品?	在 地	8.3	4.0	18.8g	C60区	南調査区
第195図23	鉄製品		在 地	8.1	0.4	5.6g	B61区	南調査区
第195図24	銅製品		在 地	11.0	0.3	13.0g	S63	南調査区
第195図25	鉄製品	環状	在 地	3.5	3.3	17.8g	No. 413	南調査区
第195図26	鉄製品	環状	在 地	2.3	0.4	9.8g	C60区	南調査区
第195図27	鉄製品	環状	在 地	3.0	0.3	6.8g	B62区2層	南調査区
第195図28	鉄製品		在 地	15.0	2.4	56.2g	B61区2面	南調査区
第195図29	銅製品			9.3	0.2	2.4g	1, 2層	南調査区 道路部分
第195図30	銅製品			2.8	2.3	9.5g	C60区	南調査区 上部黒色土層
第195図31	銅製品	環状		3.1	4.2	6.7g	C60区	南調査区
第195図32	銅製品			2.6	1.0	2.1g	B60区	南調査区
第195図33	鉄製品			7.7	0.4	8.9g	北調査区	南調査区 一端に輪が繋がる
第196図1	石製品	火打石	六太郎石	4.9	3.7	68.7g	北調査区	南調査区 黄色
第196図2	石製品	火打石	六太郎石	6.1	3.1	94.2g	周辺表接	南調査区 黄色
第196図3	石製品	火打石	石英	4.7	1.5	10.1g	B60区	南調査区
第196図4	石製品	火打石	石英	4.8	5.7	123.7g	排土	南調査区
第196図5	石製品	砥石	犬草砂岩	7.2	2.1	20.2g	C61区	南調査区
第196図6	石製品	砥石	結晶片岩	10.5	3.9	211.7g	排土	南調査区
第196図7	石製品	砥石	砂岩	4.4	4.9	64.4g	92層	南調査区
第196図8	石製品	砥石	結晶片岩	10.0	2.4	47.2g	2層	南調査区 一面を使用
第196図9	石製品	砥石		4.8	4.2	69.4g	No. 402	南調査区
第196図10	石製品	砥石	犬草砂岩	3.8	4.5	141.7g	D61区	南調査区
第196図11	石製品	砥石	犬草砂岩	4.9	4.4	42.5g	C60区	南調査区
第196図12	石製品	砥石		2.9	2.5	6.7g	B60区	南調査区
第196図13	石製品	砥石		11.2	5.9	121.2g		南調査区
第197図1	土師質	土鉢	在 地	4.0	1.2	8.1 g	A60区	南調査区
第197図2	土師質	土鉢	在 地	8.2	1.1	3.1 g	A60区	南調査区
第197図3	土師質	土鉢	在 地	5.4	1.2	0.2 g	A62区	道路跡
第197図4	土師質	土鉢	在 地	4.7	1.1	5.8g	B60区	南調査区
第197図5	土師質	土鉢	在 地	4.2	0.9	3.8 g	B60区	南調査区
第197図6	土師質	土鉢	在 地	5.3	0.8	4.9g	B60区	南調査区
第197図7	土師質	土鉢	在 地	5.0	1.1	7.9 g	B60区	南調査区
第197図8	土師質	土鉢	在 地	5.0	1.1	5.8g	B60区	南調査区
第197図9	土師質	土鉢	在 地	3.8	1.1	3.5 g	B60区	南調査区
第197図10	土師質	土鉢	在 地	4.1	1.1	5.6g	B60区	南調査区
第197図11	土師質	土鉢	在 地	4.2	1.3	5.4 g	B60区	南調査区
第197図12	土師質	土鉢	在 地	4.0	1.8	11.0 g	B60区	南調査区
第197図13	土師質	土鉢	在 地	5.7	2.0	23.6 g	B60区	南調査区
第197図14	土師質	土鉢	在 地	4.5	2.7	33.7 g	B60区	南調査区
第197図15	土師質	土鉢	在 地	1.2	0.8	1.3 g	B61区	南調査区
第197図16	土師質	土鉢	在 地	5.2	1.2	7.7 g	B61区	南調査区
第197図17	土師質	土鉢	在 地	4.3	1.3	5.7 g	B61区	南調査区
第197図18	土師質	土鉢	在 地	3.6	1.6	9.4 g	南調査区	南調査区
第197図19	土師質	土鉢	在 地	3.6	1.4	4.9 g	B61区	南調査区
第197図20	土師質	土鉢	在 地	4.5	1.0	5.8g	南調査区	南調査区
第197図21	土師質	土鉢	在 地	4	1.2	5.1g	C62区	南調査区
第197図22	土師質	土鉢	在 地	3.6	1.4	4.9 g	C62区	南調査区

第2表 中世大友府内町跡第69次A調査区遺物一覧表④

発掘No.	器種	生産地 (材料)	法量(単位cm)			遺構名	出土地区・接合・他から出土した 同一個体・特徴等
			口径 (長)	底径 (幅)	高さ (厚・重)		
第197図23	土師質	土師	在地	4.2	1.3	5.8g	C62区 南調査区
第197図24	土師質	土師	在地	4.5	1.4	7.2g	C62区 南調査区
第197図25	土師質	土師	在地	4.4	1.4	6.7g	C62区 南調査区
第197図26	土師質	土師	在地	4.3	1.2	4.1g	C62区 南調査区
第197図27	土師質	土師	在地	4.4	1.5	6.4g	C62区 南調査区
第197図28	土師質	土師	在地	4.1	1.2	4.1g	C62区 南調査区
第197図29	土師質	土師	在地	4.2	1.4	5.8g	C62区 南調査区
第197図30	土師質	土師	在地	3.0	0.9	2.8g	C62区 南調査区
第197図31	土師質	土師	在地	4.7	1.0	5.6g	跡上 南調査区
第198図1	瓦質土器	火鉢	在地	35.0			遺跡中央部跡、第52区B
第198図2	瓦質土器	火鉢	在地		32.8		C60区 南調査区
第198図3	瓦質土器	埴塼	在地	8.0			No. 327 南調査区
第198図4	瓦質土器	香炉		11.0	9.8	5.4	A2, 8層 南調査区
第198図5	瓦質土器	火鉢	在地				A2 遺跡中央部、35層
第198図6	瓦質土器	火鉢	在地				A62区 南調査区
第198図7	瓦質土器	火鉢	在地				D62区 南調査区
第198図8	瓦質土器	鉢					No. 416 南調査区
第198図9	須臾質	甌	岡山系				A2 遊路跡 南調査区
第199図1	石製品	上臼	礫灰岩	21.6	20.6	10.8	A2, 95層 南調査区
第199図2	石製品	上臼	安山岩	27.6	28.8	7.6	A2, 跡上 南調査区
第200図1	磁器	青花小杯	景德鎮	6.2	2.2	3.8	A1, 北帯黒色1層
第200図2	磁器	青花碗	景德鎮	14.4			16-41, 15次S11E・S11S
第200図3	磁器	青花皿	景德鎮		6.4		No. 364 南調査区
第200図4	磁器	青花皿	景德鎮	10.0	6.0	2.0	No. 222 南調査区
第200図5	磁器	青花碗	?州窯		5.3		No. 296 南調査区
第200図6	磁器	青花皿	景德鎮	12.0	4.0	3.4	A63-2 南調査区
第200図7	磁器	皿	景德鎮	23.5			D61区、75次S12
第200図8	磁器	白磁碗	中国		5.6		No. 468 南調査区
第200図9	磁器	青磁碗	中国	12.0			No. 205 南調査区
第200図10	磁器	青磁青花皿	中国	10.6	5.0	3.1	No. 495 南調査区
第200図11	磁器	青磁碗	中国				No. 613 南調査区
第200図12	磁器	青磁皿	中国		5.0		No. 318 南調査区
第200図13	磁器	青磁碗	中国				A62区 南調査区
第200図14							南調査区
第200図15							No. 348・S519・75 南調査区
第200図16	磁器	青磁器物	中国				次1面 南調査区
第200図17							南調査区
第200図18	磁器	白磁皿	中国		9.0		No. 543・546 南調査区
第200図19	陶器	天月碗	瀬戸窯	11.0			No. 300 南調査区
第200図20	瓦質土器	鉢		35.0			S36-A・R, S36B 南調査区
第201図1	銅製品	銭貨	景徳元元	2.4		1.9g	No. 485 北調査区包含層
第201図2	銅製品	銭貨	不明			1.6g	A60区 北調査区包含層
第201図3	銅製品	銭貨	元徳通宝	2.4		2.5g	A60区 北調査区包含層
第201図4	銅製品	銭貨	不明	2.4		2.3g	A60区 北調査区包含層
第201図5	銅製品	銭貨	元?通宝	2.2		2.0g	B61区 北調査区包含層
第201図6	銅製品	銭貨	熙寧元宝	2.3		3.3g	B61区 北調査区包含層
第201図7	銅製品	銭貨	熙寧元宝	3.4		10.0g	B61区 北調査区包含層
第201図8	銅製品	銭貨	熙寧元宝	2.2		0.9g	C61区 北調査区包含層
第201図9	銅製品	銭貨	洪武通宝	2.3		1.6g	C61区 北調査区包含層
第201図10	銅製品	銭貨	元?通宝	2.3		2.6g	No. 2 北調査区包含層
第201図11	銅製品	銭貨	不明	2.3		1.8g	No. 47 北調査区包含層
第201図12	銅製品	銭貨	寧宗通宝	2.4		1.8g	北調査区包含層
第201図13	銅製品	銭貨	不明	2.4		1.3g	No. 56 北調査区包含層
第201図14	銅製品	銭貨	□符通宝	2.2		1.9g	No. 122 北調査区包含層
第201図15	銅製品	銭貨	□通宝			1.7g	A60区 北調査区包含層
第201図16	銅製品	銭貨	不明	2.3		1.1g	A60区 北調査区包含層
第201図17	銅製品	銭貨	不明	2.4		1.2g	A61区 北調査区包含層
第201図18	銅製品	銭貨	熙寧元宝	2.2		1.8g	B60区 北調査区包含層
第201図19	銅製品	銭貨	不明	2.4		1.5g	C60区 北調査区包含層
第201図20	銅製品	銭貨	不明			1.0g	C60区 北調査区包含層

第2表 中世大友府内町跡第69次A調査区遺物一覧表⑦

押収No.	器 種		生 産 地 (材料)	法 象 (単位cm)			遺 構 名	出土地区・接合・池から出土した 同一個体・特徴等
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚・重)		
第201図21	銅製品	銭貨	元?通宝	2.6		2.5g	C60区	北調査区包含層
第202図1	銅製品	銭貨	元豐元宝	2.3		1.8g	C62区	南調査区包含層
第202図2	銅製品	銭貨	不明	2.3		2.0g	C62区	南調査区包含層
第202図3	銅製品	銭貨	洪武口宝	2.2		1.2g	C62区	南調査区包含層
第202図4	銅製品	銭貨	口?口宝			0.6g	C62区	南調査区包含層
第202図5	銅製品	銭貨	不明	1.1		2.3g	92層	南調査区包含層。右折が銘文面
第202図6	銅製品	銭貨	不明	2.2		1.2g	B62区	南調査区包含層
第202図7	銅製品	銭貨	厚口口宝	2.4		1.2g	B61区	南調査区包含層
第202図8	銅製品	銭貨	不明			0.5g	B61区	南調査区包含層
第202図9	銅製品	銭貨	泉宋通宝	2.4		2.4g	B61区	南調査区包含層
第202図10	銅製品	銭貨	昭寧元宝	2.4		4.0g	B62区	南調査区包含層
第202図11	銅製品	銭貨	昭寧元宝	2.3		2.8g	B62区	南調査区包含層
第202図12	銅製品	銭貨	元豐通宝	2.4		3.3g	B62区	南調査区包含層
第202図13	銅製品	銭貨	昭寧元宝	2.4		2.7g	第2断面5層	南調査区包含層
第202図14	銅製品	銭貨	不明	2.3		3.1g	第62層	南調査区包含層
第202図15	銅製品	銭貨	大聖元宝	2.4		2.4g	第20層	南調査区包含層
第202図16	銅製品	銭貨	元?通宝	2.4		2.2g	No. 656	南調査区包含層
第202図17	銅製品	銭貨	元豐通宝	2.4		1.6g	B62区	南調査区包含層
第202図18	銅製品	銭貨	不明			1.2g	B62区	南調査区包含層
第202図19	銅製品	銭貨	不明	2.3		3.2g	B62区	南調査区包含層
第202図20	銅製品	銭貨	開元通宝	2.3		2.0g	B62区	南調査区包含層
第202図21	銅製品	銭貨	不明			0.6g	C62区	南調査区包含層
第202図22	銅製品	銭貨	元豐通宝	2.4		2.8g	C62区	南調査区包含層
第202図23	銅製品	銭貨	不明	2.3		2.3g	C62区	南調査区包含層
第202図24	銅製品	銭貨	天聖元宝	2.4		3.1g	C62区	南調査区包含層
第202図25	銅製品	銭貨	熙寧元宝	2.3		2.0g	No. 386	南調査区包含層
第202図26	銅製品	銭貨2枚	不明	2.1		4.9g	No. 247	南調査区包含層
第202図27	銅製品	銭貨	不明	2.3		2.3g	跡土	南調査区包含層
第202図28	銅製品	銭貨	寛永通宝	2.7		4.7g		南調査区包含層
第202図29	銅製品	銭貨	不明	2.3		1.6g	C62区	南調査区包含層
第202図30	銅製品	銭貨	開元通宝	2.3		1.7g	B62区	南調査区包含層
第173図1	弥生土器	甕		25.6			最下層	南調査区包含層
第173図2	弥生土器	甕		16.2			最下層	南調査区包含層
第173図3	土師器	甕	古墳時代	16.4			最下層	南調査区包含層
第173図4	弥生土器	甕		11.5			最下層	南調査区包含層
第173図5	弥生土器	甕					最下層	南調査区包含層
第173図6	土師器	甕	古墳時代	17.0			最下層	同一個体
第173図7	土師器	甕	古墳時代				最下層	

第6節 A区まとめ

第69次調査区の調査により得られた成果についてまとめる。その中で、今回報告する4分冊に関する成果についても合わせて触れておきたい。

○京都系土師器の影響を示す土器について

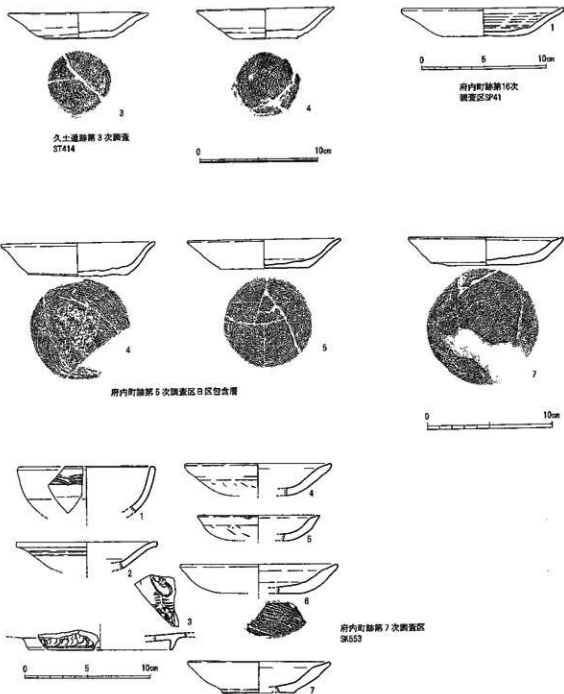
中世大友城下町及び周辺地域においては、中世に多用された土師器皿・環類の府内町跡における様相が16世紀前葉を境に一変する。土師器皿・環類はそれまでは底部糸切底のものであり回転台を使って作られていたが、16世紀前葉には新たに手づくねで作られる京都系土師器が登場し、在来土師器と共存状態となる。さらに16世紀中葉以降16世紀末葉までは回転台を使った旧来の在地系技法による皿・環類は全く消滅してしまい、代わって手づくねで作る京都系土師器が盛行する。しかし、公家文化に慣れた大友氏が豊後を去った江戸時代には、再び在地系土師器が席捲するようになると共に、京都系土師器は少数派に転落するもの19世紀まで存続する(吉田1993)。

中世大友府内町跡で今回報告する第41次・69次・75・77次調査区からは、在地系の技術で京都系土師器を模倣した製品が多数出土している。中でも多数の京都系土師器を模倣した土器が出土した第69次調査区SK519と第75次調査区のSE601は調査区の境界線上に位置したため、同じ遺構の西半分と東半分が別々に調査されたものである。今日まで行われてきた大友城下町跡の調査では、京都系土師器を在地系技術で模倣した土器は点々と出土していたが、今回のようにまとまって出土したのは初めてであり、どのように評価すべきなのか検討しておきたい。

この種の模倣土器について注意されはじめたのは最近のことであり、2005年からである。高島豊は大分市東部に位置する久土遺跡第3次調査のST414出土土器3・4(第204区)についての以下のように記述している(高島2005)。「3・4は土師器環である。底径に対し、口径が大きく、環というより皿と称すべき器形である。口縁部は強いヨコナデが施されることにより緩やかに外反している。また、体部と底部の境界は丸みをおび、明確な稜線をなさない。このような器形上の特徴は、16世紀の豊後における比較的古相の京都系土師器の特徴に類似するものといえ、これらの土師器環については京都系土師器の模倣形と評価できると考えられる」。久土遺跡の資料は第75次調査区SE519に類するものである。同年、横島隆二も大友府内町跡第5次調査B区包含層出土土器(第204区)について同様に記述している。「4・5・7は浅黄色系の色調を呈し、そのプロポーションも京都系土師器皿と酷似し、京都系土師器皿を模倣して製作されたものである」(横島2005)。2006年には田中裕介が大友府内町跡第7次調査区SK553出土土器(第204区)について「6と7は京都系土師器を模倣した底部糸切の在地系土師器の皿」(田中2006)であると報告し、在地系技術による模倣であることに言及した。このSK553に見られる模倣土器はクロク目がなく、底部糸切りであり、3期の京都系土師器系土師器に共存する。

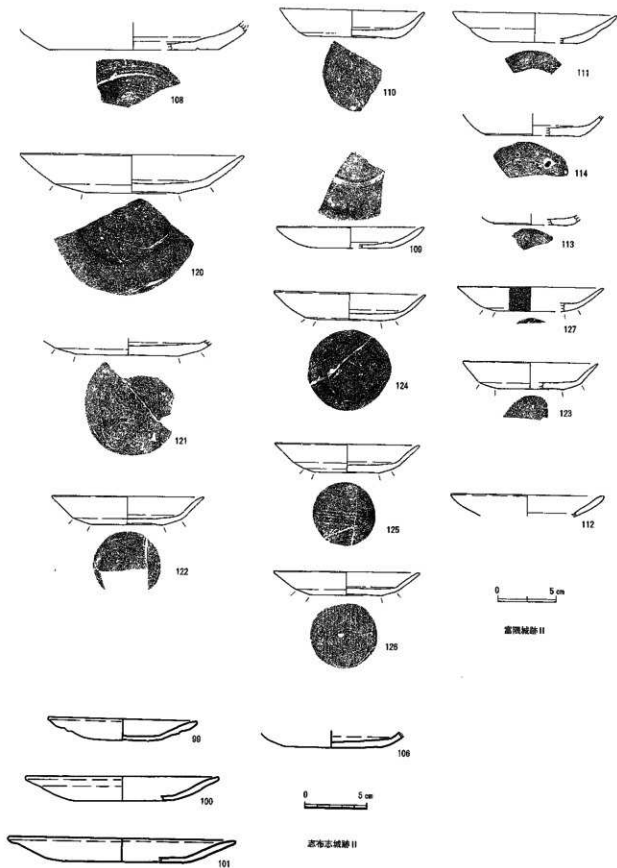
今回報告した各調査区では、京都系土師器が登場する頃の様相を量的に示す資料が出土した。在地系土師器から京都系土師器への移行はどのように行われたのか、それを示すと考えられる良好な資料が今回の第69次調査区・第75次調査区から出土している。

第69次A調査区SK73からは在地系の回転台使用土器と1期の京都系土師器が出土し、模倣土器はみられない。これよりも新しい第69次A調査区SE519(第75次調査区SE601は第69次A調査区SE519と同じ遺構の東半分である)、第75次調査区SK186・SK601からは、在地系の回転台使用土器と京都系土師器、京都系土師器を模倣した土器とが共存する。SK186ではSK601では1期の京都系土師器4点に対し模倣土器が87点、クロク目はないが模倣したとみられる土師器15点、在地系土師器1点がある。SK73とSE519(第75次調査区SB445)を比べてみると全く同じとは言えない特徴を指摘できる。SE519等には多数の2期の京都系土師器があり、別に比較的小さい在地系土師器の殆どに京都系土師器に近づぐべく努力した形跡一部が京都系土師器のように薄く、傾斜が強い。底部から体部への移行



第204図 大分県内の在地系技術での模倣京都系土器

部に屈折がなく、丸みを帯びている。糸切り痕をなで消そうとしている一が存在するのに対し、SX73では1期の京都系土師器と在来の在地系土器とが全く別々に存在するのである。SE519の折衷の様相は大器品にだけみられる特徴である。在地系土器の小型品は3点存在するが折衷的ではない。SE519の小型回転台使用土器はSX73の在地系土器に類似する。SX73では回転台使用土器は小型品しか存在しないので、もしかすると大型折衷土器が出土しなかっただけの可能性も考えられるが、SX73の場合、在地系土師器と京都系土師器系土師器とは胎土も見た目も全く異なるのに対し、SE519等では両



第205図 鹿児島県の在り系技術での模倣京都系土器

者は見分けがたいほど似た色調を示す。これはSE519の背後にある在地系土師器製作者が同種の粘土を使って2期の京都系土師器を作った証拠であろう。第36次調査区ではSK148からロクロ目のある模倣土器4点(完形2点・一部欠2点)が出土し、古手のロクロ目土器がみられない。

さらに新しい段階には、京都系土師器に混じて糸切り底の模倣土器が存在する第7次調査区SK553・第75次SK292のような場合がある。

以上を分類してみると

I類：ロクロ目のある在地系土師器と1期の京都系土師器が両方同量程度存在する遺構(第69次A調査区SX73)。

II類：2期の京都系土師器と比較的少数のロクロ目のある模倣土器や、それのない模倣土器が存在する遺構(第69次A調査区SK556、SE519)。

III類：3期の京都系土師器に少数のロクロ目のない模倣土器が共存する遺構(第75次SK292)

以上のIからIII類の様相はそのまま時間差を示すものである。II類の単品出土例としては第16次調査区SP41がある。これは内面にロクロ目を残し、底部は糸切りが認められない。ロクロ目のある在地系土師器はI類と異なる一括資料しばしば認められている。例えば第7次調査区SK712では15世紀後半中世1期の備前焼と共に体部の傾斜が急なロクロ目のある在地系土師器皿が31点報告されており、京都系土師器は1点のみみられない。I類土器群に先立つ資料であろう。

第69次調査区SP637は単品であるがロクロ目のある薄手の模倣京都系土師器があり、I期の類例である。3期の京都系土師器の段階には大友城下町ではすべての土師器皿は京都系土師器土師器で占められる、と言っても間違ではないほどの状態となる。しかし、時々共存する3期の京都系土師器を模倣した糸切り底皿の存在をどう理解すればいいのだろうか。3期の京都系土師器の段階においても模倣土器が存在することは、府内において京都系土師器作りに乗り換えた制作者が多数となった時点でも、おそらく周辺部では在地系土師器を作り続けた人がいたことの証拠であろう。京都系土師器は「口田地域を除く豊後地域全域に分布」と考えられている(坪根1997)。

最近の調査例では大友城下町の外側に目をやると調査事例は少ないが、大分平野東部の久上遺跡第3次調査ST414では出土した4点中2点が模倣土器とされている(高島2005)。大分平野東部でも京都系土師器が主流となっているようである(山本2009)。豊後水道に面した大分県東部の津久見市津久見門前遺跡では16世紀中頃の土師器は京都系土師器である(小柳2005)。大野川中流域の豊後大野市千歳町の16世紀後半の土師器は京都系土師器が独占状態である。大分県南西部の竹田市久住町小路遺跡でも、ロクロ目のある在地系土師器と京都系土師器とが共存する状態が確かめられている(後藤2000)。大分県西部、筑後川流域の玖珠町切株山城跡(城は1586年に廃絶した)の15世紀後半～16世紀代における土師器皿には内面にロクロ目を残す例はないが、3期の京都系土師器がある程度出土しており、この時期、京都系土師器で占められていた可能性も残る。今後、大友城下町の外側地域での土師器製作の状況が分かってくれば、大友城下町内のごとも理解しやすくなると思われる。大友城下町跡から時々出土する3期の京都系土師器模倣土器は非京都系土師器地帯から持ち込まれたと解釈できるが、現状ではその地域を明らかにすることができない。

京都系土師器の模倣にも地域差がみられる例として鹿児島県の例を掲げておきたい。鹿児島県にも模倣土器が存在する(岩本2009)。鹿児島湾北側に位置する霧島市富隈城跡(第205図右)では底部と体部の境をへら切りして面取りした浅い皿がまとめて出土しており、京都系土師器を模倣したとみられている。重久洋一によれば同様の例は鹿児島市鶴丸城跡や宮崎県都城市の都之城跡でも報告されているという(重久1999)。京都系土師器が見られない地域と考えられてきた鹿児島県の東部にある志布志城跡(第205図左・中)では在地系土師器に混じて、1期と思われる京都系土師器・「糸切り底ではあるものの薄手で底面からの立ち上がりを削り取る調整がなされているもの(106)」

(大塚2008)があり、富隈城跡に類似した技法を示している。大友城下町跡では立ち上がり部分を削る例はないので、横敷の仕方にもそれぞれの地域毎に独自の方法を考えつき、模倣土器には地域的な特徴があることになる。

《引用文献》

- 吉田 寛1993「府内城三ノ丸遺跡」大分県教育委員会
坪根伸也1997「豊後における戦国期京都系土師質土器に関する覚書」『大分・大友土器研究』第16号
重久淳一1999「富隈城跡Ⅱ」隼人町史意図委員会
後藤一重2000「小路遺跡・上屋敷遺跡」久住町教育委員会
高島 豊2005「海部の遺跡1—久土遺跡第3次調査—」大分市埋蔵文化財調査報告書第56集
小柳和宏2005「津久見門前遺跡・瀬戸遺跡・佐伯門前遺跡」大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第3集
重久淳一2005「留守氏館跡Ⅱ」隼人町教育委員会
山本哲也2009「中世の土器」『丹生川坂ノ市条里跡・丹生遺跡群』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第86集
大塚祥晃2008「志布志城跡Ⅱ」志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書(2)志布志市教委
岩元康成2009「鹿児島県における12～17世紀の土師器」『南の縄文・地域文化論考 新東晃一代代表遺暦記念論文集』中巻 南九州縄文研究会・新東晃一代代表遺暦記念論文集刊行会
※1 志布志市教育委員会大塚祥晃氏と霧島市教育委員会重久淳一氏に資料提供していただいた。

○同一個体破片の分布

69次調査区から出土した遺物を中心に遺物の散乱状態を掲げておきたい。整理作業の過程で、同一個体の破片が複数の遺構や包含層に分かれて存在する例が下記のようにいくつも認められた。

- ①69次SD750の青磁瓶：第77次調査区Y60区のSP1202・第6層、Z61区の4・5・6層から出土した。北調査区A60区・B61区包含層と第77次調査区のSP1172・1180・1580からも出土した。
- ②別の青磁瓶：SD750下層から13片出土した他、第77次調査区のSD1211とY61区の5層包含層からも出土した。
- ③69次SD750-46の東播系須恵器鉢：破片は中層から出土した他、第77次調査区V61区6層からも出土した。
- ④69次SP158火鉢：この破片は他にSE252からも出土している。
- ⑤69次SK58-6：SK58Aから5片、SD19・SP271から各1片、C61区包含層から2片出土した。
- ⑥69次SK130の備前磁鉢：この破片がほかにSP779(CD61区)からも出土している。
- ⑦69次SK382-6は袈裟徳鎮青花碗C群で、破片がSK382に2片、SP271に1片、C62区包含層に1片出土した。
- ⑧69次SK130の中世6期の備前焼播鉢：SP779からも出土した。
- ⑨69次SE519の72：他にSD750中層・上層から各4片、75次調査区のS54からも1片出土した。
- ⑩69次S718の瓦貫土器：S751/SD750と接合した。

同一個体破片の分布は、各遺構間の関係や、人の動き等を教えてくれる資料になると思われるが、ここではその事例を指摘するにとどめる。

第4章 中世大友府内町跡第69次B調査区

第1節 調査区の設定

中世大友府内町跡69次調査はA区とB区に分けて調査している。B区は41次調査区の西側で、戦国時代頃の府内の町を描いた、いわゆる「府内古図」では何も描かれていない地域である。調査前は店舗の駐車場用地として利用されていた。

B区はさらに5つの区画に分かれている。北半分の比較的に広い2区画をB1区とし、さらに東区と西区に区分する。南半分の細長い3区画はB2区で、南から順に1トレンチ、2トレンチ、3トレンチとした。また、調査にあたっては旧圃土座標に基づいて10m方眼のグリッドを設定し、西からアルファベット、北から2桁の数字を付し、例えばQ60区のように呼称した。このグリッドは周辺の中世大友府内町跡の調査で共通して使用しているものである。各調査区におけるグリッドは遺構分布図(第208・218・235図)に示すとおりである。

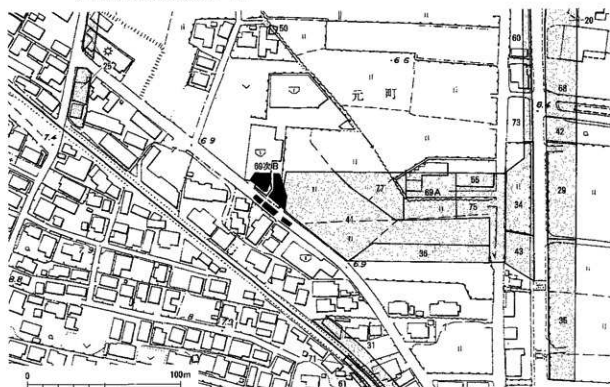
B区の発掘調査は平成18年8月21日に表土除去に着手し、同年10月19日に調査器材等の撤収を完了し調査を終了した。発掘調査の実施にあたっては調査の支援業務委託を導入し、作業員の確保や遺構実測・写真撮影等の作業は調査員の監督の下、業務受託者である株式会社バスコ大分支店が行った。ただし一部の実測作業については調査担当者が行った。

遺構番号は調査で確認された順に付しており、報告書作成時には調査時の番号をそのまま踏襲した。そのため、各時期において番号が前後することがある。

第2節 調査区の基本層序

調査区の基本層序を第207図に示す。

調査区は駐車場用地となっていたため、表面の舗装下にはコンクリート片を含む盛土層が見られた。その下に旧表土層である耕作土、第3層の床土が見られ、その下には沈着鉄分の酸化層である明褐色土層が堆積する。中世以前の包含層はその下位にあり、樹灰色系の土色でマンガン粒を含む土層が約0.3m堆積している。

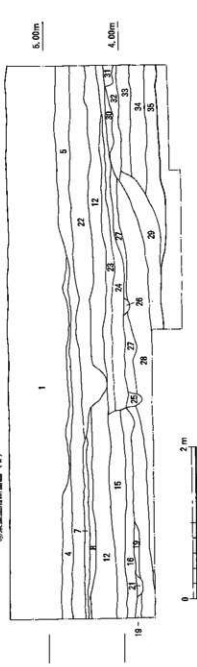


第206図 69次B調査区位置図

③東郷土層断面図(1)



④東郷土層断面図(2)

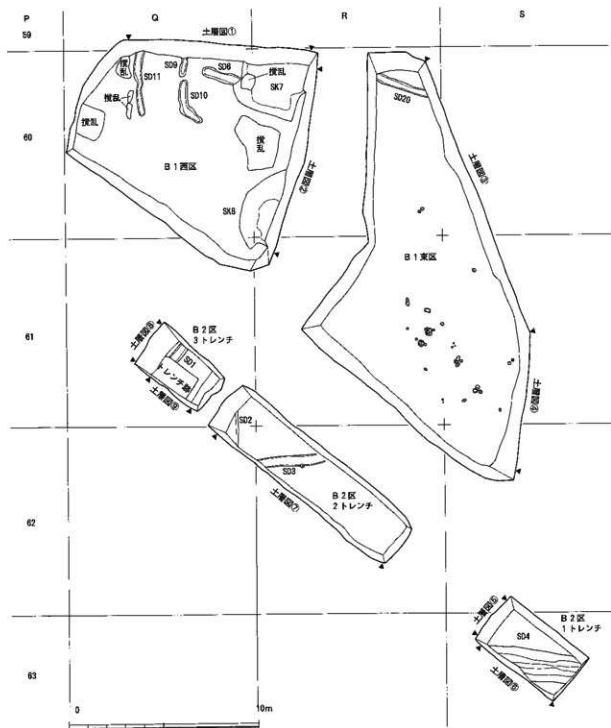


- | | | | |
|------------|--------------|--------------|-------------|
| 1 灰土層 | 11 暗褐色土層 | 21 ビット灰の層り込み | 31 赤褐色粘板質土層 |
| 2 赤褐色粘板質土層 | 12 暗褐色土層 | 22 暗褐色土層 | 32 赤褐色粘質土層 |
| 3 赤褐色粘質土層 | 13 暗褐色粘質土層 | 23 暗褐色土層 | 33 赤褐色粘板質土層 |
| 4 暗褐色粘質土層 | 14 赤褐色粘質土層 | 24 赤褐色粘質土層 | 34 赤褐色粘板質土層 |
| 5 明褐色土層 | 15 赤褐色土層 | 25 赤褐色粘質土層 | 35 赤褐色粘板質土層 |
| 6 明褐色土層 | 16 赤褐色土層 | 26 赤褐色粘質土層 | |
| 7 暗褐色土層 | 17 赤褐色粘質土層 | 27 赤褐色粘板質土層 | |
| 8 赤褐色土層 | 18 赤褐色粘質土層 | 28 赤褐色粘板質土層 | |
| 9 S200埋土 | 19 明褐色粘質土層 | 29 赤褐色粘質土層 | |
| 10 S200埋土 | 20 ビット灰の層り込み | 30 赤褐色粘板質土層 | |
- ④注：採利掘じりの灰土
 埋戻し土
 部分酸化層
 大形のマンガン管根を多く含む、6層より明るい
 部分酸化層を含む、マンガン管根を多く含む、6層より暗い
 部分酸化層
 大形の部分酸化根をやや含む、やや暗くなる
 中形の部分酸化根を多く含む、マンガン管根をわずかに含む
 大形の部分酸化根を多く含む、中形の部分酸化根をやや含む、14層より明るい
 中形の部分酸化根をやや含む、13層より暗い
 大形の部分酸化根をやや含む、暗褐色の部分酸化根をわずかに含む、暗褐色の部分酸化根をわずかに含む、暗褐色を帯びる
 中形の部分酸化根をわずかに含む、暗褐色を帯びる
 小形の部分酸化根を多く含む、マンガン管根をわずかに含む、赤褐色土ブロックを含む、部分酸化根をわずかに含む
 部分酸化根をやや含む、ビット部分酸化根をわずかに含む、ビット層
 部分酸化根をやや含む、部分酸化根を多く含む
 部分酸化根をわずかに含む、部分酸化根を多く含む、22層より暗い部分酸化根を含む、22層より暗い部分酸化根をわずかに含む、31層より暗い
 部分酸化根をわずかに含む、部分酸化根を多く含む、暗褐色を帯びる

第207-2図 69次B2区土層断面図

第3節 中世末～近世の遺構

中世包含層の最上面で検出した遺構である。B1区、2区の2・3トレンチで耕作溝を検出した他、B1西区で土坑、B2区1トレンチで溝を検出している。B1東区では小規模なピット多数を検出しているが、これらの遺構から遺物は出土していない。検出標高はB1区で約4.13～4.25m、B2区で約4.4～4.6mである。これらのうち耕作溝群は御蔵場周辺の調査でも確認されており、焼土層を切ることから近世期に比定されている。本調査区では焼土層は確認されていないが、周辺同様近世以降のものと考えられる。



第208図 69次B調査区遺構分布図（最上面）

SD1 (第209図)

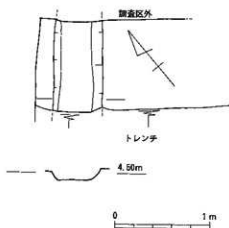
B 2区3トレンチの北西端で検出した耕作溝で、主軸は南西から北東方向に斜行している。ごく一部を検出したに過ぎず、全体の長さは不明である。幅約0.5m、深さ約0.1mを測り、検出標高は4.55mである。遺物は出土していない。

SD2・SD3 (第210図)

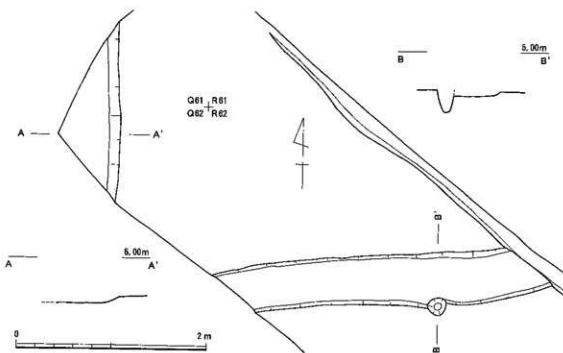
B 2区2トレンチで検出した耕作溝である。SD2は南北方向で、長辺2.0m以上、深さ約0.1m、幅は西側は調査区外のため不明だが0.7m以上を測る。SD3は東西方向で、SD2とはほぼ直交する。長辺3.2m以上、幅約0.5~0.6m、深さ約0.1mを測る。一部にピット状の掘り込みがある。SD2・3ともに検出標高は約4.6mである。いずれの遺構からも図示できるような遺物は出土していない。

SD6・9~11 (第211図)

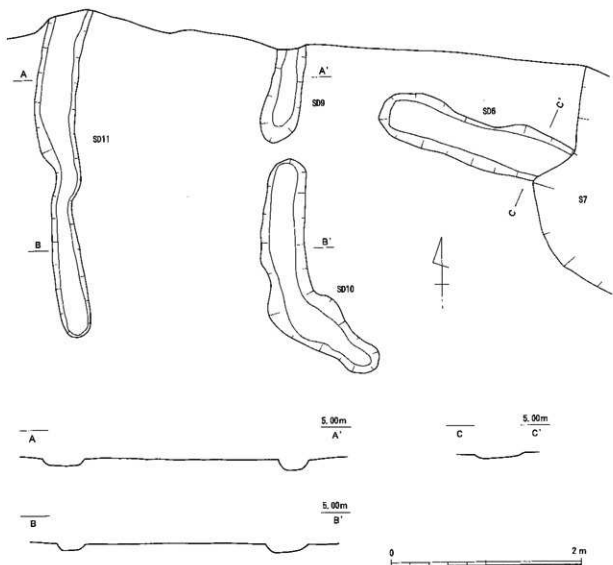
B 1西区で検出した耕作溝で、SD6は東西方向、SD9~11は南北方向である。SD6の東端部はSK7と重複している。SD10は南端が東側に折れる。規模はSD6が長さ2.0m以上、幅約0.5~0.6m、深さ約0.1m、SD9は長さ1.0m以上、幅約0.3~0.4m、深さ約0.1~0.15m、SD10は長さ約2.4m、幅約0.3~0.6m、深さ約0.1m、SD11は長さ3.5m以上、幅約0.2~0.4m、深さ約0.1mを測る。これらの遺構の検出標高は約4.15~4.25mである。いずれの遺構からも図示できるような遺物は出土していない。



第209図 SD1実測図



第210図 SD2・SD3実測図



第211図 SD6・SD9～11実測図

SK7 (第210図)

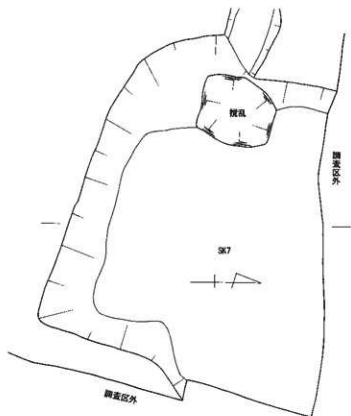
B 1 西区の北東端で検出した土坑である。一部攪乱を受け、また西側の一部は耕作溝 SD6 と重複している。北側と東側が調査区外に延びるため全体は明らかにできないが平面形状は方形を呈すると考えられ、東西3.5m、南北3.1m以上、深さ約0.5mを測る。検出標高は約4.2mである。出土遺物は少なく、遺構の時期は明らかにできない。

SK7出土遺物

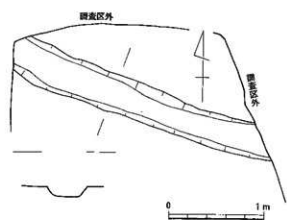
第213図は備前焼の甕で、小片のため口径は復元できない。口径部を軽く折り返して玉縁状につくる。図示できるのはこの1点だけである。

SK8 (第214図)

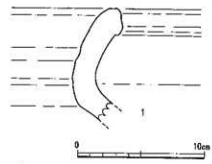
B 1 西区の南西端で検出した土坑である。平面形状は円形を呈するが南側はやや歪になっている。東側は調査区外に延びるため全体の規模は不明だが、長軸4.6m以上、東西1.8m以上、深さ約0.6mを測る。検出標高は約4.15～4.2mである。図示できるような遺物が出土していないため、遺構の時



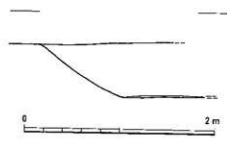
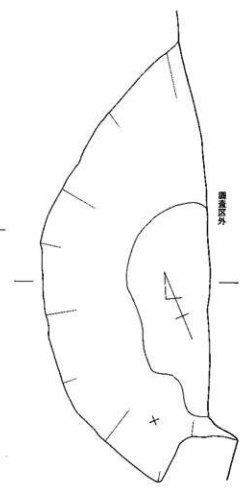
第212図 SK7実測図



第215図 SD20実測図



第213図 SK7出土遺物実測図



第214図 SK8実測図

期は明らかにできない。

SD20 (第215図)

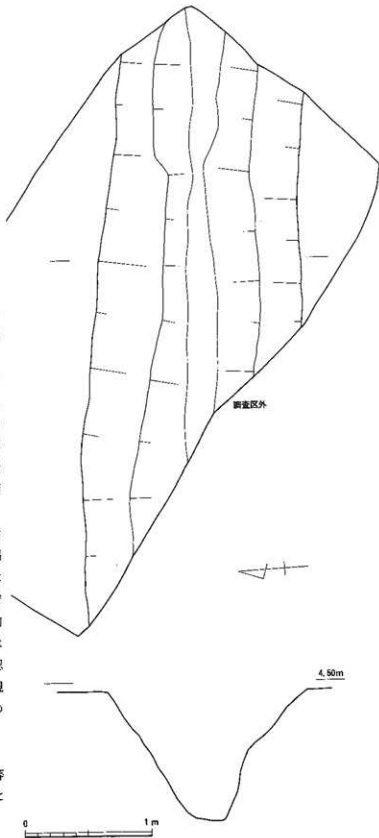
B1東区の北端部で検出した溝である。東西両端が調査区外に続くため全体の規模は明らかにできないが、長辺3.0m以上、幅約0.3～0.4m、深さ約0.1mを測る。検出標高は約4.15mである。図示できるような遺物は出土していない。

SD4 (第216図)

B2区1トレンチで検出した、東西方向にはしる溝である。全体の規模は明らかにできないが幅約1.5～1.7m、深さ約1.1mを測る。検出標高は約4.4～4.5mである。掘り込み角度は上部は比較的緩やかだが、中段から鋭くなっている。底面は幅約0.1～0.3mと狭い。埋土は第207図に示すとおり上層は鉄分を含む黄灰褐色系の粘質土層で、下層はシルト質の暗灰色粘土層である。東隣の中世大友府内町跡第41次調査の西側では方形区画の溝SD114が確認されており、その位置や規模からこの溝も方形区画の一部であると考えられる。出土遺物は土師器、青花、備前、瓦、鉄製品、銭貨等があり、16世紀後葉～末に位置づけられる。

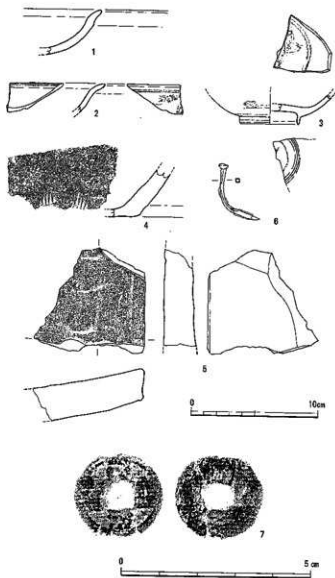
SD4出土遺物

第217図1は京都系土師器の皿で、細片のため口径は復元できない。口縁部の



第216図 SD4実測図

外反は強く、器高はやや高い特徴から2期～3期への過渡的様相を示す資料といえる。2・3は景徳鎮高の青花で、2は端反りの皿、3は碗である。4は備前焼の指鉢で、使用により表面が平滑化し、摺目はほとんど摩耗している。5は平瓦で、凹面に布目痕が残る。6は鉄釘で頭部から先端部まで残存するが、表面の剥落が著しい。7は銅銭であるが、錆のため銭種は明らかにできない。



第217図 SD4出土遺物実測図

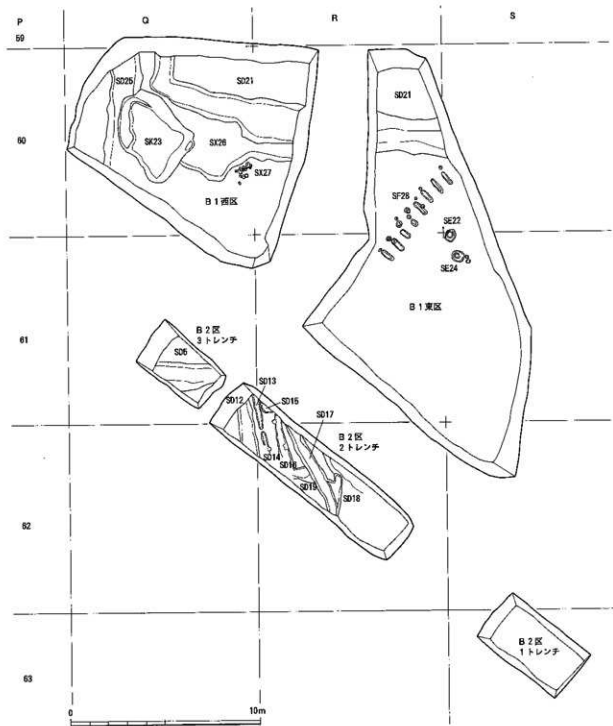
第4節 古代～中世の遺構

B1区では古代と中世の遺構が確認されている。中世に属するものは溝SD25と土坑SK23である。溝SD21、落ち込みSX26、道路状遺構SF28は出土遺物から古代の可能性があるが、SD21は在地系の上師器皿も出土していて時期決定が難しい。他に井戸SE22・24、集石SX27があるが遺物に乏しく時期決定の決め手を欠く。B2区は3トレンチで溝SD5、2トレンチで耕作溝群SD12～19を検出している。

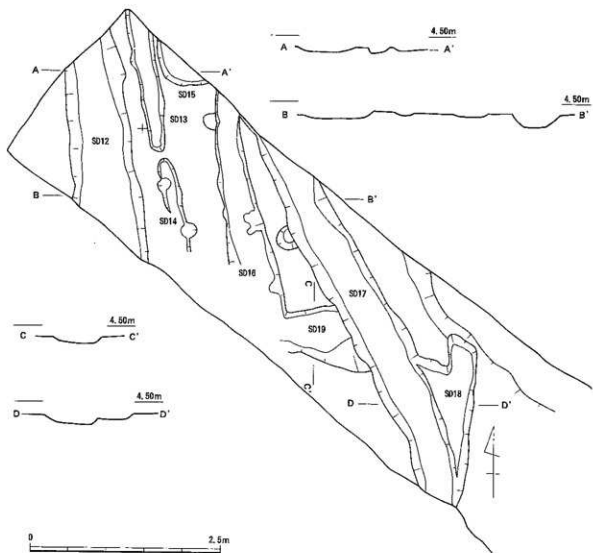
SD12～19 (第219図)

B2区2トレンチで検出した溝群である。東西方向のSD19をのぞき南北方向で、SD18以外は主軸は若干西に振る。掘り込みはほとんどが約0.1mと浅く、耕作溝であろう。ただしSD12とSD17はその中でも規模が大きい。検出標高は約4.3～4.4mである。各遺構の規模はSD12は長辺3.1m以上、幅約0.8～1.0mを測る。SD13は長さ1.95m以上、幅約0.2～0.3m、SD14は長さ約1.3m、幅約0.25m、を

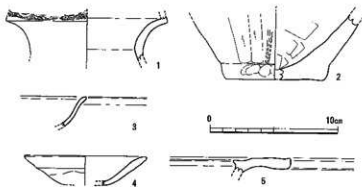
測り、本来は一体のものと思われる。SD15は円形状で、長さ0.25m、幅0.85mを測る。SD16は長さ3.0m以上、幅約0.35~0.6mを測り、南端部はSD19と直交する。SD17は長さ5.0m以上、幅約0.55~0.75m、深さ約0.2mを測る。SD18はSD17と重複しているが、その前後関係は明確にできない。長さ約1.9m、幅約0.4~0.7mを測る。SD19は東をSD17に切られ、西はSD16と重複している。長さ約0.9m、幅約0.55~0.8mを測る。これらの遺構の時期についてはSD16・17から中世の遺物が出土しており、京都系土師器を含むことから16世紀代の可能性があるが、遺構の性格上、厳密な時期比定は困難である。



第218図 69次B調査区遺構平面図(第2面)



第219図 SD12~SD19実測図



第220図 SD16・SD17出土遺物実測図

SD16・17出土遺物

第220図1・2は弥生土器である。1は安国寺式系の複合口縁壺で、口縁端部を欠損するが外面に波状文が確認できる。2は平底の底部で壊か。3は白磁皿の口縁部で、口縁端部は外反する。以上はSD16からの出土である。

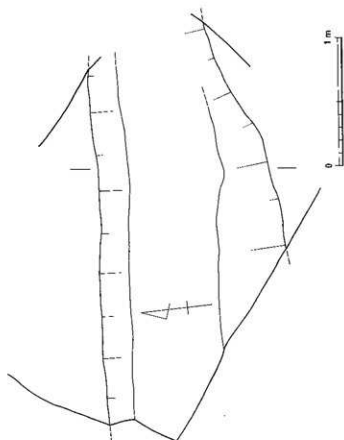
4は京都系土師器の皿である。器形は直に開き、口縁端部は丸い。外面に粘土の接合痕が残る。2は弥生土器で、口縁部を幅広く拡張する中期の鉢か。以上はSD17からの出土である。

SD5 (第221図)

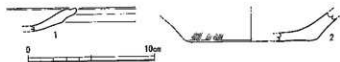
B2区3トレンチで検出した溝で、ほぼ東西方向に延びる。検出標高は約4.25~4.3mである。東西両端が調査区外に続いたため全体の規模は明らかにできないが、長さ6.4m以上、幅約2.0~3.0m、深さ約1.2mを測る。断面形状は逆台形状で、底面は約1.4~1.5mと広い。埋土は第207図に示すとおり複数層に細分され、最下層は有機物を含む黒灰色系の粘土層である。断面形状から明らかに人為的な溝であり、SD4同様区画溝と考えられる。ただし、府内町跡第41次調査でもこの溝と一致するものは確認されていない。遺構の時期は京都系土師器皿から16世紀後葉に比定される。

SD5出土遺物

第222図1は京都系土師器の皿である。口縁部は外反し、ヨコナデとの調整境には明瞭な段が認められる。口縁端部は若干上方つまみ上げ、内面には沈線状の段がつく。2は瓦質土器の鉢で、外面にはわずかにハケ目調整痕が確認



第221図 SD5実測図

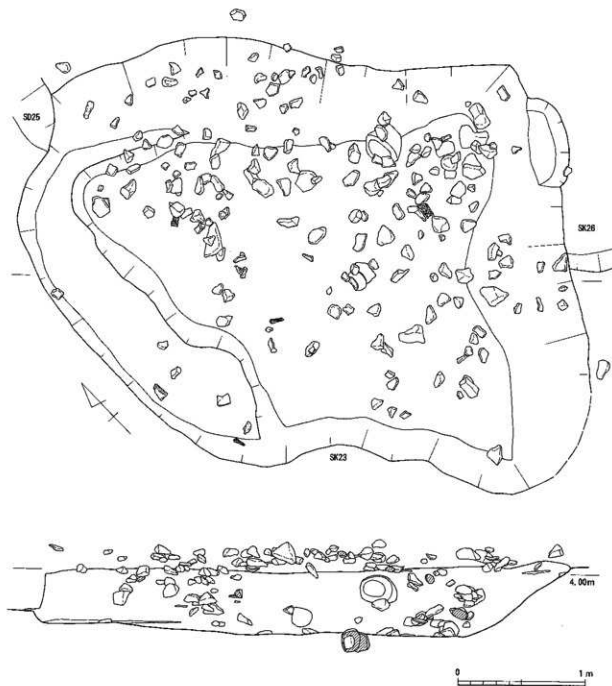


第222図 SD5出土遺物実測図

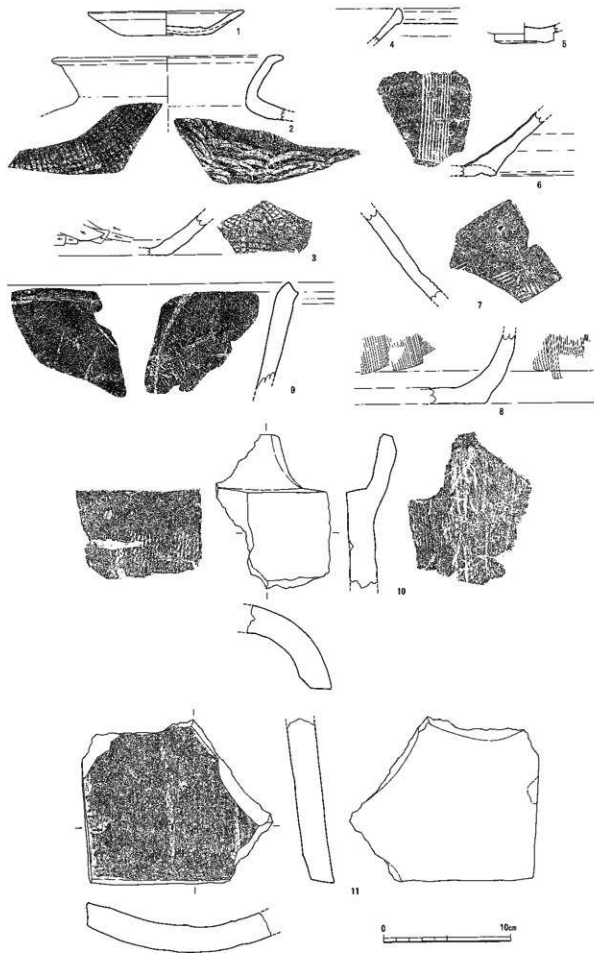
できる。

SK23 (第223図)

B1西区で検出した大型の土坑である。東部はSX26、西部はSD25を切っている。長辺約4.4m、短辺約3.1m、深さ約0.5mを測る。検出標高は約4.1mである。平面は不整形で、西側にはステップ状の段がある。土坑内部からは遺物の他に多数の礫が出土しており、廃棄土坑と考えられる。京都系土師器皿の出土から16世紀代に位置づけられ、後述のSD25を切っていることから16世紀後葉～末頃の遺構と判断される。



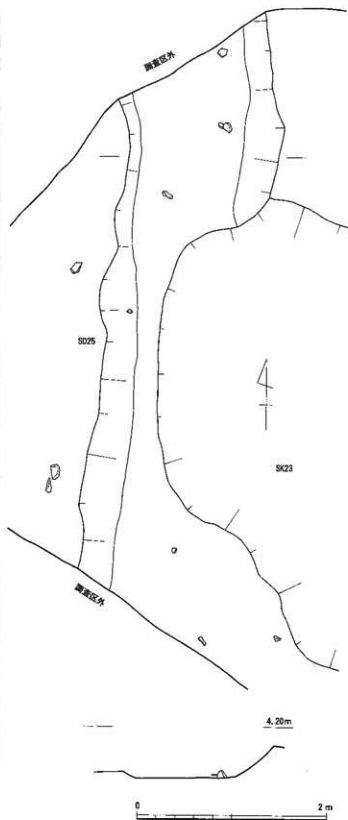
第223図 SK23実測図



第224図 SK23出土遺物実測図

SK23出土遺物

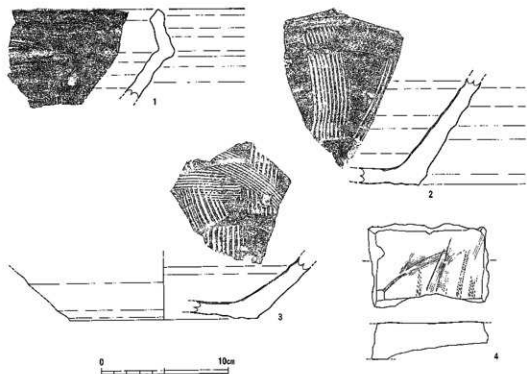
第224図1は京都系土師器の皿である。口縁は外に付き、端部は先尖りにおさめる。2は須恵器の裏で、口縁は外反する。外面には擬格子状のタタキ、内面には同心円状の当て具痕が顕著に残る。3は須恵質で、平底の底部から外に開きながら立ち上がる。外面にはタタキ痕が残る。4は白磁の玉縁碗の口縁部である。5は天目の底部で、高台に沿って割れている。6は備前焼の摺鉢で、10条1単位の摺目を施す。7は焼締陶器の裏で、肩部に方形のスタンプを施す。8は焼締陶器裏の底部で、内外面にハケ目が残る。9は滑石製の石鯛で、口縁は軽く外反し外端部の稜は鋭い。10・11は瓦類で、10は丸瓦の玉縁部である。凹面に布目痕、凸面に縄溝タタキ痕が残る。12は平瓦で、端部は明瞭に面取りする。



SD25 (第225図)

B1西区で検出した溝である。主軸はほぼ南北方向で、東側はSK23に切られる。長辺約5.2m、幅約1.6m、深さ約0.3mを測る。検出標高は約4.0mである。埋土は上層が鉄分酸化粒を含む暗褐色土で、下層が酸化鉄分、マンガンを含む褐色土である(第205図)。遺構の時期は交差摺り目を持つ備前焼摺鉢が出土していることから、16世紀後葉の遺構である。

第225図 SD25実測図



第226図 SD25出土遺物実測図

SD25出土遺物

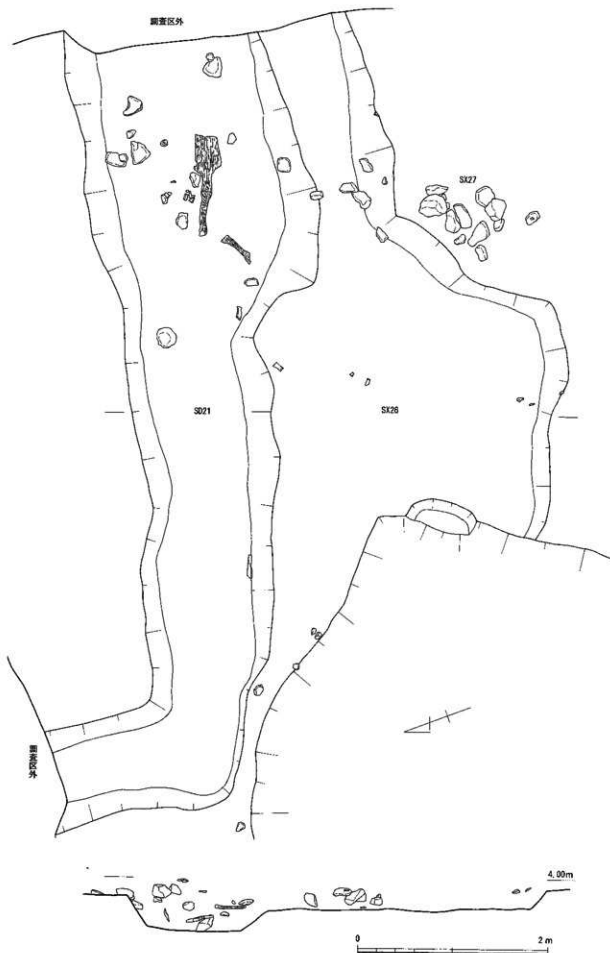
第226図1～3は備前焼の指鉢である。1は口縁部で、口縁は「く」字に内屈し、端部には内傾する面を持つ。乗岡編年の中世6a期に該当しよう。2は底部で摺目を放射状に施す。3は内面壁面に斜位の交差摺目を施し、見込みにも摺目を持つ。乗岡編年の近世1期に位置づけられる。4は磁石で、表面に擦痕が顕著に残る。

SD21 (第227・228図)

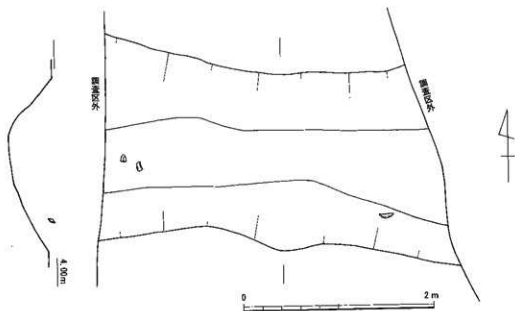
B1東西両調査区で検出した溝である。東西方向に延びながらQ60区中程で北方へ折れる。B1西区では南側がSX26と重複しているが、両者の前後関係は明確ではない。ただし出土遺物は後述の通りSX26の方が若干古い様相を示す。遺構の規模は東西の長さ16m以上、幅約1.0～1.9m、深さ約0.4mを測る。検出標高は約3.95～4.0mで、B1西区ではこれよりも若干低い。遺物は古代の土師器とロクロ円形の沈線を持つ在地系土師器皿の他、木材も出土している。溝の底付近から半分以上残った古代の土師器破片が複数出土しており、溝の機能していた時期は9世紀頃の可能性がある。在地系土師器は混入とも考えられるが、出土地点が明確でなく判断し兼ねる。2点出土していることからあるいは最終的な埋没の年代を示すものであろうか。

SD21 出土遺物

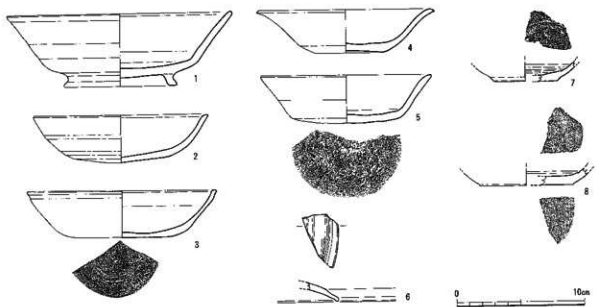
第229図1～8はいずれも土師器である。1は高台付きの坏。2～5は底面へラ切りの坏である。2・3は内湾する口縁で、端部には面を持つ。4・5は口縁部が外反する。6は坏蓋で、外面に粗いヘラミガキ底が残る。以上は古代のもので、1は8世紀、他は9世紀代に比定できよう。7・8は在地系のロクロ成形による多条の沈線を持つ皿で、16世紀前葉に位置づけられる。8は底面に回転糸切り痕が残る。



第227图 S021・SX26实测图



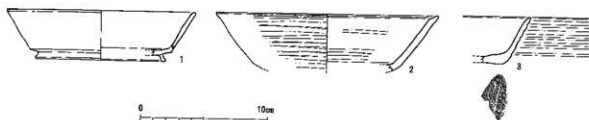
第228図 B1東調査区SD21実測図



第229図 SD21出土遺物実測図

SX26 (第227図)

B1西区で検出した遺構で、北側は先述のSD21と重複しているため立ち上がりは不明のため落ち込み状の遺構として扱う。SD21及び西側はSK23に切られるため全体の規模は明らかにできないが、長さ5.2m以上、幅約3.2m、深さ約0.2mを測る。検出標高は約3.9mである。遺物は須恵器、土師器が出土しているが、図示できるものは少ない。図化できるものでは8～9世紀頃のものと考えられ、SD21よりは先行するものと考えられる。



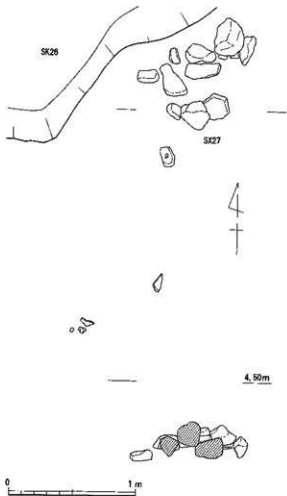
第230図 SX26出土遺物実測図

SX26 出土遺物

第230図1は高台付きの須恵器坏で、細片を図上復元している。2・3は土師器の坏で、2は内外面にヘラミガキを施すが、内面のミガキは粗い。口縁端部には沈線状の段を持つ。3は口径は復元できないが、外面にヘラミガキの痕跡が段状に残る。1・2は8世紀代、3は8～9世紀に比定できよう。

SX27 (第231図)

B1西区のSX26の際にある築石遺構である。検出標高は約4.15～4.2mで、東西約1.0m、南北約1.2mの範囲に礎が集中していたが、ややまとまりに欠ける。周囲に掘り込みは確認できなかった。図示できるような遺物は出土していないため、遺構の時期は明らかにできない。



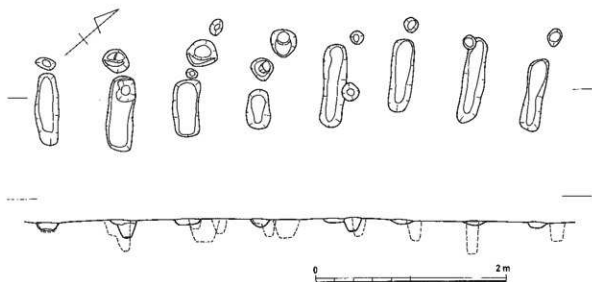
第231図 SX27実測図

SF28 (第232図)

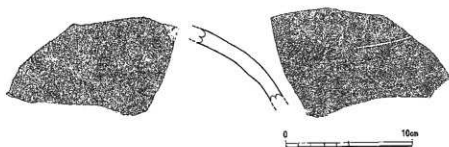
B1東区で検出した遺構で、小規模で浅い溝状遺構とピットが連続している。いわゆる波板状凹凸面と呼ばれるもので、道路遺構とされる遺構である。南西から北東方向に斜行しており、中心軸は北から東に38.5度振る。検出標高は約3.8mで、長辺約5.4m、幅は最大で約1.1mを測る。掘り込みは約0.1～0.4mである。出土遺物は少ないが、須恵器が出土していることから古代頃に比定できようか。

SF28出土遺物

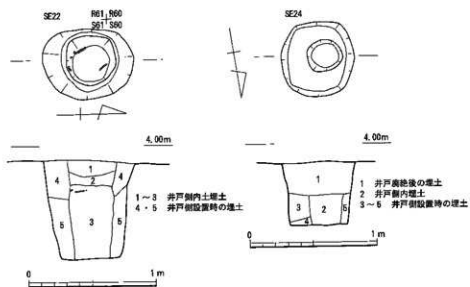
第233図はSF28から出土した須恵器である。外面はカキ目調整、内面は同心円当て具の痕跡をナ



第232図 SF28実測図 (1/40)



第233図 SF28出土遺物実測図

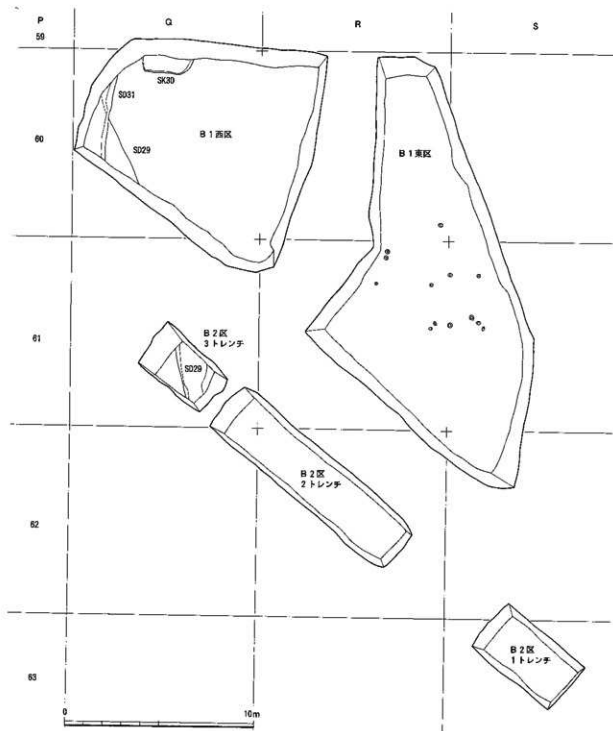


第234図 SE22・SE24実測図

デ消している。

SE22・SE24（第234図）

ともにB1東区で検出した井戸である。SE22は長辺0.75m、短辺約0.6mの楕円形で、井戸側は直径約0.4mの円形を呈する。深さは約0.8mで、底面の標高は約3.1mである。SE24は長辺0.6m、短辺約0.55mの楕円形を呈し、井戸側は直径約0.25mの円形を呈する。深さは約0.5mを測り、底面の標高は約3.35mである。いずれも図示できるような遺物がないため詳細な時期は明らかにできない。



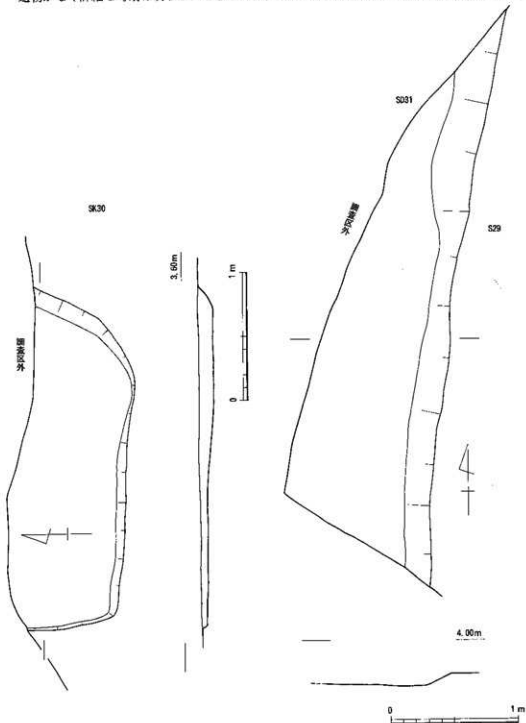
第235図 69次B調査区遺構分布図（第3面）

第5節 最下層の遺構

中世包含層の下で検出した遺構であるが、その数は少ない。B1区では土坑と溝、B2区では溝を検出している（第235図）。B1東区では中央部で小規模なピットを検出しているが、規則的な配列は認められず建物等を復元できるものはない。

SK30（第236図）

B1西区北西部で検出した土坑で、北側が調査区外に続くため全体の規模・形状は明らかにできない。長辺約2.7mで、深さは約0.1mと浅い。検出標高は約3.45～3.5mである。図示できるような遺物がなく詳細な時期は明らかにできないが、SD21の下位にあることから古代以前の遺構と考えら



第236図 B1西区SK30・SD31実測図

れる。

SD31 (第236図)

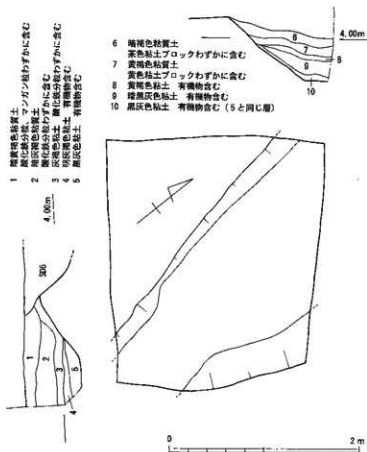
B 1 西区西端で検出した溝で、調査区外に続くため全体の規模は明らかにできない。主軸は東西方向で、深さも約0.1と浅い。検出標高は約3.75mである。図示できるような遺物がなく詳細な時期は明らかにできないが、SD29より上位にあることから16世紀前葉以降である。

SD29 (第237・238図)

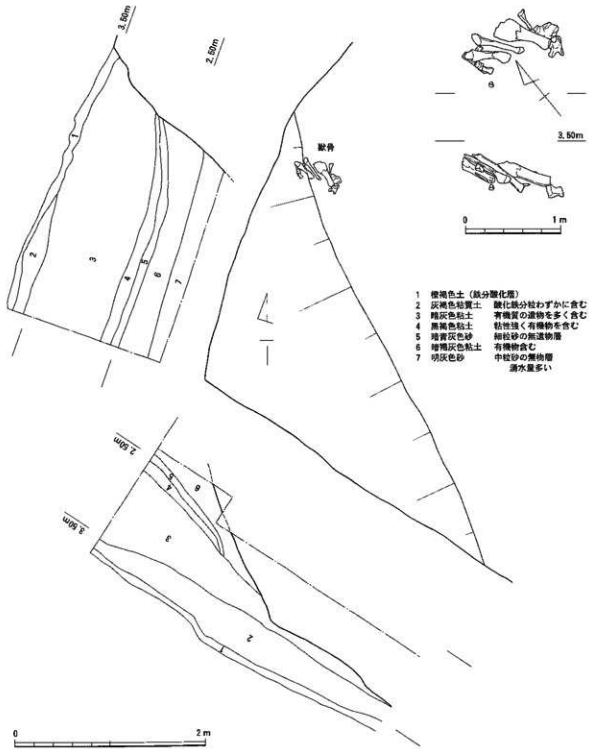
B 1 西区及び B 2 区 3 トレンチで検出した溝である。検出標高は B 1 西区で約3.3m、B 2 区 3 トレンチで約3.8mを測るが、B 2 区 3 トレンチでは上層断面の観察結果から掘り込み面はより上位の約4.4mあたりである。堆積層は B 2 区 3 トレンチでは粘土層、B 1 西区では砂層と粘土層の互層で水性堆積層と判断され、その上部に暗灰色粘土が厚く堆積している。遺物はこの上層の暗灰色粘土層に多く、土器類や瓦の他に下駄や漆器、加工木材に入った木製品も出土している。また、B 1 西区では獣骨も出土しており、分析の結果ウマの骨と分かった。下層の粘土層でも有機物は見られたが自然のものである。この下部層は湧水が著しく、完掘には至っていない。遺構の年代はSD5に切られることと、16世紀前葉の在地系土器器皿が出土している点から、最終埋没年代は16世紀前葉と判断する。

SD29出土遺物

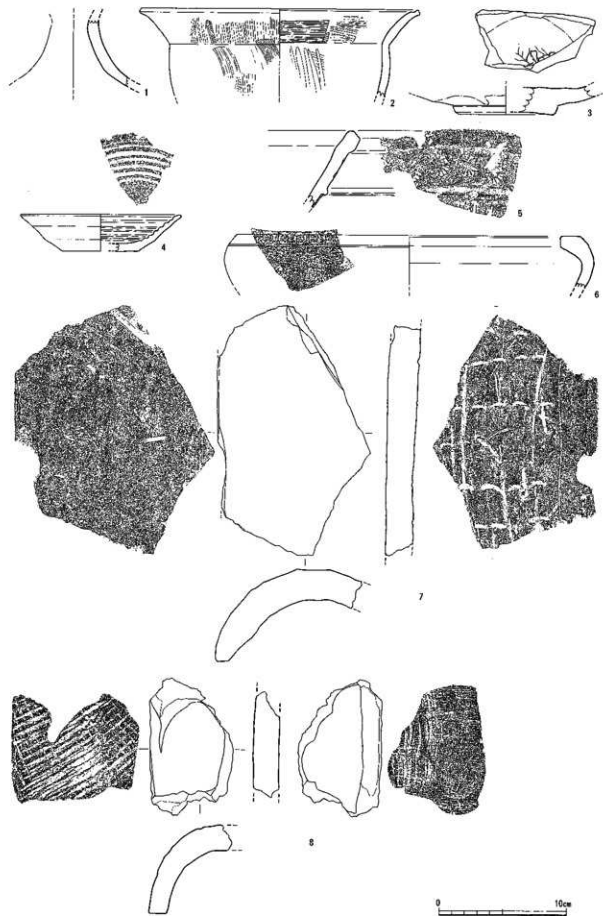
第239図1は須恵器の高坏脚部で、全体に摩滅が激しい。2は土師器の甕で、口縁は外反し体部の膨らみは弱い。口縁部内面に沈線状の段を持つ。3は青磁の皿で越州窯のものか。見込みの文様は



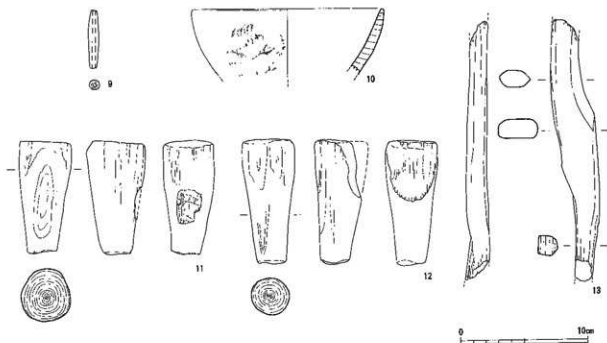
第237図 B 2 区SD29実測図



第238図 SD29実測図



第239图 SD29出土遺物実測図



第240図 SD29出土遺物実測図(2)

不鮮明である。4は在地系土師器の皿で、内面にロクロ整形による多条の沈線を施す。16世紀前葉に位置づけられる。5・6は瓦質土器の火鉢である。5は口縁が外反し、外面の凸帯区画内に菊花状のスタンプ文を施す。6は口縁が内湾し、口縁と外面に施された沈線の間に円形のスタンプ文を連続的に施す。7・8は丸瓦である。7は凹面に布目痕と吊り紐痕、8は凸面に斜格子状のタタキ痕と凹面に布目痕が残る。

第240図は土製品及び木製品である。9は土師質の管状土錘である。10は漆器碗で、黒漆面に赤漆で文様を描くが、不鮮明で文様意匠は明らかにできない。11～13は加工木材である。11・12は丸木材で先端が細くなるもので、杭であろうか。13は断面方形状に加工するものであるが、その用途は明らかにできない。

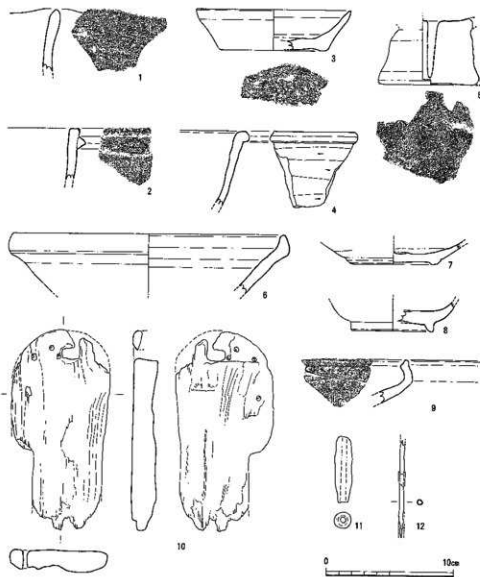
これらはいずれもB1西区からの出土で、2と4は埋土上層の注記がある他は暗灰色粘土層からの出土である。

第6節 包含層出土遺物

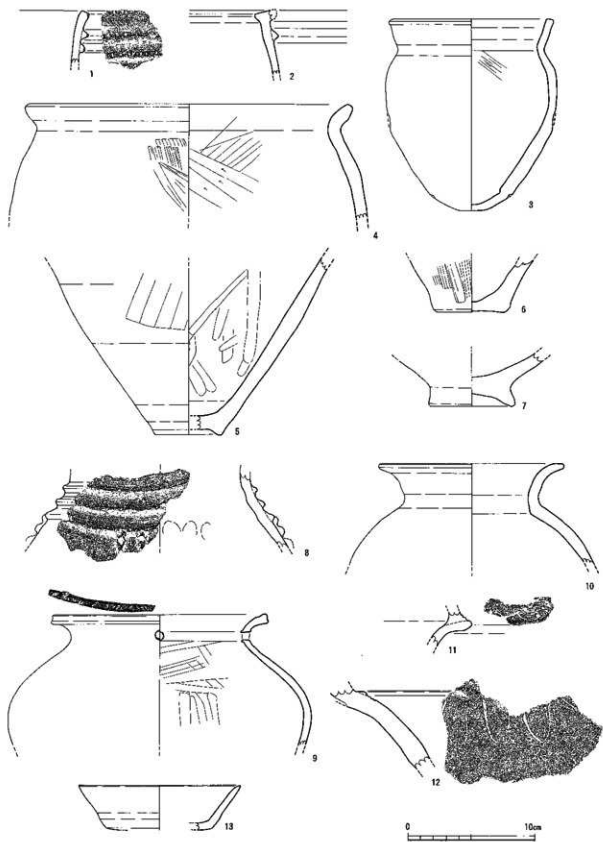
第241図はB1西調査区から出土した遺物である。注記にはグリッドしか記入されておらず、出土層位は不明である。1は甕紋土器の深鉢で、口縁部は緩い波状口縁となる。後期～晩期のものであろう。2は弥生上層の甕で、口縁外端部を刻み、口縁下に凸帯を貼付する。弥生前期後半に位置付けられよう。3は土師器の坏で、底面には回転糸切り痕が残る。4は土師器の鍋で、口縁部は玉縁状に折り返す。5は土師質の燗台で、中央に螺螄を立てるための芯棒を挿した孔がある。底面には回転糸切り痕が残る。6は須恵質土器の捏鉢で、いわゆる東播系須恵器である。口縁部は「く」字状に屈曲し、玉縁状につくる。7は白磁皿の底部で、高台は低い。8は青磁碗の底部である。9は焼締陶器の摺鉢で、口縁は強く内湾する。端部は内傾し、端面には沈線を持つ。器形から中国南部産の可能性が考えられる。10は木製の下駄で、鼻緒を通すための方形の孔を穿つ。孔の位置から左

足用と判断される。組み合わせの歯は残っていない。11は土師質の管状土師である。12は棒状の銅製品で、断面は円形である。以上の1～12はQ60グリッドからの出土である。

第242図はB1東調査区から出土した遺物である。西調査区同様注記にはグリッドしか記入されていないため出土層位は明らかではない。1～3・5～12は弥生土器である。1は外面に2条の刻み肩凸帯を施し、口縁外端部に刻みを加える甕で、前期末頃のものであろう。2は口縁部を拡張し、外面に凸帯1条を貼り付ける甕で、外面は赤彩する。中期初頭頃のものか。3は小型の甕である。5は直線的な胴部の甕か。底面は凹み底となっている。6・7は底部でいずれも甕であろう。8は甕で、外面に刻みのない凸帯を3条貼り付け、下段の凸帯から2条の刻みを持つ短い凸帯を垂下させる。9は胴部が膨らむ甕で、口縁端部に刻みを施し、頸部には1箇所穿孔孔を持つ。外面は全体に赤彩を施す。中期末以降で、後期頃のものか。10は口縁が強く外反し、胴部が広がる器形から甕であろう。11は安国寺式系の複合口縁壺で口縁端部を欠く。外面には波状文を施す。12は厚手の土器で、無刻みの凸帯下に1条の波状文を施す。4は口径の大きい土師器の甕で、古代のものであろう。13は土師器の坏で、口縁は外反し端部は先尖りとなる。15世紀代のものであろう。以上のうち、12はS61グリッド、その他はR61グリッドからの出土である。

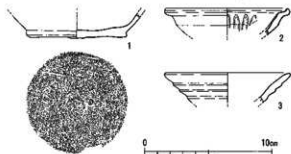


第241図 69次B1西調査区包含層出土遺物実測図



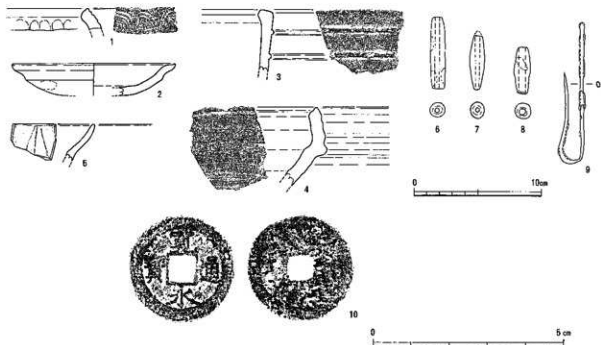
第242図 69次B 1東調査区包含層出土遺物実測図

第243図はB1区のR60グリッドから出土した上器類であるが、東西いずれの調査区から出土したかは明らかにできない。1は底面にヘラ切り痕を残す土師器の坏で、古代のものである。2は瀬戸美濃系の施軸陶器の折縁皿で、内面にスリット状の沈線を施す、いわゆる菊花皿である。3は焼結陶器で、外面に多条の段を持つ小皿である。備前であろうか。



第243図 69次B1区R60グリッド包含層出土遺物実測図

第244図はB2区から出土した遺物である。1は弥生土器の複合口縁壺の口縁端部破片である。1J縁は内傾し、外面に波状文を施す。内面には指頭圧痕が顕著に残る。破損面は粘土帯接合面であらう。2は京都系土師器皿で、口縁部に強いヨコナデを加える特徴から16世紀後半に比定できる。3は瓦質土器の火鉢で、外面の凸帯区画内にスタンプ文を施す。4は備前焼の摺鉢。5は施軸陶器で鉄絵を施す唐津の製品である。6～8は十箇質の管状土師。9は鉄製の釣針で大型のものである。10は寛永通寶で、いわゆる新寛永銭である。以上のうち、4・8はQ61区、1・2・5・7はR62区、3・6・9はS63区からの出土である。



第244図 69次B2区包含層出土遺物実測図

遺物觀察表

第3表 中世大友府内町跡第69次B調査区遺物観察表①

神図No	器 種		生産地	法量 (単位cm)			出土地点	備 考
				口径	底径	器高		
第213図1	焼締陶器	甕	備前	-	-	(8.9)	SK7	
第217図1	京都系土師器	皿	在 地	-	-	(3.6)	SD4	
第217図2	青花	皿	景徳鎮	-	-	(2.3)	SD4	
第217図3	青花	碗	景徳鎮	-	(4.8)	(2.4)	SD4	
第217図4	焼締陶器	摺鉢	備前	-	-	(3.7)	SD4	
第217図5	瓦	平瓦	在 地	(8.2)	(8.8)	-	SD4	凹面布目
第217図6	鉄製品	釘	在 地	5.5	0.3	3.8 g	SD4	
第217図7	銭貨	不明	不明	2.9	-	1.4 g	SD4	
第220図1	弥生土器	壺	在 地	(12.8)	-	(3.5)	SD16	
第220図2	弥生土器	甕	在 地	-	(8.6)	(5.2)	SD16	
第220図3	白磁	皿	中国	-	-	(2.4)	SD16	
第220図4	京都系土師器	皿	在 地	(9.6)	-	2.3	SD17	
第220図5	弥生土器	高杯	在 地	-	-	(1.2)	SD17	
第222図1	京都系土師器	皿	在 地	-	-	(1.8)	SD5	
第222図2	瓦質土器	鉢	国内	-	(10.4)	(2.2)	SD5	
第224図1	京都系土師器	皿	在 地	(12.4)	-	1.9	SK23	
第224図2	須恵器	甕	国内	(18.2)	-	(5.2)	SK23	
第224図3	須恵器	甕 or 壺	国内	-	-	(3.1)	SK23	
第224図4	白磁	玉縁碗	中国	-	-	-	SK23	
第224図5	焼締陶器	天日碗	瀬戸美濃	-	4.7	(1.4)	SK23	
第224図6	焼締陶器	摺鉢	備前	-	-	(5.0)	SK23	
第224図7	焼締陶器	甕	備前	-	-	-	SK23	肩部にスタンプ文
第224図8	焼締陶器	甕	不明	-	-	(5.4)	SK23	
第224図9	石製品	石鑊	国内	-	-	-	SK23	滑石製
第224図10	瓦	丸瓦	在 地	(12.1)	(9.0)	-	SK23	凸面曜目タタキ、凹面布目痕
第224図11	瓦	平瓦	在 地	(8.0)	(15.1)	-	SK23	
第226図1	焼締陶器	摺鉢	備前	-	-	(7.0)	SD25	
第226図2	焼締陶器	摺鉢	備前	-	-	(8.3)	SD25	
第226図3	焼締陶器	摺鉢	備前	-	(14.8)	(4.8)	SD25	
第226図4	石製品	磁石	国内	(6.6)	(9.5)	-	SD25	
第229図1	土師器	高台付杯	在 地	(17.8)	8.8	5.7	SD21	
第229図2	土師器	杯	在 地	13.8	-	3.7	SD21	
第229図3	土師器	杯	在 地	(14.8)	3.7	(7.6)	SD21	底面ヘラ切痕
第229図4	土師器	杯	在 地	14.0	-	3.4	SD21	
第229図5	土師器	杯	在 地	(13.6)	(8.6)	3.8	SD21	底面ヘラ切痕
第229図6	土師器	蓋	在 地	-	-	(1.6)	SD21	外面に粗いヘラミガキ
第229図7	在 地系土師器	皿	在 地	-	(5.0)	(1.6)	SD21	
第229図8	在 地系土師器	皿	在 地	-	(7.4)	(1.3)	SD21	底面回転ス切り痕
第230図1	須恵器	杯	国内	(15.0)	(10.3)	3.9	SK26	
第230図2	土師器	杯	在 地	(17.6)	-	(4.4)	SK26	内外面粗いヘラミガキ
第230図3	土師器	杯	在 地	-	-	(3.7)	SK26	外面粗いヘラミガキ、底面ヘラ切痕
第231図1	須恵器	甕	国内	-	-	-	SP28	外面カキ目、内面同心円当具痕
第239図1	須恵器	高杯	国内	-	-	(5.3)	SD29	B1区 暗灰色粘土層出土
第239図2	土師器	甕	在 地	(22.2)	-	(6.9)	SD29	北上層出土
第239図3	青磁	皿	越州窯?	-	(7.6)	(2.3)	SD29	B1区 暗灰色粘土層出土
第239図4	在 地系土師器	皿	在 地	(12.8)	(6.0)	2.9	SD29	北上層出土
第239図5	瓦質土器	鉢	国内	-	-	(6.0)	SD29	B1区 暗灰色粘土層出土
第239図6	瓦質土器	鉢	国内	(27.3)	-	(4.1)	SD29	B1区 暗灰色粘土層出土
第239図7	瓦	丸瓦	在 地	(19.6)	(12.1)	-	SD29	B1区 暗灰色粘土層出土
第239図8	瓦	丸瓦	在 地	(10.5)	(6.6)	-	SD29	B1区 暗灰色粘土層出土
第240図9	土師質土練	管状土練	在 地	4.5	0.9	2.5 g	SD29	B1区 暗灰色粘土層出土

第3表 中世大友府内町跡第69次B調査区遺物観察表②

探出№	器 種		生産地	法量(単位cm)			出土地点	備 考
				口径	底径	器高		
第240図10	漆器	柄	国内	(15.1)	—	(5.2)	SD29	B1区 暗灰色粘土層出土
第240図11	木製品	杭	在地	8.9	4.1	—	SD29	B1区 暗灰色粘土層出土
第240図12	木製品	杭	在地	9.8	4.1	—	SD29	B1区 暗灰色粘土層出土
第240図13	木製品	材木	在地	20.5	3.1	—	SD29	B1区 暗灰色粘土層出土
第241図1	縄文土器	深鉢	在地	—	—	(4.9)	Q60 包含層	緩い波状口縁
第241図2	弥生土器	甕	在地	—	—	(4.1)	Q60 包含層	口縁下1条凸帯、口縁外縁刻み
第241図3	土師器	坏	在地	(12.2)	(8.3)	—	Q60 包含層	底面回転糸切り痕
第241図4	土師器	鍋	在地	—	—	(5.9)	Q60 包含層	
第241図5	土師器	匭合	在地	—	—	(5.3)	Q60 包含層	
第241図6	束縛系須恵器	摺鉢	東播磨	(22.2)	—	(4.6)	Q60 包含層	
第241図7	白磁	皿	中国	—	(7.0)	—	Q60 包含層	
第241図8	青磁	碗	中国	—	(6.6)	(2.4)	Q60 包含層	
第241図9	焼締陶器	摺鉢	中国南部?	—	—	(3.4)	Q60 包含層	
第241図10	木製品	下駄	国内	(15.7)	7.7	—	Q60 包含層	
第241図11	土師質土製品	管状土鉢	在地	5.2	1.3	8.8 g	Q60 包含層	
第241図12	鉄製品	棒状	在地	(7.7)	0.4	5.3 g	Q60 包含層	
第242図1	弥生土器	甕	在地	—	—	(4.1)	R61 包含層	
第243図2	弥生土器	甕	在地	—	—	(5.1)	R61 包含層	
第242図2	弥生土器	甕	在地	(13.0)	(2.0)	15.0	R61 包含層	
第243図3	土師器	甕	在地	(26.0)	—	(9.2)	R61 包含層	古代
第242図3	弥生土器	甕	在地	—	(5.3)	(14.0)	R61 包含層	
第243図4	弥生土器	甕	在地	—	(6.0)	(4.1)	R61 包含層	
第242図4	弥生土器	甕	在地	—	7.3	(4.2)	R61 包含層	底部は不整形
第243図5	弥生土器	甕	在地	—	—	(5.9)	R61 包含層	最上部凸帯復元径 15.4 cm
第242図5	弥生土器	甕	在地	(17.0)	—	(10.3)	R61 包含層	口縁端部刻み、直径 ϕ の穿孔有
第243図6	弥生土器	甕	在地	(14.6)	—	(8.0)	R61 包含層	
第242図6	弥生土器	甕	在地	—	—	(2.7)	R61 包含層	外面波状文
第243図7	弥生土器	甕	在地	—	—	—	S61 包含層	外面波状文
第242図7	土師器	坏	在地	(12.8)	(8.3)	3.5	R61 包含層	
第243図1	土師器	坏	在地	—	8.0	(2.0)	R60 包含層	底面ヘラ切痕
第243図2	焼締陶器	皿	瀬戸美濃	(10.0)	—	(2.1)	R60 包含層	
第243図3	焼締陶器	皿	備前?	(10.0)	—	(2.4)	R60 包含層	外面縁縁成形による多條の段
第244図1	弥生土器	甕	在地	—	—	(1.7)	R62 包含層	外面波状文、内面指頭状痕
第244図2	京都系土師器	皿	在地	(13.0)	—	2.5	R62 包含層	
第244図3	瓦葺土器	火鉢	国内	—	—	(4.9)	S63 包含層	外面凸帯間にスタンプ文
第244図4	焼締陶器	摺鉢	備前	—	—	(6.2)	Q61 包含層	
第244図5	焼締陶器	皿	丹波	—	—	—	R62 包含層	鉄絵
第244図6	土師質土鉢	管状土鉢	在地	5.6	1.2	9.2 g	S63 包含層	
第244図7	土師質土鉢	管状土鉢	在地	(4.3)	1.2	5.7 g	R62 包含層	
第244図8	土師質土鉢	管状土鉢	在地	3.7	1.3	5.4 g	Q61 包含層	
第244図9	鉄製品	釣針	国内	11.0	2.1	12.0 g	S63 包含層	
第244図10	縄貨	寛永通寶	国内	4.7	—	2.7 g	Q62 包含層	新寬永銭

第7節 第69次B調査区のみとめ

中世大友府内町跡第69次B区の調査では、古代～中世にかけての遺構が確認されたが、他の調査区と異なり町屋に關係するものは認められなかった。この点は「府内古図」を基にした府内の復元において何も描かれていないことに対応しているものといえる。確認された遺構は廃棄土坑や溝であり、町屋のバックヤードの様相を示すものと考えられる。

その一方で、区画溝と考えられる溝の存在は、この辺りの土地利用を解明する上で重要である。第245図に示すように、SD4は41次調査のSD114につながることは確実である。この41次調査では調査区の西側で方形区画の溝が確認されている。この区画溝の埋没年代は16世紀後葉～末葉に比定されるが、その性格は明らかにはなっていない。豊後府内周辺では方1町ないし方半町規模の方形区画を持つ居館群が点在し、府内の防衛網が築かれていたことが指摘されている²⁾が、この区画も規模から居館である可能性が高い。ただ、これだけの規模を有しながら府内古図には全く描かれていないとなると、府内古図に示された段階では既に機能を停止し、埋没していたと考えるのが自然であろう。

また、B1区では弥生土器を包含する層が確認できた。弥生時代の包含層は69次A調査区でも確認されており、また、西側に位置する若宮八幡宮遺跡からも弥生土器が出土していることから³⁾、周囲に集落が存在するものと考えられる。

69次B調査区の遺構については、一部を除いて明確な時期を明らかにできないものが多い。そこで、検出標高を手がかりとして、帰属時期の検討を行う。

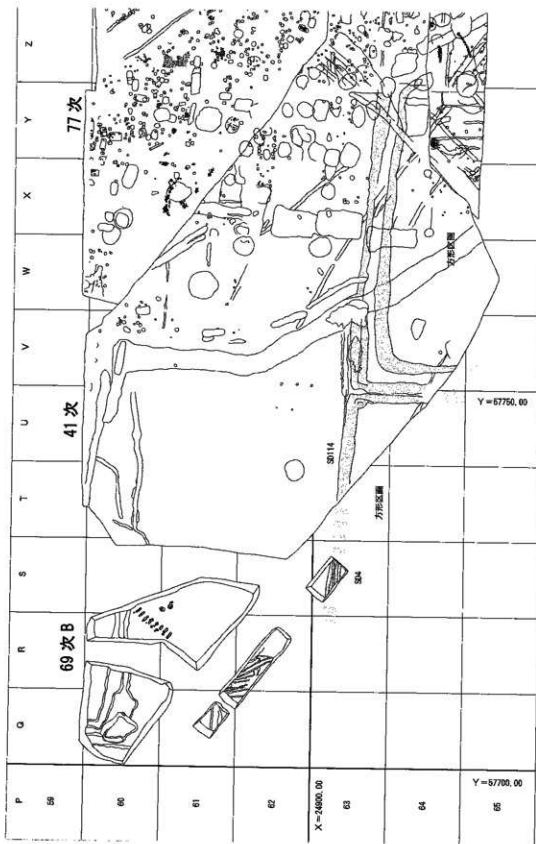
各遺構の検出標高を第1表に示す。B1区とB2区では標高差があるため、全てを同等に扱うことはできないが、ここではB1区を中心に見てみると、第1面の主要遺構は4.2m前後に位置づけられる。第2面は幅があり、4.2mのSK27、4.1mのSK23、4.0mのSD25、3.9mのSK26、3.9～4.0mのSD21、3.8mのSE22・SE24、SF28からなる。SK23・SD25は16世紀後葉～末葉で、SK27もその頃に近い年代が与えられよう。SD21・SK26は古代の遺物が出土した遺構で、8～9世紀代の可能性がある。SD21では15世紀後葉～16世紀前葉頃の在地系土師器が出土しており、注意を要するが、在地系土師器が細片なのに対し、古代の上師器は残りがいよいうえに底面近くから出土していて、判断が難しい。SF28やSE22・24といった、標高3.8m前後で検出した遺構群は出土遺物に乏しいが、中世の遺構や先述のSK26よりも下位での検出であることから、古代に帰属するものの可能性が高い。

第3面の遺構については、SD29からは中世の遺物が出土しており、埋没時期は概ね15世紀後葉～16世紀前葉と考えられる。その検出標高はB1西区で約3.6mであるが、ここでは検出面が失われており、本来はより上位から掘り込まれたものである。SD31もSD29の上位で検出されたことから、16世紀前葉以降と考えられる。ただし、SK30は検出標高が3.5mと低く、また古代の可能性のあるSD21よりも下位にあるため、古代以前に遡る可能性が考えられる。

第1表 69次B調査区の遺構と検出標高との対応

検出標高	B1西	B1東	B2
4.5			SD4
4.4			
4.3			SD5、SD29
4.2	SK7、SK8、SK27		
4.1	SK23		
4.0	SD25	SD21	
3.9	SD21、SK26		
3.8		SF28、SE22、SE24	
3.7	SD31		
3.6	SD29		
3.5	SK30		

註1) 坪根伸也2008「大友館の変遷と府内周辺の方形館」『戦国大名大友氏と豊後府内』（鹿毛敏夫編）高志書院
 註2) 高橋徹・小柳和宏・綿貫俊一2008「若宮八幡宮遺跡」大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第25集



第245図 41次・69次B調査区で確認された方形区画の溝